
BLUE EYE 碧き眼

斬谷恭平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B L U E E Y E 碧き眼

【Nコード】

N O 7 8 2 W

【作者名】

斬谷恭平

【あらすじ】

四月をもって鏡楼高校の二年生になったばかりの生上翔也。幼馴染で同じ年の武神朱鳥と同じ高校に通う。その幼馴染は神眼とよばれる特殊な能力を代々所持する家系の長女である。剣術に精通し、炎を自在に操る少女だ。そして朱鳥と過ごす日常を楽しく翔也は過ごしていた。

しかし、二千三十年四月八日の深夜0時を境にある事件に巻き込まれ、翔也の日常が急変を遂げる。自分の身体に起こる不可思議な現象。更にその身体を、パーカーを着た謎の人物に狙われる。

神眼を持つ者たちは事件に巻き込まれ、巻き込んでいく。

（＊誤字脱字などや文のおかしな点は適宜修正を行います。また通告していただければ直ぐに修正いたします。）

1 - 1 日常

死

それは人がかつて犯した罪に対する罰

ならばその罪を浄化する術があつたとして

その罪を浄化することができのならば

人は元の完全なる人へと戻ることができるのだらう

その術さえあれば・・・

二千三十年四月八日月曜日東京。

無事に高校二年生になれた生上翔也^{いけがみしょうや}は、寝ぼけ眼の寝ぐせそのままの状態で自分の通う鏡楼^{きやうろう}高校へと向かう。

高校二年生の春休みと言えはおつくうな宿題も出ないわけで惰眠をむさぼるにはもってこいの期間である。故に気分はだらけており彼は“春休みボケ”という言葉がピッタリな状態だ。

「あー今日からまた始まるのか。昼寝する時間もなくなるとか本当に勘弁だ。」

足取りも緩い状態で高校へと延びる坂道を登っていく。この高校の周辺は緑が豊富であり耳を傾ければ小鳥のさえずりも聞くことが出来る自然に恵まれた通学路である。しかし、この“春休みボケ”な彼には当然の如く聞こえないだらう。そこへ後ろから誰かが走ってくる音がした。

「高校二年生の門出と言う日に何てだらけきつた格好してるの！パシーン。」

彼が気付いた時にはその頭に竹刀がめり込んでいた。

「ぐふっ。おい！舌でもかんだらどうするんだこの絶壁！！」

「絶壁言っつなー！！」

パシーン。

ともう一発が彼の脳天に直撃する。

竹刀をふるう少女、武神朱鳥^{たけがみあすか}。彼女は剣道の全国大会で優勝する程剣の扱いに優れている少女である。頭も賢く容姿も優れているが、胸だけは絶壁まな板という言葉が相応しい有り様であった。

「全く。進学することができるか危つい翔也のために私は練習も休んで、一緒にテスト勉強をしてやったというのに絶壁呼ばわりとは何事ー！」

パシーン。

本日三度目の竹刀が彼の頭に入る。この二人は幼馴染でいわゆる腐れ縁というやつである。面倒くさがりやな翔也は勉強を全くと言ってよいほどしないため、成績優秀な朱鳥がその面倒を見ているのである。

彼が高校二年生に無事なれたのも彼女のおかげである。

「いや別に俺は頼んだ覚えなんて無いのにお前がいきなり家にやってきて勉強を始めたんだらう。あの時も寝たかったのにさー・・・。」

ー

「翔也はいつも寝過ぎなんだよ！そのうち体にカビが生えるんじゃないの？カビ臭い人が幼馴染とか本当に勘弁だからね。」

真剣な眼差しでありつつも口には笑みを含んでいるその様子は、この下らない会話を楽しんでいるよう見える。いつも通りの会話をしつつ二人は高校への坂を再び上り始めた。

「しかしお前って何でそんな朝早くから元気なんだよ。やっぱり朝っぱらから剣道の練習をしているせいなのか？」

朱鳥の竹刀で三回も叩かれて眠気が吹き飛んだ翔也はふと疑問に思ったことを聞いてみる。

「剣道というより剣術なんだけど・・・まあそうね、頭がボーっとしていたらお父さんに殺されちゃうし、真剣で練習しているのに眠

気がある状態で戦うなんていうのはあり得ないでしょ？」

そっけなく答える朱鳥。一方、翔也はそれに対して眼をひくつかせながら

「いやいや真剣って・・・そりゃ全国大会優勝して当たり前だよな」「流石、神眼の一族だけあってやっていることのスケールが違うんだな。」

そう、彼女は由緒ある神眼の家系の一人である。特徴として剣をふるう時に瞳が紅くなり身体能力は極度に向上、炎に関する魔術も使う事が可能となる。

「そうね。朝っぱらから親子眼を真っ赤にして真剣で切り合う家なんてうちくらいかもね。」

笑いながら冗談でも言うかのように、さらりとスケールの大きい事を言う少女である。

「中学校までは竹刀しか持たせてくれなかったの。高校に入っておじいちゃんの形見の刀をくれたのよ。何でも神眼の一族が使いやすいように調整してある業物みたい。」

朱鳥の祖父は生まれた時に直ぐ亡くなってしまった。彼女の祖父は神眼の一族代々の中でも指折りに入る強い人物だった。彼女が生まれる前にも、「わしが孫を鍛えてやるんじゃない！」と息巻いていたそうだ。孫の誕生を今か今かと待っていたのだが・・・。

「やっぱ真剣と竹刀は全然違うんだろな。」

朱鳥の早歩きに追いつくため足を速めながら話を続ける。

「そりゃ重さも違うし刃もついてるし。でも一番違う点は火を込められることね。竹刀だとほら、燃え尽きちゃうでしょ？」

成る程、と頷く翔也。

「昔から思っていたけど火をいつでも使えるって便利そうだな。困ったらこう、ライターみたいに付けられるじゃん。」

「私の能力をライターと同列にするとは・・・。」

ため息をつき項垂れる朱鳥。コンビニで買えるような安い代物と一緒にされてはため息もでるだろう。

「私はまだ未熟だから日常生活で扱えるような火力は出せないの。寧ろ爆発的な火力しか出せなくて困っているのよ。今日も道場の床の一部を炭にしちゃったし……。」

再びため息をつき頂垂れる。朱鳥は一族の中でも紅き瞳の色が一番濃く素質があると言われている。しかしこの能力は素質があればある程扱いが難しくなる。如何せん威力が高すぎるため上手く調節できないのだ。

「おかげでお母さんにまた怒られるよ……。」

しょんぼりとしてしまった朱鳥。床の張り替えが必要だったのはつい最近まで月一だった。しかし、ここ数日は能力の威力が上がってしまったため三日に一度は張り替えが必要になった。張り替えるたびに財布はしぼんでいくので母親にとっては悩みの種なのである。

「んなもん道場じゃなくて庭でやれば良いじゃんかよ。お前の家の庭、滅茶苦茶広いじゃんか。」

昔遊びに行ったことのある朱鳥の広い屋敷にある庭を思い浮かべながら言う。

「それは無理。昔やって庭師の人にこっぴどく叱られたから。大切にしていた松の木をね、全部炭にしちゃったのよ……。」

あーそれは庭師さん……さぞかし悲しかったのだらう。

と庭師の悲痛な念をねぎらう翔也。

「でもこんな事で気を落としてられない。今日から高校二年生になったんだから気持ちをリフレッシュししないと！」

顔を再び晴れやかにして士気を上げる朱鳥。

「ほらもうすぐ学校に付くよ。クラスわけどうなったのかな。」

気持ちを切り替えて愉快的足取りで校門へと向かう朱鳥。

一方の翔也は……。

朱鳥と一緒にクラスになりませんように！あいつがいると授業中も寝ることができないっ

と願っていた。しかし小学生の頃から何故か二人とも同じクラス

なので、半ばあきらめていたりもする。

何ですっと同じクラスなんだよ……。絶対に教師の策略があるだろう。

と疑いながら校門へ駆けていく朱鳥を眼で追う。

校門の近くにある掲示板に貼られたクラス分けの内容の前には人だかりができていた。これから一年の運命を左右するだけあつてすごい賑わいである。その表情は様々である。喜んでいる者もいれば、がっかりと頭を垂れながら別れの挨拶を言う者もいた。大勢に人だかりの向こう側から背伸びしながら小さい字で書かれた自分の名前を探す。

えーっと。二年五組か。

そこへ横から緑色の髪の少年が話しかけてきた。

「おい、翔也俺のクラスも確認してくれないかな。」

「あー葉平か。お前も俺と同じ五組だよ。」

この緑髪の少年は下光葉平^{しもみつようへい}。双子の弟である。背はそこまで高くないためこの人だかりでは掲示板を見ることができないのだ。

「あれいつも一緒にいる葉也^{ようや}はどうしたんだ？」

「兄貴のやつはもう教室に入って行ったよ。六組みたい。」

ふむ、と頷きながら

「流石に双子が一緒のクラスになるといことはないか。」

「寧ろ一緒のクラスだったら困るって。入れ替わりできないじゃないか。」

生真面目な顔でとんでもないことを話す葉平に驚きつつも

「やつぱり……。そういうことやってんのか。」

「当たり前だろ。その方が便利じゃないか。」

「だろうな。」

双子である利点を羨ましそうに思う。そこへクラスの表を見終わった朱鳥が戻ってくる。

「翔也ー。私五組だったけどどうだった？」

その声を聞いた途端に憂鬱な表情に変わる翔也……

「夢も希望もねーーーー!」

「どういう意味よ!」

パシーン。

本日四度目となる竹刀が翔也の頭に叩きつけられた。

1 - 2 日常から非日常へ

二年五組の教室には生徒が集まりつつあった。

「流石に八クラスもあっただけに見知った顔が少ないな」

翔也は叩かれた頭を押さえながら言う。お互いを知らないの自然と同じ部活、委員会、クラスだったであろうグループが出来ていた。無論グループとも言えるほどの人数ではないが。翔也、朱鳥、葉平も周りと同じように集まっていた。

「毎回思っけどクラス替えてなんでするんだろうね？」

首をかしげながら朱鳥は言う。

「クラス替えてしない方が担任の教師も楽なのにね。」

「それだと人間関係が広がらないからだろ。」

「お、珍しく真面目な意見を言うね〜翔也。」

感心しながら葉平は言う。

そこへ担任の教師が入ってきた。

「おーいお前ら。もう予鈴が鳴ってるんだから座れ。」

気付かないうちに予鈴が鳴っていた。生徒たちはあらかじめ定められていた座席表通りに座っていく。皆お互いを知らないためおしやべりは一切なく静かな教室である。

このクラスも数日すればどうせ五月蠅くなるんだろうな・・・

頬付きながら気だるそうな目で周りの緊張している生徒を見る翔也。

「さて・・・寝るか・・・。」

初日から顔を伏せ寝始める翔也であった。

放課後、今日は初日なので午前中で学校は終了する。

「翔也、早速寝てたでしょ。」

朱鳥はウンザリしながら話しかける。

「んあー。だって今日はこれからの簡単な説明だったろ。」

「で、どれくらい覚えてるの？」

疑いの目で見つめる朱鳥。その視線から眼を反らしながら……。
「んーと。何……話してたっけ……？」

すかさず竹刀が襲いかかってくる。
パン。

「ぐあ！」

小さな悲鳴をあげる翔也と、両手いっぱい力を込めている朱鳥。

「あんたはどうしてそうなのかな？ 気が緩み過ぎじゃないの？ ぽら後で教えて上げるから感謝しなさいよ！」

翔也を叩いた竹刀で肩を軽く叩きながら言う。

「ほら、さつさと帰るよ。」

早歩きで教室から出ていく。翔也はその後をノロノロと追いかけているが、出て行った。

長い下り坂の坂道を二人で下っていく。

「そついや葉平のやつはもう帰ったのか？」

「終了の予鈴が鳴った後に直ぐに教室を出て行ったよ。6組に来た転校生に興味があったみたい。」

「わざわざ編入してきたのか。」

「そつみたいね。」

「どんな奴なんだ？」

転校生ともなれば若干の興味はわく。特に高校での転校生は珍しい。
い。

わざわざ編入試験なるものを受けなければならないからだ。

「んー、私も見てないからなー。明日にでも葉也に聞いてみれば？ 6組だったでしょ。」

「そついやそうだったな。」

朝の葉平との会話を思い出す。

二人は雲一つない青空の下歩き続ける。

「あ、そうそう。さっきの学校での連絡事項は携帯のメールに送っとくね。」

「おー、ありがとう。」

単純に反応しただけのように言葉を返す。

「あんたの感謝の言葉には気持ちが入ってないわね……。」

「だって……眠いし……。」

眼を半ば閉じながら歩く。すると自宅が見えてきた。

「んじゃ、また明日ー。」

「おう。」

朱鳥と別れ自宅の扉を開ける。すると見慣れない靴があつた。

ん、誰だろこれ？ -

疑問に思いつつリビングに入っていく。そこには従兄の啓祐はるひろさんがいた。現在雑誌記者をしており、年齢は翔也よりも10歳年上である。時々食事をしに生上家へ来る。

「やー翔也、今日から高校二年生なんだってな。」

「あーはい。」

椅子に座りながら返事をする翔也。台所では母親が昼食を作っている。

「珍しいですね。兄さんが昼間にうちにくるなんて。」

「実は今ある殺人事件を追っていてな。その調査でここら辺まで来たから、序にお昼を御馳走になるうかと思つてね。」

殺人事件か

「それつてもしかして、両目がくり抜かれた死体が出る事件？」

「そうだよ。ついに日本まで来ちまつたからな。」

両手を組んだ上に顎をのせながら言う。

両目がくり抜かれた殺人死体。この事件は初め欧州の方で起きた。今年の二月イギリスを初めとして、ドイツ、フランス、ギリシャなど欧州諸国で両目をくり抜かれた死体が連続して出た。死因は四肢が切断されたことによる出血多量によるショック死。欧州での事件とあつて日本では殆ど注目されることはなかった。しかし、四月に入り遠く離れたこの日本で両目がくり抜かれた死体が発見される。こうして日本でもこの事件が取り沙汰されるようになった。

「でも欧州とは犯人がどうも一緒ではないみたいだね。」

「と言うと？」

「まず、仏さんにはちゃんと四肢が付いているんだよ。死因はナイフによって刺されたことだけだね。」

「成る程。でも、それだけでは同一犯ではないって言いきれないと思うのですが？」

「うん、そうだね。でも今でも欧州では殺人事件が起きているから違うと言えるのだよ。」

そっか、ともっともな根拠に頷く。

「日本では二人が殺されていましたっけ？」

「昨日までは二人だったけど、今朝がたまた一人発見されてね。これで合計三人だよ。」

「あ、今日も見つかったのか・・・。」

今朝起きて着替え、直ぐに学校に行ったのでニュースを見ていないので知らなかったのである。

「どこで発見されたんですか？」

「東京だよ。前の二人は石川県だったのにな。だから今日わざわざ東京まで戻ってきたんだよ。」

はーとため息をつきながら言う。

「全く、一昨日取材しに行つて今日戻ることになるうとは。着いたその日に取材が終つたから、どうしようか迷っていたんだけどね。」

「それはご苦労様です。」

そこへ母親が昼食持つてきながらリビングにやってきた。どうやら焼きそばのようである。

「啓祐くんごめんねー。来るって知っていたらちゃんとしたのを作つただけだよ。」

と翔也と啓祐の前に焼きそばを置く。

「いいえ。いきなりお邪魔してしまったので、お昼を頂けるだけでも十分です。ありがとうございます。」

と言いつつ箸を手に取り焼きそばを食べ始めた。翔也も箸を手に取り食べ始めた。

「んじゃ私はちょっと買い物に出かけるね。ごゆっくり。」

そう言いながら母親は荷物を持ってでかけた。

黙々と焼きそばを食べ続ける二人。

「御馳走様でした。」

二人とも手を合わせて言う。

「さて、そろそろ仕事に戻るかな。」

背筋を伸ばしながらあくびをする。

「俺は部屋に戻って寝るかな。」

同じく背筋を伸ばしながらあくびをする。

「高校生は気楽で良いね。」

羨ましそうに見つつ、席を立ち玄関に向かう。

「では、また遊びに来るね。」

「はい、さようなら。」

玄関を開け出ていく。翔也は扉を閉めた後に自分の部屋へと戻っていく。階段を上り自室の扉を開け倒れこむように、ベッドの中に潜り眠り始める。午後7時、母親に夕飯ができたと起こされる。いつのまにやら五時間近くも眠っていたようだ。

あー良く寝た

背筋を伸ばしながら布団から起き下に降りていく。夕食後再び部屋に戻った時に携帯が鳴る。朱鳥から学校での連絡事項に関するメールだった。どうやら明日教科書販売があり、明後日から授業が始まるようだ。それらを確認した後に携帯を閉じる。

さて、何するかな。

昼に五時間も寝たため眼がすっかり冴えてしまっている。そういう時にはよく窓の外を眺める。翔也は昔から視力がやけに良い。掲示板に貼られたクラス替えに関する表がはっきりとわかったのもそのためだ。窓の外を見れば遠くにある町まで翔也には良く見える。勿論窓の中まではっきりと見ることができない。プライバシーに関わるので出来るだけ無視しているようにしてるが、見えてしまうのは仕方ない。

そうして、寝静まった町を眺めていた時にふと不審な窓を見つける。時間は深夜一時。ここから5kmはあろう高いビルの窓だ。その中では一人の人が逃げ惑っていた。そのビルには明かりがついていないため、男か女かはわからない。ともかくその人の周りをナイフが飛び交っていた。まるで空中で飛んでいるように。

窓に手をつき、思わず驚き食い入るように見つめる。

あれはもしや連続殺人事件の一つなのでは・・・。

今まさに人が殺されようとしている場面を見てしまい、動悸が激しくなる。

このままでは今逃げている人が四人目になるのだろうか。

眼に見えている光景が信じられない。そこにナイフを投げている人物が目に入る。暗くフードも被っているため、顔を確認することができない。ナイフを投げるその様子は踊っているように見えた。次々と空を切り、舞うナイフ。

このままでは、あの人は殺されてしまう！

そう思い携帯を手に取り警察へ通報をしようとする。しかし、あのビルの住所がわからない上に名前も見えない。恐らくこちらから反対側にビルの名前が書かれているのだろう。決心したように部屋から出て玄関に向かう。両親が起きないように、静かに素早く階段を下りる。靴をはき自転車の取りに行く。

道はわからないけれど、あの高いビルなら見失わずにすむだろう。そう考えつつ素早く鍵を指し自転車に飛び乗り自宅を出る。自転車を速く進めながらビルを目指す。徐々に近づくにつれ、解体中のビルであることに気付く。外壁には工事用の足場が設けられていたためである。

しかし、それはまだ途中であった。そのため偶然あの窓が見えたのである。

俺が到着するまで間に合うか。

足を懸命に回し続ける。こうして数分後ビルの前に到着した。ビルの名前は

110番を素早く押す。

「もしもし、何かありましたか？」

冷静なトーンの声だ。

「鏡楼市にある解体中のデイルクというビルの中で人が殺されかけています！」

警察官に伝わるか伝わらないかの速いスピードで告げる。

「わかりました。パトカーがそちらに向かっているのでそこにいて下さい。」

「はい。」

と言いつつ携帯を切る。しかし安心することができない。

このままパトカーを待っていても間に合わないかもしれない！

ビルの周りは工事用のオレンジのフェンスで囲まれている。しかし乗り越えられなくてもない高さである。

よしっ、行くか。

そう決心しフェンスを乗り越えてビルの中へは入って行った。

1 - 3 Messer ナイフ

ビルの中に入ると明かりもなく真っ暗だった。眼が慣れるのを待ちつつエレベーターを探す。目が慣れてきて、ここがかつて広いロビーであつたことに気付く。懸命に眼をこらし探し続ける。すると左側にそれはあつた。駆けよって直ぐにボタンを押す。

やっぱり動かないか・・・

ボタンを何度も押すが、カチカチとむなしい音が鳴るばかりで光る事はなかった。

そうだ、階段は。

階段を探すとエレベーターの横に あつた。そこに駆け込みビルの階段を無我夢中に上っていく。二階程登ると工具の置かれている踊り場に出た。解体中のため工具は置きっぱなしにされているようだ。そこで、自分が武器を持っていないことに気付き立ち止まる。さすがに手ぶらはやばそうだな。

工具箱を開ける。そこには釘、ハンマー、バールなど武器に使えるようなものから役に立たなそうなものまで あつた。その中からバールを選択し工具箱を離れ再び階段を昇り始める。空気は酷く澱んでおり走る度に埃が舞う。光りは窓からの月明かりのみで、視界が悪い。更に二階程登つてあることに気付く。

そういえば、あれは何階なんだ？

自宅からはビルの足元まで見えなかつたため、あの窓が何階であるのかがわからなかつた。

エレベーターが動かないのだから、階段を登っていればすれ違ふだろう。

そう考えひたすら登りつづける。更に五階程登つて息が切れ始める。普段あまり運動はしないのに全力で登り続けたので、息が上がってしまったのだ。一回立ち止まって息を整えようとした時に、上から足音が聞えた。

この上か！

立ち止まらずに再び登る。色あせた数字を見るとここは十階のようだ。階段から覗くと、広い部屋の中で女性がコンクリートむき出しの柱に隠れながら逃げ回っていた。部屋の中は壁が全て打ち抜かれており、コンクリートの柱が10m間隔で並んでいた。

月明かりが女性を照らす。ナイフによる傷で顔から足まで血だらけになっていた。外見はどこかのSPを思い出させるような格好だった。そして手には黒く光るものが。

拳銃！？

やはり一般の人ではないようだ。日本の中で拳銃を持つことができるのは、限られた人々だけである。

女性が発砲する。発砲音が響き、弾がコンクリートに当たる乾いた音も響く。

「来るなっ！」

悲痛な叫びを上げる。するともう一つの足音が部屋の奥から聞こえる。階段からは奥まで見るできないため、その姿を確認することができない。

ヒュッつとナイフが空を切る音が聞こえたかと思うと、二本のナイフが女性をめがけて飛ぶ。柱を挟んで一本ずつ向こう側の壁に刺さる。

「なんのつもり！？」

恐怖が入り混じった声で叫ぶ。その言葉が言い終わらないうちに四本のナイフが空を切る。二本が柱に突き刺さった。すると残りの二本は軌道を急に変え女性と柱を囲むように回り続ける。

「いやあああああああああああああああ！」

狂ったように叫びながらナイフに向かって撃ち続ける。ナイフはそれを見殺すように飛び続け速度を増して行く。柱の反対側に飛んでいた二本が刺さったと同時に、女性の動きも止まる。

何が起きたんだ・・・。

女性は柱に縛り付けられたように動かなくなる。よく見ると月明

かりを反射して光る細い糸が女性を柱に縛っていた。
そうか、あのナイフにはワイヤーがついているのか。

敵はどうやらナイフとワイヤーを使って戦うようだ。

縛られてもかく女性に向かっていく足音。翔也の眼にその人物が映る。体格は小柄。ズボンと大きめのパーカーを着ており男か女か区別することは出来ない。やはりフードを深く被っているため顔も判別することは出来ない。そして左手には刃が15cmものナイフが握られていた。

それを女性の喉元に付きつける。

「何でも言う事を聞く！だからっ・・・命はっ！！」

その言葉を見殺してナイフを首に向けて横から突き刺そうと振り上げる。

マズイ！

と思うと同時に体を動かして敵に向かって走る。距離にして5m。その距離を素早く縮め、力を込めてバールを振り下ろす。が、それは当たらない。

速いっ！

真横に避けられると同時に左手にあったナイフが投げられる。それは右肩に深々と刺さる。思わずうめき声をあげ倒れそうになった体を柱に隠す。

「くっ・・・貫通してやがる」

刃が15cmもあるナイフが柄元まで刺さっていた。肩を動かそうとするたびに体中に激痛が走る。直ぐ横にいる女に話しかけるが、どうやら気絶してしまったようだ。バールを左手に持ち替えて考える。

相手は素早い。俺では追いつくことは出来ない。警察が来るまで女性を守りつつ逃げるしかないか！

そう覚悟を決めた途端に、ナイフが四本ずつ自分の左右の地面に突き刺さる。隠れた柱の向こう側から聞こえる足音。それは静かに、しかし速く迫って来ている。

こうなったらバールを何としても当てて、応戦するしかないっ。

そう覚悟を決め柱から飛び出す。距離を縮めようとして敵を確認する。その両手には8本の大小様々なナイフが握られていた……。危機を感じてすぐさま柱に隠れる。さっきまで自分のいた場所を8本のナイフが通り過ぎ、壁に突き刺さる。同時に、壁の表面が埃を撒き散らしながら崩れる。

あれに当たったら、間違いなく死ぬな……。こうなったら柱を移動しながら近づくしかないか。

右手にある柱に向かって駆けだす。それを見越していたかのように柱に付く前に眼の前にナイフが刺さる。思わず足を止める。

ヤバいっ！

振り向いたときにナイフが二本心臓に向かって迫っていた。慌てて体を左に倒しながらギリギリで回避する。

『u m d e n r e c h t e n A r m 』

左手を伸ばしながら敵が初めて口を開く。すると空中でナイフはいきなり止まり、右腕に向かって真横に切りつけてくる。

ワイヤーで制御してるのかっ！

避けられずに右腕を深々と切られる。そのまま真後ろに倒れこんでしまう。敵は此方に向かってゆっくりと歩いてくる。

『B e s c h l e u n i g u n g 』

そう言うと同時に敵は翔也の目の前に立ってた。

何だ……。これはっ！？

あり得ない光景に眼を疑う。20mは向こうにいたであろう敵が一瞬にして距離を詰めてきたのだ。右手の指に挟んだ二本のナイフを振り下ろす。それを左手あるバールでを弾く。

ガキン！

辛うじて軌道を反らす。相手が姿勢を崩しているうちに、跳ね上がるように立ちあがり柱に向かって走り隠れる。

あの移動速度は尋常じゃない……。あいつ人間なのか？

これは敵には距離というものが関係のないものであるということ

になる。今は辛うじてボールで軌道をそらして回避できたが、次も成功するとは限らない。

クソッ、警察はまだなのか！？

右腕から流れ続ける血。気付くと意識が飛びそうになってきていた。頭に酸素が回らなくなってきたのだ。しかも日頃運動不足であったため、体力も限界に迫っていた。敵がゆつくりと此方に向かってくる。両手には8本のナイフ。

『Zerst?rungs』

左手のナイフが空を切り柱にあたる。柱は碎かれ、粉々になり降り注ぎ埃がまう。

さっきより威力が上がってる！？

それを後ろに下がりながら避ける。そこへ埃のモヤの中から4本のナイフが飛び込んでくる。

「ぐあああああああああああああああ！」

今まで経験をしたことのない激痛に雄叫びをあげる。3本が体に突き刺さりうち2本はあばら骨を砕いた。口の中に広がる血の味。

気持ち悪くなり吐きだしむせる。“殺される”というさっきまで非現実だったものを現実で突き付けられ、絶望する。

俺は、ここで死ぬのか。

絶望に落とされた表情を見て頷く相手。それを見て自分の考えていること全てが見透かされているような気がして、背筋に悪寒が走る。

敵は口元を覗かせ・・・笑っていた。

その口元は冷酷、残忍、非情、無慈悲。

両手には再び8本のナイフがいつの間にか握られていた。
終わりか

そう諦めた時に敵は体の方向を急に変えた。そう柱に縛られている女性の方へと。

「止めろっ！」

そう叫ぼうとするがあばら骨が碎かれ肺が傷ついたのだろっ。か

すれた声しか出すことができなかった。敵は右手のナイフの一本を女性に向ける。

『T o d』

そう呟くと投げられてもないナイフは勝手に女性に向かって一直線に向かう。

「止めるおおおおお！！」

叫びながらその右腕に向かってバールを投げつける。

しかしバールは右腕に届かなかった。

光る細い糸。

ワイヤーか！

バールはその右腕に届かずワイヤーに止められてしまったのだ。

女性に向かい続けるナイフ。

俺は、誰も守れないのか

自分の無力さを呪う。

自分の脆弱さを呪う。

自分の非力さを呪う。

自分の……。

女性にナイフが刺さる。鮮血が舞う。月の光に照らされて。

そこへ敵の意外な表情が目に入る。その口元が、笑っておらずむしろ歯を食いしばっていたのだ。意外な敵の表情に疑問を持つ翔也。そこへサイレンの音が割れた窓から聞こえてきた。警察が来たのだ。

何で、今更っ！

やり場のない感情を抱く。

敵もサイレンの音に気付いたのか、慌てるそぶりを見せる。

『R ? c k g a b e』

敵がそうつぶやくとあちらこちらに散らばっていたナイフが、敵の目の前に集まりその体に消えていく。翔也の右肩のナイフも無理

やり引き抜かれる。

ぐあ！と叫びを上げる。同時に視界がぼやけ始める。そしてそのナイフも敵の体の中へと消えてゆく。

全てのナイフを集め終わった敵は近づいてきて左手で無理矢理翔也の顔を押し上げる。抵抗しようにも体にはまったく力が入らない持ち上げた顔に向かって自分の顔を近づける。

フードの間から覗く口元は円満な笑顔が。しかし、本来は美しく見えるであろうその口元は酷く歪んで見えた。

「みつけた。」

そのような音を呟いたかと思うと、コンクリートの地面にむかっていきなり顔を落とされる。意識が遠のいていく。

敵はエレベーター横の階段へ向かっていく。その足取りはどこか楽しそうに見え、とても不気味に見えた。

あいつは一体誰なんだ・・・。

そして翔也の意識は途絶えた。

1 - 4 四月中旬

眼の前に広がる無の世界。その色は黒。今にも吸い込まれそうになる。

「ここは、どこだ？」

その闇に吸い込まれてはいけないということを本能的に理解する。もがこうとするが体は動かない。抵抗することもできない。

クソッ！

必死に体を動かそうと意思を働かせるが、全く動かない。まるで他人の体のようなのだ。

あがこうとしているうちにその闇が目前に迫る。

「もうすぐ俺は死ぬのか。」

根拠もなしに自分が死ぬということを知っている。つまりそれは眼の光景が死の世界と言う事になる。しかしそこには世界と呼べるような空間があるようには思えない。

そこには“無”しかないからだ。その時突然眼に激痛が走る。

「ぐああああああああああ！！！」

あまりの激痛の酷さに悲鳴を上げる。何かに押しつぶされ破裂しそうな痛さだ。眼を抑えようとするが体が動かない。それに構わず激痛は酷くなっていく。

すると眼の前に沢山の文字が広がり始める。体にも沢山の文字がまわりつき、這いまわる。眼の前の光景も文字によって凄く速さで満たされていく。その動きは明確な意思を感じる。

文字は空間全体に広がっていく。まるで自分と、その世界を隔てようとしているようだ。

気付くと自分は死の世界に吸い込まれることはなくなっていた。逆に遠ざかっていくのを感じる。体の自由がきくようになり、意識もはっきりしてきた。

目覚めた時に自分はこの世界の事を覚えているのだろうか・・・。

ふとそんな疑問が浮かぶ。
背後から淡い光を感じる。気付けば体中が文字と光りに満たされていた。

心臓の心拍数を数える機械の音が聞こえる。一定の間隔で鳴り続ける。それは監視している人が生きていることを示す。
意識が少しずつ体を満たして行く。目を開けると窓から日がさしていた。

左手に誰かが触れている間隔を感じる。その手は強く握られている。握っている人物の髪は黒く長かった。

「朱鳥・・・？」

小さい声で呟くとその人物は顔を上げた。その目の下黒ずんでいる。殆ど寝ていないようだ。

「翔也！！！」

いきなり抱きつかれる。

「どんだけ心配させるのよ。」

くぐもった声でそう呟く。

「ごめん・・・。」

何となく謝った方が良い気がするので謝る。どうやら相当心配をかけてしまったようだ。段々と自分の身におきていたことを思い出す。

ナイフを操る謎の人物。月の光の中で倒れた女性。

「そうだ！あの人は助かったのか！？」

唐突に大きな声をだす。あの人は助かったのだろうか・・・いや、あれでは無理かもしれない。

「あの人・・・？あ、翔也と一緒に運ばれた女の人の事？何とか一命はとりとめたみたい。ただかなり重症で意識を回復する見込みがないんだって・・・。」

「そつか……。命は助かったのか。良かった。」

自分のしたことが無駄ではなかったことに安堵する。

「翔也も意識回復するかわからなくて凄いい心配だったんだよ。だってもう三日もたつし……。」

「三日も!？」

自分が三日も寝続けたことが信じられない。三日と言えば72時間だ。きっと人生の中で最高記録だろう。これからもその記録は打ち破られることはないと思う。

ということは今日は十二日なのか。

「そういえば母さんとかは……?」

「今、私の昼ご飯を回に言ってくれている所。そうだ!早く知らせなきゃ!」

そう言いながら立ちあがり、駆け足で病室を出て行った。

その後二日で退院することができた。医者も異常な回復の速さに驚いていた。更にあんな大けがをしたのにその傷跡は残っていなかった。

退院する前日に気になったのであの女性のお見舞いに向かった。

医者からの話によれば一命を取り留めることは出来たので、後は意識を回復するのを待ただけだそうだ。

久しぶりに自宅へ帰る。まだ退院したばかりなので二週間は学校を休むようにという医者からの御達しがでた。よってこの二週間は暇をもてあそぶ事ができる。……と思っていた。

「翔也、警察の方がお話を聞きたいそうよ。あと啓祐くんも聞きたいんだって。」

というわけで事情聴取が始まるのであった。それで四日は潰れることとなる。警察も初めての目撃者ということで色々聞いてきた。同じ質問を何回も聞かれたりとぐったりする様な四日間だった。

そして今日は啓祐兄さんから話を聞かれる人になった。正直かなりウンザリしている。似たような質問をされることは目に見えているからだ。

インターホンの鳴る音がする。どうやら来たようだ。階段を下りて玄関に向かう。

「やあ。翔也、色々大変だったみたいだな。」

「はい、色々大変でした。」

うんうんと頷く兄さん。

「家でも話すのもなんだし、ちょっと駅前のお店にでも入らないかい？」

「あーはい。」

駅前には商店がありここからもそんなに遠くはない。徒歩5分ほどで到着する。夕方前とあって商店街には沢山の人が溢れていた。

「しかし全然変わらないなこの景色は。いや、技術もほとんど進歩してないな・・・。」

「やっぱり二十三年の事件が原因何ですかね？」

「お偉い学者さんにもわからないことが俺にもわかるわけないだろう？」

二十十三年五月二十日。太平洋中心で謎の大爆発が起きた。最初にはアメリカによる水爆実験であると取り沙汰されたが、それはただの爆発ではなかった。爆発の起きた部分の空間が消えたのだ。結果、海流変動も起き季節が変わってしまった。そうなれば世界情勢も大きな変化を遂げる。後進国による飢餓の発生により政権が不安定な国々が続出した。そんな中、第三次世界大戦を回避することができたのは国連の起こした奇跡と言えよう。

しかし人類にとって一番深刻だったのは、科学技術の停滞だろう。あの爆発事件以来科学技術の進歩が全くと言って良いほどなかったのだ。そのため、二十十三年から世界は止まってしまっていると言っても過言ではないだろう。

「あの爆発事件が起きた時のことはよく覚えているよ・・・。日常が崩壊していくさまが眼の前で繰り広げられ、俺も巻き込まれたかな。実際雑誌記者になったのも、あの事件の事実を知りたかったりするからなんだ。」

どこか遠くの過去を見るような眼をする。

「さてさて、これから暗い話をするっていうのに今からこんなんでどうするんだか。この話をは終わり。んじゃあその店にでも入るか。」

そう言いながら赤い看板ファーストフード店へと入っていった。

店の中は表と同じように沢山の人々で賑わっていた。見慣れた制服を着ている高校生も何人が固まって座っていた。

カウンターへ行きいくつか注文する。お金は兄さんが持ってくれた。適当な座席を見つけて二人で座る。

「さて、そろそろ始めようか。」

「はい」

先程買った炭酸系のジュースを飲みながら話を聞く。

「まず、犯人の顔をみたかい？」

メモを片手に聞いてくる。

「いえ、フードを被っていたため全く見えませんでした。体格も小柄と言う事だけで男か女かも全くわかりませんでした。」

「成る程。犯人に繋がる有用な情報は持っていないのか。」

「はい。」

「凶器はやっぱりナイフだった？」

「はい。でもただのナイフではありませんでした。」

「と、言うത്？」

表情を時に買えず此方の顔をジッとみ続ける。

「ナイフにワイヤーみたいなものを付けていました。後、聞いたことも無いような言葉を呟いてました。」

「ふむ、その言葉は覚えてる？」

「えーと、よく覚えてないです。英語とも違うようでしたし……。でも英語にはなんとなく似ていたような気がします。」

頷きながらメモをとっている。

ある程度書き終わると、少し考え込むようにボールペンを額にあてる。兄さんの考えている時に出る癖である。暫くして口を開く。

「そいつは日本語も喋ってなかった？」

「あ、そういえば喋っていました。」

「日本語も喋れるのか。つまり日本人である可能性もあるのか。これは厄介だ……。」

更に深く考え込んでしまう。

「他に気になった点はなかったかな？」

「他には……やっぱりナイフが体の中に消えていったことですかね。」

「ナイフが体の中に？それは刺さったということかい？」

「いえ、体の中にこう消えていくような感じでした。」

「それはただの人間ではないようだな。」

「かと思えます。」

この事は警察にも話したがあまり信じてはくれなかった。記憶が混濁していると俺を疑っているようだ。

「兄さんは信じてくれるんですね。」

「そりや勿論。神眼なんていう能力を持つ人を何人が知っているからね。これくらいじゃ驚かないよ。」

「そんなにいるんですか……。まあ朱鳥もいますしね。」

うんうんと頷く兄さん。伊達に雑誌記者をやっているわけではないようだ。神眼の能力を持っている人は朱鳥しか知らない。他にもいくつか能力があるようだ。

「あのー、神眼の能力ってどれくらいあるんですか？」

「俺が知っているのは、物や現象を言葉によつてあやつる言霊とか朱鳥ちゃんのような炎、雷とかもあつたね。そう考えるともしかしたらあの犯人は神眼所持者で能力は言霊かもね。だとしたら厄介だ。」

ため息をついて煙草に火を付ける。

「どうして厄介なんですか？」

「言霊という能力はね洗脳することもできるんだよ。記憶を思い出せなくしたりね。だから追いついて見つけても思い出すなと言われ

たら思い出せなくなってしまう。」

「それは確かに厄介ですね。」

ストローを吸い込むが口の中に飲み物が入ってこない。いつの間にか飲み物が空っぽになっていた。

「ちよつと水貰ってきますね。」

おう、とタバコを右手であげながら煙を吐く。

能力者って沢山いるのか。どんな能力があるんだろうか……。

兄さんとの会話は警察との会話と違って様々な情報が手に入るの
で退屈はしない。

しかし、これ以上もう話せることはない。あの事件については思
い出せる限り思い出したからだ。ただ一番重要だった何かを思い出
すことができない。その違和感だけが頭の中に残る。一番重要だっ
たであろうことが思い出せないのだ。

言霊の能力で思い出せなくなったのかな……。

カウンターに到着すると人が先ほどよりも沢山溢れていた。その
中に緑髪で顔が良く似た二人を見つける。葉平と葉也だ。どうやら
帰りがけのようだ。

「葉平、葉也久しぶり。」

右手を上げながら声をかける。此方に気付き同じ顔が此方に向く。
この双子は本当に瓜二つであるが、葉也は眼鏡をかけているので見
分けは簡単だったりする。

「翔也じゃないか。あの事件に巻き込まれたようだけどけがはもう
大丈夫なのか？」

心配そうに尋ねてくる葉平。

「あまり無理はよくないぞ。けがの治りが悪くなるからな。」
眼鏡の位置を治しながら葉也も言う。

「もう大丈夫だって。そこまで酷くはないんだ。ただ医者に止めら
れているから、休んでいるんだ。寝れるから結構良かったり。春休
み延長みたいに考えているよ。」

「おい、まで。医者から休むように言われているのに何故外出して

いる。さつさと帰って寝ろ。」

「まあまあ良いじゃんか葉也。んじゃ体調に気をつけるよ。」

葉平が葉也を引っ張りながら店を出て行った。

さて、俺も水を貰ってさつさと戻るかな。

それから程なくして取材は終わった。もう特にはなせることもなかった。特に進展はなかった。兄さんには自宅まで送ってもらった。

「翔也、お前は間違いなく犯人に命を狙われている。だから一人で外出するんじゃないよ。命がおしければ絶対だからな。」

「わかりました。」

月明かりの中、兄さんからのありがたい忠告を受け取る。もっとも外出する気はさらさらなかった。一人で外出してはいけないというのはかなり行動を制限されるが、寝て過ごすつもりである俺には関係ないことだ。

こうして事件から八日目、二千三十年四月十七日が終わった。

1 - 5 殺害未遂現場

四月二十日土曜日。時刻は朝九時。空は雲一つない快晴。

兄さんの取材を受けた後は予定通り一日中寝て過ごした。部屋から出るのは食事の時のみ。この食事モインスタントである。何故なら両親は共働きであり家にいないからだ。朝早くに出ていき夜遅くに帰る。息子が命の危機にさらされているというのに、特に気を留めていないようだ。土曜日の今日も普段通りに出かけて行った。

結果、俺は春休みの悪習をそのままにした状態である。これでは体にカビが生えてもおかしくはないかもしれない。

ニュースを見るとまだ事件は続いているようだった。生存者は俺とあの女性のみ。そして女性はまだ意識が元に戻らない。つまり、俺が犯人にとつての汚点ということになる。

よって、家の前には不審車両・・・もとい警察の覆面パトカーがずっと貼りついている。いくら自分を守ってくれているとはいえ、監視され続けているため心中は穏やかではない。それにあのような犯人に警察がかなうのだろうか、という疑問もある。あれと渡り合えるのは同じ神眼所持者の朱鳥位なのではないだろうか。

そんなことを寝起きの布団の上で考えていると枕元の携帯がなる。画面には“武神朱鳥”の文字が。無視するとやっかいなので（出るまで何度もかかってくる）緑色の通話ボタンを押す。

「珍しく一回で出たわね。」

相手は心の底から驚いているようだ。いい加減俺も学習するに決まっている。

「で、何の用事だ？」

気だるそうな声を出しながら答える。

「これからお邪魔して良い？」

「嫌だ」

間髪いれずに答える。こいつは何を言っているのだろうか。惰眠

をむさぼりたいのにその邪魔をするとは何というやつだ。

「俺は寝たいんだ。じゃあな。」

「んー・・・、もうついちゃっているんだよね。」

「じゃあそのまま回れ右して帰れ。」

普通出かける前に連絡するのがマナーだろうに。

「それは面倒くさいわよ。早く開けてくれなきゃ護身用に持ってきたこれで切り開けようかな。」

カチャカチャと金属音の鳴る音が電話越しに聞こえる。

「待て・・・お前まさか真剣もってきたのか・・・？」

「そうよ。だってあの犯人ナイフ持ってるんでしょ？ だつたらこちらもそれに見合うものを持って来なきゃ。よし、行くわよー。」

「わかった、わかった。頼むからその物騒なものをしまえ。」

警察は一体何をやっているのだろうか。自宅の前に真剣を構えている人物のだ。どこからどう見ても不審者なのだから取り押さえるなりするのが当たり前だというのに。職務怠慢とは日本警察も困ったものだ。

仕方なしに布団から起き上がり階段を下りていく。玄関に向かい鍵をガチャリと開ける。そこには晴れやかな笑顔で真剣を片手に持つ少女がいた。

「お前、何の用だよ・・・。」

「ちよつと話があつてね。しかしあんた気を付けなさいよ。家の前に不審な車があるっていうのにどうして警察呼ばないの。怪しいから取り敢えず気絶させといたよ。」

朱鳥の後ろをみると不審車両・・・ではなく覆面パトカーの前に三人の男が倒れていた。どうやら俺を守ってくれている警察を不審者と間違えたらしい。

「馬鹿か。あれが俺を守ってくれている警察だよ。」

えっ、と眩きゆつくりと後ろを振り返る。背後からもわかるほど動揺しているようだ。倒れた三人組を確認し再びゆつくりと此方に向く。その顔には冷や汗が浮かんでいた。

「どどどどうしよう。」

下がうまく回らないようだ。

「いや、どうしようとか言われてもなー……。」

此方も起こして事情をわざわざ説明するのは億劫である。

「ほっとけば良いんじゃない？ 後で勝手に目覚めるだろうし。」

「大丈夫かな……。良かった殺さなくて。」

ほっと胸をなでおろす。どうやら彼らは運が良かったようだ。

しかし、朱鳥にもかなわないようではあの犯人を止めることが不可能に近いかもしれない。警察は期待できなさそうだ。

「んじゃあの人たちが眼を覚ます前に……。」

そのまま早足で家が上がってきた。

リビングに入り刀を脇において着席する。俺は麦茶を冷蔵庫から取り出し机の上に持っていく。

「さて、さつきと同じ質問になるけれど何の用だ？」

こんな朝っぱらから来るのだから何か重要な用事でもあるのだろう。

「翔也は、犯人が気にならないわけ？ というか、復讐したいと思わないわけ？」

いきなり表情が真剣になる。

確かに犯人は気になる。しかし、先日の戦闘を思い起こす限りこちらに勝機は一切なかった。寧ろ一方的におもちゃにされるだけであつた。

「そんなことは思わないよ。あいつに俺がかなうとは思えない。」

「そりゃあんた一人だったらね。」

えーと、こいつは何を言う気なのだろうか。嫌な予感しかない。それを口にする前に朱鳥の口が先に開いてしまう。

「私はね、あの犯人が許せない。絶対に許せないし許さない。翔也のあの姿を見たら余計にね。あいつを燃やしつくて黒い炭にして白い灰にしてやる。」

刀をきつく握り締める。眼は普段と違い朱くなっていた。よほど

頭にきているようだ。

「待て待て。ここで能力を使うな。家を炭にされたらたまったもんじゃない。」

あ、ごめんと眼の色を変える。快眠できる住処をなくすことは避けられたようだ。

だが肝心の問題が解決していない。このまま放っておいたら犯人探しが始まるだろう。あまりこちらからは行動を起こしたくないのだ。遭遇して何日か経つが犯人側からのコンタクトは一切ない。このまま動かないのが得策だろう。

「なー、そこまで俺を心配してくれてるのはありがたい。でもなさつきも言ったが俺ではかなわないんだから動いても意味がないんだよ。」

「大丈夫、私も一緒に行くから。」
やっぱりこうなるか。

「んじゃお前が一人でやれよ。」

「何言ってるの。犯人の姿を見ているのはあんたじゃないんだから勿論ついてきてもらうわよ。殺されそうになっても私が守るから。」

確かに朱鳥なら勝てるかもしれない。

「いや、でもな……」

ダン！と俺の脇に刀が振り下ろされる。鞘に納められていたので机が真つ二つになることはなかった。が、俺を脅迫するには申し分なかった。

「行くわよね？」

「はい……。」

この状況にとっても納得できなかったがここは頷かざるを得ないだろう。ここで反論すれば机が四本足で立っていられる保証がなさそうだ。

「んじゃ、これから現場に行くわよ。案内して。」

刀を手に取り立ちあがる。その後について行き玄関を出ていく。

警察官はまだ倒れていた。その脇を通り現場となったビルへ向かう。ビルに到着すると解体中だったはずなのに、その外見は以前と変わっていないかった。恐らく警察によって解体工事を一時中断させられたのだろう。それを物語るかのように黄色いテープが入口に貼られていた。

朱鳥はそれを無視してぐりぬけ中に入っていく。俺もそれに続く。

昼間とあり中は以前と比べてとても明るかった。壁はコンクリートむき出しになっており無機質な空間だった。相変わらず埃っぽい。朱鳥が動かないエレベーターへと向かう。

「おい、それ動かないよ。」

「え、そうなの。工事中だから当たり前か。そういえば何階？」
記憶を探っていく。あれは確か・・・

「十階だったかな。」

「十階ね。んじゃ登るわよ。」

早足でエレベーター横の階段に向かっていく。階段に足を置くとびに埃が立ちあがる。幾つかの踊り場には工具がそのまま置かれていた。無言のまま登り続け十階に到着した。

「うわー、これは酷いな。」

思わず声を上げる。表面が剥がれている壁。砕けている柱。あちこちにはナイフの残した跡が沢山残っていた。前は月明かりのみだったので部屋の様子がよく見えなかったがここまで酷いとは・・・。
良く生き残れたな俺・・・

ふと地面をみると人型に描かれたチヨークのマークがあった。

「そこに倒れたのね。」

そこには血の跡がまだ残っていた。その範囲はとても広く上半身を覆えるほどだった。これだけ血液を流しているにも関わらず、本当によく生き残れたものだ。

朱鳥はずっと部屋の中を歩き回っている。時々立ち止まり間隔を研ぎ澄ましているようだ。その目は朱くなっていた。

「おかしい……。神眼を使った形跡が残ってない。」

「そりやもう相当日にちが経過しているから残っているもの何てないだろうよ。」

首を横に振り否定する。

「神眼の力は使うと空間にその跡が必ず残るの。啓祐さんの話によれば言霊使いだった可能性があるのよね。もしそれが本当ならば、その言霊使いは相当な力を持っている事になる。」

ん、こいつはいつ兄さんと会ったんだ？

「お前兄さんと会ったのか？」

「会ってはいないけど今日の朝早くに連絡を入れたの。もう翔也から情報を聞いていると思ってね。」

勘の鋭い奴だ。

「で、さっきの話はどういうことだ？」

「言霊使いは現象に干渉することができるの。だから空間に残った後を消すことができるのよ。ただこれは相当な力がないと無理。それこそ人を殺せるようなレベルの所持者ね。」

「“死ね”って言えば人を殺せるのか？」

「それは流石に無理、死に方を指定しないと。例えば心臓を止めるとかね。人間の肉体には常に動き続けなければならないものがある。だからそれに干渉して止める。でも生命活動に関わる部分に干渉するのは非常に難しいのよ。理由はわかってないけど。そして空間に干渉するのはそれすらも超えている。もし犯人が言霊使いならば私でもかなわないかもしれない……。」「

どうやら状況はあまり好ましくないようだ。

「でも、犯人が言霊使いとは限らないからね。この眼で確認するまでは。」

この様子からして犯人探しをあきらめる気は全くない。

「お前、確認してからで間に合うのかよ……。」「

俺の言葉を気にも留めず現場を調べ続ける。ナイフの跡に触れただけで微かにでもその跡が残っていないか調べているようだ。

「んじゃ他の殺害現場にも行くわよ。」

「おい、まだ探すのかよ。というか他の殺害現場ってどういうことだ？」

「啓祐さんに情報をもらっただけ。全部で後五件ね。」

「五件もあるのか……。俺を含めると計六件。随分度派手にやっっているようだ。」

「犯人の狙いは何なんだろうな。」

「眼をくり抜いているって話だから他の神眼狙いかもしれないわね。」

「おい、だったらお前が一番危ないじゃないか。」

「コイツは正気なのだろうか？自分が一番狙われているのに何でこんな悠長に犯人探しをしているのだろう。」

「いや、悪魔で予測。殺された人たちは全員所持者ではないしね。そんな話も聞いていない。」

「そうなのか。でも仮に犯人の目的が神眼だとしたら手に入れてどうするんだ？何かに使えるのか？」

「それは私にもわからない。わかっていれば神眼狙いだって断定できるけれど、わからないから悪魔で予測なの。」

「どうやら本当にわからないようだ。しかし、理由が分からずとも眼をくり抜いている点からしてその予測は的外れではないのだろう。」

「さて、さっさと行くわよ。幾つか気になる点もあったし。」

「気になる点？」

「ちよつとね。他の現場を見ないことには判断できないから。」

「そう言いながら足早にエレベータ横の階段に向かっていく。俺もその後が続く。」

「殺害現場は残り五件。」

1 - 6 殺人現場

向かったのは一回目の殺害現場。場所は路地裏のようだ。その入り口には遺族が置いたのだろうか、献花されている花束があった。その花束の横を通り過ぎ黄色いテープをくぐり入っていく。しばらく細い道が続く。昼間なのにもかかわらずそこは暗かった。

暫く歩き続けると少し広い場所に出た。周囲にはビルの室外機が幾つか置いてあり大きな音を鳴らしている。そしてここにもチョークで人型の絵が描かれていた。その色は薄くなっており殆ど読み取ることができなくなっていた。しかし、その周囲にある血のしみでどこで亡くなったのが直ぐにわかった。

コンクリートについた血はどうやら取れていなかったようだ。場所が場所なだけに洗い流す雨も届かないのかもしれない。

その小さな空間に佇み感覚を研ぎ澄ましている朱鳥。犯人の残した痕跡を探しているようだ。しかし、この現場は事件が起きて数週間が経ってしまったている。残る物も残ってはいないだろう。

「あのさ、数週間も経っているのに何で探しているんだ？」

「空間の傷は消えないわよ。時間なんて関係ない。」
姿勢を変えずに答える。

「それに、今僅かに残っている痕跡だけでも探そうとしてるから声かけないで。」

真剣そのものな声色に俺は無言で答える。どうやら暫くそつとしておいた方が良さそうだ。しかし、こんな狭い所まで追いつめられて死しか選択肢がなかった被害者。

どんなに苦痛だったんだろうか。

どんなに悲痛だったんだろうか。

どんなに悲劇だったのだろうか。

そういえば、被害者がどんな人だったのかを知らなかった。男だったんだろうか、女だったのだろうか。子どもだったのだろうか、

大人だったのだろうか。今の自分にそれを知る術はない。嫌、兄さんに聞けばわかるかもしれない。でもあまり意味はないだろうし、現場にのばす足がおもくなるだろうな。

朱鳥動き出す。どうやら、ここでやることは終ったらしい。

「ここにも、残っていたわ。」

「何が？」

「能力以外の力を使った痕跡よ。」

「能力以外？」

「具体的に何かはわからない。でも能力以外の何かを使った痕跡はある、というより違和感があるの。あの解体ビルにも空間に違和感があったの。ただ能力を使ったにできるものとは全然違う。似ているけど違うの。」

「なんだそりゃ。益々わからないな。」

神眼以外に能力があるのだろうか。聞いたこともないが。いや、そもそも俺自身神眼のような規格外の力については詳しくないからもしかしたらあるのかもしれない。

「神眼以外の能力の種類って存在するのか？」

「それはない、と断言できるわ。そもそも神眼の能力と言うのは、特殊な身体を持っている人が発揮できる力全てを指すの。私たち神眼を持つ能力者は、人間がもとも持っているある力を他のものに換えられる身体なのよ。身体の構造自体が普通の人とは違うの。」

「ふーん。んじやもしその換えられる力があれば誰でも能力者になれるのか。」

「そうね。もつとも、換えられるシステムを持っているのは今のところ身体だけだから無理だけど。」

「んじや、さつきから空間にある違和感と言うのは何なんだ？」

「それは知らないし、私が一番知りたいわよ。さて、この現場にはもう用がないから次行くわよ。」

そのまま、再び細い道に入っていく。

あの犯人の正体は何なのだろうか。性別すらわからない。眼を必

ずくり抜く。一体何に使うのだろうか。身体の一部をわざわざ挟り持って帰るといふのは何か目的があるはずだ。ただの人の目の使い道……。そんなのあるのだろうか？

あれこれ考えているうちに大通りに出た。まだ太陽は真上まで登っていない。

「次の現場はどこなんだ？」

「ちよつと待つて。」

そう言いポケットから携帯を取り出す。

「次の現場はこっから歩いて十分くらいね。アパートみたい。」

「アパート？」

アパートと言うと部屋の中なのだろうか？そうになると鍵が必要になつてくる。あ、でも朱鳥の刀でなら切れるのかもしれないな。器物損壊罪は免れないだろうが。

もつとも、こんな心配はまったくいらなかった。何故かというと、ドアがあつたであろう場所には黄色いテープしかなかったからだ。ドアは一体何処へ……。犯人のあのワイヤーでバラされてしまつたのだろうか。

アパートの外見は水色。築20年位だろうか。所々錆びており年月を思わせるたたずまいだ。

それにしても、人氣がなく物静かだ。誰も住んでいないのだろうか？

郵便ポストを見るとほとんどがガムテープで塞がれていた。どうやら人はほとんど住んでいないようだ。

「全然人が住んでみたいだな。」

「そりゃ、町を騒がせている犯人が現れた場所にそう長くは住みたいとは思わないわよ。しかも無差別だからね。」

確かに自分の隣の部屋で、町を騒がせる殺人事件が起きたら引越したくなるだろう。下手すれば被害者の最後の悲鳴を聞いているのかもしれない。そうなれば夜も寝てられない。引越して当然だ。

問題の現場はアパート一階の一番左の部屋だった。ポストを見た限り一階につき四部屋。そして事件の起きた部屋は104号室だった。

「四ねえ……。不吉な数字として忌み嫌われていたから大分昔はなかったみたいだけど、やっぱりこういのつてあるのね。」

ドアのない部屋へと向かっていく。黄色いテープは潜り中に入る。「うわ……。これは酷い。」

思わず口から言葉が漏れた。

部屋の中は悲惨な状況だった。あらゆるものが破壊されテレビも真つ二つになっていた。家具もバラバラにされていた。その切り口は綺麗に一直線。そして、床は赤黒かった。

「随分と派手に荒れてるわね。一体全体どうしたらこんなことになるのかしら。」

そして部屋の中央へと足を進める朱鳥。再び直立の状態で感覚を研ぎ澄まし探索を始める。

俺は、何か残っていないか他の部屋に行ってみる。といっても他の部屋は風呂場とトイレくらいしかないが。覗いてみると、綺麗だった。何も壊れていない。そのままの状態だった。

色々探してみるが犯人に繋がりそうなものはなかった。最も、あったとしても警察があらかた回収してしまっているだろう。

「何やっているの、そろそろ次に行くわよ。」

「ん、ああもう終わったのか。」

「ええ、やつぱりここにもあった。何かしらの力を使った痕跡がね。どうやら言霊使いではなさそうよ。」

そう言っただアのない玄関へ向かう。

「他に住人が住んでいたら話を聞けたのにな。」

「そうね。でも、その人たちの引っ越し先を調べるのも大変よ。わかったとしても事件について聞くのは気がひけるわ。わざわざ引っ越しまでしているんだから。」

確かに、引っ越したという事は事件のことを忘れたいのだからそ

れを今になつて掘り返させるのは酷なのかもしれない。

「そして次の現場はどこなんだ？」

「駅のトイレよ。因みに女子トイレ。」

ふむ、次の現場ではどうやら出番はなさそうだ。流石に女子トイレに入るわけにはいかないからな。

再び大通りを歩きながら今度は駅へと向かう。アパートからはそう遠くないはずだ。

しかし、このような休日に俺が刑事のような行動をするのは我ながら可笑しい。寝るのが仕事である俺がだ、朝から歩き回っているのだ。雨でも降りそうだな。空は青空だが。もつともこの原因はあのフードを被った犯人としか考えようはない。あのように殺されなければ、変わらないものも変わるだろう。俺もこれから変わっていくのだろうか。怠け癖は治ることは良いことだ。

無論、理由が理由であるのであまり歓迎はできないが。

「珍しく考えているような顔をしているわね。」

「いや、まーな。」

本当にどうしたのだろうか、俺は。

「なんでもない。所でお前疲れていないのか？」

「これくらい大丈夫。能力使うよりは全然楽よ。」

「なら良いけど。」

そんなこんなで駅が見えてきた。休日とあって人で賑わっていた。駅周辺には様々なビルが立ち並んでおり、遊びに来る人が多いのだろう。俺は出不精なのであまり来たことはない。

そしてトイレに到着。

流石に黄色いテープはなかった。公共の場所だけに綺麗にされているようだ。日頃から使っているわけだしな。

「んじゃそこで待ってて。ちよつと行ってくる。」

そう言つて中に入つていった。俺は入り口で暫く休憩のようだ。

時計を見ると十一時。このまま行けば昼過ぎには全て回れそう。事件の現場は後二件。

「ん？」

ふと人の視線を感じたような気がした。顔を上げて探してみるが人の数が多すぎて見つけることができない。

まさか犯人だろうか？でもこんな人の多いところでは流石に殺しにかかれないうらう。

ヒュッ

眼の視界に不自然なもの、正確には左側に銀色に光る物……。ナイフが顔の横の壁に突き刺さっていた。体中から冷や汗が出る。まだ犯人に狙われているのだろうか。殺されるのだろうか。恐怖が頭を食いつぶして行く。

冷静になれ。冷静になれ。冷静になれ。冷静であれ！

頭に意識が戻っていく。

ここでは殺されない、殺せない。

理屈で頭を落ちつかせていく。

落ちついたところで飛んできたナイフの柄を掴みナイフを抜く。

刃の長さはそこまで大きくない。意外と小ぶりだった。

「どうしたの翔也？」

思わず驚いてナイフをポケットにしまう。小ぶりなので自然とポケットの中に入った。

「いや、なんでもない。」

「何か顔色が悪いけど……。」

「心配しなくて良いから。」

「休憩しよか？」

「いや、現場も後二か所だろ。さっさと済ませよう。次はどこだ？」

「そう……。次は電車で三十分くらい先の郊外よ。お金はある？」

「大丈夫、財布はあるから。んじゃ行きましょう。」

人込みの中に入っていく改札へと向かう。

さっきのナイフ。犯人は俺の命を狙っているのは確かだ。ただ朱鳥のいない場所で攻撃を仕掛けてきたという事は、朱鳥がいれば早々手を出しては来ないという事なのだらう。

電車で揺られながら三十分、郊外へと到着する。周りにビルは無く人も少ない。ちょっと離れただけなのに、町の景色はこんなに変わるのか。

「四件目は神社の境内の中よ。ほら、あそこにあるでしょ。」

駅から出て道路を挟んだ所に神社があった。森に囲まれた中にあるようだ。周りは木々で溢れかえっていた。

鳥居を潜って境内へ入り石畳を歩き進んでいく。奥に着く前に朱鳥が立ち止まる。

「ここ草むらの奥よ。」

そういつて、石畳からそれて草むらの中に入っていく。十五mほど進んでに少し開けたところに出る。周りは黄色いテープで囲まれている。

朱鳥は再びその中心へ行き感覚を研ぎ澄ます。

俺は草むらの中に入り何かないか探す。無論、今までと同じく何も見つかるような気がしない。

「翔也、次行くわよ。」

「え、もうか？今回は早いな。」

「確定したのよ。犯人は、道具を使っている。言霊使いではない。そして道具は力を原動力としている。」

「人間だれもがもっているやつか？」

「そう、つまり犯人は能力者とは限らない。といつても神眼能力者である可能性は高いのよ。私たちは力を変換する方法を生まれつき知っているの。身体そのものが変換できる機能を有しているからね。その身体を有していないのに力を変換する方法を身につけるのは相当の鍛錬が必要。」

「成る程。」

「でも能力を使った形跡がないから、もしかしたら能力者じゃないかも。でも能力者である可能性が高い。」

「おい、何かややこしいぞ。」

「要点は能力者だった場合、何の能力かさっぱりということ。これ

は戦闘となった時に不便になるわ。」

「手の内がわからないのか。それは確かに厄介だ。」

「取り敢えず戦いになったら先に道具を潰しにかかった方が正解ね。」

朱い眼のまま真剣な表情の朱鳥。

「次の現場に行くのか？」

「こっから近いしついでに。」

そういつて草むらの中に入り石畳に向かっていった。

時刻はもう直ぐで十二時になるうとしていた。

1 - 7 前座

五件目の現場は山の奥だ。さっきの神社の森の裏手にある山だ。距離的には眼と鼻の先なので直ぐに登山道に入って目的地を目指す。手入れの行きとどいている山のように登山道もしっかりしており登りやすかった。

ところで朱鳥の様子が先程からおかしい。というのも、ずっと朱い眼の状態なのだ。臨戦態勢で刀に手をかけた状態だ。

「朱鳥さっきからどうしたんだ？」

「ん、気にしないで。」

ふむ、気にしないでと言われてもその状態では気にしないのが無理な話なのだが。

「近くに犯人でもいるのか？」

「大丈夫。見つけ次第この山ごと火葬するから。」

いやいや。そんなことをされてしまったら俺まで葬られてしまいそう気がする。

どうやら犯人 フードを被ったワイヤーとナイフの使い手 はここにいるようだ。さっき俺にコンタクトを仕掛けてきたことを考えれば、近くににいるのは当たり前なのだろう。

そういえば先程のことを朱鳥に言いだせなくなっている。タイミングを逃してしまった。優柔不断が故の癖である。正直臨戦態勢の朱鳥にこれ以上警戒心を与えてもどうしようも無いので、ほっておくことにする。

暫く山道を登り続けると、倒れた木によって道がふさがれていた。それも一本ではなく何本もの木によって塞がれていた。切り口はとても綺麗だった。

「ここが最後の現場よ。」

「成る程……。あのワイヤーって木も切れるんだな。逆にあの女の人がバラバラにならなかったのが不思議だ。」

「ワイヤーの切れ味は力の調整で変えられるのかもね。」

刀に手をかけたまま立ち止まる。周囲を警戒しているようだ。心なしが周囲の気温が上がっているような気がしてきた。朱鳥の警戒心が限界まで引き上げられている。間違いなく近くに犯人はいるのだろう。

「いい加減出てきたらどうなの？」

朱鳥は視線を周囲に走らせながら声をかける。

「やーやー、朱いお嬢さん。そんなに殺意を出さなくて良いよ。その燃えるような闘志でこの山が燃えちゃうじゃないか。」

上から軽い声が聞こえてくる。それと同時に朱鳥は刀を抜きそちらの方向へ身体の向きを変える。

「ようこそ、俺のフィールドへ。」

手を広げながら今にも倒れそうな木の上にそいつはいた。あの夜と同じ格好。しかし、明かりの中とあって良くその様子が分かった。鼠色のフードに半ズボン。服にはいくつもの切りこみが入っている。そこからナイフの出し入れしているようだ。あの夜、身体の中に入っていると思っていたのはその切り口が見えなかった錯覚のようだ。そして両手にはナイフを構えている。表情はフードを被っているためわからない。依然と同じく口元は酷く歪んでいた。

背の大きさはそこまで大きくない。中肉中背という四字熟語がピッタリだ。

「お前・・・！」

「久しぶり。まだ覚醒はしてないのかな？ だったらちよつと刺激が必要かもね。」

ナイフをクルクル回しながら刃先を俺に向ける。

「黙れ！ 翔也に手は出させない！ 覚醒もさせない！」

低い声で犯人に刀を向ける。その刀からは火の粉が出ている。

覚醒？ 一体何のことだ？ 俺には何の覚えもない。しかし朱鳥は知っているようだ。まさか俺に隠していることがあるのだろうか？

「おーっと、そんなに慌てるなよ。」

両手で朱鳥を制しながら、お気楽な声で話し続ける。

「さすが正統な血の流れを汲んでいるだけあって、能力の質は中々良いね。あこがれちゃうな。」

相手の話し方が朱鳥と真反対、相反してる。こいつもやはり何らかの能力を所持しているのだろう。出なければここまで余裕を出せるわけがない。朱鳥は武神の血を引き、強力な朱の力を持ち、強い。そんなのは一笑に付すものに過ぎないという素振りだ。

「そのの、翔也だっけ？彼も中々だけど今現在では君の方が価値はあるね。その眼欲しいかも。」

俺に向けていた刃先を朱鳥に向ける。

「私の眼を奪いたいなら奪ってみな。その前にあんたに聞きたい。何故、普通の人の眼を取っている。私のような神眼所持者の眼ならいざ知らず、普通の眼を殺してまで取るような価値なんてないはず。」

「その質問には答えて上げよう。答えたらその眼を抉り取っても良いのかな？」

「タダでもお前には渡さない。」

「タダより高いものはないのになー。ま、良いや。んじゃ俺様は親切だからその質問には答えて上げよう。出血大サービスだよ。」

そう言いながら、風通しのよさそうな服にナイフをしまう。

「武器をしまってもまったく警戒を緩めないんだね、朱いお嬢さん。」

「当たり前でしょ。あんたの武器はワイヤーとナイフでセットなんだから。そしてワイヤーは見えにくい、特にあんたのはね。今も見えているのはあんたの周辺にあるやつのみ。そのワイヤーがいつ襲ってくるのかもわからないのに、警戒を緩めることはしない。」

「ご明察。ワイヤーは巻くのが面倒くさいんでね。そのままにしておくさ。さて、では最初の本題に入ろうか。俺は戦う事も好きだけど喋ることも好きなんだ。まだ時間はたっぷりあるんだ。ゆっくりいこうじゃないか。」

こいつ、ペースを全く乱さない。マイペースの代表と言えるかもしれない。このままでは朱鳥があいつのペースに飲み込まれる可能性が。

「おい、早く話を済ませろ。そもそも、俺はお前と喋りたいとは思わない。」

こいつのペースに乗ってはいけないと考え抗うが・・・

「おやおや、随分と俺も嫌われているな。」

やれやれと両手を上げる。抗っても受け流されてしまう。抵抗しても無駄なようだ。

そして、話を続ける。

「翔也、だっけか。お前にとって眼とはんだ？」

眼、身体の一部、外の世界を認識するのにとても優れている身体の器官

「その通り。そして眼と言うのは聴覚よりも沢山の情報を取り入れている。パソコンだと音楽ファイルより動画ファイルの方が要領は大きくなる。それほど、視覚の情報量はとても多いんだよ。その眼をだ、俺は自分の能力の質を上げるために使っている。ただこれは相性があつてだな、例えば朱いお嬢さんの眼の力はとても素晴らしいが実は俺とは相性が良くないがためにあまり意味をなさないんだな。さつきのはコレクションとして欲しいという事なのさ。だから一般人の眼を使う。一般人の眼は相手を選ばないからな。」

「つまりあんたは自分の能力の質を上げるために人を殺して眼を奪っていたわけ？」

刀を構えたまま問いかける。

「ご明察。おかげで俺の能力は格段に上がったね。」

「でも、他人の眼を取り入れて能力が上がるなんて初耳よ。」

「ふん、それはこの国の研究が遅れているだけさ。全く何の研究もされてないんだな。呆れたよ。」

首を振りながら心底呆れている。そもそも日本では神眼の能力を知っている人は少ない。というのも殆ど認知されていないのだ。そ

のせいで研究も進んではないのだろう。何故なのだろうか？神眼の能力はどう考えても大衆の眼を引くはずなのに。

「全く、この国は本当に閉鎖的だな。内緒ごとが好きなんだろうな。」

それに対し睨み続けることしかない朱鳥。研究が進んでいないのは事実なのだろうか？

「無言か。最もその無言は肯定として受けつつておくよ。それにしてもその刀、中々優秀な神器じゃないか。引きこもりの国が作った物にしては良いものだ。」

「神器・・・？」

疑問を浮かべる朱鳥。初耳らしい。

「神器という名前もしらないのか。そいつも俺のワイヤーと同じお前の力で強化されている。最もお前の場合身体は身体の延長線上のようなもので、俺のワイヤーとは若干異なるみたいだがな。神器と言うのは人間に本来備わっている力を用いて、力を発揮させる道具全てを指す。そして発揮できる力は所持者の能力の質の良さと比例する。普通のやつらの眼を喰った理由もその一つだ。」

「あんた、それが許されるとでも思っていないわよね？」

今にも切りかかりそうな勢いの朱鳥。見ている此方は不安で仕方がない。

「許される、か。俺は誰にも許されるつもりなどない。後悔もしていない。止める気もまだない。そして朱いお嬢さん、俺はその男の眼が一番欲しいんだ。といつても今はまだその時ではないけれど。」

「おい、今じゃないってどういうことだ。さっきの覚醒と関係あるのか？」

最初のこの二人が話していた「覚醒」の話。俺には自分に関する知らない何かがあるのだろうか。

「あれ、これは予想外。本人は気付いてないのか。蒼き能りよ・・・」

「黙れ！！！！」

朱鳥が叫ぶ。あいつの声をかき消すかのように。

「おい、朱鳥どういうことだ？」

ここまできて何故隠そうとする。俺のことなのにそれを知る権利はないのか。

「ごめん。まだ、その時じゃないの。説明できる時が来たら説明する……。」

やるせない声で話す。やはり何かがあつようだ。

だとしたらそれは怖い。

非常に恐い。

そんなの恐怖でしかない。

「ふん、そういうことか。そいつの力は確かに珍しいからな。お前の道具にでもするつもりなのか？」

「そんなのはさせない。神の家の頭領、武神の次期頭首としてそれは許さない。」

「次期頭首だろ。現頭首の意思には逆らえないんじゃないかな。」

「黙れ！！！」

「都合が悪くなればその一言で済まず気が。はん、つまらない。」
頭をかきながら呟く。

「おい、そのボーっと立ちっぱなしのお前。」

「何だ。」

「もし覚醒について知りたければこいつを倒すのに協力しろ。そうすれば教えてやっても良いが。」

「ふざけるな。」

いくら知りたいと言っても朱鳥を裏切るつもりはない。そんなのは全く別の問題だ。同列に並べる物ではないし、条件にもならない。殊勝なことで。もっとも、覚醒していないお前など何の役にも立たなそうだな。」

確かに、神眼所持者同士の戦いに普通の俺が介入する余地がないのかもしれない。

「まー、そうがっかりするな。近い将来お前も俺たちの舞台の上で

一緒に踊れるようになるさ。」

「貴様、いい加減にしろ。」

朱鳥がもう限界のようだ。刀が朱く光り始めている。

「そろそろ良い時間か。俺のステージの上でどれだけ戦えるのかな。純血な神眼所持者との戦いはそう出来るもんじゃない。せいぜい楽しませてくれよ。」

「翔也、下がって!」

いきなり朱鳥に後方へ突き飛ばされる。山道を数m転げ落ちる。

いつの間にか眼の前に大量のワイヤーが張り巡らされていた。まるで大量の蜘蛛の巣だ。それが俺と朱鳥の間を阻む。

「流石は勘が良いな。さて殺し合いを始めようじゃないか。」

手を広げ酷く歪んだ口で高らかに開戦を告げた。

1 - 8 武と式

一瞬、時が止まった。

俺は何もすることは出来ない。今はただの傍観者でしかいられない。介入は許されない。というより、介入したら直ぐに巻き込まれて死ぬだろう。直感でわかる。

「そうだな、まずは名前でも名乗っておこうか。」

そいつは酷く歪んだ口元を動かす。

「俺の名を知らずに死なれるのは味気ないからな。」

止まった時の中で言葉を続ける。

「無の世界へと俺の名を運べ。俺の名を無の世界へ広める。朱い女。」

動き出そうとしている時の中で言葉を続ける。

「俺の名前は式神しきがみあきと厭人。今は失われた神の名だ。」

武神と式神が動き出す。

朱鳥の刀が朱く燃え上がる。

『我が獄炎よ、我が指示に従い使命を果たせ。』

朱鳥を中心に爆発が起きる。周囲にあった木、草、土、全てが炎をまとって式神に向け吹き飛ぶ。

『Fly e ge』

ワイヤーが青白く強い光を放つ。すると足元にあったワイヤーが式神を空中へ打ち上げた。その下を大量の破片が洪水のように通過していく。その跡は地面が抉れ、黒い煙を上げていた。

朱鳥は動作を止めず刀を下に構えて振り上げる。剣先から炎が喰らい突くかのように式神へ向かう。式神は空中にもかかわらず全て回避する。そのまま地面へ着地し、前傾姿勢の状態で朱鳥へ向かい突っ込んでいく。その軌跡に沿うようにワイヤーが青白く弧を描く。
『free i』

式神がそうつぶやくと服の切り口全てからナイフが飛び出た。青

白い軌跡を描きながら大小様々のナイフが無数の数で襲いかかる。

「よくそんなにナイフが入るわね。」

朱鳥も式神に向かい、刀で全てのナイフを弾く。一方式神は両手に四本ずつナイフを構える。

二人が衝突する。

金属と金属が激突する。

甲高い音を上げて相対する。

式神は殴るように右手で切りつける。朱鳥は刀で反らしながらその隙を突くように刀を振り上げる。式神は身体を捻るようにしながらそれを回避し、振りかえりざまに左手の四本を朱鳥の身体に向け投げつける。朱鳥はそれを横に回避する。ナイフはそのまま地面に突き刺さり大きな音を立てて地面を割る。

二人は距離を取り姿勢を直す。

「流石武神だ。その血を引いているだけあって、身体能力は高いな。早く死んでくれないかな。」

「あんだこそまさか式神とはね。もう既に消滅した家系のはず。何で死んでいないのかしら？」

二人とも全く息が切れていない。何事も無かったような素振りだ。「ふん、俺様を生んだ家系がそう簡単に消えるわけないだろう？」

「じゃ、私がここでそれを断ち切ってあげる。あんだ達は消えるべくして消えたはずの家系なんだから。生きていることは許されない。」

「消せるものなら消してみろ。お前如きに殺される俺様ではない。消えるのはお前だ。そして、あの木の陰にいるやつの眼を頂こう。」

「私の命に代えてもそれはさせない。」

朱鳥は刀を中段に構える。基本的な刀の構え方だ。その剣先を式神へ向ける。

一方、式神は右手にも持っていたナイフを地面に落とす。ナイフの刃は赤くなっている。刃先がボロボロになっていた。

「しかし、全く無駄に熱いな。こんなじゃどんなナイフも駄目だ

ろくな。」

そう言いながら、ズボンの後ろに手を伸ばしグローブを嵌める。そして、小刀を取り出した。大きさは肘から手首までなので、そこまでは大きくない。それを、逆手に持ち顔の前に構える。

「では、本気で行かせていただこう。」

「同じく、私も貴方を灰すら残らない状態にまで燃やしつくす。そんな小刀、ただの鉄の塊に返す。」

地面を砕くような音がしたかと思うと、朱鳥は一瞬で式神との距離を詰める。間は十メートルもあったはずなのに一瞬で式神の眼と鼻の先まで迫ったのだ。刀を振り上げる。

式神は驚きもせず小刀の持ち手を変えてを受け止める。朱鳥も朱鳥だが式神も異常な反応速度だ。

再び切り合いが始まる。朱い炎を纏った刀が綺麗な弧を描きながら式神へ襲いかかる。式神は身体を捻り踊るように避けながら、小刀で切り掛かる。無論それも朱鳥によって反らされて当たらない。段々と二人の速度が上がっていく。距離を離れたかと思えば距離を詰め、切り捨てたと思えば反らされ、殺したと思えば生きている。止まることなくその戦いは激しさを増す。まわりの木や草は燃えて灰になり、土は黒く焼け焦げ砕かれている。あの二人の周辺にいたあらゆる生物はもう生きてはいないのだろう。それほど破壊されつくしている。

神眼と神眼がぶつかりあうと全てを壊してしまうのだろう。

「あれ、そういえば式神の能力って何なんだ・・・？」

神眼所持者であることがわかっていて。しかし、その能力はまだ分かっていない。まだ使っている所を見ていないのだ。眼に見えないタイプの能力なのか、それとも隠しているのか。能力を使わなくても使用している朱鳥とほぼ同等の強さ。能力を使ったら一体どうなるのだろうか。

青白く光るワイヤーの向こう側で行われている人外の戦い。

決着する気配はない。このままでは持久戦になるので、助けを呼

びに山を降りた方が良いかもしれない。朱鳥を置いて行くことになるが、俺は何もできないので同じことだろう。

ばれない様に姿勢を低くしながら山を下ろうと背を向ける。

「翔也！！！」

「え？」

思わず間拔けな声が出てしまう。振り向くと音は止んでおり、式神がいなかった。

ヤバイ！

いそいで周囲を探すが いない。

その代わり、ワイヤーが空を切る音が周囲に響き渡る。

「どなつてい・・・」

言い終わらないうちに右腕を何かにきつく縛られた。

「え・・・」

右腕を動かそうとするが全く動く気配がない。青白いワイヤーが腕に巻かれていた。

そのまま、一気に残っていた木の枝に吊るし上げられる。二メートル程釣りあげられたようで地面が遠く見える。

右腕に激痛が走る。ワイヤーが食い込んでいるようだ。思わず顔が歪む。

「良い表情してるじゃん。言っておくが俺はお前も逃がすつもりはないよ。ここでジツとしておいてくれ。あいつを殺すまでの辛抱だ、我慢してな。」

いつのまにか真上に式神がいた。

「翔也を離しなさい！」

「んじゃ死ね。」

式神は再びジャンプして荒廃した場所に着地する。

「はーっ！」

着陸後を狙うかのように式神へ突っ込んでいく朱鳥。それを受け止める式神。

炎を纏った刀と小刀がぶつかり合う。

『爆炎！！！！』

朱鳥がそう叫ぶと朱鳥の刀が爆発した。轟音と共に二人を炎が包み込む。

その炎の中からそれぞれ反対側に吹き飛ばされる。地面を転がりながら二人は立ちあがり態勢立て直す。

「朱鳥！お前馬鹿か！！」

「大丈夫よ。この私が自分の炎で死ぬわけないでしょ。」

俺の心配を余所に平然とした様子で返す。しかし、肩で息をしているほど息切れしており限界が近づいてきたようだ。一方の式神は、流石にダメージを受けたようだ。鼠色のフードは今真っ黒になっていた。

「ちっ、全く威力だけは高いなお前。」

そう言いながら犯人は上に着ていたパーカーを脱いだ。

髪の毛は白、右腕には大きな青色の刺青、そして眼は“蒼”かった。眼は蒼いのにその内に秘めているものはとても暗かった。外見は少年のようで体格は細く筋肉が付いている。

「言っておくが、俺はお前と同じ年だからな。」

「え・・・あ、ああ。」

どうやら見透かされていたようだ。

「全く、外見だけで人を判断するなど愚者がすることだ。お前いつペン死んでみるか。あーでもその前に覚醒させて眼を頂いてからだな。」

燃えたのはパーカーのみで式神は無傷だった。

「あんたも、しぶといわね。」

「ふん、お前よくやるな。俺様をここまで追い込んだのはお前が初めてだ。まさか、あのパーカーを焼き切るとは。おかげで武器が小刀一本になっただじゃないか。」

やれやれという表情で両手をヒラヒラさせる。

「んじゃ、ここで死んで楽になりな！」

地面を砕く音と共に朱鳥は式神との距離を詰める。

「お前がな。」

左手を上にあげる。ワイヤーが空を鳴らす音が周囲に響く。青白い線が様々な線を描く。

そして、朱鳥の動きが止まった。

「な……。」

朱鳥の体中に青白く光るワイヤーが巻きついていてた。

「どうやら此処までのようだな。」

小刀の腹で肩を叩きながら余裕の表情で話す式神。

「周囲を良く見ないからこうなるんだよ。覚えたかな？お得意の自爆ももう一回使えば流石に致命傷になるだろう？」

「馬鹿ね。爆発する必要はないわよ。」

「は？」

余裕の表情の朱鳥に、疑問を浮かべる式神。

そして同時に気付き小刀を朱鳥の心臓に向けて突きさすために突っ込む。

「遅いわよ。」

「炎よ、全ての糸を焼き切れ。」

周囲に張り巡らされている青白いワイヤーが赤く光初め次々と切れていく。

俺の右腕も自由になり、下に尻もちをついて落ちる。

「痛い……。」

二メートルほど釣りあげられていたので思ったより痛かった。

朱鳥の方を見ると拘束が解けたようで式神の小刀を受け止めていた。

「チツ、しとめ損ねたか。」

「甘いわよ。私がそんなことじゃ死なないわよ。」

「ならば、俺の能力でお前を封じるまでだ。」

式神の蒼い眼が朱鳥の眼と合う。

すると朱鳥は力が抜けたように倒れていく。

「あ、あんた……何をした……。」

刀を地面に突きながら膝をつく。

「朱鳥、大丈夫か！」

急いで朱鳥に駆け寄る。

「まだ、上手いかないか。もう少し力が必要みたいだな。」

朱鳥から距離をとり薄笑いを浮かべる。

「お前、何をした！」

「なーに、ちょっと心を弄らせてもらった。初めてだから中途半端みたいだな。」

まんざらでもないというようだ。

「心って、どういうことだ！」

「それはお楽しみだ。しかしちょっと疲れたかな。俺はここいらで退散とさせていただこう。お前の眼は今度頂こうか。」

そう言つと荒廃している木々の向こう側に消えていった。今回はこれ以上追撃をしてこないようだ。

「朱鳥！大丈夫か！？」

段々と顔色が青白くなっていく。かなり重症のようだ。

「ごめん……。歩けそうにないから家まで連れて行ってくれないかな……。」

息も切れ切れに言う。

「大丈夫だ、俺がちゃんと連れて行くからもうしゃべるな！」

「あり、がと……。う」

意識を失ったようだ。

早く朱鳥を連れていかなければ。

俺は朱鳥を背負いながら急いで山を降りた。

1 - 9 □兄妹 弑、弑、？！

その後、急いで山を降りたて朱鳥の家へ電話をかける。一度救急車へ電話をしようと119まで押したがそれはやめた。朱鳥の異常の原因は神眼のせいなのであり、一般の病院ではなんの解決にもならないと判断したからだ。そしてどうや正解だったようだ。

「もしもし、武神です。」

抑揚のない一定のトーンの声だった。電話に出たのは朱鳥のお付きの人のらしい。あらためて、朱鳥がお嬢様なことに今更ながら驚いてしまった。因みにお付きの人の名前は□弑^{せついちご}人と言うらしい。取り敢えず今起きたことについて場所や状況を一通り伝えた。

「わかりました。ではそちらに向かいますので、動かずそこでお待ちください。あ、病院に連絡するなどの余計なことはいしないで下さい。色々と厄介ですので。」

朱鳥を近くにあつたベンチで寝かせる。俺は車が来ても直ぐわかるように車道の方を良く見る。

そうして数分後で黒い車が道の向こうから見えてきた。車の通りが殆どない道だったのでまさかとは思ったがそのまさかだった。車は俺たちの前に止まる。しかし、電車で三十分以上もかかるこの場所へ何故こんなにも早く着いたのだろうか？異常な早さである。

中からは黒いスーツを着たオールバックで眼鏡をかけた男が降りてきた。年齢は啓祐兄さんと同じくらいのようなのだ。

「翔也さんですね。お嬢様を見ていただきありがとうございます。」

そう言つてベンチに寝かせてある朱鳥の方へ向かう。当の朱鳥は顔が青白くなつており呼吸も荒くなつていた。気も失つており非常に危険な状態だ。

そんな朱鳥の様子に取り乱すことなく、無表情に脈を測つたり瞳孔を見たりしている。それらが済んだ後に朱鳥を抱き上げ車の後部

座席に運び込む。無駄のない迅速な動きだった。

「あなたも助手席に乗って下さい。色々話を聞かなければなりませんので。このまま、お嬢様のお宅まで来ていただきます。大丈夫ですか？」

「はい・・・大丈夫です。」

有無を言わさない物言いだったので大人しく従う事にした。無論、断る理由も無いわけなのだが。

車の助手席に座ったら直ぐに車は発進した。

「あの、質問を良いですか？」

実はさっきから何故こんなに速く到着したのか気になっているのだ。

「どうぞ。答えられる質問には答えましょう。」

「ありがとうございます。まず、何故こんなに速く到着したのですか？俺は朱鳥の自宅へ電話をしたはずです。電車で三十分もかかる場所から何故こんなに早く到着したのですか。」

「そのような事、少し考えればわかるのではないのでしょうか。お嬢様の家庭教師を受けているのですから。」

「あ、はい・・・。」

うーむ、何故かとても攻撃的な印象を受けるのは何故だろうか・・・。

「もっともそのような質問をしている時点でダメなのですが。仕方がない、此処は答えて差し上げましょう。」

やはり一々棘ある言い方だ。

「単純です。私はお嬢様から今日どちらへ行かれるのを聞いていたからです。」

「近くまで来ていたんですか、成程。いや、待って下さい。それだと自宅の電話に出たことの説明にならないじゃないですか？」

「あなたは転送という言葉を知らないのですか？自宅の電話であっても、出た場所が自宅とは限らないでしょう？」

「あ、そういうことだったんですか・・・。」

思わず声が小さくなってしまう。この人、表情が終始変わらないので何を考えているのか全く分からないのだ。鉄仮面の人と話すのは苦手だ。一樣、言葉の節からして怒ってはいるような気はしなくてもない。

「私が外出する時には常に転送の状態になっています。何事も私を通してから連絡が行くようになっていきます。これは朱鳥のお父様である赭鸞^{しゅうらん}さまも同じです。」

「朱鳥のお父さんというと、現在の武神家頭首ですよね？」

「そうです。」

「朱鳥の付き人なのに何故、頭首でもある朱鳥のお父さんのまでも管理しているのですか？」

「私は武神家全ての情報を管理しているのです。なので武神家に関する情報は私に全て集まるようになっていきます。」

「どうやら、かなり信用されているようだ。」

「因みに私には弟と妹がいます。二番目の弟の式晨^{しきぎ}は護衛を担当しています。三番目の妹^{みでぎ}？ 塑稀は医療を担当しています。」

兄弟揃って武神家に仕えているのか。しかし何故、弟や妹の情報までわざわざ俺に話したのだろうか？ それぞれの役割が、情報管理、護衛、医療と重要な役割ばかりだ。

「その質問に対する解答は明白です。あなたにはこれから暫くこちらで過ごして頂くことになるからです。その上で私たちについて知っておくことはとても重要です。」

「え、何ですか？」

自宅に帰ることができなくなるという事なのか。これまたいきなりな展開だ。

「理由なんて聞かないで下さいよ。事態はかなり深刻なのですから。」

俺はとんでもないことに巻き込まれているみたいだ。もつとも殺されかけたあの夜からなんとなく感じていたことだが。恐らくはあの式神のやつのせいだろう。それを踏まえると武神家は一番安全な

のかもしれない。

本来消滅したはずの家系、神の名を持つ少年。あ、俺と同年だそうだから青年というのが正しいのだろうか。そして、“蒼い眼”“蒼い能力”。

しかし、俺は神眼に詳しくないので周りで起きていることに関しては理解が及んでない部分が沢山ある。その説明を是非して欲しいと思うのだが、そうはいかないようだ。俺に対する対応は非常に刺々しいからな……。武神家の情報管理をしているのだからきつと知っているのだろうけど、質問するのは何か気が引けるのだ。

そんな非常にいずらい雰囲気の中、車で三十分ほどだろうか。朱鳥の自宅に到着した。その門構えはとも立派である。さながら、武家屋敷だ。周囲は高い塀で囲われている。周りは山に囲まれておりとても東京にある場所とは思えない。建物自体は木造で大きな屋敷になっている。敷地は勿論無駄に広い、迷子になる位広い。屋敷が入り組んでいるのでなおさらだ。昔遊びに来た時には、朱鳥が必ずいなければ迷子になること必須だった。

門が自動的に開き中に入っていく。暫く車を進めると玄関に到着した。そこには、救急用の担架と白衣を着た女の人がいた。髪を後ろで束ねており体格は細くて背が高い。眼鏡をかけており見た目からして頭がよさそうだ。あれが？塑稀さんなのだろうか？性格は弑人さんと同じようなのだろうか……。そうだとしたら少し困るな。話してみないことにはわからないが。

？塑稀さんの目の前に車が静かにとまる。弑人さんは急いで自動車を降りて後部座席で寝ている朱鳥を運び出す。担架に乗せた後に？塑稀さんと二、三会話している。その間俺は朱鳥の横に立って様子を伺う。さつきと比べると更に酷くなっているようだ。そこへ？塑稀さんが話しかけてきた。

「翔也くんかな？」

明るい声で話しかけてきた。どうやら兄である弑人さんとは違う性格のようだ。

「はい、そうです。はじめましてよろしく申し上げます。」

「よろしく。んじゃさっさとお嬢様を医務室に運ぶわね。あなたも怪我しているようだからついてきて。治療してあげる。」

そこへ式さんが声をかけてきた。

「翔也くん。治療が終わり次第緒攀さまと会っていただきます。覚悟しておいて下さい。」

そう言くと、車に戻り発進させてどこかに行ってしまった。

しかし、“覚悟”しておくとはどういうことだろうか……。不穏な感じにしか聞こえない。

「んじゃ行きましょ。」

？ 塑稀さんは早歩きで担架を押して移動を始めた。俺はその後について行く。

「お嬢様の容体は最悪であっても、死ぬことはないから安心しなさい。」

「そうなんですか？」

「ま、これは医者としての直観だよ。信頼はして欲しいかな。本当のことは実際に治療してみなきゃわからないけどね。」

如何にも自信ありげの様子だった。武神家の医者だから恐らく日本一信頼できるかもしれない。だから信頼しようと思う。

「あ、そうそうさっきの式人のことだけど、大丈夫よそこまで心配しなくても。緒攀さまはそこまで怖くないから安心しなよ。」

「そうなんですか……。」

「全く、式人は脅し過ぎだよ。怒っているようだけど翔也くん関係ないのになー。」

「あ、やっぱり怒っているんですか？」

「うん。理不尽だよ〜まったく。」

「あの……。何で怒られているのかよくわからないのですが。」

「お嬢様が傷ついたことに怒っているのよ。そしてその原因が翔也くん絡みだからね。勿論、翔也くんの責任ではないよ。当たり前だけど。悪いのは式神のやつだからね。」

「式神について何か知っているんですか？」

「いや、私はそこまで詳しくはないよ。式人なら何か知っているのかもしれないけど。でも後で赭攀さんに会うのだから、そこで聞けば良いと思うよ。そこら辺の話については日本の中で誰よりも詳しいはずだからね。」

確かに朱鳥のお父さんならば何でも知っていそうだ。勿論、俺に関することについても。

「しかし、いきなり最近忙しくなったわね。つい数ヶ月前はのんびりとした時間が流れていたのだけれど、暫くはこの緊迫した状態が続くのでしょうか。」

真剣な眼になり考え込む？ 塑稀さん。暫くして医務室に到着した。その前に立ち止まりこちらに顔を向けてきた。

「んじゃ翔也くはちよつとここで待ってて。朱鳥の治療するから。数分で終わるともうけど、その後に君を治療するね。序に検査もするから。んじゃ、また後で。」

そう言うつと医務室の中に朱鳥を運びこみ扉を閉じた。俺は近くの椅子に座りこみ待つ。

「やあ、君が翔也君かい？」

いきなり隣側から声がした。直ぐ右隣に、いつの間にか居たのだ。外見は式人さんと似ており髪型は同じオールバックだが、式人さんよりも長かった。何故かニコニコしている。

「あの・・・、式人さんですか？」

「おお！よくわかったねー。凄い凄い。改めて、俺はせつにしき式人だ。この家の護衛を担当している。以後お見知りおきを。」

笑いながら握手を求めてきたのでそれに応じる。ニコニコと決して顔を崩すことはない。この人となら？ 塑稀と同じようにコミュニケーション出来るかも知れない。

「君も大変だったね。よりもよって式神に眼を付けられるとは。ま、君なら大丈夫。なんとかなるさ。ところで式人が何かしなかったかい？」

「いえ、特に何も・・・。」

「ほー、これはこれは明日にでも槍が降りそうだな。かなりあり得ないことだから。君、一生分の運を使い果たしたかもね。式人が八あたりしない何で珍しいぞ。」

「あ、いえ八あたり位なら・・・。」

「そうかそうか。ま、当然と言えば当然。あいつは武神家の情報に詳し過ぎているからね。それは言いかえれば神眼に関する情報を殆ど知っていることになるんだよ。故に、あいつは全てが見えているような錯覚に陥っているのさ。だからこそ何とかかなりそうだったことが、何ともならなかったことにうんざりしてしまうのさ。それは既に何ともならなかったことでも。今回の件然りね。俺よりも年上のくせにまだまだ子どもだよ。フツ。そうそう、君は何かしらの能力を持っていないのかい？式神に集中的に狙われるというのはとてもとても重要な意味を持っているんだよ。多分蒼の能力だね。ただ蒼の能力ってうちのお嬢様の朱と違って様々な種類があるんだよね。だから君がどんな能力を持っているのかとても興味があるんだよ。」

前後撤回。この人、ほつといたらずつと喋っていきそうな気がする。ある意味コミュニケーションが取りづらい。しかも、思い込みも激しいときた。もしや俺などいなくても、壁さえあればずつと話せるんじゃないだろうか。

もつとも、その光景を思い浮かべると何故か胸が痛くなる・・・。

「残念ながらまだわからないです。その・・・蒼の能力であるかどうか。」

「そうかそうか。では後で赭攀さまにでも聞いておくと良いよ。あの方は君の事について昔から知っているらしいからね。」

「そうなんですか？」

これは初耳だった。一樣朱鳥とは幼馴染だから昔は良く遊びに来ていたのだが、実は朱鳥のお父さんとは殆ど会ったことがないのだ。「フツ、これで赭攀さまと会うのが楽しみになったかな？どうせ

式人には“覚悟しておけ”みたいなことを言われたと思うけどそんなに緊張する必要はないよ。別に死ぬわけじゃないんだからさ。寧ろ君にとって有益な情報になるのだから喜ばないと。ほらニーツで

」

いつのまにか口の中に両手の人差し指を入れられて無理矢理笑顔を作らされていた・・・。

「ニーツ・・・。」

何やってんだろ俺・・・

何で初対面の人に人差し指を突っ込まれて無理矢理笑わされているのだろうか。壁一つ向こう側では朱鳥が苦しんでいるというのに。「そうそう。笑顔は大切だよ。危機的状态になればある程ね。死ぬときだって笑って死ななきゃだめだよ。笑顔というのはとても高尚なものなんだからね。何せ人間にしかできない表情何だから。笑顔こそが人類があらゆる生物の頂点に立てた理由と言っても過言ではないと思うよ。だから笑顔の練習は欠かさずにねフツツ。」

「そんな練習どうやってやるんですか？」

「ん？そんなの鏡を使って中にいる自分に笑いつづけるのさ。そうすれば美しい笑顔を作ることができるよ。君の家にも鏡はあるだろう。」

「一様鏡があります。」

自宅の鏡の前で笑顔の練習をしている自分を思い浮かべる。うむ、家族に見られた俺はもう一生顔を合わせる事は出来なくなるかもしれない。絶対にしたくない、誰にもばれなくてもだ。式晨さんはそんなことをずっとやっていたのだろうか・・・。

「ならば話は早い。家に帰ったら早速練習を始めるんだ。あ、でも君は暫く此処にいるんだっけか。だったらこの私が直々に笑顔の指導をしてあげよう。一週間もすればこの私のように笑顔の達人になれるよ、フツツ。」

「いえ、折角ですが遠慮しておきます。」

「別に気に欠ける必要はないんだよ。私は人のために何かをするの

が好きなんだ。自分にどんな害があったとしてもね。それが死であつてもだ。ただのたれ死ぬよりも、誰かのために死ねた方が素晴らしいと思わないかい？」

「それは、あまり考えたことがないです。」

死ぬことについてど考えたこともなかった。寧ろこれから自分はどう生きる事になるのかしか考えたことがなかった。

「そうかそうか。そりやそうだろうね。君は死にかけたことが一回しかないからあまり考えたことはないのかもね。でも、死ぬことについて考えておくのとても重要なんだよ。死というのは万物平等、誰にでも訪れる事なんだからね。そして、死を考える上で注意しなければならぬのは自暴自棄にならないことだ。死を恐れてはいけないよ。今は生きているんだから。だからこそ高尚な死を迎えられるように、笑つて死ぬるように、生きている時は精一杯生きなきゃいけないんだよ。幕を閉じるなら素晴らしい舞台を演出したいじゃないか。だから私は、どうしたら美しい舞台を演出できるのかを考えているんだよ。」

確かに、あの夜以降俺にとって死は遠い存在ではなくなつてしまつた。まだ成人すらもしていないのにだ。のんびりした未来があつたはずなのだが、もう過去の話になつてしまつたのだ。“人生何が起きるのかわからない”とか言つていた人がいたが、“人生いつ終るかかわからない”ということでもあるのだろう。

「フフツ、そんな悩んだ顔をしなさんな。」

「いや、今のはあんたのせいなんだけど・・・。」

「フフツ、怖い顔をしないしな。そう言う時こそ笑顔だよ笑顔。」
うーむ、こちらの言葉は通じないのだろうか・・・。とか悩んでいたら医務室の扉が外側に開いた。そうやら朱鳥の治療が終わつたようだ。

「あら、式炅じゃない。こんなところで何やつているの？」

「おや？ 塑稀じゃないか。どうして君がこんなところに？」

「ここは医務室でしょ。私の領域だよ。^{フィールド}そしてまずは人の質問に答

えてから、質問をするべきじゃないの？」

「フツッほらほら、怖い顔になっているよ。女性は笑わないとシワが増えちゃうよ。」

「あんに私の肌の心配をされる筋合いはないよ。」

「そうかそうか。」

やれやれと手を上げ顔を振る。

「実はだね、この翔也君とお話をしていたのだよ。楽しかったよ。実に素晴らしかった。」

満足そうな表情を浮かべている。こっちは堪ったものではなかったのだが。

「大方あんなが一人で喋っていただけでしょうに。ごめんね翔也くん、迷惑掛けちゃって。」

「いえ、大丈夫です。それで朱鳥の方は？」

「お嬢様なら問題はないよ、ちゃんと治療は施しておいたから。致命傷だったみたいだけどこれ以上は酷くなることはないよ。時間がかかると思うけど。命に別条はないから安心しな。」

良かった。どうやら命は助かったようだ。

「最も的確な治療方法がね・・・」

「え、何ですか？」

「ん？何でもない気にしないで。」

何事もないような表情だった。もっとも何か含んでいるような物言いだっただが。

「良かったじゃないか翔也君。ほら笑顔笑顔、ニーツ。」

「ニーツ・・・」

取り敢えず笑ってみる。あーもう、何でこんな時にこんなことをしているのだろうか。

「あーもうダメダメ。」

再び無理矢理口に入差し指を突っ込まれていた。

「ちょ、やへれくらはい・・・」

「そうかそうか、嬉しいのか。」

いやちつとも嬉しくないのだが……。というより指を突っ込まれているので上手く話せない。

「ほら、式戻そろそろ止めなさい。」

そういうと？ 塑稀さんは俺を式戻さんから無理矢理解放してくれた。

「あ、ありがとうございます。」

このまま突っ込まれていたら逆に、これから笑うことが苦手になりそうだった。笑顔を強制されるのがこんなに恐ろしい事だったとは。

「フフツ、相変わらず？ 塑稀は強引だね。笑顔は大切なんだよ。病は氣からとも言っじゃないか。」

強引なのはあなたです。

「残念ながら翔也くんは外傷なの。外傷は気だけじゃ治らないわよ。ほれ、私も仕事するからあんたも仕事に戻りな。」

「フフツ、了解。んじゃ翔也君また後で会おう。」

そう言うなり消えた。その場にいたはずなのに消えた。視界から消えたのだ。椅子の上から消えた。

思わず驚いてしまった。さっきはいきなり表れて、今度はいきなり消えたのだ。幽霊なのだろうか？ まさに神出鬼没だ。

「言っておくけど式戻はお化けじゃないからね？ あいつ、気配を消すのがとても十八番なのよ。しかも、ただ消えるんじゃなくて見せる人にとって空気と同じように錯覚させるのよ。脳が消えたと認識させるの。だから見えない護衛として働いているんだよ。」

どうやら式戻さんはただの護衛ではないようだ。確かに神眼を持つ武神家に仕える者として、そこら辺にいそうな只の強い人間では護衛が務まることはないのだろう。

「さて治療するわよ。右腕出して。」

袖を捲って右腕を差し出す。見るとワイヤーで縛られた跡がクツキリと残っていた。服の上からだっただけならここまで跡がついているとは。かなりの強さで縛られていたのだろう。

「成る程ね。意外と軽傷でちょっと驚いちゃったよ。あるいは既に回復しているのかな？ んじゃ軽く薬塗って包帯巻いておくね。この分なら傷跡は残らないと思うよ。」

そう言つて薬を塗った後に丁寧に包帯を巻いてくれた。どうやら「三兄妹の中で一番まともなのは？ 塑稀さんしかないかもしれない。」

「？ 塑稀さん質問を良いですか？」

「どうぞ。答えられるものだけ答えましょう。」

「あ、はい。ありがとうございます。では何で皆さんお互い呼び捨てなんですか？」

一番年上の式人さんならまだしも、式晨さんと？ 塑稀さんは年の差のある兄妹なのだから呼び捨てにするのは不思議だ。

「あのね、私たち「三兄妹は三人そろつて一つなのよ。因みに年の差はそれぞれ年後だから、私と式人の差は二年しかないのよ。そして私たちはお互いの存在が不可欠。誰が欠けてもならない。三人で一つ。三人で武神家の付き人としてその役割を全うできるのよ。」

三人で一つ。一人として欠ける事は許されない。きっと深い絆で結ばれているのだろう。でなければ武神家への付き人として完璧に仕事を行う事ができないのだろう。

「よし、治療は終了。これかさ赭攀さまに会いに行くんだっけ？」

そうだった。式晨さんのせいですっかり忘れていた。取り敢えず何を聞くか考えておかなければ。朱鳥のお父さんとは直で話すのは初めてだ。顔と顔を合わせたことが数回しかないだけで、会話を交わしたことはないのだ。

「ありがとうございます。」

「気にしなくても良いよ。また何かあったら此処にきなさい。どんな傷でも治療してあげるから。」

その時医務室のドアが短いノックの後開いた。そこには式人さんがいた。

「ちょうど良い時間だったみたいだな。では案内しよう。来なさい。」

「そう言つと背を向けて歩き出した。俺は？ 塑稀さんに一礼した後、その後を追つた。」

「全く、ただでさえ赭攣さまは忙しいというのに。手短にすませて下さい。」

そう言つて、長くて、入り組んでいて、視界の悪い、迷路のような廊下を歩いて行く。暫くすると八枚も襖のある部屋にたどりついた。

「この中に赭攣さまがいらっしゃいます。お入りください。」

そう言つて中央の襖を開ける。そこには、一人の男がいた。目は細く肩幅がしっかりしており見た目からして強そうだ。しかも只ならぬ気配を纏っていた。俺のような戦闘において素人な人間にもわかるほどだ。

その人物こそ朱鳥の父でもあり、神の名を統べる家系の頭首である武神^{たけがみしづる}赭攣である。

この一連の出来ごと、特に赭攣さんとの出会いによって俺の人生は決定的に決まった。これを境に俺は二度と十二日前の俺に戻ることは出来なくなった。良い意味でも悪い意味でもだ。

「翔也くん久しぶり。こうして話すのは初めてだね。」

部屋に一步入ると、朱鳥の父親である赭攣しじゅるさんは腕を組んで座っていた。

「はい、お久しぶりです。」

只ならぬ気配にも関わらず、その口から出る言葉はとても落ち着いており優しかった。その差に面喰めんくってしまった。

「そう固くならなくて良いよ。今日は君に話さなくてはいけなことがあからね。落ちついて聞いてほしい。では、そこに座ってくれ。」

目の前にある座布団の上に座る。赭攣さんと一対一、顔を突き合わせる形になった。弑人いちとさんは襖の外で控えているのだろう。

「まずは朱鳥を助けてくれてありがとう。」

そう言って深々と頭を下げる。

「いえ、そんな大したことしていません。寧ろ俺のせいで朱鳥を危ない目に合わせてしまいましたし……。」

そうだ、俺がいるから式神が現れて朱鳥をあんな目に合わせたんだ。俺にこそ原因がある。

「そう自分を責めないでくれ。原因の一端は私にも有るのだから。それに朱鳥も想像したほど重傷では無かったし。回復には時間が掛かるみたいだが負い目を感じる必要はないよ。」

その重傷を負わせた式神 一体何の能力で朱鳥を倒したのだろうか。朱鳥を倒した一撃はただ視線を合わせただけなのだ。あれが蒼い眼の力なのだろうか。

「あの、式神は……式神厭人は一体何の能力を持っているのですか？」

赭攣さんは少し考え込んだ後に口を開いた。

「大体はわかっているが……その前に、式神について君はどれだ

「知っているのかな。」

式神について 戦闘に入る前に確か飛鳥は“消えた家系”と言っていた。

「式神家はね十年以上前に一族諸共消滅したはずなんだ。嫌、自ら一族全ての力をもつて自爆したはずなんだ。」

「自爆って・・・どうのことですか？」

「人類にとって大きな災厄をもたらしたあの事件。二千十三年に起きた世界中を巻き込む爆発が太平洋の中心で起きた。その原因が式神家だ。」

「そうだったんですか・・・。」

世界の科学技術の進歩を停滞させた謎の爆発。その因果関係は全てはつきりしていない。成る程、神眼という未知の力が関わっているようでは無理もないだろう。

「詳しいことは、私も良くわからない。何せ現場は分家の者にまかせていたからな。私たち本家は指揮をとっていた。」

「でも何故式神家がそのようなことを？」

「式神家はね、神眼を研究していたんだ。その成果は我々よりもはるかに質が高いものだった。但しその過程において罪のない一般の人々を用いていたんだ。実験体としてね。よって我々武神家がその粛清に向かったわけなのだが、上手くいかなかったんだ。後一步という所で失敗した。」

無念な表情を浮かべる。

「しかし、まさか生きていたとはな。しかも、朱鳥と同じくらいの年となるとあの時にやはり生き残りがいたんだろうな。今まで式神を使って一様の対策を行っていたが、徹底的な対策を行う必要があるな。これ以上一般人の犠牲を出すわけにはいかないからな。式神、いるか？」

「はい、こちららに。」

いきなり、真横から声がした。急いで振り向くとそこにはニコニコ笑っている式晨さんがいた。

「おや、そんな口をあぐり開けてどうしたんだい？それは笑顔の練習をして欲しいのかい、フツ。」

と言いながら指を突っ込もうとしたため慌てて口を塞いだ。本当にこの人は神出鬼没だ。いつからここにいたんだよ……。

「式戻、それはまたの今度にしてくれないかな。」

「はい、わかりました赭攀さま。」

姿勢を正して正面に向き直る。流星に主の命令には逆らえないようだ。

「では、私の推測だが式神厭人の能力が何かを話そう。」

二人とも真剣な顔になり、赭攀の話に耳を傾ける。

「？塑稀の話によれば、朱鳥は精神的ダメージを受けていたようだ。そして式神厭人が蒼の能力であることを踏まえると、操心術である可能性が高い。操心術というのは、心を読むことができ更に操ることもできる能力だ。発動条件は眼を合わせる事らしい。」

「つまり朱鳥は式神に心を操られて……」

「その通りだ。そして心の傷であるが故に適切な治療方法はわからないようだ。ただ外傷ではないので命に別条はないようだ。不幸中の幸いと言っやつだ。式神のやつが未熟である事も幸いしたのだろう。そこで式戻。」

「はい。」

短い言葉で返す式戻さん。その様子は普段のニコニコ笑う余裕が見えない。

「蒼の能力、系統操心術である式神厭人を捕らえよ。今までは捕縛対象が曖昧だったが今回の件ではつきりしたので、早急に動いてくれ。もし、捕縛が難しければ殺しても良い。情報に関しては引き続き式人から受け取ってくれ。」

「わかりました、仰せのままに。」

一礼した後、その場から霧のように消えた。

「さて、今度は君のことについてだ。」

赭攀さんが此方に顔を向ける。

ついに自分に関する話になり必然と姿勢が固くなる。

「薄々気付いているかもしれないが、君も神眼の能力者だ。」

やはり、俺もそうだったのか。今更な気がしなくもない。

此処最近の状況を鑑みれば、神眼所持者でなければ生き残れているはずがない。

「しかも蒼の能力者で、その中でも珍しい種類なんだ。それが式神に狙われている理由かもしれない。」

「珍しい能力とは・・・？」

確か蒼の能力には幾つも種類があると式晃さんは言っていた。その中でも珍しいものなのだろうか。

「ところで、君は他の人と比べて異常に回復速度が速くないか？」

「あー、はい。」

確かに俺は怪我の治癒能力が確かに速い。あの夜の件で負った大けがも今では綺麗サッパリ治っている。

「俺の身体の治癒能力は確かに速いですが、それでも直ぐに治るわけではないですし・・・。それが関係あるんですか。では俺の能力の名称は？」

「君の系統は永劫だ。」

「永劫・・・ですか。」

永劫、つまり永遠。終わりが無いもの。

「君はその能力を覚醒させたが後、死ぬことが出来ないんだよ。」

「え、つまりそれは・・・。」

「どのような攻撃を受けても身体は治癒し、死ぬことはない。」

死ぬことはない、俺は永遠に死ぬことはない とんでもない事実に反応できない。

いや、でもそれは本当なのだろうか。赭攣さんを疑うわけではないが信じる事が難しい。どうして俺になんかにそのような能力が・・・。

「因みに、その覚醒は起きないように抑制させてもらっている。」

「え、どういう事ですか？」

「君が生まれた時に心臓に直接抑制の呪をかけさせてもらった。その呪がある限りは覚醒することはない。」

「何故、そのようなことを・・・？」

「死ぬことが出来ないというのはとても孤独な事なんだよ。とても辛い。生きるという事自体が辛いというのにそれを永遠に続けなければならぬんだよ。精神が狂ってしまっても生き続けなければならぬんだ。そんな不幸なことはあつてはならないと私は考えている。」

死ぬことができない。

周りの人々、好きな人、大切な人。皆が死んでいく中生き続けなければならぬ。それはきつと哀しいかもしれない。生きるのが辛くなっても死ねない。正に生き地獄だ。

「そこで私と君の両親とで考えたんだ。結論として取り敢えずその能力の覚醒を抑える運びとなったため呪をかけさせてもらったよ。その能力の覚醒を君の意思で決めてもらうためにだ。」

「俺の親もですか？」

「そうだ、君のお母さんと私は昔からの知り合いでね。ま、この話は後日にしよう。」

全く知らなかった。まさか知り合いだったとは。

「因みに呪の解き方は心臓を直接突き刺せば良い。」

「え、心臓を突き刺すんですか・・・？」

首を縦に振る赭攣さん。

他に痛くないやり方はないのだろうか。かなりえげつない場所にかけられてしまったものだ。死ぬことのない命を手に入れる代わりに、とんでもない痛みを味わわなければならないようだ。

「自分で良く考えて判断してくれ。その思考力がもう君にあると私は信じている。」

「わかりました。自分で考えて判断します。」

満足そうに頷く赭攣さん。

「さて、これで式神に狙われてしまった大体の理由は把握したと思

う。そこでうちの分家の者に君の護衛を任せようかと考えている。本来ならば式晁を与えられれば良いのだが、あいにく式神捕獲に全力投球してもらいたいのですね。」

「いえ、全然問題ないです。寧ろ嬉しいくらいです、はい。」

俺の反応に首を傾げる赭攣さん。

こちらとしてはあの騒がしい人に護衛されるのはこまる。精神的なダメージが大きすぎるからだ……。正直内心ではかなり安心している。本当に良かった。

「そして分家のものだが、名前は神成梓かななり あずさという者だ。紫の眼で重力使いだ。まだまだ未熟な所もあるが、戦闘の強さは私が保障しよう。後、一連の出来事が収まるまでうちに留まってもらう事になるのが大丈夫かな？」

「大丈夫です。どちらにせよ暫く学校には行けませんし。それに此処にいれば安心です。よろしく願います。」

きっと此処は日本で一番安全かもしれない。何しろ敵が敵だからだ。プロフェッショナルに任せるのが一番だろう。

「ゆっくりしてってくれ。君のお母さんには私から連絡しておこう。久しぶりに話してみたいものでね。では、式人に部屋を案内させるのでついていってくれ。梓については後ほどそっちに挨拶に向かわせるからよろしく頼むよ。」

「わかりました。では失礼します。」

一礼して部屋を出る。

そこには式人さんが無表情で立っていた。

「終わりましたか。」

「はい……。」

「では此方へ。」

踵を返した式人さんの後をついて行く。

何か威圧的なものを凄く感じる。俺はかなり嫌われてしまっているみたいだ。暫く一諸に過ごすというのにこれでは行く先が心配だ。「あの、これからよろしく願います。」

「まったく、君のような部外者をこの家に置くことになるとは考えられない事だ。私は反対したが緒攀さまのご指示とあつては従わざるを得ないからな。くれぐれも迷惑をかけないでくれ。」

射抜くような目で睨まれる。身が縮む思いだ。目だけで人を殺せるんじゃないだろうか・・・。

「もし朱鳥さまの身に再び何かが起きようなものなら、私は君が悪くなくても許しはしない。覚悟しておけ。」

とんでもない警告を受ける事になってしまった。というより理不尽な・・・。

この人だけは敵に回したくない。いくら情報管理担当と言っても、あの式晃さんの兄だ。只者ではないはず。

暫く薄暗い廊下を歩き続けある部屋の扉の前で止まる。

「さて、此処が君の部屋だ。後ほど梓を此処に来るように言いつけておきます。挨拶をしておいて下さい。外出する際にも彼女は常につくことになります。では何かあれば梓に申し受け下さい。」

無表情な顔で一礼した後に薄暗い廊下の向こう側に消えていった。部屋の中に入ってみると一人で過ごすには丁度良い部屋の広さだった。畳がはられており、窓からは周囲の森が見渡せる。中々の良物件だ。

神成梓か・・・どんな人なんだろう

名前しか聞いていなかったので全く想像することができない。取り敢えず俺が望むのは普通の人である事だ。ただ、神眼所持者だそうだからそれは期待出来ないのかもしれない。ま、何だかんだ心配してもしょうがないだろう。外れる時は大きく外れるものだから覚悟しておくしかない。

そして特にすることもないので、畳に転がり仮眠をとろうとするんー。畳の上だとやっぱり寝にくいな

俺は畳の上で寝るといふ事を経験したことがあまりない。昔から畳のある部屋がない家に住んでいたからだ。日本に住んでいるのにこれ如何に・・・。

まだ日が傾き始めようとしている時間なので外は明るいがひとまず布団を敷くことにした。式人さんに見つかったら小言を言われてしまうかもしれないが、部屋の中までは入ってこないだろう。それくらいのプライバシーは守ってくれることを祈る。

しかし武神家の情報を全て握っていると、どうなんだろうか。一瞬襖を開けようとする手が止まる。ま、でもそんな心配をしてもしょうがないわけで。

結局襖をあけて布団をしいて仮眠の準備を始める。

さて、寝るか。夕飯を食べるにはまだ時間があるだろうし三時間は寝れるだろう。

そうして布団に潜り込んで眠りに落ちて行った・・・はずだった。布団の入っていたであろう襖の中から何かが落ちる音がしたのだ。

「いたーーーーーい！」

襖の中から甲高い声が響く。どうやら仮眠することはできなさそうだ。

襖がゆっくりと開いて行く。

中から髪の毛を後ろに束ねた黒装束に紫色の帯を締めた女の人が出て来た。

「痛てててて・・・。えーとあなたが翔也さん？」

腰を押さえながら床に立ちあがる。

「こんにちは。私は神成梓。以後よろしく！式晨さんの代わりになるかわからないけれどあなたの護衛をさせて頂きます。」

軽く頭を下げる。雰囲気からしておかしいところはなさそうだ。

まともでちょっと安心した。

「というか、何でこんな時間から布団何か敷いて寝ようとしているんですか？」

首を傾げて疑問の表情で質問してくる。

「いや、単純に寝たいだけだよ。」

「え、ええええええ！」

顔を赤らめてあたふたし始める。ん、何か誤解をしているような・

「ちょっと待って下さい！私は護衛を任されたのであって、そこまでするよには命を受けていないです。いや、で、でも今は翔也さんがご主人様だから従わなきゃいけないのかな。で、でも初めては好きな人って。」

目を回して更に慌て始める。

「ちょっと、落ちついてって。」

マズイ。かなり変な誤解をされてしまっているようだ。

「は、はい！」

さつきよりも心なしか顔が赤くなっている。早く正さなければ。

「俺はこれから軽く仮眠を取ろうとしたただだって。君と寝るだなんて一言も言っていないよ。」

「な、なんだあ。良かった。」

胸を撫で下ろして座りこむ。そんなに安心されると逆に傷つくな・

・。そんなに嫌だったのだろうか。

「では、私はお傍で控えさせていただきますね。」

そう言いながら枕元に正座してちょこんと座る。

む、これはこれで何故かとても寝にくいぞ・。というよりこの子、意外と胸が大きい。黒装束だからわからなかったが下から見るとわかりやすい。朱鳥とは違うな。

「ちょ、ちょっとどこ見ているんですか！」

腕を交差させて俺の視界を遮る。

「い、いや何でもない。所でさそこに居られるととても寝にくいんだ。だから入口の近くの方で待機しておいてくれないかな？」

「は、はい！しません。」

慌てて立ち上がり入口の方へ小走りで向かう。こちらに背を向けて正座する。かなり真面目ではあるようだ。

俺には考えなければならぬことが沢山ある。

式神のこと。朱鳥のこと。俺の永劫の覚醒をどうするか。

でも、今考えても仕方がないことだ。

俺の怠けスキルの発動だ。そういうわけで俺は眠りに落ちて行った。

肩を叩かれて眼がさめる。身体を起こすと傍に梓が座っていた。何か言いたげそうな表情だ。

「あの。夕食の時間ですので起きてく、ください。」

「ん、わかった。」

しかしこの子、未だに緊張しているのだろうか。口が上手く回っていない。これはこれで護衛として心配だ。でも、赭攣さんのお墨付きだから大丈夫か。

「そういえば夕食はどこで食べるの？」

「私がお持ちしました。下げる時も私がやるので大丈夫です！」
机の上にいるの間にか夕飯が置かれていた。どうやら皆で集まって食べるという事はないようだ。

「ここ最近は皆さん忙しいんです。なのでそれぞれが空き時間に夕食を食べている感じです。」

確かに俺以外の人は皆、式神のせいで大忙しなのだろう。昼寝したせいか罪悪感をひしひしと感じる……。俺だけがこんなに暇を持て余していて良いのだろうか。

「そ、そうだ。夕食を取りながら色々お話ししよう。私はまだ翔也さんの事についてわからなですし、翔也さんも私について殆ど知らないみたいです。」

「そっか、それじゃ食べながらお互い自己紹介しようか。」

二人で机に座り食事を食べ始める。

「えーとんじゃ俺からいくかな。俺は生上翔也。神眼は何か蒼の眼らしい。系統はえーっと、永劫だったけな。覚醒はまだしていない。」

「ええええええええええ！」

そう言いながら梓は机から後ろに向かってひっくり返る。

「あ、蒼き眼で永劫！？な、何で私なんかがそんな方の護衛を！？」

目を回しながらあたふたしている。そんなに驚くことなのだろうか・・・。

「いやもう、それはもう国宝級ですよ！というより世界遺産級ですよ！蒼き目というだけで国宝なのに永劫何て言ったらもう世界遺産です！」

この眼ってそんなに希少だったのか。

「まさか生きているうちに所持者の人と会える事ができるだなんてビックリです！」

さっきから急に興奮しっぱなしだ。どうやら感情が素直に出る子のようなのだ。

「で、では次は私ですね。」

一旦箸を置く梓。

「えーと、私は武神家分家七の神成梓かなりあずさです。神眼は紫の眼で能力は重力使いです。」

「分家七？」

「はい、武神家は十の分家を抱えていてその七番目が神成家なんです。」

十ってこれまた多い数だな。それだけの分家を束ねているのか。

「因みに数字の割り当ては強さの順番になっています。私の家は比較的に弱い方なんです。」

「待って、重力使って結構強そうな気がするんだけど・・・。」

名前からして重力を扱うのだろう。だとしたらかなり強い気がするのだが。

「重力使いという名前の通り、確かに私たちは重力を操作することができます。例えば敵の地面の重力を五十倍にして潰しちゃったりできます。」

随分度と残酷な技を使う事が出来るようだ。

「そんなことが出来るのに何で七番目なんだ？」

「実はこの力、制御がとても難しんです。強すぎると見方を巻き込んだり、はたまた自分をも巻き込んでしまうのです。結果、訓練中

に自滅してしまいう人が何人もいるんです。」

すこし悲しそうに頂垂れる。身近な人が訓練中に亡くなったことがあるのだろうか。

「そんな感じで訓練に生き残った人が武神家に仕える事を許されるんです。」

「じゃ君はその訓練の中生き残った一人なんだ。すごいじゃん。」

「は、はい。でも私これが初任務だったりするんです・・・。」

あれ、ちよつと待った。初任務と言う事は重力に巻き込まれて俺も潰れるなんて事故が起きるのだろうか。いくら怪我の治りが早いと言っても重力に押し潰されたら堪ったものではない。

「心配しないでください。極力潰さないように頑張ります！」

「いや待て、極力じゃなくて絶対に潰さないでくれよ！」

思わずこちらの声も大きくなる。益々心配になってきた。プレスされる経験などいらない。しかも呪が刻まれた心臓も巻き込まれて潰されて、呪が解けてしまうような気がするのだが。ただ呪が解けずにプレスされた後、徐々に治るのもそれはそれで生き地獄。どっちになっても恐ろしい。

俺達は本来組み合わせさってしまっただけではないペアではないのだろうか。

「精一杯頑張るのでよろしくお願いします！」

両手でガッツポーズをしながら円満な笑顔だ。

こちらの心配を余所にやる気満々、もとい殺る気満々のようだ。

「ところで、さっきは寝る直前だから突っ込まなかったんだけど。」

「何のことですか？」

何の事だかわからず首を傾げる。

「何で君襖から出てきたの？」

「あれ、そんなことありましたっけー？」

とぼけるような表情で視線を横に流す。

「いやいや、俺の仮眠を邪魔したじゃんか。」

「んー覚えていたんですか。実は私の寢床がこの上なんです。」

「あれこの上に部屋何てあつたつけ？」

「いえ、この屋根の板挟んで一枚上です。」

「って屋根裏で寝る気なのかよ！」

あそこは人が寝る場所じゃないような気がするのだが。

「うー式昴さんに言わないように釘を刺されていたのに……。」「

え、どういうこと？」

式昴さんの指図とうはどういうことなのだろうか。

「実は式昴さん私の師匠なんです。それで今回この任務につくにあたって、翔也さんに気付かれずに何日間あそこで寝られるかを指示されたんです。」

式昴さんが師匠だったのか。何と気の毒な。

「式昴さんは素晴らしい師匠ですよ。特に笑顔が一番ですよ！」

笑顔を浮かべる。この子の笑顔ならずと見ていても良いかもしれない。

「もしかして笑顔の練習とか言つて指突っ込まれたりするのか？」

「はい。それはもう毎日、四六時中！」

良かった。式昴さんが俺の護衛担当にならなくて本当に良かった。

……。あんな練習を毎日もやってられない。

「式昴さんは強いですよー。 “霧隠れ” っていう技が使えるんですよ。それで暗殺から白兵戦まで何でもできちゃうんです。私もあの技使えるようになりたいな。」

そう言いながら表情を緩める。かなり懂れているようだ。

その後黙々と二人して夕食を食べる。

「ごちそうさま！」

「ごちそうさま。」

言い終わつた後直ぐに梓は食器をまとめ始める。

「では翔也さんはそのままです。私はこれを片づけちゃいますね。」

梓は食器を持ち上げ部屋から出て行った。

そう言えば朱鳥は大丈夫なのだろうか。ちょっと様子を見に行ってみよう。

梓も帰ってくるのに時間はかかるだろう。しかしこの屋敷は無駄に広いのでまだ道を覚えていなかったりする。ま、探索ついでに回るのも良いだろう。迷子になっても誰かいるだろうし。

立ち上がり部屋を出て薄暗い廊下を何となく歩いて行く。相変わらず明かりは申し訳程度にしかない。更に今は日が沈んで夜になっているのでまるでお化け屋敷のようだ。

暫く長い廊下を何となく歩いて行く。すると向こう側から誰かが歩いてきた。

「あら、翔也くんこんな所で何しているの？」

白衣をきた？ 塑稀さんだった。これは運が良い。

「あ、どうも？ 塑稀さん。実は朱鳥の様子が心配だったので様子を見に来たんです。」

「成る程ね。でも今は面会謝絶中だから無理かな。」

「そんなに悪いんですか？」

命に別条はないとは言え精神的なダメージは大きいようだ。

「明後日くらいには会えるようになると思うからそれまで待っててくれる？」

「はい、わかりました。朱鳥をよろしくお願いします。」

「何言っているの、これは私の仕事よ。勿論全力で治療させて貰っているよ。私に任せなさい。そして、翔也くんは自分自身のことについて良く考えておきなさい。緒攣さまから聞いたよ。まさか永劫だったとわねー。運が良いのか悪いのか。じゃ、私はこれで。」

そう言っただけとすれ違い廊下の向こう側へと消えていった。そうだな少し考えてみよう。

これからの自分の事について考えるため部屋にいったん戻る。どうやら梓はまだ帰ってきてはいないようだ。

永劫の力か。

永劫、死ぬことのできない力。とても魅力的だし、悪い所がないように思える。

ただ、自分だけが生き残り他の人が死んで行くのを見送らなければ

ばいけない。時間を共有できる人たちがいなくなっていくのだ。

いなくなればまた新しい人間関係を作れば良いが、それは代わりにはならないだろう。代わりになる人間なんていない。人間一人一人の存在する力はとても大きいし多種多様だ。

やはり、この呪は解かない方が良いのかもしれない。

これが今の俺の結論だ。考える時間は五分にも満たなかったが俺にとっては十分だ。

扉が開く音がする。梓が帰ってきたようだ。

「ただいま戻りましたー。あれ、何でそんな難しい顔をしているんですか？」

「いやなんでもない、気にしないで。」

「何かそういうこと言われると余計に気になります！」

ぐいっところらに顔を寄せて、俺の表情を読み取るうとする。

「本当に大丈夫だって。」

手で視線を遮って押し返す。

「ところでさ、君の能力について一様見ておきたいんだけど見せてもらえるかな？」

「良いですよー。では、何か手ごろなものはないかな。」

そう言って部屋中の探索を始める。暫くして小さな花瓶を持ってきた。

いや、花瓶って大丈夫なのか？高そうな気がするが……。

そんな俺の心配を余所に花瓶を両手で掲げる。

「では、まずこの花瓶を浮かせてみますね。」

花瓶を手のひらにのせる。

「行きますよー！」

すると梓の眼が紫色に変色する。眼が怪しい光を放つ。それと同じに花瓶が浮きはじめる。

それを両手で操り、回したり、身体のを旋回させたりして飛ばす。

「おー結構便利そうだな。中々上手いじゃんか。」

思わず拍手をしてしまった。

「でも制御が難しんです。強すぎると花瓶が割れちゃうので。」
と言いつつも気前よく花瓶を飛ばし続ける。中々手慣れているようだ。

ただ、調子に乗れば乗るほど勿論手が滑るという事が起きやすくなるわけだが。

ピシッ

何かにひびが入る音がした。勿論その音源は飛んでいる花瓶意外にない。梓もその音に気が付き身体を硬直させる。

「お前、まさか・・・。」

梓の顔から血の気が引いて行く。そして慌てて花瓶を降ろして背中後ろに隠す。

「い、いえいえいえいえ！問題ないです。では花瓶はこ、これ位にして。」

そう言つて慌てながら花瓶を元あつた場所に戻す。

あの花瓶いくらしたのだろうか・・・。

「で、では気を取り直してもう一つだけ見せます！」

気を取り直して俺の前に達両手を横に広げる。すると梓を中心に紫色の膜が半球円状に張られる。大きさは人が二人ほど入れるくらいの大きさだ。

「これは重力の結界です。何か物が飛んできても直ぐに跳ね返します。試しのその枕を投げてみて下さい。」

さつき寝る時に使っていた枕を取りに行く。よくよく考えたらこれをさつきの花瓶の代わりに使えば良かったと思うのだが、敢えて言わないでおこう。

「では私に向かって投げて下さい！」

「それじゃ行くぞ。」

枕を右手で持ち上げ、腕を大きく後ろに下げて力を溜める。

そして全力で枕を重力の決壊に向けて投げつけた。

ピシッ！

大きな音と共に枕が破裂してしまった。どうやらあの結界は跳ね返すというより、ぶつかって来たものを破壊してしまうようだ。

無残な枕は中に入っていた羽毛と共に散って行った……。

「お前、これはやり過ぎじゃないか……。」

勿論梓の顔は先ほどよりも更に血の気の引いた青ざめた表情になっていた。周囲の決壊を解除して頂垂れる。

「どうしよう……、師匠に怒られる……。」

膝を抱え込んで沈み込んでしまう。

「式戻さんなら説明すればきつとわかってくれるよ。俺も一緒に謝るからさ。」

一樣それなりのフロアを試してみる。

「翔也さんは私と一緒に罰を受けてくれるんですね！何とお優しい……！」

いきなり両手を掴まれて振り回される。本当に感情が素直に表面へ出過ぎだ。どれだけ感情の起伏が激しんだこの子は！

「待て、謝るとは言ったが罰を受けるつもりは毛頭ないんだが。」

「そんなー。」

そう言って再び頂垂れる。そこへ部屋の扉からノックの音が響いた。

枕の断末魔の音に誰かが気付いたのだろう。

「失礼します。」

抑揚のないトーンの声と共に部屋の扉が開く。

「この声はまさか……。」

どうやら一番来てほしくない人が音を聞いてしまったようだ。

部屋に入ってきたのは、式人さんだった。部屋に入るなり周りの惨状にため息をつく。

「あなた達は一体何をやっているんですか？」

射抜くような目線に俺と梓は思わず姿勢を正す。

「ここは崇敬なる武神家なのですよ。しかも、その家のものを破壊するなど言語道断。特に神成梓。分家ともあろう者が本家の物品

を破壊するなど一体どういう神経をしているのですか。」

「すいません……。」

顔を伏せてしょんぼりと肩を落とす。

「別に梓だけが悪いわけじゃないです。やってみてくれと言ったのは俺なので。」

ため息をついて呆れる式人さん。

「全く君達は……。今回は翔也君の顔に免じて見過ごしましょう。翔也君は赭巒さまの大切なお客様なのでね。しかし、次やったら覚悟しておいて下さい。いくら翔也君でも許しません。その枕のようになりたくなければ、何もしないでください。私の堪忍袋の緒はそこまで太くないのでね。」

額に血管を浮かべながら睨みつける。

「はい、気を付けます。」

頭を下げて謝る。梓も揃えて頭を下げる。

「では、せめて片づけは自分たちで行って下さい。代わりの枕は後で梓、お前が取りに来なさい。」

そう言つて踵を返して部屋から出て行った。

扉が閉まった音とともに力が抜けて二人してため息が出る。

「相変わらず式人さんは怖いな。」

「あの人って人なんでしょうが。鬼にしか見えないんですけど……。」

床にへたり込んでしまう梓。

「あの人はやっぱ怖いな。俺なんかかなり嫌われているみたいだし。あんまり揉め事は起こさない方が良いな。」

「触らぬ神に祟りなしですよ。では、私が片づけるので翔也さんはそのまま待っていて下さい。」

「良いよ。俺も手伝うよ。」

「いいえ、翔也さんは今私のご主人さまです。主を働^{あるじ}かせるなんて言語道断です。ジツとしていて下さい。」

そう言つて梓は散らばった羽毛を集め始める。一方俺は、仕方な

いので畳に座ってしばし時間を待つ。

その後新しい枕が部屋に来て取り敢えずは一段落した。

「さて、もうすぐで十二時になりますね。ではそろそろ寝ましょうか。私は屋根裏に戻りますね。」

布団の入っていた襖を開けて屋根裏に登ろうと足をかける。

「いやわざわざ屋根裏に行かなくても良いんじゃないか？俺に見つかつたんだしさ。」

「確かにそうですね。」

しばし考え込む梓。顎に手を当てて悩んでいるようだ。

「うーん、でもどこに寝れば良いんでしょうか？」

「此処で良いんじゃないか？」

何故か再び顔を赤らめる梓。また変な誤解をしているのだろうか。

「で、ででも私男の人とその、寝たことないんです……。」
ちよつと待て、何かそのセリフはとても危ない発言でしかないような気がするのだが。

「これでも私はまだ十五歳なんです……。何でその経験というものは……。」

「いや、だから寝るっていうのは同じ布団って意味じゃないから。」

「え、そうなんですか!？」

口をポカーンと開ける。そして更に顔を赤くしていく。

「え、じ、じゃ私勝手に変な妄想を……。」

「いや、だから落ちついて。取り敢えずお前も布団しいて寝ろ。」

「は、ひゃい!」

屋根裏から布団を引きずり降ろして、ぎこちない動きで布団を敷いて行く。そして頭の中まで潜り込んでしまう。

さて、俺も寝るかな。

新しくて少し固い枕に寝心地の悪さを感じながら俺は本日二度目の眠りに落ちて行った。

こうして武神家での一日目が終了した。

一方、ここは真夜中の鏡楼高校の屋上。まだ寒い風が屋上を吹き抜けていく。

そこに式神厭人と式戻が相對していた。

厭人は半ズボンに上は身体に張り付くようなシャツを着ている。

一方の式式は黒いスーツを着て髪型は綺麗に整えられたオールバックだ。その長い髪を風になびかせている。

「フツ、やっと見つけましたよ。」

相変わらずニコニコと笑みを浮かべながら厭人を見る。

「はん、今まで二度も俺を取り逃がしておいて捕らえられるとも思ってたのか？」

厭人は酷く歪んだ口に笑みを浮かべながら余裕の表情だ。

「三度目の正直です。しかも今回は殺しても良いという指令が出ています。まさかあなたがあの忌まわしき式神家の生き残りだったとはね。私も本気で活かせていただきますよ。」

そう言うといつの間にか式戻は剣を掴んでいた。刃はとても長く一メートル半はあるだろう。その刃は黒く光っていた。

「へー、武神家の護衛ともあろうう人が西洋の剣を使うとはね。これは以外。」

「この剣に名前はありません、無名なんですよ。名がついてしまうとその名に縛られてしまうのでね、フツ。」

「それは面白い考え方だな。んじゃ俺の小刀 牢刀 とどちらが強いかに試してみるか？」

そう言うって黒い手袋をはめて小刀を取り出す。

「そのようなおもちゃで私に勝てるっても考えているのですか。今はもうあの神器を失っているのでしょうか？命乞いをすれば命だけは助けてあげますよ。」

式戻は無名の剣を左手に持ち構え、姿勢は正したままだ。

「あんなのは飾りだ。これ一つで俺は十分だよ。」

厭人は顔の前に逆手で小刀 牢刀 を構える。足は左足を前に右足を後ろに、姿勢を低くする。

「最も、飾りだからこそ使わなきゃ花がないよな！」

そう言うのと左手を大きく右に引く。すると式晨の周囲に青白く光るいくつものワイヤーが襲いかかる。

「フフツ、やはりストックはありましたか。しかしこれは私には効果がありませんよ。」

姿を消す。霧隠れの技だ。ワイヤーは虚しく空を切る。

一方の式晨は厭人の五歩前に現れる。その様子に驚くことも無く厭人は後方へ高速で移動して距離を開ける。

「あなたのその動き、ワイヤーを使っているのですか。成る程、色々な使い方があるんですね、フフツ。ならばこの邪魔な糸を細切れにするまでですね！」

式式は剣を大きく振る。すると周囲を剣撃が襲い幾つかのワイヤーを切断していく。

「あんた神眼を持っていないのに、中々やるじゃんか。でもそんなんじゃ全てを切ることもなんてできないよ。ここは既に俺のフィールドだ！」

満足そうな酷く歪んだ笑みを浮かべる。

「今度はあんたを細切れにしてやるよ。」

「フフツ、甘いですね。」

式式の未だに余裕な表情に厭人は警戒心をさらに強める。

「私はね、逆境的な状況こそ打破するのを得意とするのですよ。ここはあなたたのフィールドであると共に私のフィールドでもあるのですよ、フフツ。」

構えを変えて、剣の柄を顔の横まで持つていき剣先を斜め下に下げる。式晨独特の構えだ。

「それじゃ、誰が此処のフィールドを制するかやってみようじゃないか。」

「フフツ、望むところ。そしてあなたを今度こそ捕らえましょう。」

式晨の言葉が終るとともに戦闘が始まった。

1 - 12 戦場跡地

窓から見える空は曇り一つない快晴。差し込む日の光もとても心地よい朝だった。

梓あずひに朝八時に無理矢理起こされて朝食をとる。まだまだ寝ていたのにそれに関しては聞く耳を一切持つてくれない。

「序です。翔也さんの悪習である、だらけきった生活習慣を治しちゃいましょう！そうすればお嬢様にも誉めて頂けると思うので。是非一緒に頑張りましょう！」

という梓のやる気満々な希薄に押されて結局起きる事となった。折角の休みだから寝ていたいのに……。何て時間の勿体ない。

意識のはつきりしない状態で朝食を食べ終える。昨日の夕飯と同じように梓は食器を片づけて出て行ってしまった。

よし、この隙にまた寝るか。

そして布団に再び潜り込み眠り込む。二度寝こそ最高の幸せだし、そんな心地よい眠りも今度は別のものによって妨害されてしまう。携帯が鳴ったのだ。

画面に出ている名前を見ると「下光葉平」という名前が。髪の毛が緑色で双子の弟の方だ。性格はともお気楽で人思い。兄の方は性格は逆であり頭が良いが理屈を優先させるタイプだ。ここまで対極的な双子も珍しいのではないだろうか。

そんな双子の弟からの連絡だったのでどうせ下らない話の内容なのだろう。ということと俺は無視し続けた。

いつもならば二回位で着信は止まるはずなのだが……。今日は違った。

何度も何度も鳴りつづけるのだ。無視を決め込んでいるのにこんなにかけてくるとは予想外である。結局この着信は梓が部屋に戻ってくるまで鳴りつづけた。

「翔也さん、携帯なってますけど？」

部屋に戻るなり鳴り続けている携帯を手にとって差し出してきた。
「いや、無視しちゃって良いよ。どうせ下らない事だから。」

「あのー、下らない内容のために三六回も電話をかける人なんです
かこの人？」

いつの間にやらそんなにかけていたのか。これはちょっと珍し
ぎるな。そんな大切な事でも起きたのだろうか。仕方ない一度出
てみるか。

「もしもし、日曜日の朝っぱらから何の用だ？」

「あ、やつと出たか！おいお前だけ無視する気だよ！でも、今
はそんなことは良いや。それよりもヤバイぞ高校が！」

大きい声で喚くように喋る。背後からはパトカーの音や人のざわ
めき声が聞えて来る。

「一体何が起きたんだ？高校で何かあったのか。」

「何があつたも何も、屋上が崩れ落ちてんだよ！」

屋上が崩れている？今一言っていることの意味がわからない。大
きな地震が起きたわけでもあるまいし。火事とかが起きたのだろう
か。

「しかもただ崩れているんじゃないんだよ！校庭にまで破片が飛ん
できていて、もう半壊の状態なんだよ！お前も見に来いよ。」

「えー、見に行つてどうするんだよ下らない。じゃあな。」

「あ、おい翔也！」

携帯の通話終了ボタンを押す。

学校が半壊しているのか。ま、これはこれで休みの期間が更に延
びるからある意味吉報なのかもしれない。

「あの、翔也さん何かあったんですか？」

「何か俺の通っている高校が屋上から半壊したらしいんだ。」

「ええええええええ！」

大袈裟なという反応をする梓。

「見に行きましょうよ！」

興味深々のような。内容を教えてしまったのは失敗かもしれない。

この子なら興味を持たないわけがなかったか。寝起な頭が上手く働かなかったせいで失敗してしまった・・・。

「良いよ面倒くさいから。んじゃ寝るね。」

「だーめです！」

そう言つて掛け布団を無理矢理はがされる。

「ご飯食べた後に寝ると太っちゃいますよ。身体動かさないと！ほら運動がてら翔也さんの高校に行きましょう！」

結局押しに弱い俺は梓に無理矢理行くように説得されてしまった。仕方なく出かける準備をする。

「では行きましょう！」

梓に手を引つ張られながら部屋を出る。すると目の前に式人さんが立っていた。思わず身体が固まる。梓も驚いて動きが止まってしまったようだ。

そんな俺らの不自然な状態に気を止めることなく口を開く。

「あなた方はこんな朝早くから何処へ行くこうというのですか。外出するのは出来るだけ控えて下さい。翔也君は今狙われているのですよ。」

こちらを見据えて話す。一方梓は頑張つて口を開き話そうとする。昨日の今日である。式人さんの前ではあまり下手なことは出来ないのだろう。

「いえ、あの翔也さんの高校で事件が起きたらしくてその様子を見るに・・・。」

目を横に下に反らしながら話す梓。そんな不自然な動きに注目もせずいきなり考え込む式人さん。

「ふむ、そうでしたか。あなたにしては中々良い勘をしていますね。」

え？という表情になる梓。俺も頭の中に疑問符が浮かぶ。良い勘とは一体どういう事なのだろうか。単純に気の向くままの行動を梓はしただけのはずなのだが。

「実は昨日の夜を境に式人との連絡が途絶えているんです。」

「ええええええええ！師匠がですか！？」

さっきの声よりも数倍の声で驚く。

「私もその高校の情報については手中にありましたが、別件の情報について確認しなければならぬのです。なのであなた方に任せましょう。鏡楼高校の様子とその近辺を探って式晁に関する情報を見つけて下さい。もし本人を見つけた場合は至急私に連絡を下さい。では。」

言うだけ言うと言を返して廊下の向こう側に消えていった。その姿が見えなくなってから梓が口を開く。

「まさか、師匠がやられたんじゃ……。」

「そんなわけないだろう。だってあいつ強いんじゃないのか？」

「確かに師匠は強いです。しかし神眼所持者ではありません。だからもし神眼所持者、それこそ式神と戦いになったらどうなるかわかりません。」

「え、そうだったのか。」

霧隠れ何ていう技を使えるのだからすっかり何かの神眼所持者と思っていたがどうやら違うようだ。

「取り敢えず連絡が取れないとなると心配です。最悪の場合拉致されている可能性があるので、急いで探しに行きましょう。」

梓が慎重な面持ちになる。予想以上に自体は深刻なようだ。万が一式晁がとらえられているようなことがあったら予想されるのは・
・俺の眼との取引なのだろうか。でも、覚醒していないから材料にはならないはずなのだ。

「式神の考えていることです。きっと強引に覚醒させられるかと思っています。なので急いで事実確認をしましょう。」

取り敢えずは式晁さんの所在をはっきりさせることにした。武神家を出る。

早足で鏡楼高校へと向かう。近づいて行くにつれ日曜日にも関わらず人の数がとも多かった。そして校門の前にはパトカーが数台停まり警察官が進入規制をしていた。そして肝心の高校は……。

屋根が吹き飛んでいた。いや屋上が吹き飛んでいた。上一階部分の壁も窓も無くなっていた。校庭にはその破片が散らばっている。その校庭にも所々穴が開いており、まるで爆撃機が通過したような状態になっていた。このような事が起きる戦いと言えば、あの二人しかないだろう。

どうやら本当に激突したようだ。

「梓、君神眼や神器を使用したかどうかの検索ってできるのか？」

「は、はい？」

目の前の凄惨な状況にビクリしていたようで、意識がどこかに行っていたようだ。これが初任務なのだからこのような光景を見るのは初めてなのかもしれない。俺も昨日の式神と朱鳥の対戦が初めてだったからこれで二度目ではる。

「一樣私もそれは出来ますが……。校門からだ距離があるのでちよつと難しいです。ただ幾つかの破片の壊れ方を見ると少なくとも師匠がここにいたことは確かです。」

「え、破片でそんなのがわかるのか？というか此処から破片の距離まで相当な距離があると思うけど……。」

破片があるのは校門側からだ小さなものしかない。拳程度の大きさのものばかりだ。校舎側に行くと人一人分くらいの大きさの破片もあるが、此処からだとそれこそ拳程度の大きさにしか見えない。「私、これでも視力は良いんですよ。というより神眼所持者の人たちは基本的に視力が良いですよ。能力を使っている時は見ようと思えば、十キロメートル先の本の文字でも読むことができますよ。」

ちよつと得意げな表情で解説をする。

しかし、神眼所持者は一体どういう視力をしているのだろうか。といよりそんな遠くのものが見えていてもしょうがないと思うのだが。そうか成る程、俺の視力が他の人よりも良かったのはそれが理由か。でも覚醒前からまだそこまで視力はない。

「そして、大きな破片の綺麗な切り口を見るにあれば師匠の剣撃の跡だと思います。」

「剣撃って何だ？」

「何と言えば良いのかなー。剣撃っていうのは、剣の斬る衝撃波を飛ばす技のことです。なので一つの場所にいるだけで周囲を攻撃することができるとです。近距離武器であると共に遠距離武器として使えるんです。」

あの人そんな技も使えたのか。逆にそこまでできないと神眼を持つ武神家の護衛は務まらないという事かも知れない。

「しかし、中の状況を見なければいけないですね。もしかしたらあの校舎のどこかに師匠がいるかもしれません。」

「それはあるかもしれないが、警察がいるせいで中に入れるわけがないだろう。」

「そこは武神の名前を使っちゃいましょう。ちょっと待ってて下さい。」

そう言つて人を掻きわけながら警察官の方へと向かっていった。

「お、翔也じゃんかいたいた。」

梓と入れ替わるように後ろから声をかけられる。どうやら葉平のようだ。何故か制服を着ていた。

「お前、なんで制服着ているんだ？」

「あ、ああこれは今日部活だったからだよ。うん。」

「そうなのか、お前って何の部活入ってたっけ？」

「俺は剣道だよ。そいえば朱鳥のやつ倒れたんだって？全くこれから大会があるのに主将が休んでどうするんだよ。」

確かに葉平は肩に細長いケースを持っていた。どうやら大会前の練習をするつもりだったのだろう。

「というか、朱鳥って剣道部の主将だったんだな。知らなかった。」

「そりゃ今月からだからな。ま、そもそも去年から主将になっていなかったのに驚きだよ。あんだけ強いのにさ。だから大会に出てくれないと結構困るんだよなー。ま、そもそもこの様子じゃ俺も練習できなさそうな気がするけど。体育館も被害にあってるみたいだし。」

体育館を見てみると屋根に大穴があいていた。さつきは気付かなかったがどうやら屋上の大きな破片の一つが体育館の屋根に穴を開けて落ちてきたようだ。

「しかし、何でこういうのは迷惑なことするかな。」

葉平はため息をついて頂垂れる。大会目前にこのような大惨事を起こされては確かに迷惑だろう。

でも何でこんな大規模な破壊活動が行われていたのに誰も気がつかなかったんだろうか。

爆撃機が通過したかのような凄惨な状況だ。誰かしらが気付いても良いはずだが。

「なー、昨日の夜とかに誰か気付かなかったのか？」

「ん、それはわからないな。俺は早く寝ていたし。」

どうやら葉平も知らないようだ。

「んじゃ俺はそろそろ帰るね、お前も何か気を付けろよ。」

心配そうな声をかけられる。

「大丈夫だよ。」

「本当か？何か困ったことが俺に何でも言えよ。じゃあな。」

そう言つて葉平は人を掻きわけて校門と反対側へと出て行った。

そこへ人込みをかき分けて校門側から梓が戻ってきた。

「翔也さん、校舎に入れることになりましたよ。」

「お、本当か？じゃさつさと入ろう。」

人込みをかき分けて校門の方へ向かう。すると警察官が道を開けてくれた。その警察から突き刺すような視線を感じたのは気のせいだろう。

校庭を歩いて校舎の方へと向かっていく。

「でも、こんな風に壊せるほど師匠と式神は強いのですか。こういうのを見ると私に護衛が務まるのか心配になります・・・。」

自信のなさそうな表情を浮かべる。これだけの状況を見せつけられたら、ある自信もなくすだろう。

「戦わなくて良いよ。梓が危ない目にあうことはないよ。昨日の夜

の結界を使いながら逃げれば良いし。」

「戦わなければ護衛は務まりません。私の命に代えても守りますよ、絶対に。」

真剣な目で俺を見据えてくる。どうやら覚悟は相当あるようだ。と言っても俺は早々致命傷を負っても死ぬことはないので、多少の事は大丈夫なのだが。いざとなったら俺が身体を張れば良いだけだ。校舎に近づいてくると大きな破片が目立つようになる。幸いなのはどれにも血痕が付いていないことだろうか。そして久しぶりの校舎の中へ入る。

中もかなり酷い状況だった。壁という壁に大きく綺麗な剣撃の跡が残っていた。

「翔也さん、この校舎って確か四階建てですよ。」

「うん、そうだよ。一階が職員室で二階が三年、三階が二年、四階が一年の教室だな。今はその四階が半分吹き飛んで切るけどね。」

「どうやら屋上から下の階へと順々に移動して戦っていたみたいですね。最後は校庭ですか。」

これだけ一つの大きな建物を壊して行っているから、きっと長期戦だったのだろう。

「では使えるかわかりませんが階段を上って行ける所まで行きましょう。」

そう言って校舎の端になる階段を目指して歩く。廊下も所々穴が開いており、歩きにくくなっていた。

そして階段の直ぐ横にある職員室を通りかかった時だ。中から物音がした。

その物音に反応して俺の前に梓が立ち塞がる。

「翔也さんはちょっと下がっていて下さい。私が中の様子を伺います。」

職員室の扉のない入口から中の様子をう窺う。中もかなり酷い状況だった。机という机が壁際まで吹き飛ばされており沢山の紙が地面に散らばっていた。

その中央窓側に壁に寄り掛かるようにして倒れている人が。

「師匠！」

急いで式戻さんに駆け寄る梓。俺もその後につき向かう。

「師匠！大丈夫ですか師匠！」

大きな声で式戻さんに声をかける。周囲には血の海ができていた。

「フツ、梓、じゃないか。」

いつものように笑顔だがその顔には生気があまりない。

「翔也さん、急いで武神家に連絡を入れて下さい！私は師匠の治療をするので。」

そういつと自分の見につけていた紫色の帯を引き裂いて治療を始める。

俺も急いで電話をかける。すると式人さんが電話に出た。

「はい、武神です。」

「式戻さんを発見しました。まだ校舎の中にいました。かなり大怪我をしたいと思います。」

「わかりました。では分家二の仁居神にいがみの者を回収に向かわせるのでそこにジツとしていて下さい。くれぐれも警察などに話さないようにお願いします。」

弟の一大事というのにとっても冷静な反応だった。そこにちよつと違和感を俺は覚えた。でもこの状況でそんな事を言っても仕方がないので、それを飲み込む。

「梓、今式人さんに連絡したら仁居神ってやつが来るみたい。」

「わかりました。此方も一様の応急処置は完了しました。」

式戻さんの身体には幾つもの紫色の布で縛られていら。取り敢えずは大丈夫なようだ。

「フツ、まさか、君達に、助けられるとはね。」

「あまり喋らないでください師匠。肺にも折れた骨が食い込んでいるんですからジツとしていて下さい。」

梓は式戻さんを横たえる。

そこへ俺と梓の間にいきなり人が現れた。年は二十歳くらいだろ

うか、女性のようだ。髪の毛は短髪で黄色いパーカーを着ていた。

「仁居神^{にいがみ}銕^{かざり}只今参りました。」

落ちついた表情で自分の名前を告げる。

「式戻さまを回収しに来ました。」

そういつて式戻さんのもとに歩いて行き抱き上げる。

「神成梓、迅速な処置をよく行いました。その調子で護衛対象もしつかり守って下さい。」

俺の方を見据えて言う。

「私はこのまま？ 塑稀さまの元へと届けますので。では。」

「はい、よろしく願います。」

「ちよつと待つてく。」

そういつて式戻さんが引き止める。

「式神に関してはいくらか傷を負わせておいた。だから暫くは動くことは出来ないはずだ。逆に式神を発見して倒すのも今がチャンスだ。」

「わかりました。」

梓は式戻さんの手を取りながら頷く。

「そして、笑顔を忘れずにフツ。」

「はい。」

梓も綺麗な笑顔を作る。

「では、そろそろ行きますね。」

そういつと銕さんは式戻さんと一緒にどこかに行ってしまった。

「ところであの銕さんだけど、あれも霧隠れなのか？」

「いえ仁居神の人たちの神眼能力はテレポートです。移動距離は人それぞれですがその中でもあの銕さんはその中でも一番です。」

「そうなのか。つまり怪我人の搬送にはもってこいなのか。」

テレポート言う能力もあるのか。神眼と言っても多種多様な種類があるようだ。

「ところで、どうやら式神も手負いのようですね。でしたら今がチャンスです。急いで場所を突き止めましょう。」

抑揚のない声で話す。どうやら式晨さんをあそこまで痛めつけたことが許せないようだった。

「そうだな、そのためにもこの校舎の探索を続けよう。」

職員室を出て階段を目指す。どうやら階段は使えるようだ。所々穴があいているが心配はないだろう。

階段を上って、各階の様子を見ていく。どの階も壁という壁に傷ができており所々には人一人分が入れるような大穴も開いていた。そして四階。本来ならば見えるはずのない青空が上から覗いていた。「此処が一番酷いですね。」

全てのものが壁に寄せられるように吹き飛んでいた。教室を隔てていたであろう壁は全て無くなっていた。ここに教室が会ったのかも疑わしい。それがわかるのは壁側に寄せられた机や真つ二つになった黒板を見る事によって判断するしかない。

空は青空なのにこの荒廃した様子。その合わなさがより一層この凄惨な状態を際立たせているようだった。

その中心に二人の人がいた。

梓は俺の前に立ちふさがりその二人の様子を伺う。

二人とも水色の浴衣をきており、顔には狐のお面を被っていた。背の大きさからして梓と同じくらいの年のようだ。

「あなた達は誰ですか。」

梓が静かな声でたずねる。その声に反応したかのように此方の方を向く。

「お前が」

「生上翔也か。」

右から左へと一人が途中まで喋り、残りをもう一人が喋る。「だったらどうするのですか。」

梓が答える。攻撃の構えをしており臨戦態勢だ。それに対して目の前の二人は暫く沈黙した跡に話したず。

「生上翔也ならば」

「捕らえるだけだ。」

そう言うのと二人はそれぞれナイフを取り出した。その形状は独特な形をしていた。デザイン性が重視されているような形状だ。それを一人は右手、一人は左手に構える。

梓も手を構えて紫色の球体を出す。

「邪魔をするなら」

「まずはお前を殺す。」

二人はお互いの距離を取りながら梓を挟みこむために走り出す。

「翔也さん、下がって下さい！」

「待て、お前はどつする気だ！」

「逃げながら戦うにしても二人が相手では難しいです。まずは一人を倒します！」

そう言うのと狐のお面を被った二人に向かって駆けだした。

1 - 13 狐のお面

梓の眼が強く紫色に光る。

『重力四倍！』

梓は駆けだしながら両手に持っていた紫色の球体を地面に叩きつける。

すると周囲の地面に複数の紫色の円が描かれる。梓に向かって駆けていた二人の狐のお面を被る人物はそれを回避するために横に避ける。正体不明の現象に危険を感じたのだろう。

横にそれた二人は梓を挟むようにナイフを構えながら立つ。どうやら様子を窺っているようだ。

「どうやら判断能力は完璧のようですね。その円状の上に立てば自分の体重がたちまち四倍になってまともに歩けなくなりますよ。」

敵二人を交互に見ながら話す。成る程、複数の丸い円に触れれば自分の体重が四倍になるのか。しかも散らばっているので所々隙間があいている。もし梓に接近したければその限られたルートしか通れない。梓からすれば敵がどこから攻めてくるのか直ぐにわかるといことだ。

「甘い」

「な」

二人が呟く。

「近寄れないなら」

「投げるまで」

そう言うとお互いナイフを高々と投げる。ナイフは地面の円に引き寄せられるように空中でいきなり落下を始める。しかし、垂直に落下することはなくその先は梓の方を向いているようだ。

「ヤバイ！」

梓は慌てて両手を合わせて広げ、結界を作って飛んできたナイフを弾き飛ばす。

大きな音をたてて弾き飛ばされたナイフは二人に向かって飛んでいく。二人は身体を回転させ交わしてから柄の部分を掴み再び構える。

「やりますね。ナイフを投げた時の加減を調節して重力を使って私に向かつて投げてきたわけですか。」

二人の敵はナイフを構えたまま反応をしない。

「これでは何も進展しませんね。では私が！」

梓は手を合わせて大きく広げる。次の瞬間両手には大きな紫色の球体が出現する。同時に地面にあった紫色の円は消える。それと同時に二人の敵も動き出す。梓は動かずにその二人のナイフを片手で受け止める。

すると右手から攻めてきた方は大きく薙ぎ払いのけりを仕掛ける。左手側の敵は足払いを仕掛ける。

それらを梓は球体を破裂させ敵を吹き飛ばすことにより回避する。吹き飛ばされた敵は空中を回転しながら地面に着地する。

『反重力四倍！』

梓がそう叫ぶと、身体が浮き滑るように高速で移動し右手側にいた敵に接近する。両手には再び球体が出現していた。それを眼前に構えて相手の顔に押し付けようとする。敵はそれを後ろに下がりながら転がるようにして、間一髪回避する。

避けられてしまった梓は、それを辛うじて残っていた壁に叩きつける。するとその壁が崩れながら梓の両手に吸い込まれていく。これにより周囲二メートル四方だろうか、壁が消えてしまった。

「よく避けましたね。でもまだまだ行きますよ！」

梓は何故か緊張感のかからもなく、寧ろさつきから段々と気分が上がっているようだ。初の任務による実践が楽しいのだろうか・・・。

梓は再び攻撃を加えようとした敵に向かい先程の球体を構えて突っ込む。敵もその威力を知ったのか早めに回避行動をとり、間合いを開けようとする。

「一人じゃ」

「ない」

抑揚のない声が聞えたかと思うと梓から攻撃を受けていないもう一人が、動きを妨害するように真横からナイフを投げつける。移動する梓に向かつて追尾しながら飛んでくる。

「そんな投げ方じゃ私に当たりませんよ！」

飛んできたナイフを球体で薙ぎ払って弾く。弾かれたナイフは、今攻撃しようとしていた目の前の敵へ向かって飛んでいく。

それを敵は回避しながら柄の方を上手くつかみ、立ち上がりと共に再び梓の攻撃を回避する。

再び避けられてしまった梓。しかし前のめりに壁に突っ込むことはない。大きな音、床を削り抉るような音を立てながら軌道を変えて攻撃を続ける。

一方、先程から避けていたばかりの敵は今度は回避しない。二本になったナイフを身体の前でクロスさせる。

その様子に梓も眉を顰める。

「この」

「神器は」

「二つで」

「一つ」

両手にクロスさせていたナイフを大きく横に広げる。

「発動」

「神器」

『牢獄 始まりの章』

『牢獄 始まりの章』

最後の言葉だけ二人で声を合わせる。するとナイフが怪しく光、刃の長さがメートルまで長くなる。それはもうナイフではなく剣だ。片方は黒く光、片方は白く光る。しかもあのナイフは神器だったようだ。だとすれば何かしら特殊な効果があるのかもしれない。

敵はその二本を構える。

「剣撃」

『序』

大きく広げていた剣を、目の前でクロスさせるように振り上げる。その二つの剣が交差した瞬間黒い斬撃が淡い光を放ちながら梓に向かつて飛ぶ。

梓は移動を止めてそれを両手の球体で受け止め吸収しようとする。しかし、中々吸い込まれない。

「これ何！こんなの初めてだよぉ！」

そう叫びながら何とか吸収しようと両手を構え続ける。

「わき腹が」

「空いてる」

武器を持っていないもう一人が脇から駆けて行き、梓を蹴り飛ばす。

脇から蹴られた梓は教室五つ分の端の壁まで吹き飛ばされる。

「ぐあ……。」

肺から全ての空気が出ていく。壁に少しでも身体めり込んでいる。何本か骨も折れてしまったようだ。

「まだまだ！」

めり込んでいた壁から飛び降りて地面に立つ。両手を構えて再び球体を構える。

敵二人もそれぞれ構える。

「剣撃」

『序』

再び斬撃が梓に向かって襲い掛かる。梓はそれを受け止めることなく回避する。

避けられた斬撃は梓のめり込んでいた壁に衝突。そこにあつたはずの壁、全てを粉碎してから吸い込む。校舎は縦長なのだが、その短い縦方向の壁すべてが一瞬にして消えた。

「そうでしたか。どうも吸い込めないと思ったたらその神器も重力系なのですね。」

梓の声に反応することなく敵は再び剣を構え直す。

「これは参りましたね。下手したら巨大なブラックホールが発生してしまつて町丸ごと消えちゃうじゃないですか。」

「え、そうなのか!？」

町一つ消えるつて、それはいくらなんでも駄目だ。そんなことになつたらどれだけの人が命を失うんだ。この町は東京の中でも一番大きな町なのだ。

「梓! その最悪な事態だけは何が何でも回避するんだ!」

「わかつてます! しかし、私の武器は基本的にこの能力しかないんです。」

確かに、梓は紫の眼重力使いなのだ。それしか武器として使える能力は持っていない。しかも今は物理的なもの、ナイフなどは持っていないようだ。手ぶらで二人、しかも一人は神器を持っている。そのような状態で戦うのは厳しい。

「でもやるしかありません。最悪の事態は避けつつ戦えば良い事!」
両手を構えて球体を再び出す。

『反重力十倍!』

梓の身体浮いたかともうと、先ほどよりも高速に移動を開始する。次の矛先は武器を持たないもう一人に絞つたようだ。

瞬間的に距離を詰めて、両手にもつ球体を叩きこむようにぶつける。しかし、その攻撃を身体を日低くされ回避されてしまう。

避けた敵はそのまま横に回転しながら転がり、梓の腰に蹴りを入れる。

再びもの凄い速さで真横の壁に向かって吹き飛んでいく。

「剣撃」

『序』

吹き飛んでいく中、剣を構えていたもう一人が梓のぶつかるところ位置に斬撃を飛ばす。

『反重力五十倍!』

吹き飛ばされる中、梓は両手の平を後ろに伸ばす。すると球体で

はなく平面な円が出現する。梓は壁にぶつかることなく空中で静止して地面に降り立つ。

一方飛んでいた斬撃は梓を消すことなく、校舎横方向の壁を粉碎し全て飲み込み消し去る。

段々と校舎四階が柵のない屋上になりつつある・・・。

地面に降り立った梓にむかって武器を持たないもう一人が駆けだす。

今度は梓は球体を出現させず徒手空拳で迎えうつ。

接近した敵は構えていた手を梓の顎に向かって突き出す。梓はそれを一歩下がることによって回避する。回避した梓は、そのまま左足を心臓目がけて蹴りあげる。

しかし、その攻撃は相手の右手に塞がれる。しかも足を握られてしまい動くことができない。

「どんだけの握力があるんですか!？」

驚きの表情を浮かべる梓に目もくれず、その掴んだ足ごと梓を空中へ投げる。

空中へ高く投げだされた梓は身体を捻りながら態勢を立て直す。

「剣撃」

『序』

梓の着地地点を狙うようにして斬撃を放つ。

『反重力三十倍!』

態勢を立て直した梓は手のひらを地面に向けて広げ、平面な円を出現させ空中で静止する。

斬撃は教室一個分の地面大きな音をたてながら消し去る。

「困りましたね。あの神器、かなり邪魔です・・・。」
肩で息をしながら呟く。

この二人、武器を持たない一人は梓を振り回しもう一人はとどめを刺す砲台のように一つの地点に構えている。このフォーメーションを崩さないと勝ち目はないかもしれない。

何とか打開策を

空中を移動して俺の直ぐそばに降りる。

「翔也さん、このままでは勝てるかどうかかわからないので急いで逃げて下さい。」

「馬鹿かお前、お前を置いて逃げられるわけないだろ！」

こっちは前々から見ているだけしかできないのだ。逃げるなんて言う真似はできない。

「でもこれは私の任務なので、任務優先とさせていただきます。」

そういうと俺の鳩尾目がけて蹴りあげ俺を階段の踊り場に吹き飛ばす。

鳩尾を蹴られてしまいむせて動くことができない。

『重力壁二倍』

踊り場と教室部分の間に大きな薄い壁が作られる。

「梓、お前！」

梓は俺の声を耳に傾ける事もしない。

「ではそろそろお終いにしましょうか！」

パンツと音を立てて手を合わせる。

『重力十倍！』

両手に球体を作り出しそれを地面に叩きつける。

その瞬間全ての地面に紫色の円が浮かび上がる。敵二人は慌てて、隙間に移動する。

『反重力二十倍！』

立てつづけに能力を使用する。体力が少ないにも関わらずだ。

高速移動を始める梓。最初の目標は武器を持たない方だ。

「さつきはよくもやってくれましたね！」

そう言いながら動けない敵の顔面に向かって蹴りを放つ。腕で防ごうとするがその腕は仮面を打ち砕き重力の円の中に無理矢理引き込まれ立ち上がれなくなる。声を出すこともできないようだ。重力によって肺が押しつぶされそうになっているのだ。呼吸するだけで精一杯だろう。

梓はそのまま態勢を立て直すことなく、もう一人神器を持つ方ね

移動する。

「これで、あなたは剣撃が使えなくなるはず！」

敵は剣撃を発動させることなく梓の攻撃である球体を受け止める。そうやらあの二人は、揃っていないと神器の能力を発動することは出来ないようだ。

「黙れ」

敵はそう呟くと梓をはじき返す。同時に両方の剣を地面に叩きつけ、三階に移動する。

梓はその穴へ入ろうとするが同時に後ろ側で地面の碎かれる音がある。動きを封じていたもう一人の地面が崩れたのだ。その結果、その範囲の重力が解除され敵は穴の中へ落ちていく。

その穴から剣をナイフに変え片手にはもう一人を抱えながら敵が出てくる。

「次こそは」

「……………」

そう呟くと重力の隙間を縫うように壁の端まで移動し、外に飛び降りて消えていった。

「はー…」

大きなため息をつく梓は倒れこむ。同時に発動させていあ全ての能力が解除される。

「大丈夫か梓！」

倒れこんでしまった梓に急いで駆け付ける。酷く疲労しているようだ。

「初めて、こんなに沢山、使いました。」

息も切れ切れにそう呟く。そのまま眠ってしまった。

「お疲れ。」

眠っている梓には聞こえないかもしれないが、そう言わずにはいられなかった。

いつまで俺は他人に迷惑をかけなければならないのだろうか。自分の身位自分で守れなくては どうするのだろうか。自分が何もでき

ないことが悔しい。

そこへ黄色いパーカーを着た女性、にいいがみかさり仁居神鋸さんが現れた。

「仁居神さん！」

思わず驚きの声を上げてしまう。

「仁居神ではなく鋸とでもお呼び下さい。私の家族は、武神家に何名かいますのでゴチャゴチャ二なつたいますよ。」

ほほ笑みながら話す。そして梓の方へ視線を移す。

「どうやら梓は、任務を一樣は果たせたみたいですね。護衛対象を放っておいて寝ているのは頂けません。」

どうやら鋸さんはとても穏やかな人のようだ。梓の努力をしつかりと評価している。

「翔也さんもお怪我がないようで安心です。ではこのまま一旦帰宅します。どうやら異変に気が付いた何人かがそろそろ此処に来るころみたいです。」

確かに階段側から何人かの足音が聞こえてくる。

「では行きますよ！」

俺の肩に手を置く。鋸さんの眼が橙色に光る。その瞬間身体をとてつもない浮遊感が襲う。

その感覚も一瞬で今度は何故か空中にいた。

「何だこれ!？」

しかし落下することも無く、またあの浮遊感が訪れたかと思うと今度はビルの屋上に。

そんな移動を数回続けた後朱鳥の家の門の前に到着した。

「どうでしたか、人生初のテレポートは？」

「はい…とても気持ち悪くなりました。」

俺はあまり絶叫マシーンなどが得意ではない。よってこの浮遊感はとても厳しかった。テレポートというのは便利だなと思っていたが、どうやら俺には全くもって向いてないようだ。ちよつと夢が壊れた気がする。

「それはちよつと残念です。」

残念そうな表情を浮かべる。しかし、表情を変えてほほ笑えむ。
「きつとこれから使用しているうちに慣れると思いますので安心して下さい。」

どうやら俺は、慣れるくらいこれからこの移動手段を使う事になるようだ・・・。

その後、梓を？塑稀さんに預ける。？塑稀さん曰く、今日中には体力が戻って任務に復帰することは出来るようだ。そして梓が抜けている間は鎋さんが俺の護衛担当という事になった。

そして今、一つの部屋に年上のお姉さんとおれが一对一で相対していた。今は昼食の時間、鎋さんが昼食を持ってきてくれた食事を食べている。

因みに先程から食事が上手く喉を通らない。

実は、鎋さん良く見ると大人びていてかなり綺麗なのだ。今まで修羅場だったために全く目に入っていなかった。服装は黄色いパーカーが目立つだけで後は質素なのだ。なのにも関わらずこれだけ綺麗なのだ。

俺はこれでもまだ高校二年生である。緊張しないわけがない。そんな俺の心境を知ってか知らずか、鎋さんは俺に話しかけてくる。

「どうしましたか？さっきから喉を食事が通っていないようですが疲れているんですか？」

「いえ、大丈夫です・・・。」

「何かあったら私に言っして下さいね。何でも致しますので。」
思わず心臓が高なる。

鎋さん俺の緊張をほぐそうとするのは良いのだけれど、それをする事によって俺は益々緊張するのだが。全くの逆効果である。

「んーお食事が気に召さなかったでしょうか？」

「いえ、とても美味しいです。何か使われている食品とか俺が普段口に出来ないようなばかりのものですし。」

何とか受け答えることによってこちらの心境を悟られないよう

にする。女性と相對しただけで緊張していると知られたら恥ずかしいすぎる。

「そうですね。ここで使っている食材はどれも良いものばかりです。しかも、値段では選ばずに質でこだわっているそうですよ。」

「そ、そうなんですか。」

ぎこちない中やつとのこと食事を終える。ごちそうさまをした後、鏑さんは食事を片づけに行く。

「はーっ。」

しばしの間緊張の鎖から解放される。あの人の前だと終始余分な緊張をしまつてまともに目を合わせられない。今日一日このような状況が続くかと思うと気がめいる。取り敢えず今はしばしの休息の時間だ。畳に倒れこんで寝っ転がる。

俺の日常ってこれからこんなのかな・・・

精神と身体両方が滅入つてしまいそうだ。

暫くして扉が空く音がしたかと思うと鏑さんがお茶を持って戻ってきた。慌てて起き上がる。

「緑茶で良かったでしょうか？」

「はい、大丈夫です。」

机の上に二つの湯飲みと和菓子が置かれる。

「どうぞ召し上がって下さい。」

「あ、ありがとうございます。」

再び相對することとなつてしまった。

梓、早く戻ってきてくれ

そう頭で願つた。

1 - 14 武神家分家一神威家

大人びた綺麗な女性、にいがみかざり仁居神鎔さんとお茶の時間。

因みに俺先程からずっと面喰って緊張してしまっているので動きがぎこちなくなっている。そんな挙動不審な様子を悟られないように何か質問することが無いかと頭を絞って考える。

「あの、鎔さん何でさっきはテレポートを使って移動しなかったんですか。使ったほうが早く移動できて便利だと思うのですが。」

和菓子を美味しそうに口に含みながら俺の質問を聞く。それを飲み込んだ後に口を開く。

「理由は二つあります。」

指を二本上げる。

「一つ目に能力はあまり使わないようにしているんです。急ぎの任務の時に使えなかったら意味がないですからね。そして二つ目は、この屋敷では武神以外の者は一部を除いて能力を使用することができません。私はその一部に入っていないので能力の使用は屋敷内に置いて制限されています。」

では梓がこの部屋で能力を使用できたという事は、神成家は使用が許されている一部という事なのだろうか。

「神成家も使用が許可されているんですか？」

「いえ、違いますよ。今回梓ちゃんが許されたのは特例です。翔也さんの護衛の任務につくにあたり赭攣さまが特別に許可したんです。何せ任務の内容が内容ですしね。」

成る程。特例だったのか。護衛が任務なら確かに能力の制限は解除していなければ難しいだろうな。

「んじゃその一部ってどこなんですか？」

「分家一の神威家です。神威家は役割と能力の性質上許可されています。」

役割と能力？特殊な立ち位置なのだろうか。

「因みに、その詳細については私も知りません。武神家の治安に関わるという事なので口外はされていません。」

「流石分家の中で一番強いだけあるんですね。」

神威家は十ある分家の中でも一番最強であり特殊なようだ。

「そいえば銚さんも分家二で強い方なんですよね？」

緑茶を軽く口に含んでから答える。

「はい、確かに私たち仁居神家は強い方です。が、その強さというのモ力というわけではなく能力の性質上の強さです。私たちは移動という性質に置いて一番強いというだけで戦闘という面においては神威家が分家の中でも最強なんです。」

分家の中の強さというのは戦闘の事を指しているようではないようだ。しかし、神威家はその中でも戦闘において優れており様々な性質の最強よりも上に置かれているのだ。しかしそれを分家としている本家、武神家は一体どれだけなのだろうか。

「その神威家の人たちはどれくらい此処にいるんですか？」

そんな簡単な質問にちよつと考え込む銚さん。

「どうなんでしょう。話に聞く限りではいるようなのですが私は会ったことがないんです。会う機会がないだけなのかもしれないですけど。もしかしたら翔也さんは会う機会があるのかもしれないですね。立場上は翔也さんは我々武神家本家分家が総力を持って守護すると決まりましたから。」

「え、そうなんですか！？」

今の自分の立ち位置が把握できない。俺に一体何が起きているんだ。というより俺って…何なんだ？永劫という能力はそんなに守られなきゃならない程貴重なのだろうか。

「取り敢えず翔也さん。あなたは今あの式神家から総力をもって狙われています。あまり外出しないことをお勧めします。」

「え、でも消滅したはずだからそんなに居ないのでは。」

武神家と式神家の戦闘の際に、式神家は一族諸共自爆。しかし一族全てではなく式神厭人のような生き残りもいた事が先日判明した。

だが一族のほとんどは失われている。だから直接手を下せるのは式神厭人だけなはず。

そしてそいつも、この前式戻さんに深手を負わされたのだから暫くは動けないはず。

「何もあなたを狙っているのは式神家だけではありません。」

「それは一体どういう事なんですか？」

式神家以外の何かしらからも俺は狙われているのだろうか。

「式神家も分家を所有しています。そしてあなたはその分家からも狙われています。」

「分家、ですか。」

「因みに式神家の自爆には分家も巻き込まれていたようです。ただその本家程被害は無かったようです。」

想像以上に敵の数は多いようだ。どれだけの分家がいるのだろうか。武神家は十なのだろうから式神家もそれくらいなのだろうか。

「式神の分家はどれ位いるんですか？」

「それはわかっていません。」

「わかってないんですか？」

分家の数すらわかっていないとは。武上家はかつてそんな敵と戦っていたのか。

「その理由としては名前がすべて“しきがみ”なんです。故に区別を付けるのが難しいのです。」

全ての分家の名前が同じ。成る程、武神家は名前がそれぞれ異なっているのに対して式神家の分家は名前の読み方が全て同じようになると調査の仕方も難しくなるのだろうか。

そう言えば今日の表れたあの狐のお面を被った二人。あれらは式神家の分家と判断して良いのだろうか。

「そうですね。あの二人は分家として判断しても構わないかもしれませんが。何よりも神器を所有していましたし。」

「それはどういう意味ですか？」

「式神家、特に本家なのですが神眼所持者が現れる割合が異常に少

なかったのです。しかも少々特殊でしてね。故に式神家では神器が沢山作られたのです。そして本家が消滅した今それらは分家に渡っているのでしょう。」

和菓子を口に含みながら話を続ける。

「最も、神眼の素質を持たないものが神器を扱うというのは至難の業です。故に神眼に関する研究は式神家の中でもとても盛んだったようです。一様我々武神家でも研究は行われ神器も作られていたましたがその質はそこまで高くありません。ただ我々能力の質には自信があります。」

目を橙色に輝かせながら微笑む。その仕草に思わず背筋が凍る。

「と、ところで。」

「はい？」

首を傾げておどけている。

「何でそんな軽装なんですか？」

鎧さんの服装は黄色いパーカーに、中は質素な鼠色のズボンとＴシャツだけだ。因みにＴシャツは身体にピッタリくっついておりそれはもう…。

「単純な理由ですよ。レポートする時に余計な物がついていと難しいんですよ。本当は裸でいたいんだけど。」

「は、裸ですか!？」

思わず驚いてしまう。鎧さん…それはダメです、色々と…。

「ま、そんな事をしてしまったら捕まってしまうよね。だから最低限の服しか身につけていないんです。でもこれでも私は女性です。だからこの黄色いパーカーはお洒落のようなものです。」

少しだけ微笑む。

確かに鎧さんは元々が綺麗だからもうそれだけで十分なお洒落にはなっていた。

この様な感じで鎧さんとお茶の時間は終った。因み高級だったであろう和菓子の味は勿論覚えてはいない。

「では、ちよつと食器を下げて行きますね。」

銚さんはそう行つて部屋を出て行つた。

かつて式神家と武神家は血を血で洗う争いを行っていた。

そんな泥沼の中生まれたのが式神厭人である。そして物心つく前に、否生まれて直ぐに一族は殆ど消滅してしまった。

「只今」

「戻りました」

廃屋の壊れた扉から狐のお面に水色の浴衣を着た二人が帰つてきた。

しかし、その外見はボロボロだった。お面にはひびが入っており浴衣も汚れていた。

「いやーおかえり。」

一方の厭人も現在大怪我を負つており体中の半分が包帯で巻かれている状態だ。そして床に敷かれた布の上で寝ていた。

「どうやら捕らえ損ねたようだね。」

寝ている布の上から顔だけを上げてその二人の様子を見る。

「全く、分家一と二が二人がかりで掛かつても武上家分家六に敵わないとはね。式神家も落ちたもんだよ。」

やれやれといった表情でその二人を見つめる。

「識神井言井、織神易絲易両名休んで回復した後に直ぐ生上翔也を捕らえに行け。俺も回復し次第向かう。」

「はい。」

「はい。」

二人、井言井と易糸易は一礼した後に別室に移動した。

参つたものだ。あの夜に自分があいつを覚醒を待たずに捕らえればここまで大事にはならなかったはずなのだが。少し遊ぼうと思つたらこのような目になってしまった。反省しなければ。

「と言いつつも反省はしていないのでしょうか？」

艶めかしい声で扉の陰から姿を現す。

「色神妖偽しきがみようぎか。お前のような女が俺になんの用だ。」

女、色神妖偽は少しずつ歩み寄ってくる。

「厭人さまのような方が余興を楽しまないはずがありませんものね。」

「ふん、お前に俺の何がわかる。」

女はそんな反応も気にせず怪しく微笑む。

「私は武神家をとて恨んでいます。厭人さまも同じではなくて？」

厭人はそんな言葉に反応せずただ視線を壊れたドアの方に移す。

「私はあの戦いで大切な人を失いました。」

それでも女は言葉が続ける。

「復讐か。」

「はい。」

厭人の問に短く答える。

「復讐何ぞ下らないぞ。俺は復讐などという低俗な動機によって動きはしない。」

「では厭人さまは何をもって武神家に攻撃を仕掛けるのですか？」

ほんの少しだけ間を空ける。

「簡単だよ。」

酷く歪んだ口で笑いながらその問に答える。

「翔也を捕らえて永劫を手に入れるためさ。」

短く簡潔に目的を伝える。

女は解答が納得いかないのか軽蔑の眼を厭人に向ける。意味がわからないというような感じた。

そんな視線に気付いたのか厭人は言葉が続ける。

「というより、お前は分家七であるとしても相当の力を持つ神眼能力者だろう。今のお前なら俺を倒すことなど障子に穴を開けるより簡単なはずだ。なのに何故俺を主として未だに仕え続ける。」

そんな問に当たり前かのように答える。

「そんなのは分家として当たり前です。貴方様のために命を捧げる

事は本望です。そのように血で刻まれています。」

「呪いのようなものだ。」

ニヤニヤと歪んだ口で笑いながら呟く。そもそも式神家は本家としての力もなければ能力も所有していないのだ。それにも関わらずかつての先祖の交わした血の契約によってこんな末代まで子孫は縛られ続けられなければならないのだ。何と言う皮肉なのだろうか。

自ら自爆して滅びようとする本家に使えなければならないのだ。

「なあ、お前のその大切な人っていうのは俺の親たちの自爆に巻き込まれたとかじゃないのか？」

「いえ、武神家分家一神威の家の方に殺されました。眼前で。」

「ほーう。」

厭人は興味ありげにその話について耳を傾ける。身体を起こして女の方を見つめる。

「確か神威家の姿を見た物は誰も生き残れないという話を聞いたことがあったのだが。例外もあるんだねえ。」

神威家の者の姿を見たが最後。決して生き残ることは出来ない。

そんな宣伝文句のような強さが武神家分家一神威家の特徴だったのだ。それにも関わらずその姿を見たという人間が目の前に妖艶な姿をしながら立っている。

「因みにその神威の奴はどんな姿だったんだ？」

答えるのに暫く間を開ける女。

「その姿は私はよく覚えていないのです。まだ幼いという事もあってね。ただ名前だけは覚えています。」

「へーえ。どんな名前なんだ？」

神威家の者が名前を名乗るなど益々興味深いことだ。隠匿であることも売りであるのに自らそいつは名前を名乗ったのだ。そんな変わり者の名前を知っておいて損はないだろう。

「そいつの名前は…」

式神厭人の狙いは俺だ。だからこそ武神家に攻撃を仕掛けてくる。昨日の朱鳥の件と今日の梓の件も含めてだ。

では俺がいなくなれば攻撃を止めるのだろうか。

しかしそんなことは無いだろう。

復讐だ。

復讐をもつてして武神家を攻撃するかもしれない。ならば俺は居ても居なくても一緒なのだろうか。

否、式神の奴は復讐心などないかもしれない。

あいつは朱鳥に止めを刺さずにあの山から立ち去って行ったのだ。だとすればそんな復讐心はない。

とすれば目的は俺だけなのだろう。

ならば俺がいなくなれば、俺が俺の能力を覚醒させずに死ねばこの戦いは終わるのだろうか。

.....

「何考えているんですか？」

不意にそんな声をかけられる。

どうやら片づけから鏑さんが帰ってきたようだ。

「何か年相応ではない表情でしたよ？」

「そ、そんなことはないですよ。」

表情を明るくして誤魔化そうとする。

「そんなので私の眼をごまかす気ですか？ 私にはあなたの考えていることが丸わかりですよ。翔也さんよりも私は年上で様々な状況を潜りぬけてきました。」

穏やかな声で話し続ける。

「なので、あなたの今置かれている状況とあなたの性格を鑑みれば心中を察します。」

口調は穏やかだが俺の眼を心まで射抜くように見据える。

「死ぬなんてことは考えないでください。」

諭すように話す。

「あなたを大切に思っている人がいることを忘れずに。」
そついうと立ち上がる。

「さて、その大切な思っている方が回復したようですよ。最も、あなたが一番に大切に思っている人はまだのようでそれは残念ですが……。」

朱鳥は？ 塑稀さんから言われているように回復まで時間を要すると言われていた。昨日の今日で回復するわけは無いだろう。

それよりも梓が回復したのだ。これは喜ばしいことである。

「もうそろそろ来る頃ですよ。」

「そうですね。短い間でしたがありがとうございました。」

一礼を述べてお礼をする。

「これは任務ですよ。お礼など要りません。」

一言だけ述べると鎗さんは部屋から出て行った。

1 - 15 閑話休題

「ただいま戻りました！」

元気な声で梓が帰ってくる。その様子は初めて会ったとき同様とても元気な姿だった。

式晨さんを治すために使ってしまった紫色の帯もちゃんと腰に巻いていた。

「おかえり。元気な様子で安心したよ。」

「嫌ですねーもう！私の事好きになっちゃったんですか。」

両手を頬に当てながら顔を赤らめている。

「そっとなわけないだろう。」

「そりゃそうですねー。翔也さんは朱鳥さまが好きなんですもんね！」

茶化すような声色で俺をからかう。

「それもないな。」

「えー。」

何で何でという表情で俺を覗きこんでくる。

「だって幼馴染ですよ！もうそのままゴールインしちゃえばいいじゃないですかー。」

確かに俺と朱鳥派幼馴染ではある。但し、それはもう家族と同じようなものであり好きとか恋愛感情を抱くことにはならない。いつも一緒にいるのだから、もうそれが当たり前になっているのだ。だから逆に長期間一緒にいないときがあると何か物足りなさを感じる事はある。だがそれは、恋愛感情ではないと思う。恋をしたかどうかの記憶がない俺が言うのもどうかと思うけれど。嫌そもそも恋愛感情ってどんな感情なのだろうか。

「梓、お前は好きな人っているのか？」

「いきなり何ですかもう！私にそんな質問するなんて、もしかして私のこと気になるんですか？」

「それは断じてない。」

俺の問答無用な即答にしょんぼりとする梓。俺が梓を好きになることは断じてないだろう。確かに、年の割には出るところが出ていて魅力的ではあるがそんなのは十分条件には成り得ない。例えば鏝^{かぎり}さんのように眼が眩むほど美しいとしても、俺は好きにはなれない。悪魔で美しいだけだ。

「翔也さんの好みってどんな人なんですか？」

「んー、これといって好みのタイプっていうのはないんだよな。」

「そうなんですか。私は、カッコイイ男の人が好みです！こう、勇者みたいになつそうと現れてパパツと敵を倒してくれて私を救ってくれる人です。いないかなー。」

くねくねと不自然な身体の動きをする。顔がにやけており、感情丸出しである。

しかし、勇者のような男の人とはまるで子どものような思考だなというか最近の子どもですらこのような事は言わないと思うのだが梓の趣味は一体何歳の時点で留まっているのかな。俺もこのように子ども心を忘れていなければ簡単に恋愛をすることができるのだろうか。良いとは思わないけど。

「で、その勇者とやらは表れたことあるのか？」

「ありますよー！それはもう勇者の中の勇者。また会えたら絶対に手を離しません！」

拳をきつく握って眼を輝かせている。どうやら理想の勇者とやらには既に出会えていたようだ。世の中は広いものだ。絵に描いたような勇者というものは実際存在するようだ。

「そいつってどんなやつなんだ？」

「それは、昔のことです。」

いきなり遠い目をして話を始める梓。ころころ感情が変わるな。「私がこの町に初めて来たときです。その時は確か九歳くらいだったでしょう。武神家にご挨拶に伺うために来たのですが親とはぐれてしまって迷子になってしまったんです。」

今でも落ちつきがないのだ。勿論子どものはもつと落ちつきのない子どもだったのだろう。梓は迷子になっても全く可笑しくは無い。

「親とはぐれてしまった私は泣き続けて歩いていたんです。その時になんと、カッコイイ男の人が話しかけてくれたんです！」

あれ、それって単なる親切な人であって勇者とも呼ばれることはしていないような…。きっと少女補正が入ってありもしない幻想がかかっていたのだろう。純粹な少女はある意味恐ろしいな。

「その人がお前を助けてくれたのか？」

「そうなんですよ！何故だか知らないですけどその人此処を知っていたんですよ。どうして名前を聞かなかったんでしょうね。全く悔やんでも悔やみきれないです。」

名前を聞かなかったかつての自分が恨めしいようだ。これこそ悔恨の念というやつかもしれない。

「うー、どんな人が気になります。」

「因みに外見はどんなひとだったんだ？」

「ちよつと待つて下さい。思い出してみます。」

数分間考え込み続ける梓。

自分の好みの人だったとはいえその外見すら思い出すのに時間がかかるとは。少女補正恐るべし。

「えーとですね、眼には包帯を巻いていました。」

「包帯？」

これまた随分と特徴のある人のようだ。

「髪の毛の色はちよつと明るい黄色でしたね。長さも長くて後ろで縛って垂らしていました。」

何でそんな特徴ある人を直ぐに思い出せないのだろうか。髪の毛が黄色くて長くてしかも眼には包帯だ。そんな人を街中で見かけたら関係なくても記憶に焼き付いてしまうのだが。

でも、人の記憶というのは思い出せなくなるもの。流石に時間がたち過ぎていたのだろう。

「どこかで会えませんかね！。式人さまにお願いしてみようかな。」

「日本随一の情報収集能力のある人をお前の妄想に付き合わせるな。」

「妄想じゃありませんよー！」

顔を膨らまして否定する。いや、というか梓は恐らく式人さんには煙たがられているに違いないと思うのだが。つい昨日花瓶に傷を付けて枕を亡き物にしているのだし。できるだけ式人さんとは接触しない方が良いはずだ。

「お前、式人さん怖くないのかよ？そんなふざけた質問したら何言われるかわかったもんじゃないぞ。」

「そりゃ怖いですよ。でも背に腹は変えられません。」

そんなにその人に会いたいのだろうか。

「でもお前今まで探したことなかったのか？」

「はい、先程まですっかり忘れてました。」

そんな人をいきなり会いたいと言い出し、果ては嫌われているであろう式人さんにまでお願いをしようとしているのはおかしいのでは…。あの戦いで頭のうちどころが悪かったのだろうか。

そもそもが包帯で眼を隠している人が実在するとは思えないのだが。

「梓お前：頭大丈夫か？」

「大丈夫です！何の問題も無いです！寧ろさつきから色々な素晴らしい記憶が頭の奥からよみがえってきます！」

ヤバイ。何かの薬でも打たれたのだろうか。幻覚の見える副作用のあるものだったのだろうか。これはちょっと？塑稀さんに確認を取っておかなければ。

「梓、ちよつと出るから此処にいてくれ。」

「はい！」

そういいながら畳にちよこんと座って顔を赤らめながらニコニコしている。やはりこれはおかしい。おかしい所ががもはやない位おかしい。

急いで扉を閉めて廊下を歩く。

そしてふと気付く。

あれ、医務室ってどこだっけ…

俺は一回しか医務室に言ったことがない。それも式人さんの後について行きあの部屋に行つたので道順など全く覚えてない。こんな広い屋敷だからこそだ。

取り敢えず部屋に戻って梓に聞いても今は意味がなさそうな気がする。廊下を進んでいくことに決めた。おぼろげに覚えている限りで進んでいくことにした。まずは、右だっただろうか…。その後右に左に進んでいった。

そうして十分は経つたのだろうか。

此処って…どこ？

完璧道に迷ってしまった。今は障子が長く並ぶ薄暗い廊下にいる。先程の十分はずっと歩き続けていたが全く誰ともすれ違う事は無かった。誰かとすれ違って聞こうと思っていたのだが人の気配が全くしないのだ。無論、今更部屋に戻ろうと思ってても戻れるわけは無い。まさかここまで迷子になるとは思わなかった。十分間も迷えることのできる屋敷って存在するのか…。

その後もこの長く障子の続く廊下を一直線に歩き続ける。

あれ…？

さっきからおかしい。確かにさっきから迷ってはいた。それでも“景色”は変わり続けていたのだ。ここまで同じ景色がずっと続いている事は全くなかった。歩いてても歩いてても白い障子が続いて行くばかり。

急に身体力が抜けて転びそうになる。何とか態勢を保って立ち上がるが頭の意識が飛びそうになる。目眩もしてきた。さっきから身体にも異常が出てきた。間違いない。これは只の廊下じゃない。明らかに侵入者対策だ。あるうことか俺は侵入者トラップにかかってしまったようだ。段々と視界が狭くなってくる。体中の力が抜けて廊下の冷たい床に倒れこむ。

意識が遠のいて行く…。

月明かりが廃屋の部屋を照らす。床に布を敷いて寝ていた厭人は身体を起こして夕食を食べていた。今晚は分家四の四季神しきがみにコンビ二へ行かせて買って来させた弁当だ。今いる分家の中で料理の上手い奴がいればそいつに作らせるのだが生憎今は任務を与えて出かけていた。一人だけでも残しておかなかったことに後悔している。最もこの廃屋に調理できるような場所は今はない。かつてはあったがその部屋は屋根が落ちてきていて既に使い物にならない。一度この廃屋も立て直した方が良さのかもしれない。

建て直すとしても今起きている件について一段落ついてからになるが。今は生上翔也の覚醒を急ぎ永劫を宿した神眼を手に入れる事が最優先だ。

手に入れた後の手はずは既に整っている。地下にあった研究室は無事だったからだ。

流石式神家の要。対策は万全だったか

そう、この廃屋。外から見れば枯れた木を寄せ集めたようにしか見えないこの廃屋は、元式神家の屋敷だ。かつて武神家に襲撃を受けその全体は焼きつくされていた。いくつか残っている部屋も屋根に穴があいていたり、抜け落ちていたりしておりまともに使えたのは高々数部屋だけだった。この屋敷が綺麗だった時は数百もあったのに使える部屋は指折り数えるしかないのだ。もう一度武神家の急襲を受けてしまえばもう後は平地しか残らないだろう。

今は武神家全体に対抗できるほどの兵力はない。頭である本家ですでに壊滅状態なのだから仕方のないことだ。

「厭人さま。包帯を変えに参りました。」

扉のない部屋の入り口に、医療器具を持っている少女がいた。名前は系器神しきがみ佐矢。系器神家は治癒の神眼の血統を持つ分家九だ。神

眼が発動すると瞳は黄緑色に変わる。

「お前のおかげで随分と怪我の治りが早いよ。武神家もまさかここまで優秀なやつがいたとは思っていてもいないだろうな。」

「お誉めの言葉ありがとうございます。」

そう言いながら俺の身体中に巻いてある包帯を解き始める。その下の傷は朝より大分良くなっていた。今朝帰ってきたときには出血し過ぎてしまい意識が飛びそうだった。傷口も大きく深く致命傷に近かった。

昨日の夜武神家の式辰というやつと戦闘をした。こちらは予備として用意していた神器 死糸 を使って万全の態勢で臨んだはずだった。それでも戦闘は難航した。あいつは予め張っておいた神器を片っ端から壁諸共破壊していった。結果、時間が掛かれば掛かるほど負ける可能性が大きくなっていった。そこで、肉を切つて骨を断つ作戦で行こうと思ったのだが。

結局あいつの剣撃が俺の身体に直撃。肉を切るどころか骨も断たれてしまった。それでも相手にそれ相応のダメージを与える事はできた。しかしどれくらいの傷を与える事ができたか確認していない。想像以上のダメージだったため近くに控えさせていた識神と織神に俺を回収させて急いでこの廃屋へと戻つて来たのだった。

しかし、これで此方が優位になることは間違いない。相手方に治癒の能力がある血統の分家は存在しなかったはずだ。即ち俺の回復が早い。万全な体制が整い次第生上翔也の覚醒と捕獲する。

「この傷はどれ位で治る予定だ？」

「はい、もう後二日もかからないかと。明日には動けるようになっていくかと思います。」

「治癒の力は凄いな。あんな致命傷をこんな早く治せるんだからな。便利なおやつだ。」

どうやら俺は後二日で動けるようになるようだ。

ここら辺でもう一度、生上翔也に手を入れた方が良いかもしれない。妖偽マユイにでも行かせようか。

「厭人さま、今から治療を行うので痛いです我慢して下さい。」

そう言って眼の色を黄緑色に変化させて傷口に手を当てる。傷口に激痛が走る。思わず顔を歪ませてしまう。この治癒の力、治りが早いのは良いのだが意識が飛びそうなほどの激痛を伴う。

額に汗がの粒が浮かぶ。体中の水分が抜け出ていくような汗が身体中から溢れる。

数分後にやっと傷口から手が離れた。

「お疲れさまでした。これで一通りの治療が終わりました。では包帯を巻きますね。」

手に包帯を取って俺の身体に包帯を着けていく。

そこへ入口に妖偽妖偽が立っていた。

「丁度良い所へ来たね。」

「そろそろ私の出番かと思いましたが、我が主。」

深々と頭を垂れる。最も俺が床に寝ている時点で頭をいくら垂れても俺より下になることはならないのだが。

「任務だ。生上翔也を攻撃して来い。できれば覚醒させる。」

「はい。しかし覚醒の条件は一体？」

「致命傷を与えれば良いはずだ。首でも捻じって切り落とせば良いだろう。そうすれば否が応でも覚醒が始まる。眼が蒼色になったら成功だ。」

「わかりました。」

再び頭を垂れて、踵を返して部屋から出ていく。

「ああそうだ。」

俺の声に歩みを止める。

「護衛がいたら殺せ。」

「はい。」

短く答えると部屋から月明かりが照らす夜空の下へ出て行った。

意識が戻る。

眼を開くとベッドの上で寝かされていた。薬品の臭いが部屋に漂う。どうやら医務室のようだ。誰かに運び込まれたのだろう。

「翔也くん眼さました？」

横から？ 塑稀さんの声がする。

「俺は…一体…？」

身体を起こしてみる。今でも頭には締まれるような痛さが走る。

「あ、まだ寝てた方がよいよ。何せ獅護神しゆごの幻覚に晒されたんだから。よりにもよってあそこに行っちゃうとはね。彼らの幻覚は見せるだけじゃなく身体そのものにもダメージを与えるから。これから気を付けなよ。」

「そうなんですか…。」

「此方としても警告し忘れていたからね。ま、体感してもらったからもう大丈夫だね？」

この激痛は経験するまでも無く回避することができた方がとても嬉しかったのだが。

「因みにさっきので判明したんだけどどうやら翔也くんの呪は半分くらい解けちゃっているみたい。」

「はい？」

予想外の言葉に驚く。俺にかけられていた呪が半分も解けているって…。

「多分式神に襲われた夜に心臓にも傷ができてたんじゃないかな？ ただ全部解けていないところを見ると式神には呪が心臓にあることはわかってないみたいだね。因みに今くらいでも死ぬことは出来るから安心して。」

その言葉に安心してため息が出る。

死ぬことができると言われて安心してしまうとは。本来は逆のはずなのだが滑稽なものだ。

そんな事よりまさかあの夜に呪の半分も強制的に解けてしまっていたとは。確かに式神のナイフを胸に直撃させてしまっていた。そ

れが原因だったのだろう。折れた肋骨が心臓も傷つけてしまったのか。

「あ、そう言えば。」

「ん？」

此処は目的とした医務室だったことを今しがた思い出した。

「あの、梓が帰ってきたときからおかしかったのですが。何か副作用のある薬でも使ったんですか？」

ああ、と頷きながら此方を向く。

「あの子に投与した薬は副作用があまりない物のはずだったんだけど…。薬に弱いのかな。迷惑かけちゃったね。」

「いえ、大丈夫です。それよりもあれは治るんですか？」

「それは勿論。薬の効き目がなくなれば大丈夫だよ。今頃は寝てるんじゃないかな。んじゃこの薬を渡しておくね。明日の朝にでも梓に渡して。」

？ 塑稀さんから小さな紙袋に入った薬を受け取る。

「んで翔也くんは今日此処で泊まりね。」

どうやら俺はこの医務室で一晩過ごすことになるようだ。

「あ、ところで朱鳥は？ 見当たらないのですが。」

「お嬢様は奥の集中治療室だよ。因みに面会謝絶ね。」

部屋の奥を見ると集中治療室と書かれた看板のある扉があった。

「やはり治りが悪いんですか？」

俺の質問の返答にしばし時間をかける。

「いや、一週間後には会えるようになると思うよ。それまで待つてね。」

？ 塑稀さんは席を立ってその集中治療室に向かっていく。

「んじゃ私はお嬢様につきっきりになるから、何かあったら側にいるスイッチ押して。そしたら来るから、んじゃお休み。」

「お休みなさい。」

部屋の蛍光灯の明かりが全て消える。

朱鳥は一向に良くならないようだ。式神の奴、どんな方法を使っ

たのだろうか。

確か操心術とか言っていたな。あの強気な朱鳥の心をあそこまで不安定にさせるのだ。俺が受けたら一体どうなってしまうのだろうか。

対策としては眼を合わせないことしかなさそうだ。

そう言えば俺は朱鳥のことが本当に好きではないのだろうか。よくわからない。こうやって心配で？ 塑稀さんにも質問をしたりしたが“心配”するというのは家族でも心配するわけだし。決定打となるものがない。朱鳥を好きであると証明できるものがないのだ。それが見つからないうちにはあの梓の質問には否定しかできない。俺には悪魔で家族としか捕らえる事しかできないんだ。この悩みは朱鳥が眼を覚ましてから聞いてみる事にしよう。あいつは俺の事をどう思っているのだろうか…。

それにしれも今日は酷い目に合った。怪我をせずに済みそうかと思っただけでまさか此処でこんな事になってしまふとは。案内なしにこの屋敷を回るのは絶対に駄目であるということを学んだ。

幻覚を見せる獅護神か。一体どんな人なのだろうか。

神威家と言いこんな広い屋敷にもかかわらず俺の知っている人は指折り数えるだけだ。一度此処に住んでいる人の顔を確認しておきたいものだ。そうすれば今日みたいなことにはならなかったのだけれど。明日会える人だけにでも会っておいた方が良くかもしれない。意識が通常通りに戻っているであろう梓にでも案内を頼むかな。

1 - 16 医者には従え

翌朝眼がさめると体から激痛は無くなっていた。どうやら無事完治したようだ。呪も半分解けているようだから回復速度も速いのだろう。

ベッドから起き上がり？ 塑稀さんを探す。すると医務室の扉が開いて手にコーヒークップを持ちながら入ってきた。

「あら、翔也くん起きたんだね。んじゃこれから送りに行くよ。」
持ってきたコーヒークップを机の上に置き再び扉へと向かう。俺も昨晚受け取った薬を持ってその後を付いて行く。序に道順を覚えようと頑張ってみたが、上手くいかなかった。どうやら侵入者対策のためだろうか、巧みに迷いやすい構造になっているようだ。

「そう言えば式晨さんは大丈夫なんですか？」

昨日の医務室では見なかった。奥の集中治療室にもいないようだしどこににいるのだろうか。

「式晨は結構重傷でね。別の部屋で私が直接治療しているの。今日も早朝に治療に行ったんだ。それで休憩ついでにと、君たちの様子を見に一旦医務室に戻ったんだ。」

「そんな重傷何ですか……」

「久しぶりに遊び過ぎたって笑ってたね。あんな怪我をして良く笑える余裕があるもんだよ。」

こっっている肩を叩きながら溜息をつく。式晨さんは相変わらずのようで少し安心した。

数分後に俺が泊らせてもらっている部屋の扉に到着した。

「それじゃ次からは気を付けてね。必ず梓と一緒に行動するようにした方が君のためだよ。この屋敷には獅護神しのいせの幻覚よりも危険なもので溢れているからね。身体の回復が早いとはいえ怪我はしない方が良いでしょう。」

それじゃ、と右手をヒラヒラさせながら踵を返して廊下の向こう

側へと消えていった。

部屋をノックする。

「梓、入るよ。」

鍵の掛かっていないドアを開ける。

部屋の中に入ってみるとそこでは梓が布団も敷かず畳の上で倒れこむように寝ていた。とても心地良い寝息を立てていた。薬の副作用で興奮していたせいか体力を消耗してしまったのだろうか。

しゃがんで寝顔を覗いてみると、とてもかわいかった。この子身体体のラインも完璧だし顔も整っているから、こうやって見ると結構かわいい。しかし、こんな綺麗で顔には何かしたくなる。ちよつとした悪戯心というやつだ。昨日の夜は朱鳥の事で色々突っ込まれてしまったからその仕返しだ。

部屋を少し見渡す。机の上に何故かマジックが置いてあった。何という偶然。これは天命としか言いようがないだろう。それを手に取りキヤップを外す。書く前に頭の中にイメージを描く。どのようにしたら面白い顔になるのだろうか。

考える事十何秒。

早速ペンをその柔らかい肌に押し付けて書いて行く。これだけ書いてもまだ起きない。かなり眠りは深いようだ。額から頬まで余すところなくペンを走らせていく。

よし、できた

完成した作品をまじまじと見つめる。我ながら上出来だ。この顔なら誰も文句を言わずに笑ってくれるに違いない。現にこの俺が笑いを抑えるのにかなり苦労している。

そんな違和感にやと気付いたのだろうか。梓が眼をさました。

「あれ、翔也さん。おはようございます…。」

眠たそうな目を擦りながら身体を起こす。そこで笑いを必死に抑えている俺の姿に気付いたのか頭に疑問符を浮かべて首を傾ける。

「あのー、何が面白いんですか？」

俺はとうとう笑いを抑えきれなくなって、笑い出してしまった。

俺の爆笑に益々顔を疑問符で埋め尽くして行く梓。

そうして部屋に備え付けられた洗面所に向かって行く。

洗面所に入った瞬間最初は悲鳴だった声が次第に爆笑に変わっていった。

「ちょっと、翔也さん！何ですかこれ！」

こうして今日の朝は俺と梓の爆笑の渦から始まったのだった。

梓と朝食を食べた後に？ 塑稀さんから預かっていた薬を渡す。

昨日の異常なテンションは本人も大変だったようだ。確かにあの状態が何時間も続けば無駄に体力を消費するのは当然だ。

「え、そうなんですか？あれ位なら宴会にでも出れば普通に一人や二人いますよ。」

さて今日は何をする予定だったかを此処で思い出した。この家にいる分家の人達と顔合わせをしておきたいのだ。でないと昨日の夜

みたいに殺されてしまいかねない。命を守るためにも絶対に必要だ。
「梓、この家には分家の人は何人いるんだ？」

「えーとですね、今のところは分家十全ているはずです。翔也さんは昔あったことないんですか？」

「俺は何度か遊びに来ているから会っているのかもしれないけれど名前は知らないだよな。」

朱鳥の家には昔何度か遊びに来たことはある。ただその時は俺もまだまだ幼かったから会っていたとしても覚えていないし名前なんて全く記憶にない。この家に分家が十あるというのは朱鳥から聞いていたが、それぞれの名前は聞いたことがない。今のところ知っているのもまだ神成、かんなり獅護神、そのこせ仁居神、にいがみ神威だけだ。他に六つもあるのか。

「翔也さん神威家を知っているんですか。また何でそんな一番レアな名前を。」

昨日の夜の鏑さんかざりと交わした会話を梓に話す。

「式神家の分家のことまで話したんですか。私も式神家分家を名乗る敵と会ったことも無いのでわからないです。でも此処数日中に相対することになるんでしょうね。気をひきしめなくっちゃ！」

ガッツポーズを決めて腕を高々と上げる。確かに俺の護衛をしているのだから式神家分家と相對することになるだろう。式神の狙いが俺である以上式神家分家を総動員させて狙いに来るのは間違いないだろう。

「それで此処の分家の人とできるだけ会いたいんだけど。」

「あ、そうなんですか。ではまず獅護神家に会いに行きますか？あちらも謝罪したいかもしれませんし。それに獅護神には私の親しい友人がいるんです。最近なっていないかったから会いたいですし。」

「じゃ決まりだな。」

梓と一緒に部屋を出て長い廊下を歩いて行く。暫く歩いた後にあの障子が長く続く廊下に到着した。改めてみると本当に廊下の先が霞むくらいの距離まで全部障子だ。見ているだけで吸い込まれそう

になる。

「あんまり見ない方が良いでしょう。でないと幻覚に掛かっちゃってまた倒れますよ。」

そう言いながら梓は前を見ず下だけ見て歩を進めていく。

「一、二、三、四、五！」

数えながら五歩進んだところで立ち止まる。そして右手側にある障子に身体の向きを変える。

「此処は決められた手順を踏まないと幻覚に掛かるようになっていきます。」

「そうなのか、んじゃ俺もやった方が良いのか？」

「はい。」

俺は下を向きながら梓と同じように数を数える。

「一、二、三、四、五。」

そうして身体の向きを変えて右手側の障子を見る。すると見ていた景色に変化が現れた。徐々に長く見えていた廊下がその距離を縮め初めて、直ぐ先に右に折れている廊下も出現した。長く続いていた障子もその数が一気に減る。霞んでいた景色が全て元通りになった。どうやらこれが本来あるべき姿のようだ。

「では、夢弓ちゃん！梓だよ。開けて良い？」

目の前にある障子に向かって名前を呼び掛ける。しばし数秒後に声が返ってくる。

「はい…大丈夫…です…。」

今にも消えてしまいそうな返事が部屋の中から聞こえてきた。梓は障子を開けて部屋の中に入っていく。俺もその後が続く。

部屋の中はも広めに作られている。床は勿論畳である。その畳三畳ほど離れた所に着物を着た少女が座布団の上に小さく座っていた。着物の色は赤を基調とした花柄、髪はそこまで長くなく綺麗に切りそろえられている。

「久しぶりだねー夢弓ちゃん。元気にしてた？」

「はい…梓さんも…元気で…何より…です…。」

顔を髪に隠すように上げない。あまり人と話すことになれていないのだろうか。昨日そのような子の所に部外者である俺が近づいてしまったのは自業自得かもしれない。

「こちら、今は私の主の翔也さん。何か昨日夢弓ちゃんの罠にかかったみたいで倒れたみたいなんだ。」

「あ…昨日の…。その…ごめんなさい…。」

隠していた顔をより一層隠して謝る。その謝り方だと何故か俺の中に罪悪感がヒシヒシと湧いてくる。いやまあ実際俺にも原因があるのだから当然なのかもしれないけど。でも釈然としないな…。

「謝らなくても良いよ。勝手に家の中を歩き回って君のところに来ちゃったみたいだから。」

「全く、駄目ですよ翔也さん。」

お前のせいだ、とつつこみを入れておく。

「そして翔也さん、此方は獅護神夢弓ちゃん。今年で九才だったけ？」

「…はい。」

小さくうなづく。この子の動きは声も動作も含めて全て小さいようだ。

「ちよつと人見知りが激しんだ。でも、獅護神家の中で一番力の強い子どもなんだ。」

「…そんな…強くないよ…。まだまだ…修行中…。」

こんな小さな子があのような不気味な幻覚を見せているのかと思うと信じられない。獅護神家一番というだけはあるのだろうか。だからこそ武神家に居るのかもしれない。修行中のようだし。

「今は暇？」

「はい…次の修行は…夕方…だから…大丈夫…です。」

「それじゃおしゃべりしよう！」

こうして梓があつという間にお茶の準備をしてしまった。和菓子と緑茶が俺たちの前に揃えられた。

「そう言えば夢弓ちゃんは何色なの？」

「その…私は…混色系の…朱紫です…。」

「混色系…？」

はて、初めて聞いた名前だな。

「目の色には純色系と混色系があるんです。混色というのは色々な色が組み合わさっているものです。確か五色の能力もあつたような…。純色系は単色何です。私のような紫ですね。」

五色もあるのか…。覚えるのがとても大変そうだ。つまり色の組み合わせの分だけ能力があるのか。

想像以上に能力の種類は多いんようだ。

「どちらが強いという事は無くて性質上単純に区別されているのです。寧ろ強さで言えば朱、蒼、翠の三色最強と言えるかもしれません。」

朱、蒼、翠か…。つまり俺はその中の一つに当てはまることになるのか。

「朱は御存じの通り炎系統です。翠は言霊ですね。私はまだあつたことないのですが何でもそうそう会える人たちじゃないそうですよ。」

言霊使いに啓祐兄さんは会つたことあるのだろうか。確か知っている能力として上げていたような。

「そして蒼何ですが、これが一番珍しいみたいです。何せ色が一緒なのに能力の種類が一人一人違うんですよ。だから所持者と対峙しても刃を交えるまでは手の内がわからないんです。どんな能力よりも厄介ですよ。」

「それじゃ何で俺のは永劫ってわかつたんだ？」

「それは観察眼の能力の人が見てくれたんだと思います。うちの分家には観察眼の所持者はいなかったのだから呼んだんだのかと。」

それじゃその観察眼の人は俺にとって恩人か。産まれて直ぐに俺の持っている能力を識別して赭孿さんに封印してもらって…。一様は死ぬるような身体にしてくれたのだから。一体誰なのだろうか。

「因みに観察眼は蒼です。」

「え、そうなの？」

「偵察役としては結構強いですね。眼で見なくとも感覚でどこにどの能力者がいるかピンポイントでわかるみたいです。探索範囲は人それぞれみたいです。強い人になると半径三十キロメートル以内ならわかるそうですよ。」

半径三十キロメートルというと一体どれくらいの距離なのだろうか。すくなくとも幾つかの町はその範囲内に入るだろう。

「因みに偵察でいえば内の分家では神琥家かんくですかね。今日って此処にいるかな？」

「それは…わからない…です。」

透視できるやつもいたのか。

「そっかー。それじゃ後で会いに行くかな。」

「というか透視って何か嫌だな。何処にいても見つかったやうだろう。覗きしほうだいじゃないか。」

透視なのだからその能力は壁とか何て見透かしてしまうのだろう。未だにプライバシーが騒がれているこの時代に、そんなものはないのも同然になる力だな。

「大丈夫ですよ。透視能力が使えるからこそ、神琥家ではそこら辺のモラルはしっかりしているようですし。それに昨日私たちを回収してくるように判断したのは神琥家の人みたいですよ。」

そうだったのか。ならば会った時には感謝しないといけないな。

「あの…」

夢弓ちゃんが小さい声で話しかけてきた。そういえばすっかり夢弓ちゃんを置いて行ってしまっていたような…。

「おい、梓。何か夢弓ちゃんが会話に加われるような話しないのか？」

「あ、そうですね。うーんと…」

考え込んでしまう梓。仕方なく俺が会話を繋げていくことにした。
「夢弓ちゃんは何処の生まれなの？」

「秋田…です。実家は…そこに…あります。」

実家という事は一人でこの武神家に来ているのだろうか。

九歳なのに頑張っているな。まだ小さいから不安だろうに。

「いえ…でも…私…能力が…安定しないから…此処にいないと…他の人を…」

なるほど。確かにあれ程の幻覚が制御しきれていないのは危険なのかもしれない。ただ自分がそこにいるだけで他の人が幻覚に掛かってしまうのは嫌だろう。

「でも最近は大分制御できるようになったよね。最初の頃は緒攀しづまさましか長時間一緒に居られなかったのに今じゃこうしてお話できるし。」

「へー、頑張ったんだな。」

「緒攀さまの…おかげです…。」

緒攀さんはあの幻覚にも耐えられるのか。流石だ。俺だったらあのまま死んでいたみたいだし。

ん、そう言えば今は瞳の色が変わっていないのに何故廊下には幻覚が働いていたのだろうか。

「今は…能力を…抑えるための…薬を…飲んで…いるんです…。」

そう言いながら眼に手を当てる。

「こうしないと…勝手に…発動…しちゃうんです…。薬の副作用で…今は…眼の色が…変わらない…んです。」

？ 塑稀さん特製の薬らしい。

「？ 塑稀さんって凄いいよね。私たちの治療を完璧にしてくれるんだよ。昨日あれだけの疲労だったのに私もこうやって回復しているし。だからこそ、ここの医務室に雇われたんだね。」

「私も…凄く…嬉しい…。」

夢弓ちゃんはニツコリと笑顔を見せる。髪に隠れてしまって良く見えないがこの子の笑顔も結構かわいい。

「そういえば夢弓ちゃんは後どれくらい此処にいる予定なの？」

「後…一年…くらい…かな…。修行が…終わったら…また…実家に…戻る…。」

「そっかー」

うんうんと頷く梓。

「それじゃこれからも一緒に頑張ろうね！」

「はい。」

元気よく頷く夢弓ちゃんだった。

それから暫く三十分位だっただろうか。三人で他愛もない雑談を楽しんだ。

夢弓ちゃんはあまり言葉を発することはなかったが、梓がそれをフォローしながら話を盛り上げていつてくれた。梓の性格だからこそこできることなのだろう。しかし、良く口が動くものだ。

「それじゃ、そろそろ次行きましょうか。」

「そっだな。」

丁度会話の区切りが良かったところだ。

「また…遊びに…来て…下さい。」

少しだけ頭を下げて笑顔を見せる。

俺と梓は立ち上がり障子を開けて部屋から出る。さて次は誰に会いに行くのだろうか。

「さて、次はどうしましょうか。先程の会話に出た神琥家の誰かでも会いますか？今は誰がいるのかな。」

「ん、常駐しているわけじゃないのか？」

「はい。一樣分家の一人の誰かが必ず此处に居るように定められています。ただ固定ではないので分家によりますが、数力月単位で交代したりしています。私はもう二年目になりますが。」

二年間も何故いるのだろうか。一族から省かれているのだろうか…。

「単純に交代できる人がいないんです。この重力の力は制御が難しいですよ。まともに使えるのは私だけです。」

「そうなのか。だとするとお前はかなり優秀なんだな。」

「えへへへ。誉めたって何も出ませんよ！」

顔を赤らめて手をヒラヒラさせている。かなり照れているようだ。

隠そうとしても感情が直ぐに表情に表れるので凄くわかりやすい子だ。

暫く話しながら廊下を歩いて行く。

しかし相変わらず此処の廊下は薄暗い。何故明かりを灯さないのだろうか。廊下にはこれといった特徴があるわけではないので自分は何処にいるのかもわからない。窓も所々しかないとため今の時間は時計でしか判断することができない。

曲がり角に迫った時に横から人とぶつかりそうになった。

「お、梓と翔也くんか久しぶりだねフツ。」

「師匠！」

そう言つて驚いて飛び上がる梓。一方の式晃さんは松葉づえを付いており所々服から包帯が見え隠れしている。目にも眼帯をしておりどう見ても重症である。

「式晃さん、もう歩けるようになったんですね。」

「ああ、？塑稀のおかげだよ。あいつは医者としてはとても優秀だからな。」

？塑稀さんはかなり頑張ったようだ。

「では師匠はもう大丈夫なんですか！？」

「フツ、大丈夫だよ…ゴフツ。」

「！？」

「！？」

式晃さんは咳と共に吐血して、倒れた。

「式晃さん！」

「師匠おおおおおお！」

倒れても吐血を続ける式晃さん。既に意識は失っているようだ。

「運ぶぞ梓！」

「はい！」

急いで式晃さんを二人で持ち上げる。でもかなり重い…。鉄の塊を持ち上げているようだ。

「おい、梓。式晃さん何でこんな重いんだよ…。」

「師匠は体内に武器をもっているんです。だから、こんな、重いんです。よいしょ！」

だそうだ。どれだけ重い武器なのだろうか。しかも体内に隠すつて式晨さんの身体は一体どうなっているのだろうか。

「梓の重力で運べないのか？」

「無理です。運んだら師匠を潰しちゃうかもしれません。手負いなのに留めさしちやいますよ…。」

梓の重力は操作が難しいそうだからそりゃそうか。

長い廊下と一緒に歩きながら数分後。やっと医務室に到着するこ
とができた。

しかし医務室の様子がおかしい。中からただならぬ殺気があふれ
出ている。

「あ、梓…。これは一体…？」

「？塑稀さんが怒っているのかもしれませんが…。」

梓は扉の方を見ながら身体を震わせている。

？塑稀さんが起こっている原因。それはどう考えても俺と梓が抱
えてるこの人以外にいないだろう。全く迷惑な人だ…。

ドアをノックする。直ぐにドアがゆっくりと開く。

中からは白衣を着た悪魔が…。

『ぎゃあああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああ』

俺と梓は二人してみつともない悲鳴を上げてしまった。

1 - 17 捻じれる日々

式^{しき}戻さんを悪魔のような形相だった？ 塑^{みそぎ}稀さんに預けて医務室から出る。

「梓^{あずな}…。？ 塑稀さんってあんな怖い表情が作れるんだな。…」

「私も初めて見ました…。？ 塑稀さんってあんな人だったんですね…。もうビックリし過ぎてさっきから膝が爆笑しているんじゃないかという位震えてますよ。」

「奇遇だな。俺もだよ。…」

俺と梓は顔面蒼白、膝は爆笑状態のまま廊下を歩きながら部屋に戻る。

人って悪魔になれるんだな

そんな常識のような気がしなくてもないことを今日直感的に学ぶことになった。あの？ 塑稀さんがあのようになれることができるとは…。もしかしたら三兄妹の中で一番強いのは？ 塑稀さんなのかもしれない。

部屋に到着して気を取り直す。

「さて、一旦昼にするか。」

「そうですね。では昼食を持ってくるので待ってて下さい。」

そう言って梓は昼食を取りに部屋を出て行った。

今日はまだ後十二時間ある。本当はこのまま分家の人達との顔合わせをしていきたいところだけれども、一辺に会っても名前を覚えられなさそうだし今日は後一人二人位と会えたら外に出ようかな。折角の平日を休日として過ごすごうことができるんだ。

過^ごごし方に関しては、この前の俺だったら部屋で寝るかの一択しかなかった。しかし此処数日は何やかんやでかなり寝て過ごす時間が多かったのだ。昨日も十時間位は眠っていたはず。

そこで俺らしくもなく外出することを考えていた。駅前辺りに行って色々散策してみるのも良いかもしれない。ただ問題なのは式神

家の分家とやらに狙われないかどうかだ。式神のやつが動けなくてもこの前の狐のお面みたいな二人が襲ってくるに違いない。それだけがどうしても心配だ。

でも式戻さんの話によれば式神に止めを刺すには今が絶好の機会らしい。となるとだ、こちらからあいつの根城を発見して奇襲することもできなくはない。今まではあちらからの攻撃ばかりだったけれども、今度は俺らが仕掛ける番だ。

問題は俺が戦えないことだろうな…。いい加減俺にも何か武器が欲しいところだ。

ん、そう言えば

此处で数日前の事を思い出す。朱鳥と式神探しをしている時にあいつから駅の中でナイフを投げつけられた。その時のナイフはポケットに入っていたはずなのだが…。

ズボンのポケットを探ってナイフを取り出す。改めてみると本当に小柄なナイフである。これで果たして戦えるのだろうか…。しかもよく見ると、刃が^{やいば}付いていない。これではものを切りつけることはできなさそうだ。

寧ろ刃がちゃんと付いていなかったからこそ、ズボンのポケットを破らずに済んだのかもしれない。

梓に後で聞いてみるかな

ナイフをポケットにしまったと同時に、扉が開く音がして梓が昼食を持ってきた。

「翔也さんお待ちせしましたー。今日は洋食のハンバーグですよ！」
心なしに梓は嬉しそうな表情をしていた。ハンバーグが好きなのだろうか。

「私こういう料理好きなんです。特にハンバーグはもう、大好きで大好きで！」

頬をほころばせながら涎を垂らしそうになっている。

机の上に持ってきたものをさっさと並べると、直ぐに座ってナイフとフォークを持つ。

「ささ、早く食べましょう！」

俺も梓の反対側に座って一緒にハンバーグを食べは始めた。

暫く黙々と食べつつける梓。無我夢中で会話をする隙がない。数分後梓は手に持っていたナイフとフォークを机の上に置く。どうやら食べ終わったようだ。

「あれ、翔也さんまだ食べ終わっていないんですか？良ければお手伝いしますよ！」

再び机の上に置いたフォークを構え直して目を光らせる。好きなものに関してはこの子、際限がないようだ。

「駄目だよ。俺だって食べるっつーの。」

「えー、人の親切はありがたく受けるのが重要ですよ。」

「これは親切じゃないだろうよ。」

「あう…。」

口をすばませながら座り直す。それでもなお視線は俺のハンバーグへと向けられている。非常に食べにくい…。

「ところで梓、今日は後二、三人分家の人と会ったら出かけようと思っただけど。」

「そのこと何ですが。さつき昼食を取りに行った時に来たのですが現在、翔也さんの知らない分家の方は全員任務に出かけているようです。」

「全員？」

式神絡みで何かあったのだろうか。まさか全面戦争でもする気なのだろうか…。

「全員じゃないですが何名かはヨーロッパに行っているそうですよ。」

「ヨーロッパ？」

はて、何でヨーロッパという見当違いな場所に行っているのだろうか。

「ヨーロッパで何かあったけ？」

「あれ、知らなかったんですか？日本ではピタリと最近やみました

が、ヨーロッパではまだ眼がくり抜かれ、四肢が切断されている謎の連続殺人事件は続いているんですよ。」

そう言えばそんな事件があったな。最近自分の周りで起きる殺し合いばかりに注目していたからすっかりわすれていた。どうやらまだ続いているようだ。

武神家の分家の人達が向かったという事は、あの事件も神眼絡みの事件なのか。

「あの事件はかなり残酷ですよ。罪もない人たちを場所、時間関係なく殺しているんですから……。」

「その事件と比較すると式神の奴なんか小さく感じるな。」

「比較対象にはなりませんよ。ヨーロッパで起きている事件と式神家の起こしている事件は次元が違い過ぎます。一樣ヨーロッパにも武神家のような神眼の家系が存在するんです。ところが先日、その家系諸共壊滅したそうです……。」

「確かに次元が違うな……。」

式神が武神家を壊滅させるようなものか。

ヨーロッパで暴れ回っている殺人鬼は異常なくらい強いみたいだ。

「ヨーロッパ中神眼家系が今危険に晒されているんです。そこで赭^し攣^{づる}さまが分家の何名かをヨーロッパに派遣したんですよ。」

「それで、今分家の人はいないのか。」

「はい。因みに此処に残ったのは私含めて四人みたいです。」

「四人って事はあと一人、俺が会っていない人いるんじゃないか？」

俺が知っていて合っているのは、梓の神成家^{かんなりけ}、鎗^{かざり}さんの仁居^{にいがみ}神家、夢弓^{しのかげ}ちゃんの獅護^{しご}神家。それで会っていないのは神威家^{かむいけ}の人と神琥^{かん}家の人だ。

神威家は確か一番強いらしいから、神琥家の人が誰か残っているのかな。

「えーと残っているのは、神威家の人みたいです。」

「そうなのか？ てつきり一番強いからヨーロッパ行っているのかと思った。」

「神威家の人は確かにヨーロッパに向かっています。只此処の本家にいるのは家系の中でも上位の強さを持つ人何ですよ。だから力が一番強い他の家の方々はヨーロッパに向かいました。でも神威家の方に關しては皆さん強いので、本家にいる方はヨーロッパに行かなかったみたいです。」

本家にいる人は皆その家系の中でも強い人なのか。

それで神威家の人に関しては、皆強いからその中でも一番強い人は本家に残っていても問題はないのか。それだけ強いのであれば一回は会っておきたい。

「梓、その神威家の人と合う事は出来ないのか？一回会ってみたいんだけど。」

「それは無理なんです。私も会ったことないですし……。」

そう言えば錆さんも会ったことがないと言っていたな。神威家の存在は本当に秘匿の状態にされているようだ。

「神威家って存在しているかやっぱりよくわからないんですよ……同じ屋根の下に住んでいるはずなのに、知らないっていうのは何か不気味です。」

梓は二年間武神家にいるのだ。二年間も住んでいるのに、その存在を見たことがないのは不気味だろうな。

「そうそう。このナイフ何だけどさ。」

俺はさっき取りだしたナイフを再び取り出して、梓に見せる。

「こんな小さいナイフ何だけど、戦闘で使えるかな？」

「ちよつと見せて下さい。」

梓にナイフを手渡す。それをしばらく色々な角度から眺める。

「これってもしかして……。」

そして右手に持って力を強く入れた。するとナイフは紫色にひかり、ナイフの刃の部分が大きくなった。刃の部分は紫色になっており、明滅している。

「これ、神器ですよ。何でこんな珍しいものを持っているんですか？」

「神器だったのか。いや、式神からちよつと拝借したんだよ。」

へー、と感心しながらそのナイフを振り回す。振り回すたびに紫色の光が弧を描いてとても綺麗だ。

「梓、俺もそれ使えるかな。」

振り回していたナイフを止めて俺の方を見る。

「多分使えますよ。ではどうぞ。」

梓の手から離れるとナイフはおれが渡した時の状態に戻った。そしてそれを右手に握ってみる。

「どうやったら使えるんだ？」

「単純に力を込めるだけで大丈夫ですよ。こう、ぎゅーっと。ぎゅーと力を込めてみる。」

すると刃の部分が梓のよりも数倍大きくなって表れた。長さは一メートルはありそうだ。蒼い光を放っており、真っ直ぐな日本刀のような感じになった。

思わず俺と梓は口をあぐり開けて固まってしまった。

「翔也さんって、潜在能力の力凄いですね…。その刃の大きさっていうのは、所有者の力の大きさに比例するんです。他の神器も同じで所有者の力が大きければ大きいほど、大きな威力を発揮します。」

俺ってどんな身体なんだよ。

自分の体なのに、他人の身体のような感じで実感が全然わかない。俺は立ち上がって少しだけ振り回してみる。重さとしてはあの小さなナイフなので、とても軽い。大きさと重さが比例していないので、とても違和感があった。

「翔也さん、それ一樣武器ですからあまり振り回さないでくださいよ。多分この机位なら一刀両断できちゃいますから」

ナイフから力を抜いて刃を消す。

「それじゃやることもないし、ちよつと外出しないか？」

「良いですけど、式神家が心配ですね…。」

「人込みの多い所に行けば大丈夫なんじゃないか？人目のつくところ」

るなら流石に暴れられないだろうし。」

「そうですね。では行きましょう!」

俺と梓は部屋を出て武神家の門へと向かう。

その薄暗い廊下を歩いている時に、向こう側から黒いスールを着た式人^{いちひと}さんが歩いてきた。

「どちらに向かわれるんですか?」

「ちよつと駅前の方まで。」

溜息をついて呆れる式人さん。

「何を言っているんですか。あなた方は昨日、式神家分家と思われる人物に攻撃されたんですよ?ちよつとは警戒心を抱いて頂けませんか?」

「大丈夫です。この神成梓^{かなりあずさ}がしっかりと護衛しますのです。」

「昨日できなかったことが、今日直ぐにできるんですか?」

「大丈夫です。俺も戦うので。」

俺のセリフを聞いて少し言葉を止める式人^{いちひと}さん。

何か考えているようだ。

「ならば、良いでしょう。何かあったら私に連絡を下さい。ではお気を着けて。」

そう言って一礼すると、俺たちが歩いてきた方向へと消えていった。

俺と梓は眼を合わせて疑問の表情を浮かべる。

「何かあっさり引き下がったね…。」

「はい。私もこれは予想外でした。何かあるのでしょうか?あの式人さまが、こんな危険なことを考えもなしに承諾するとは思えませんが、んし。」

「ま、折角許可してくれたんだし楽しもう。」

「そうですね。無駄な心配をしようがないですし、行きましょう!」

元気よく声を出して歩き始める。俺もその後が続いて廊下を進む。

駅前の商店街まで行くとお昼時だからなのだろうか、沢山の人で賑わっていた。

大通りを沢山の車が行き交い、歩道にも人が溢れていた。

「おかしいな、何で平日なのにこんな沢山人がいるんだ？」

「今日って祝日でもないんですよね？どうしてでしょうか…。」

中には高校の中で見たことがあるような顔もあった。何故こんな真昼間から高校生がこんなにいるのだろうか。その中に緑色の髪のようへい葉平がいた。

「お、翔也じゃんか。ん、その女の子は誰？まさか、彼女…！？」

「ちげえよ。」

背の低い頭にチョップを入れる。

「この子は俺の護衛をしてくれている、神成梓ちゃん。朱鳥の所分家の子だよ。」

「始めまして、神成梓です。」

頭を下げて挨拶をする梓。こいうところは丁寧にできるようだ。

「俺は下光葉平です。よろしく！」

「そういえば、葉也はどうしたんだ？」

双子の兄貴の方が見当たらない。

「あー、兄貴のやつは今トイレ行ってるよ。」

「お兄さんがいるんですか？」

「こいつら双子何だ。ただ兄貴の方は性格がな…。」

葉平は結構親しみやすい性格なのだが、兄の葉也のほうは結構な真面目なのだ。こうやって学校において怪我人とされている俺が歩いていると、色々と言われてしまう。

「そうだ。翔也って暫く学校が休みなの、知っていた？」

「そうなのか？」

「昨日お前も見ただろ。あんな状態じゃ授業できるわけないだろう。しかもうちの高校ってここら辺で一番生徒の人数多かったらしいか

ら、他の高校への仮転校も難しいらしいよ。そこら辺がすっかり決まるまで休学だつてさ。」

一昨日の夜に式晃さんと式神が校舎の屋上を滅茶苦茶にしてみました。そして昨日の昼に梓と狐のお面の二人が暴れて、更に壊してしまつた。現在四階建てだった校舎は三階建てになっているだろう。「それじゃ葉平も暫く暇なんだな。」

「そうだよ。取り敢えず今日はこうして兄貴と遊びに来たんだ。翔也と梓ちゃんもどう？」

「え、私もですか!？」

何故か大きい声を上げて驚く梓。

「そうだな。葉也にグダグダ言われると思うけど、序だから遊ぶか。」

こうして俺、梓、葉平にトイレから帰ってきた葉也と一緒に遊ぶことに決まつた。

予想していた通り葉也には、「お前は梓ちゃんだけ置いて帰れ」とか「怪我人は部屋で寝てろ」とか色々言われたけれど、無視した。四人でゲームセンターや、店に入って食事をしたりして楽しんだ。久しぶりに心の底から楽しんで遊ぶ事ができて良い休憩になった。梓はゲームセンターの類いは初めてだったようで、どれもこれも興味津津に遊びに行っていた。俺もそれに乗じて沢山遊ぶ事ができた。葉也も真面目な割にはかなりゲームが上手く、シューティングゲームのハイスコアを更新したりと、その腕前を俺達に疲労していった。

これからもこんな風に遊べると良いのだけれど、そうはいかないことは俺が一番よくわかつている。

そして、それは直ぐにやってきた。葉平と葉也と別れて武神家へと変える帰り道。

俺は梓とお踊り沿いの歩道を歩いていた。

「今日は楽しかったですね!ゲームセンターってあんなところだったんですね。知りませんでしたよ。」

かなり楽しかったのだろうか。未だに楽しそうな顔をしていた。

「そうだな。また遊びに行こう。」

「はい！」

とても明るい笑顔を見せながら、元気よく返事をした。

その時、右にあった電柱が大きな音をたてながら“捻じれた”。

「下がって下さい！」

梓は瞬時に眼付を変えると、倒れてきた電柱に向かって手を合わせた後広げる。

『反重力五倍！』

ガキンツ、という大きな音を立てて電柱が反対方向へと吹き飛び、すぐそこにあつた民家の塀に突き刺さった。電柱に引っ張られるように、電線も大きくしなり音を立てる。

俺は直ぐにポケットから神器を取り出すと、力を込め発動させる。梓も構えて紫色に変化した眼をしながら周囲を見渡す。

すると百メートル先だろうか。やけに扇情的な服装をした女の人があられた。その目は殺気を秘めており俺らを射抜くような視線だ。何の武器も持たずに直立で立っている。最も、もし神眼所持者ならば最大の武器は眼なのだが。その眼の色は特に変わっていない。

「こんにちは。あなたが生上翔也くんかしら？」

「だったらどうするんだ。」

何故か怪しく微笑む女。

「そして隣にいる女の子が護衛かしら。」

「私は神成梓！お前は式神家分家の者か！」

威勢よく声を上げる。

「私は色神妖偽しきがみようぎ。如何にも、式神家分家の者よ。今日はあなたとこの男の子を捕まえに来ました。」

「ならば、戦うまで！」

そういつて梓は両手に紫色の球体を構えながら突っ込む。

「若いつていいわね。」

そう短く呟くと眼の色を変える。その眼の色はオーロラのように

朱から緑へ、緑から朱へと変化する。その異変に気付いたのか梓は駆けるのを一旦止めて、構え直す。

「翔也さん！この人の能力は捻曲ねんきよくです。気を着けて下さい！」

梓は俺の方を見て声を張り上げながら、警告する。

「遅いわよ。」

妖偽は短く呟く。

すると俺の横に止めてあつた車が、大きな音をたてながら捻じれる。

「危ないっ！」

梓が叫ぶ前に俺は前の方へと走りながら、道へ飛び込む。その瞬間爆発が起き、俺を更に前へと吹き飛ばす。

「大丈夫ですか！」

「大丈夫だ。お前も集中しろ！」

梓は慌てて前を向く。

「若いというのは、単純で考えものかもしれないわね。」

怪しく微笑む。

すると次々と空間が歪み始める。電柱、壁、自動車、家、全ての物が捻じれて壊れる。

周囲数十メートルのもの全てが爆発、崩壊、倒壊を始める。

立ち上がった俺は、梓と駆けながら、それらを避ける。俺は倒れてきたものは断ち切り、爆風は梓が決壊で防ぐ。妖偽に近づこうとするが、一歩進めるごとに周囲のものが大きな音を立てて壊れる。

「おい、捻曲つてこんな無茶苦茶なのかよ！」

周りの崩壊音に負けないように俺は梓に大声で聞く。

「武神家分家にも捻曲の能力を持つ人はいましたが、ここまでののは初めて見ました！」

一方の妖偽は、向こう側で怪しく微笑んでいるだけで、全く動かない。ただ直立しているだけで、此方をずっと見つめている。

「元気が良いわねえ。それじゃこれはどうかしら。」

妖偽は右手を俺らに向けて差し伸べる。

『捻じれる』

バキバキつと不気味な音が足元から聞こえる。俺はいきなりまとも

に立てなくなり、倒れこむ。足に熱いものが伝っていく感覚を肌で感じる。一瞬何が起きたのか分からず、右足に眼をやる。

俺の右足がきちがいな方向へと曲がっていた。途端に激痛が身体を駆け廻り、大きな悲鳴を上げる。

「ぐあああああああああああああああああああ！！！」
そんな俺の様子を妖偽は怪しく満足そうに微笑んだ。

俺は右足を膝から下から、前の方向へ、つま先が太ももに付きそうになるまで曲げられていた。出血もしており、靱帯も勿論切れている。俺は立てなくなり、座りこむように倒れこんでしまう。

「翔也さん！」

色神によって吹き飛ばされ続けている破片を防ぎながら、此方を見る。

俺は激痛のあまり何も言う事ができない。齒を食いしばって、痛みに耐えているのが精一杯だった。ナイフの神器を地面に突き刺して立ち上がるとしても、立ち上がることはできない。力が上手く入らない。

その隙を狙ったかのように、俺が防いでいた方向から大きな瓦礫の破片が飛んでくる。

「伏せて下さい！」

梓はそれを、右手に出現させていた球体で弾くことにより、辛うじて防ぐ。

俺が破片を防いでいた方向が空いてしまい、梓は全方向から飛んでくる破片を防ぐことになってしまった。

俺は痛みに耐えながら意識を失わないでいるのに精一杯だ。

このままでは、梓の力が尽きたら俺らは二人とも死ぬ。いや、俺を捕らえるように命令をされているはずだから、梓だけが命を落とすことになる。このままでは…。

「梓…」

何とか力を振り絞り、声を出す。

「お前だけでも、逃げろ。お前のその力なら大丈夫なはずだ」

「そんなことはできません！」

此方を振り向きもせず、手に持った球体で飛んでくる破片を次々とはじき返す。

「そんなこと言ってもだ…、お前の体力が尽きれば…終りなんだぞ…。それに俺は…、死ぬことは無いはずだ…」

「いやです!」

梓は大きく叫んで、俺の言葉を受け入れようとはしない。

「絶対に守ります!」

梓は手に持つ球体を大きくする。

『反重力三十倍!』

大きな球体二つを周囲に放り投げる。

『爆散!』

梓が叫ぶと、空中に浮かんでいた球体が少しだけ縮んだ後に、大きく膨らみ爆発した。轟音と共に周囲の大气が押し出されて、飛んできた破片は反対方向へと、飛んで行く。

梓はすかさず手を合わせて、眼の光をより一層光らせる。

『独立結界重力二倍!』

叫んだ後に手を大きく広げて、半透明の大きな球体を出現させる。それは急速に大きくなり、俺と梓を覆うようになる。半径二メートル位の大きさまで膨らんだ後、ピタリと止まる。

中は紫色の半透明なせいか、薄暗くなる。

飛んでくる破片は球体にぶつかる瞬間、全てが反対方向へと飛んでいく。

梓は額から大粒の汗を浮かばせながら、息を荒くしている。昨日の今日だ、体力もそろそろ限界なはずだ。

「翔也さんはここにいて下さい」

「馬鹿かお前は!体力だって残ってないだろ、いい加減諦めろ!」

俺の言葉に少しだけ黙り込む。しかし俺の眼を見る事は決していない。

そして意を決したかのようにこの結界から出ていく。

「私の任務は、翔也さんを守ることです」

短く言うだけで、歩みを止める事はしない。色神の方へと進んでいく。

「そんな体力で私に勝てるっても？」

色神は怪しく笑いながら梓を見据える。

気付くと破片が飛んでくることはなくなっており、辺り一帯は静まり返っていた。どうやら無駄と思つて、一旦止めたのだらう。

「それじゃ、あなたから殺してあげる」

色神は手の平を梓に向ける。

『捻じれる』

梓の首元の空間が揺らぐ。そして時計回りに急回転を始めて、梓の首を捻じ切ろうと襲う。

「梓！」

俺は叫ぶが、梓は反応しない。

ギン！

肉と骨が曲がるような音の代わりに、金属と金属がこすれ合うような大きな音がする。そして捻じれかけていた空間はその音と共に消滅する。そして首元には小さな紫色の球体が浮かんでいた。

「なるほど相殺したの。それじゃ、これでどうかしら？」

色神は手のひらを梓に向けて両手に構える。

まるで全ての狙いを、梓に集中させるかのようだ。

『全ては私の意のままに 捻死 』

色神は眼を一層光らせながら、言葉を放つ。

『反重力二十倍！』

同時に梓も叫び、右に大きく走り出し色神の攻撃を回避して色神へ急接近する。

瞬間、梓のいた場所は空気が捻じれて大きな風が吹き荒れる。敷かれていたアスファルトは巻き上げられ、大きな穴が開く。巻き上げられたそれも、空中で粉々に碎かれ、砂塵と化した。

そんな光景に眼もくれず梓は色神との距離を縮め続ける。

「あなたの能力は厄介ね。これ以上成長する前に、始末するのが正解かしら」

梓は色神との距離は十歩程度。この距離ならば、もう回避するこ

とはできないはずだ。梓は両手に構えた球体を、色神の顔面に突き出すように構える。

一方色神はそれを避けようとするのは一切しない。むしろ右手を突き出して、梓の球体を受け止める。梓と色神がぶつかり合った瞬間、金属がこすれ合うような音が響き渡る。

梓は両手を押しこみ、色神の片手を吹き飛ばそうと力を込める。だが、全く動かすことができない。自分の能力である重力が、色神の捻曲によって相殺されている感覚が、手のひらから伝わってくる。それどころか：

「お腹があいてるわよ」

色神が怪しく微笑みながら、開いていたもう片方の手で梓の腹をなでる。

その手が梓の腹から離れると同時に、斜め後ろの方向に向かって、身体をきりもみさせながら吹き飛ぶ。梓の血が大きな弧を描く。そして地面に転がるように着地する。

暫くピクリとも動くことはしない。

「おい、梓！起きろ！」

俺はまだ治らない右足を恨む。永劫を封じている呪は半分も削られているにも関わらず、中々効果を発揮することはないようだ。一層の事、神器で心臓を貫こうか考える…。

「あ、う…ごほっ…」

咳き込みながら血を吐く。腹の傷口を抑えている片手からは、血が漏れている。

「翔也さん…余計な事は…しないで…くださいね」

途切れ途切れに、辛うじて声を出す。地面から身体を起こし立ち上がる。

「あら、片手だけだとまだ甘いみたいね。それじゃ」

色神はスッと両手を再び構える。捻死を使う気なのだろう。このまま捻死を食らうのは、留めの一撃になるに違いない。

『重力四十倍！』

捻死の発動よりも早く、梓は叫び地面に手を叩きつける。

色神の周囲の地面に紫色の円が、次々と描き出されていく。

捻死はその威力と比例して発動するまでには、ほんの少しだけ時間がかかる。だから梓は後先考えずに、梓の重力はどんなに使っても相殺されることがわかっていても、能力を発動させる。死なないためには戦い続けるしかない。

そして紫色の円は、色神の足元にも出現した。それに気付いた色神は動じる事も無く、両手を梓から地面に素早く移す。

『捻死』

色神の真下で広がるうとしていた円は、相殺され収縮していく。

『反重力五十倍！』

梓は少しだけ身体を浮かばせて、滑るような移動を開始する。地面に広がる紫色の円に触れても、少しだけ沈むのみで、止まることはしない。一直線に色神へ向かっていく。

色神は周囲を紫色の円で囲まれているので、動くことができない。それでもなお、色神は怪しい笑みを崩すことなく余裕の構えだ。

その不審な様子に梓は少しだけ眉を潜ませる。それでも尚攻撃は続ける。そうしなければ、捻死を使われてしまうからだ。

色神との距離を五歩まで縮めて、片手に一つずつに球体を構える。そして片方を顔面目がけて、片方を鳩尾目がけて放つ。

ガン、という音と共に色神も片手ずつそれぞれを防ぐ。足を踏み込み重力の円がない部分に踏みとどまる。二人は掴み合いの状態になりこう着状態が続く。

一歩も動くことはない。

梓は眼を強く光らせながら、色神の眼を獣のように睨みつける。

「うおりゃあああああああああああああああああああああああああああああ！」

叫び声を上げて球体の大きさをより一層大きくする。

その勢いに押されているのか、すこしずつだが色神の踏ん張っている足は、重力の円へと近づいてゆく。あの中に入れば自分の体重

はたちまち四十倍になり、内臓もつぶれて致命傷、或いは殺すことができる。

「若さのつていうのは損よね。その有り余る力に頼って、頭を使わない。もっとも、そうじゃなきゃ吊り合わないわよね」

そう言くと、色神は梓の両手を掴んだまま身体を低くする。そうして身をひるがえし、素早く梓の横に移動する。その流れのまま、梓の腰に蹴りを入れた。

梓は腰を中心にくの字になって真横に吹き飛ぶ。

吹き飛んだ身体は、道路を超えて反対側の歩道にあった電柱にぶつかるまで止まらなかった。

ベキベキという音を立てながら電柱に激突、そのまま下に落ちる。梓の来ていた黒装束は、所々がすり切れており、その下から血が地面へと流れ出ていく。

梓は虚ろな目を夕焼けに滲む空へと向けて、ピクリとも動かなかった。色神の周囲に合った重力の円も消失する。

「梓！おい、梓！しっかりしろ！」

俺は大声で呼びかけるが、反応する様子はない。

「さて、これで留めにしようかしら」

色神は屍まで後一步の梓の身体に向けて、両手の平を向けて、眼の光を強める。

「ふざけるな！」

俺は考えるよりも先に身体を動かした。梓が時間を稼いでくれたおかげで、右足は動かせるまでには回復していたのが良かった。

完治しきっていない足を引きずりながら、色神に向かって神器を向ける。

すると色神はその両手を、俺に向け直した。

『捻死』

ベキベキ、ゴキゴキ

俺は足の支えを急に失って前のめりに倒れる。手に持っていた神器は、地面に転がり落ちる。

右腕は外側に大きく反り、左腕は三百六十度横に回転。手首はねじ上げられている。全ての指の関節は反対方向へと九十度に曲がる。足は左足が立てに百八十度回転、右足は横方向に一回転。足首も内側に百八十度回転。

首は右方向へと曲がりきらない位まで、捻じられていく。

視界に移っていた、異形の光景は少しずつ視界から消えていく…。

「う…が…あ…あつ…」

激痛に叫びを上げなくなるが、首を絞めつけられているため、肺から空気が出ていかない。

アスファルトには関節から溢れ出る血によって、赤い池がどんどん広がっていく。

身体中から血液が抜けていくのと、肺にある空気が入れ替わらないので、ものすごい速さで視界が狭くなっていく。

「これはおかしい…」

ただの肉の塊へと変化していく様子を眺めながら、訝しげに首を傾げる。

「何で此処までの致命傷を負いながら、覚醒をおこさないのかしら。このままで死んでしまう…」

今までになかった焦りを顔に浮かべる。

「まさか、人違い…。それはないはず、あの蒼い刃を出現させていた神器を見る限り間違いない。だとしたらこれは…」

色神は構えていた両手を交差させる。

バキン

何かが外れる音がしたかと思うと、俺の身体中の関節がこ以上曲がることを止めていた。どうやら捻死を止めたようだ。

カツ、カツ、と色神の履いてたハイヒールが音を立てながら俺に近づいてくる。

ピシャっという音と共に、色神の姿が俺の視界はいる。俺は、その眼を睨みつけながら敵意を示すが、他には何もできない。ここまです関節を破壊されてしまえば、回復するのには数分では無理だろう。

「おかしいわね…。回復は始まっているけれど、何でこんな中途半端なのかしら。これでは私の捻死の方が先に止めを刺してしまうところだった…」

安堵の表情を浮かべる色神。

携帯電話を取り出し、電話番号を押す。

「色神妖偽よ。生上翔也を捕獲したわ。覚醒を促す様に致命傷を与えたはずなんだけれど、覚醒しないのよね…。これってどういうことかしら」

暫く色神は頷きながら、俺の方を見続ける。

「わかったわ。抑え込んでいる呪の類いを見つけて、破壊すれば良いのね」

携帯をしまい、俺の身体にしゃがみ込む。

「さて呪いはどこかしら」

俺の服に触れる。そして、ビリビリという音がしたかと思ったら、服が破かれていた。

「どこにあるのかしらね…。取り敢えず上半身の服は邪魔だから全て剥がそうかしら」

ビリビリという音を立てながら俺の来ていた服が破かれていく。

染みついていた血が周囲に飛び散る。

このまま、上半身を剥がしても無駄なはずだ。俺の呪は心臓に直接刻まれているからだ。その表面を見たところでわかるはずがない。それでもなお色神は、俺のボロボロの身体を丁寧に確認していく。「ここにもないのね。武神家の呪なのだから、中途半端な効果の物をかけるはずはない…。だから厭人さまが襲った時に、身体の表面に記された呪が傷ついて、半分解けていると考えただけ…。もしかして、内側にあるのかしら？」

ブツブツと独り言を言いながら、考え続ける色神。

誰か一人でも通って、この現場を見つけてくれる人はいないのだろうか…。

あれ、おかしい…

そういえばさつきから人がいない。俺、梓、色神だけだ。

これも何かしらの神器を使っているのだろうか。さつきからあれだけの轟音が鳴り響いているのにも関わらず、人が集まらないのはいくらなんでもおかしすぎる。

「ちよつと身体を開けてみようかしら。でもこれ以上やると本当に死んでしまうかもしれないし…難しいわね」

立ち上がり、何故か梓の方へと歩み寄っていく色神。意識を完全に失ってしまっている梓の襟首を、片手で持ち上げて俺の直ぐ横へと持ってくる。まさか…

「あら、良い眼をするじゃない。そうね、あなたなら知っているはずよ。どこに呪があるのか。それを教えなければ…」

色神はもう片方の手で、梓の頭に触れる。

「この子の頭が吹き飛ぶわよ」

怪しく微笑みながら、梓の頭をなでる。

それだけは…、それだけはだめだ。止めてくれ…。

「もっとも、私としてはこの子を殺したいのだけれど。もし殺しちやったら教えてくれないものね」

俺は首を何とか無理矢理曲げて、しゃべれるようにする。

「や、止める…。呪は…しん」

「余計な事を言うんじゃない、このクソガキ」

今まで聞いたことのない声が俺の鼓膜を震わせる。

「誰!？」

色神は梓を片手に持ち上げながら、声のした方を向く。俺も少しだけ曲がるようになった首で、そちらの方を向く。

「ったく、式神家の神器っていうのは、本当に優秀だねえ。この私を数分間も迷わせるとは、流石だよ。この“人扱い”の神器」

漆黒のような黒くて長い髪。来ているスーツは左右が中心で、綺麗に黒と赤で別れている。つけているネクタイや中のシャツもだ。

一目で見ただけで、異色な存在である事はわかる。

「ま、この神器は私がありがたく頂いてやろう。これから必要だし

な」

そう言つと長方形の不思議な文字の書かれた和紙を、ヒラヒラさせる。

しばらくすると、それは白い部分が朱から黒へ、黒から朱へと変化した続ける不思議な紙へと変貌した。

その色を見て、色神は急に顔色を変えた。どの色は、恐怖、驚嘆、そして憎悪が浮かんでいた。

「あなた…もしやその色…」

「おやあ、私たちの事を知っているのに、生きているのか。これは一体どういう事かね。多分あの糞野郎のせいだろうな。全く、あの馬鹿野郎はどうして私たちの掟を、中途半端にしか守らないのかね。ま、私もそれは一緒だけだな！」

キツと色神の事を睨みつける。そして瞳の色を変化させる。それは朱から黒へ、黒から朱へとグラデーションの波のように変わり続ける。

「そ、それ以上近づかない方が良いわよ。でなければこの子の命は無くなるわよ」

あからさまに動揺している色神は、梓の頭に再び手の平を近づける。その手はとても震えていた。さっきまでの余裕な笑みも一切ない。そのかわりに、汗がその額を濡らしていた。

さっきまで、優位に立っていたはずなのにこの変わりよう。あの女の人はそれだけ強いのだろうか。

「それはこの私に対する脅しのつもりか？笑わしてくれるじゃないか」

腹の底から大きな笑い声を、周囲に響かせる。

「どこのどいつかわからないが、お前はもう既に選択を間違えたんだよ。お前は、私たちの存在について実感として信じている、珍しい存在なんだぞ。だから真っ先に逃げるのが正解だった。ところがだ、あるうことかお前は私を脅迫するという、自殺行為を行った」「まさか、この子がどうなっても良いと思ってるの？」

色神は何とか言葉を発する。正直、あの女と相對するのは自分でも不本意だ。しかし、あいつらには恨みがある。だからこそ引けるに引けないのだ。勝機があるとすれば、人質のある今しかないのだ。ここで、あの女だけでも仕留める事ができれば、もう思い残すことはない。仇討にはならないが、贅沢は言つまい…。

「そんな人質なんていうのは、私には意味ないんだよ。単に一手間増やすだけで、私にとって何の枷にもなることはない。そうだな、もし私に枷を付けたければ神様でも連れてくるんだな！」

より一層、色神を睨みつける。しかし、その表情は楽しそうであらずうずしている。

「私はな、仕事は熱心にしない、面倒くさいからな。だがな、遊びには予断がないんだよ。それじゃ行くぜ！」

そう叫ぶと同時に姿を急に消した。

そして、既に色神の眼の間に降り、その拳を鳩尾へと向けて殴りこんだ。同時に、片手で持ち上げられていた梓奪い取った。

殴られた色神は空中を数秒間浮遊して、数十メートル先へと落ち、転がりながら止まった。

片腕で上半身を起こしながら、立ち上がろうとする。身に着けていた服は、所々が避けていた。

「く…がはっ」

口に滲んできた血液を全て吐き出す。

そして尚立ち上がる。

「ほう、ちよつとは私を楽しませてくれそうじゃなかよ。私の一撃でくたばらなかつただけでも、誉めてやろう。そして何をする気なんだろうねえ」

片手で梓を抱えながら笑っている。

色神は両手女の人に構え、眼を強く光らせる。

『捻死！』

女の人の周囲の空間が捻じれ始める。

しかし、身体は捻じれる事は無かった。むしろ、あろうことかそ

眼を大きく見開いて、俺達三人を睨みつけた。

「うわあああああああああああああああああああああ
あああああああ」

狂ったような叫び声をあげて、立ち上がる。まるでその姿は幽霊のようであり、妖怪じみていた。

「あーら、もしかして理性失っちゃったのかな。　　たたく面倒くさいな」

梓を一旦降ろそうと、地面に横たえる。

その時、いきなり叫び声が消えた。

「ああ？」

色神の所を見ると、そこには水色の浴衣を着ている二人が、色神を抱えていた。

そして、そのまま立ち去ってしまった…。

「くそつ、逃がしちゃったか。でも追いかけるには行かないからな畜生。取り敢えずてめえらを運ぶか」

右腕には梓、左腕には俺が抱えられる。

「んじゃ行くぜ」

一瞬自分の身に何が起こったのか分からなくなる。取り敢えず、大きなショック、所謂ブラックアウトして俺は意識を失ってしまった。

目を開ける。

身体中に、意識の液体が満たされてい浮くように、感覚が脳にまで上ってくる。身体が柔らかい布に挟まれている感覚。目の前には白い天井と蛍光灯。鼻から薬品の臭いが入ってきて、嗅覚を刺激する。耳には何の音も入ってくることはなく、鼓膜を刺激することはない。

身体を起こそうとする。しかし、思うように上がらない。何故ならば体中の関節という関節が固いもので覆われて、動かすことができないからだ。

声を出そうとする。

「あ、あ、あ…」

思うように声を出すことができない。何か膜が張られている感じで、かすれた音しかでない。

ベットを囲んでいたカーテンが開く音がする。誰かが中に入ってきたようだ。

「翔也くん意識戻ったみたいだね」

それは白衣を着た^{みそぎ}？ 塑稀さんだった。首には聴診器をぶら下げながら、俺の顔を覗いてくる。

「今はちよつと声帯が傷ついているから、ちゃんと声が出ないかもしれないけど、多分お昼頃には完治しているから大丈夫よ」

どうやら声が上手く出なかったのは声帯のせいらしい。

「しかし、流石蒼の永劫ね…。あんな大怪我を一晚で直してしまうなんてね。傷跡も残らないし。覚醒しなくて、いずれあなたに私は不要になるかもね。中途半端な呪の解け方に関わらず、ここまで成長するのは予想外よ」

俺の胸に聴診器をあてながら喋りつづける。

「そうそう、翔也くんは十五時間程意識を失っていたんだよ。現在

は四月二三日午前十時二十七分」

一晩意識を失っていたようだ。

そう言えば、此処で夜を明かしたのは二度目だな。一昨日の夜は幻覚で倒れ、昨日は身体中の関節を強引に曲げられ、倒れた。

痛みでは昨日のが一番ひどかったな…。まさかあそこまでの激痛を味わうことになるとは。

梓は大丈夫だったのだろうか。意識を失っただけで、死んでいないはずだ。でもあれだけの傷を負ったのだから、何か障害が残るかもしれないけれど。

「後梓ちゃんのことだけれど、かなり重症ね。最善は尽くしているけれど、いつ目覚めるかは不明。特に内臓の傷が酷いから慎重を要するの。でも死ぬことはないから大丈夫、安心して。糞馬鹿野郎を追いつ出して、そこで治療しているから」

糞馬鹿野郎とは恐らく式^{にしき}辰さんのことだろう。？塑稀さんは治療中の指示を効かない患者には、容赦がないようだ。怪我人を救う天使から、悪魔に変わるからな…。

「ただ…」

？塑稀さんは沈んだ顔をする。

「子どもはもう産めないかもしれない」

え…子どもが作れない…？

「当たり前が悪かった、としか言いようがないわね…。修復は試みるけど、どうなるかはわからない」

深いため息をつく。

恐らくその原因は、妖偽にあの腹を撫でられて吹き飛ばされた時だろう。あの一撃の傷はそんなに深かったのか。それにも関わらず、俺を守ろうと戦い続けた…。

妖偽…許さない…

「さて、ちよつと包帯とギブスを外して確認するね」

俺の右腕に巻かれていた包帯を外して行く。そこからギブスが現れた。ネジ回しでネジを一つずつはずして行く。

指、手首、腕の関節と確認していく。

「本当に治っているね。曲けても大丈夫そうだし、ちょっとやってみて」

俺は言われたとおりに、関節を曲げていく。違和感や痛みも無く、動かすことができた。完治しているようだ。

しかし、あれだけ滅茶苦茶に曲げられると、関節を動かすのが怖く感じるな…。

「うん、大丈夫ね」

満足そうに微笑みながら、身体中に巻いてあった包帯を次々と解いて行く。

「でも声帯なんて場所が、傷ついているのは不可解ね」

強引に首を曲げられた時にでも、傷ついたのだろうか。だとしたら首の骨が折れていたことになるのだが…。

？ 塑稀さんは外したギブスと包帯を片づけ始める。

「ちよつと立ち上がってみて」

俺はベットから出て立ち上がる。足の関節も通常運転の用だ。首を回してみると、止まるべきところでとまってくれた。百八十度まで無理矢理回転させられていたから、もしかやと思ったがこちらも通常運転のようだ。後は声だけか。

「あ、ああ、ああ…」

さつきよりは出るようになってきている。この分なら？ 塑稀さんに言われたとおりに、昼過ぎには声帯も通常運転になるだろう。

「うん、うん。大丈夫そうね。それじゃ二回目の退院おめでとう。ま医務室だけど」

椅子に座りコーヒを飲み始める。

「そう言えば翔也くんはもう決めたの、覚醒させるか否か」

正直深くまで考える時間がなかったから、まだ決断はしていない。首を横に振り、否定の意を示す。

「そつ、でも早めに決断はしておくことね。ただ私としては早死に知る位なら、永遠に生きた方が良いと思うよ」

早死にとは昨日の事をさしているのだろう。

昨日のは流石に危険だったか。もし色神が捻死を止めなければ、あのまま捻じれて殺されていただろう。

俺も早死にだけは御免被る。まだまだやり残していることは、沢山あるはずだ。

「んじゃ、部屋まで送り届けるからついてきて」

無言でうなずき、ついていく。

この光景も昨日見たばかりだな…

薄暗く先の見えない廊下を歩きながら、部屋に到着する。

「それじゃ、お大事に」

そう言つて？ 塑稀さんは、今来た方向へと戻っていった。

目の前を扉を開けて部屋の中に入る。誰もいない部屋。静まり返っている部屋。

昔は俺の部屋もこんな感じだったはずなのに、何故か寂しいものを感じる。明かりもつけないで、薄暗い部屋に座り込む。窓からは太陽の光が差し込んでくるが、その光は部屋の奥まで届くことはない。

考える

早死にするのと永遠に生きる。どちらを選択するべきなのだろうか。

昨日の戦いで俺は死にかけた。

命を失いかけた。

「無理だ…」

どっちを選択するなんて、わからない。そりゃ早くは死にたくないが、永遠に生きる事も嫌だ。

寂しい…

俺の側にいた人たちが次々と消えていく恐怖が、此処最近で一段と大きくなった。近くで大切な人が死にかけているのを見すぎたせいだろう。

できればあのような恐怖は知りたくなかった。今まで通り、怠け

ながらそんな世界とは隔絶された場所で生きて、死にたかった。

でも…もう遅い。

俺には二つに一つしかない。選ばないという三つ目の選択肢はあるが、それは応えていないだけだ。問題というのは解答者の事など顧みずに、襲ってくるものだ。だから決めるならば、今しかない。

俺は…

“永遠”を選ぶ

廃れた屋敷の一室。天井は穴があき、床も穴だらけ。

そんな一室に、色神妖偽しきがみようぎは腹部を包帯で巻かれて、寝ている。横には系器神佐矢しきがみさやが患部にさわりながら、治療をしている。その瞳はとても明るい黄緑色だ。

色神の瞼が動き、目を開く。

「もう暫くお待ちください。間もなく動けるようになります」

そんな言葉に、妖偽はやるせなさそうに視線を、穴のあいた天井へと向ける。

「私は…殺し損ねたのね…あの女を…」

復讐を果たせなかった。仇討をすることができなかった…。

彼を、彼を残酷なまでに殺した、あの家系の人間を。チャンスはあれしかなかったはずなのに。

「はい、せめて契約の詠唱でもしてから、能力の制御を外すべきでしたね。無理矢理制御を解除するものですから、危うく自滅しかけたですよ。それをあの二人が防いで回収したんです」

狐のお面の二人か。あいつらの助けを借りる事になったとは、私も落ちたものだ…。

「それで私はこうして醜態を晒す羽目になったのね…」

「そういう問題ではありません。今のあなたは、厭人あきこさまの願望を

叶えるのに必要な存在です。あなた一人の身体ではない事、そしてあなたが死ぬことの決定権はあなたにないことを自覚して下さい。」
わかつている、私の身体は私のものではない。でも、それは血によつて縛られているのは身体だけだ。心までは血で縛ることは出来ない。人形のように空っぽでいられるわけではない。

この憎しみだけは、消し去ることができない…

「さて、これで一様は治療が完了しました。包帯を取り替えますね」
腹部の傷口から手を話して、包帯を外し始める。

「あのさ、佐矢」

「はい」

妖偽の問いかけに短く答える。

「あんたって、憎んでいる人はいないのかしら？」

「いませんよ。基本的に私の家系は戦場へと赴くことはないので、誰かに殺された人はいません。後、救えない人にあつてやるせなくなつたこともありません。私は医者ですが、治療できないと判断した場合、容赦なく切り捨てます。でないと、助けられる人が助けられないので」

佐矢は明るい瞳をしながらも、その心は棘のように冷たい。人を助ける能力を持っていながら、人の存在については、道具程度にしか考えない。使える道具は何回も修理するが、修理できないほど壊れた道具は廃棄するのみ。

「私はね、武神家と分家の奴ら、特に神威家を恨んでいる」

「神威家ですか。あんな化物じみた家系を憎んでどうするのですか。勝ち目なんてありませんよ」

その通りだ。確かに勝ち目なんかは無い。でも戦わなければ心まで死んでしまう。この憎しみ、憎悪は消え去ることはない。

「それは今日身を持って経験した」

佐矢は包帯を解くのを一旦止めて、後の残つた傷口を覗く。

「ということは、この傷は神威の者に付けられたもののですか」

「その通りよ。一発殴られただけでこの傷。人間の身体って力さえ

あればあんなに吹き飛ぶものなのね」

身体の一点を殴っただけで、あそこまで吹き飛ばす馬鹿力。

それだけではなく、あの女は片手だけで、捻死を全て封じた。

あれが一番信じられなかった。本当に計画性もない、只の強大な暴力だ。あんな理不尽な強さの存在に彼は殺されたのか…。

「昔ね、と言ってももう十七年も前の話し何だけれど、私には好きな人がいたの。まだ六歳だった私よりも七歳年上の少年。彼はとても強く才能に恵まれて、周囲からとても期待されていた。そんな彼は驕ることなく事も無く、とても優しくかった。私には兄のように慕ってくれた。いつも遊んでくれて、神眼の力についても色々教えてくれたの」

妖偽は両手を持ち上げて、その手のひらを見つめる。

「私の象徴でもある捻死も彼に教えてもらった、捻曲の使い方からヒントを得て開発したものなの。だから今の私があるのは、彼のおかげ。」

「そうだったんですか」

「でも、彼は私を庇って死んだの。二千十三年に起きた全面戦争の時に、私の前に神威家の男が現れた。そいつは、私を殺そうと近づいてきた。ご丁寧の名前まで名乗ってね。もう駄目だと思った。その時に彼が助けてくれたの。その時私はとても嬉しかった。こんな弱かった私でも、助けてくれたのだから。でも…彼は神威に勝てなかった。彼は才能があると言われていても、まだたったの十三歳で、実戦で神威と戦うには経験がなさすぎた。そして、私の前で無残に殺された…」

「それで復讐というわけですね」

私は許さない。

武神と神威を。

神威水欺を絶対に許さない。

だが、今の私では神威を殺すことはできない。これからずっとあの、類い稀なる神眼を受け継いでいく家系には勝つことはできな

いだろう。

「だからと言って、一矢報いる事ができないのは、死んでも死にきれない…」

何か、何かできないだろうか。神威家、武神家に対して何かできないだろうか…。

「あの少年を奪う事がやはり良いと思いますよ」
いけがみしょうや

「生上翔也か」

「はい。彼らは神威まで出してあの少年を救いだしました。だからこそ、あの少年を我が式神家の手に渡れば大きな痛手になるはず」

確かに武神家は生上翔也に対して、かなり力を注いでいる。貴重な神成家の少女も使っていた。彼女の家系は二千十三年の戦争で、優秀な能力使いは全員死んでしまったのだ。よって彼女は現在の神成家における、唯一の分家としての役目を果たせる一人だ。

その彼女を護衛として使用している。

確かにこれはおかしい。

「それに、我々の手に渡れば、厭人さまの長き願望、式神家の研究がついに完成します」

「そういや、その研究っていうのは何なの？私にはよくわからないのだけれど」

佐矢は妖偽に新しい包帯を巻く作業を、一回止める。

「簡単に言えば、永遠の命です。式神家は何世代にもわたり神眼を研究し続け、永遠の命を求めました。ある時は神眼所持者の力を取り出そうとしたり、力がほとんど使われていない非所持者の力を回収したり…。しかし、いずれも上手くいきませんでした。しかも後者の研究をしている時に武神家に、研究内容を知られてしまい、あの戦争へと発展したのです」

永遠の命か…。

そんなものを手に入れてどうするのだろうか。どこかの悪役よろしく、世界征服でも企んでいるのだろうか。下らない…。

「式神家の研究は、研究することが目的です。それを使ってどうこ

うというのはありません。研究を行う事自体に、意味を見出しているのです」

それで人間一度は求める永遠の命を研究しているのか。

「そんなものために、あんな全世界をも巻き込んだ自爆をしたのか…」

「はい。科学技術の進歩を止めたのは、自分たちよりも研究を先取りされないためです。当時の科学技術の進歩レベルを考えると、我々よりも先に永遠の命の研究を達成できそうでしたからね」

何か色々聞いているうちに、馬鹿らしくなってきた。

永遠の命なんて言う曖昧なものに、どうしてあんな沢山の命をかけたのだろうか。命を賭して行うものとは思えない…。

「そこら辺は私も同じように思いますね。でも本家の指示に従うのは、我々分家の務めです」

そう、私は式神家分家六色神妖偽だ。本家の式神に逆らう事はできない。

「さて、一様はこれで動けるようになったかと思えます」

「そう、ありがとう」

妖偽は立ち上がり、外に出ていく。

「佐矢、これから運命というやつに逆らってみようと思うの」

「それはつまり、あの少年を殺すという事ですか」

「そうよ。佐矢の話を聞いてね、何か本家に従う事が馬鹿らしくなっちゃったの。だからね、あいつを殺すことによって終らせようと思うの」

「できると思っているのですか…」

妖偽はゆっくりと首を横に振る。

分家と本家がかつて血の契約で結ばれている。

それは、決して本家を裏切ることにはできない。取り消すことも決してできない。

「でも、いい加減血も薄れているはず。多少なりとも、逆らう事は出来るかもしれないわよ」

太陽が高く上っている青空を見上げる。心なしかとても澄んで見える。

「それじゃいつてくるわ」

「いつてらっしゃい」

佐矢はこれから運命に逆らおうとしている妖偽の背を見送った。

翔也は蒼い刃を出現させた神器を構えながら座っている。

心臓を狙うのに、服が邪魔なので上半身は裸だ。

「さて、どうしようか…」

刃は蒼く強い光を放ちながら明滅している。これからこの刃を自分の心臓へと突き刺すわけだが…。

「絶対痛いだろうな…」

内臓を、しかも身体の中で一番重要な部分であろう場所を、一突きに刺さなければならぬのだ。一回で成功しなければ、肺を貫通させることになって、痛いだけだ。一回で成功させたいところだ…。刃渡り一メートルもあるナイフを自分に向けて構える。

深呼吸を繰り返す。緊張のあまり、額から大粒の汗が出る。呼吸は荒い。

もう一度、永劫の覚醒、永遠の命を選択したのかを考える…。

俺は今まで守られているばかりだった。朱鳥や梓に命を賭けてまで、守ってもらった。そしてその二人は今、眠っている。朱鳥派いつ目覚めるのか未だにわからない。梓は大きな深手を負ってしまった、回復までに長期の時間がかかる。

このまま中途半端な状態では、何もできない。せめて命の失う事のない身体を手に入れる事により、自分も戦う。式神厭人を倒す

その前に、梓をあそこまで、子どもが産めなくなるまでした、妖

偽を倒さなくてはいけない。これは俺の決意だ。

決断だ！

俺は神器の刃を心臓へと狙いを定めて、突き刺す。
身体中に激痛が走る。

「ぐ……」

更に深く突き刺す。体を貫通させるまで突き刺す。
絶対に成功しなければならぬ。

身体から溢れ出た血液は、身体を伝って下の畳へと垂れていく。

「うおおおおおおおおお！」

サクツという音と共に、俺の背中ら刃が突き出る。瞬間視界が大きく揺らぐ。

視界には見たことのない文字が目一杯映る。それは眼から出ていき、身体中を包み込もうとしていく。数秒後には全身を、沢山の文字が駆け巡る。

持っていたナイフの柄から手が離れ、刃が消える。ただの短いナイフとなった神器は、ピチャッという音を立てて、俺の血の池に落ちる。

「あ……ぐ……クソッ……」

眼が熱い。

身体中を熱さが満たして行く。

そして蒼い光が部屋を包み込む。

「ぐ……う……」

何度も雄叫びをあげない様に堪え様とするが、眼の激痛は増すばかりで、耐えられそうにない。

「う……あ……あ……ああ……」

眼を手の平で覆う。

数秒後身体に変化が起き始める。心臓に付けられた傷が凄く速さで、閉じられていく。

「ぐあああああああああああああああああああああ
ああああああああああ」

ゆっくりと視界が開ける。

どうやら、激痛のあまり意識が飛んでしまったようだ。ゆっくりと身体を起こす。

「全く、あなたという人はどうして畳を汚すんですか」
 一いつの間にか式人さんが立っていた。

溜息をついて心底呆れているようだ。

「いえ、大丈夫です。にしても決断されたんですね」

「ならばあなたにはそれ相應の神器を渡しましょう。その様な式神の神器では心もとないでしょうし」

「これは、蒼き眼の所有者のための武器です。かつて此処の町に蒼き眼を持つ少年がいましてね。彼が置いて行つたものです。故に名前にはわかりませんが、重くも無く使いやすいはずですよ」

劍には何やら文字が刻まれていた。刃の色は薄い蒼色で長さは三十センチメートルくらいだろうか。片手で持てる大きさである。かなり扱いやすそうだ。

それをもう一度鞄にしまい、立ち上がる。

「復讐ですか？」

「はい」

「そうですか」

暫く間が空く。

「では、お気を付けて」

「はい」

俺は部屋を出て、武神家を後にした。

蒼く輝く眼を光らせながら日が沈んだ道を走る。できるだけ人目のつかないような場所を選びながら走り続ける。

前は人被いなんていう神器が使われていたが、今回も使われているかわからない。周りの人を巻き込むような場所は、避けておかなければならない。

そしたら戦う場所の問題だ。できるだけ広い方が良いかもしれない。何しろ、あの妖偽というやつは技はいとこで大きな威力を発揮する。開けていて、戦いやすい場所を探さなければ。

暫く走り続けて、待ちの外れを流れる川に辿り着く。土手に降りて、周りを伺ってみると人の姿はない。空を見上げると、夕焼けと夜の境目が表れていた。もうすぐ日が降りるので、殆どの人は帰っているのだろう。

式人^{いちひと}さんから受け取った剣を鞘から取り出す。果たして、神器としてどのような効果を発揮するのだろうか。右手で柄を握り、力をこめてみる。

すると剣の刃に描かれた文字が蒼く光り始める。その文字から光りが漏れでて、それは刃を全て飲み込む。瞬間、謎の文字が刃の周りを円を描くように回転し始めた。

勿論、何と書いてあるのかは読めない。ただ、その意味だけは何となくわかったような気がした。

この刃は永遠に折れる事がないということ

剣の使い方は、よくわからないけれども朱鳥とずっと一緒にいたから、基本的な立ち回りは何となくわかる。

そして、あの女は表れた。

土手の上に立ち、腹には痛々しく包帯を巻いている。けれどもその眼はすでに、変色していた。

「あなた、自分で覚醒させたのね…」

少し怪訝そうな顔をしながら俺を見つめる。

「そうだ、お前を倒すために俺は決断をした。全然俺らしくない判断だけだな」

剣の柄を更に強く握り締める。

「そう…、でもあなたには死んでもらう。これ以上は許さない…」

妖偽は両手を構える。捻死を使う気なのだろう。

「させるか！」

俺は捻死を使われる前に、駆けだす。あの攻撃は照準を合わせなければ、当てる事は難しいはずだ。

『捻死』

ゴリゴリという鈍い音と共に、後ろの地面が決れる。俺の後を追うようにそれは続いて行く。左右蛇行しながら、自分の身体に当たらない様に回避するがしつこく追跡してくる。

周囲を土煙が埋め尽くしていく。視覚が段々悪くなっていく。

しかし、俺にはわかる。妖偽が何処にいるのかが。

これが朱鳥の言っていたことが…

同じ神眼所持者には、能力が使われた痕跡がわかる。それはつまり、能力を現在行使している人物の居場所もおのずとわかるということだ。

感じる…妖偽が両手を構えて、俺をこの世から消そうとしている。

俺は茶色の視界を走りながら、倒す相手に向かう。

「そこだ！」

剣を突き出す。

手に何かを刺した感触は感じなかった。その変わりにその右手を掴まれる。

「そんな直線的だと、私は倒せないわよ」

妖偽は怪しく微笑む。

バキバキという音がして俺の右手は力なく、垂れる。

「クソッ！」

俺は妖偽の手から強引に、逃げて距離をとる。右手は剣をしつか

り掴んだまだだったが、手首が粉々に折れて、中で掻き回されているようだ。

この前までの俺だったら、此处でもう敗北は決定していただろう。でも今の俺には蒼き目、覚醒した永劫がある。

こんな変な眼のせいで俺の日常は崩れ去った。神眼なんていう人外な能力のせいで、こんなことになった。神眼、永劫とかいうわけわかない力のせいで俺は、変わることを強制された。

いい加減これまでの“つけ”を払ってもらおうじゃないか。

ちゃんと力を発揮しろよ。

『永劫 再生 ！』

俺の変色した蒼い瞳がより一層輝く。

同時に、粉々になっていた右手首が蒼い光りと文字によって覆われる。直ぐに骨は治った。何の異常も無い。

もう一度剣を構える。

「その力、やっぱり消さないと駄目ね…。危険すぎる」

容疑は眼を細めながら、俺の治癒した右手首を見る。

「覚醒したあなたの存在は、これから沢山の人を苦しめる事になる。だから此处で消えなさい」

「沢山の人を苦しめたのはお前らだろ。お前ら式神さえいなければ、こんなことにはならなかった」

翔也は妖偽に向かって走り続ける。頭の中にあるのは目の前の憎い敵を倒すことしかない。

妖偽は瞳の色をより一層濃くして、捻曲を発動し続ける。

走る翔也の身体は捻じれる。肩が外れる。腹に穴が開く。足が吹き飛ぶ。一つの捻曲が翔也の身体に触れることに、捻じ曲げ不気味な音と一緒に破壊していく。

しかし、それらは直ぐに元に戻る。外れた肩は蒼い光と共に治り、腹の穴は蒼い光と共にふさがり、吹き飛んだ足は蒼日光と共に再生する。

破壊、再生、破壊、再生、破壊、再生、破壊、再生

破壊しても意味のない身体に向かい、妖偽はひたすら捻曲を使い続ける。

破壊されても再生する翔也は、ひたすら走り続ける。

「きりがないわね……」

妖偽は額に汗を浮かべる。このままでは、此方の方が力先に尽きてしまう。やはり、捻死で一氣に行動を封じてあの眼を破壊しなければ。

神眼とは文字通り、眼にその全てが凝縮されている。覚醒して間も無い今ならば、もしかしたら眼を封じる事によって殺すことができるかもしれない……。

そもそもあいつが本当に死なないかどうかはわからない。

“永劫”というのは、今まで所持していた人は記録上一人しかいないとされている。その人物に関しても、所持しているという記録だけであり、その後どうなったのかはわかっていない。

実際、永遠の命とは言ってもそれは悪魔で推測だ。永劫の特徴として“無限の再生”や“決して死ぬことのない身体”という記録があるから、永劫の所持者は“永遠の命を得られる”という推測が成り立っている。その事実も誰によって記されたのかは、全く分かっていない。よって“永劫”というのは伝説上の神眼でしかなかった。ところが今目の前には、その神眼を所持していると言われている少年がいる。ちゃんと覚醒もしている。そして、さっき“無限の再生”を発揮した。

残るは“決して死ぬことのない身体”だ。

無限に再生するのだから、あいつにとっては自分の身体など使い捨てにできる。非常に戦いにくいが私の『捻死』さえ当たれば動きを封じられる。

妖偽は周囲一帯に捻曲をばら撒きながら、手の平を翔也に向ける。十分に距離を詰めてからでないかとまた避けられてしまう。翔也が接近してくるのを待つ。

間合いが近くなる……。

二十歩、十九歩、十八歩、十七歩、十六歩、十五歩、十四歩、十三歩、十二歩、十一歩、十歩…。

今だっ！

『捻死！』

一直線に走り続けていた翔也は避ける事ができない。

バキバキという音が響き渡る。関節という関節が勝手に曲がり始め、走れなくなり転倒する。身体はを転がりながら妖偽の足元まで転がり続ける。

妖偽は翔也の身体に向け、それが足元に来るまで両手を構え続けている。

「う…ぐあ…」

翔也は立ち上がれなくなる。捻死によ破壊と永劫による再生が身体の中で繰り返される。

かなり気持ち悪い。自分の身体で、一体何が起きているのかわからなくなる。

けれども、目の前の妖偽を殺そうと立ち上がるうとする。右手に握んだ蒼い光を放つ剣は絶対に離さない。

翔也の姿を見て妖偽は戦慄する…。

こいつは化物だ…

その手に捻死の力を最大限までに上げる。先ほどよりも破壊を速さが増え続ける。

翔也の周りには沢山の血が溢れ出していた。破壊が起きるたびに血が溢れ、再生が始まるたびに血は止まる。その繰り返しで今目の前で起きている。

「う…あ………」

翔也は短く声を上げる。再生が破壊に負け始めていた。

今から再生が始まって直ぐには立ち上がれない二違いはない。今こそその時が来た。

容疑は首が捻じれ、憎悪の視線を投げ続ける翔也の目に手を伸ばす。指先に捻死を全て集中させる。

『捻死！』

人の形に戻りつつあるそれに向かって攻撃を放つ。
バキンッ！

しかし、空間は歪まない。捻死はかき消されたのだ、あの意味のわからない文字によって…。

「なっ…！？」

自分の能力の効果が全くないことに驚く。今回はあの神成とは違い相殺されたわけではない。これは寧ろ神威のように強引に消された感覚に似ていた。力技で捻死を封じられた。

捻死を封じた文字の大群の中で、再生は行われる。その速さは増し、人の姿へと戻っていく。

「何で、何でっ…」

妖偽はひたすら捻死を放ち続けるが、全て封じられてしまう。

「何で何でっ…」

人の姿に戻った翔也は、より強く光る蒼く輝いている。

「お前じゃ俺には勝てないってことだよ」

剣を構える。

「お前のせいで梓は死にかけた。俺を守ろうとして梓はお前に殺されかけた。そしていま、大怪我をしてとても苦しんでいる。俺はお前がとても憎い」

妖偽を蒼い瞳で、射抜くような目つきで見る。

そして剣先を向けて宣言する。

「俺の力でお前を倒す」

そんな翔也の決意に、妖偽は笑い出す。

「あんたも大切な人を殺されていることを知っている。でも良いじゃない、まだ死んでいないんだから」

「え…」

翔也は思わず驚く。

「私はね、かつて武神家のやつらに大切な人を殺された」
冷たく、生気のない声で話し続ける。

「眼の前で私の大切な人は、私を守るために殺された。そうよ…あいつらが私の大切な人を奪った」

下を向いて、独り言のように言葉を続ける。

「私は…私は…」

妖偽から理性が消える…。

「お前を…ユルサナイ」

妖偽の眼が大きく見開かれる。

瞳の色は、朱から緑へ、緑から朱へと速いスピードで変化し続ける。

グシャ という音が響く。

「な!？」

気付くと左肩から腕までが、抉られたように消えていた。痛覚が直ぐに襲ってきたが、慌てて距離を取る。

『永劫 再生 ！』

俺は急いで腕を再生して、立ち回り方を考える。俺の身体には謎の文字が今もなお駆け廻り、それが妖偽からの攻撃を防いでいた。ところがさっきの攻撃はそれを打ち破り、俺の身体へと攻撃が届いた。

「何だあいつ…さっきとは全然違う」

その眼は狂気しかない。その眼で俺だけを見続ける。

キン

変な音が響いたので、慌てて剣で防御する。同時に剣へもの凄い衝撃が加わり後ろへ吹き飛ばされてしまう。地面を暫く転がり、そのまま立ち上がる。

キン

再び空気を切り裂くような高い音が響く。今度は両手で剣の柄を持ち、衝撃に耐える。

「ぐっ…」

手が痺れて危うく落としそうになった。剣は欠けることはなかったが、剣を取り巻いていた文字は少し減っているように感じた。

あの衝撃はいくらなんでも駄目だ。今は防げたとしても、幾つも食らって話にならない。止める方法はやっぱり直接攻撃しかないのだから、上手くいくだろうか…。

「ユルサナイ…ユルサナイ…ユルサナイ…ユルサナイ…ユルサナイ…ユルサナイ…ユルサナイ…ユルサナイ…ユルサナイ…ユルサナイ…ユルサナイ…ユルサナイ…ユルサナイ…ユルサナイ…ユルサナイ…ユルサナイ…」

ブツブツと眼を虚ろにしながら呟き続ける。その姿はまるで人形のようなものだ。

キン

不快な音が響き渡り鼓膜を震わす。その次には衝撃。その度に両手で構えた剣で防ぐが、そのたびに文字は減っていく。

何なんだこいつは、一体どうなってるんだ!?

このような妖偽の様子は確か、あの変なスーツを着た女の人と戦った時に見たような気がする…。

最も、あの時俺は死にかけていたため良く見る事ができなかった。その続きがこれなのだろうか。

「お前、そんなに恨んでいるのか。でもな、俺は死ぬわけにいいかないんだ。大切な人が何人もいるからな…。今度は俺があいつらを守る番だ」

俺は剣の構えを防御から攻撃に変化させる。この状態が続けば俺の方が先にやられてしまう。此方から攻撃を仕掛けるしかない。

「今止めを刺してやる!」

既に人ではない妖偽に向かって走る。

「ウア…オマエハ…シネ…」

キン キン キン と高い音が連続して鳴り響く。慌てて横に転がるように回避する。次に地面が揺れるような衝撃と土ぼこり

が舞いあがる。土ぼこりがなくなると、そこには巨大な穴が開いていた。

あまりの攻撃力に戦慄するが、それでも妖偽に向かって走り続ける。足を止めてしまつては身体が丸ごと消えてしまいかねない…。身体が分子レベルまで粉々にされても、再生できるかどうかの自信はない。

耳鳴りがしそうな高音が鳴り響くたびに、身体を転がしたり下がりながらして辛うじて回避していく。

グシヤ

急に身体のバランスが崩れて地面に倒れこんでしまう。

「しまった、左足が……」

俺の左足は膝上から消失していた。

永劫再生！

急いで回復するように集中するが、中々回復しない。そして突然身体に疲労感が襲う。どうやら力がかかり減ってきているようだ。

「くそっ！」

衝撃を剣で防ぎ、左足の回復を待つしかない。さつきから俺は身体の一部が欠けてしまうような、強すぎる攻撃を受け過ぎた。さつきなど死んだ状態から生き帰ったようなものだ。そんな状態でこれ以上戦い続けるのは難しいはず…。

「きや ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああああ」

突然眼の前から大きな悲鳴が上がる。同時に、耳鳴りのするよう
な高い音のなる攻撃もなくなっていた。

妖偽は眼を抑えながら崩れ落ちていく。

「そんな……そんな……私は……私は……」

泣き叫び続ける。一体何が起きたのだろうか……

「あ……あ……助けて……」

そう呟くとそのまま地面に倒れて動かなくなった。俺は回復した

左足で立ち上がり、恐る恐る確認しに行く。妖偽は全く動かない。
「何だこれ…」

妖偽の右肩には蒼い刻印が浮かんでいた。まるで何かの呪いのようだ。

「全く、この馬鹿は何やってんだろうな」

背後から声がする。その声は俺にとっては絶対にわすれられない声だった。

「式神！」

俺は剣を構えて、眼を強く光らせる。

「覚醒したのか。うんうん、順調なようだな」

満足そうに酷く歪んだ口で笑う。

「その調子だ。お前はそのまま憎悪を動力源として戦い続ける」

「お前は殺す！」

俺は目の敵に向かって走り出す。

ピンッ

「な…」

いきなり身体が動かなる。式神を見ると左手を高々と上げて、俺をみながらニヤニヤと笑っていた。酷く気持ち悪い笑い方だ…。

「そう焦るな。お前には更なる高みに行ってもらわなければ困るんだ」

「更なる高み…？」

「お前は未だに“蒼”のままだ。だからお前は死ぬことはある」

「どういうことだ。俺はさつき死にかけたがこの通り生きているぞ」

「そりゃ力がある限りな。だが力が尽きればお前はいずれ死ぬ。全く、神眼の研究が全く進んでない武神の野郎どもの声なんか信じるな。お前は今のままでは間違いなく死ぬ。だがな、それじゃ困るんだよ。お前はその永劫の能力を更にも上げてもらわなければ困る。“蒼”よりも高貴なる眼、“碧”の力を備えた“碧眼”にな」

「碧眼…」

「だからそれまで俺はお前を捕らえる事はしない。お前の周りの連

中に攻撃を仕掛け、お前の憎悪を膨らませていく」

酷く歪んだ笑みで笑い続ける事を止めない。

「そうだな、だから今日はこれまでとしよう。井言井、易絲易妖偽を運び出して研究室へと運んでおけ」

「はい」

「はい」

いつのまにか妖偽のそばには狐の仮面を被った、水色の浴衣を着た二人が立っていた。その二人は以前のように妖偽を担ぎあげるとどこかに消え去ってしまった。

「お前、研究室ってどういうことだ」

「簡単な話だ。あんな女はもう素材としか使えない。俺の家系は研究が大好きでな、それはきっちり受け継がれている」

楽しくて、愉快そうに笑う。

「分家じゃねえのかよ…」

「分家？そんなもの、ただの替えのきく道具に過ぎない。あいつらは人間じゃないんだ。倫理観とか道徳観など必要ない。俺に使われることに存在意義があるんだからな」

「てめえ…」

俺はより一層式神を睨みつける。

「そんな眼で見てどうすんだ。お前は今俺によって身体を拘束されている」

身体中が青白く光り始め、細い糸が浮かび上がる。

「それでな、ワイヤーってこんな使い方もできるんだぜ」

スッと左手を降ろす。

途端に俺の体中から鮮血が舞いあがった。そのまま俺は地面に向かって前のめりに倒れこむ。

「今日はこんなもんだ。次の機会には輪切りにしてやるよ」

酷く歪んだ笑みを浮かべながら、暗い闇の中へと消え去っていった。

ある畳が敷かれた一つの部屋に男と女が座っていた。

男は畳に相應しい着物を着ていたが、女の方は赤と黒のスーツを着ており見た目は派手だ。

「成る程ね…。これは一回ヨーロッパから、何人が戻した方が良いかもしれないな」

「はん、その必要はないよ。私から直接出向いてそいつらを殺してやるよ。この前も一人殺りそこねたからな」

「駄目だ。君は今回本家にいてくれ」

「私に戦うなと？」

「できるだけな。君達一族は動いただけで、ちよつとした自然災害に匹敵する被害がでるからね。そして君はさらに酷いからな」

「その私たちを意図もたやすく従えているあんたはどうなんだ？」

「私かい？君たちと契約を交わしたのは、私の先祖だよ。私はそれを父親から受け継いだだけだ」

「違うな。私の身体に刻まれている刻印が有効になるのは、私を従えている人物が私よりも最強であることが条件だ」

「私にそこまでの力はないよ」

「そりやそうだろうよ。今あんたは此处本家に巨大な結界を張っていて、且つ町中にまで神眼探索の範囲を広げて探している。後者に至つては、式人のやつに任せればいいのによ。そうした力を使っているにも関わらずまだまだ余裕そうな表情。あんたの身体は一体どうなってるんだか」

「大したことないさ。それに力に関しては朱鳥の方が私よりも高いぞ」

「あんたを超える力をあのお嬢さんは宿しているのか」

「楽しく愉快そうに笑つて」

「だから式神厭人しきがみあきとの操心術に耐えられたのか。普通の神眼所持者な

らば、耐える事は出来ても直ぐに精神崩壊を起こして狂人になるからな」

「あれに関しては寧ろ精神崩壊して狂人化した方が楽かもしれにないんだがな……」

「自分の娘さんの事だろう？ 娘に狂人になって欲しかったのかあんたは」

「あんな苦しんでいるのならば、狂人化した方がましということだよ。苦しんでいる子どもを見て悲しまない親はいないさ」

「それじゃ式神に何かしらの対処を考えているのか？ 今度こそ一族壊滅とか」

「そこまではまだ考えてない」
チツと舌打ちをする女。

「それじゃ暴れられないじゃんかよ」

「作戦を行うにしても、君を作戦として組み込むのは最後の最後だよ。君は核兵器のような最終手段だからな」

「それまで私に動くなと」

「勿論だ。式神は確かに倒されるべき家系だが、町一つを代償にしてまで滅ぼす価値はまだない」

「じゃその価値に値するようになれば、私が暴れる事が許されるというわけだな」

「そんなことにならないために、ヨーロッパから何名か呼び寄せようと思っているのだよ」

眼の前に置かれたお茶を飲む。今日は静岡産の緑茶のようだ。香りも大分良い。

「取り敢えずは攻撃でなく防御に徹する予定だ。そのために、神崎、神琥のどちらかには戻ってきてもらおうと考えてる」

「神崎はやめてくれ。あいつらは嫌いだ。あの見透かしたような眼と態度が全然気に入らないんだよ。本当に眼障りだ」

「それじゃ神崎にするか」

「この鬼畜野郎。私よりも強いのを良いことに好き勝手やってくれ

るじゃん」

顔面に血管を浮かべ、とても不愉快な表情をしている。普通の人なら思わず命乞いをしてしまいそんな恐怖を感じるが、話をしてい
る男はそんなのを全く気にしていない。

「彼らの能力は非常に役に立つからね」

「でも、二年前には全く使えなかっただろ」

「それはあの少年のせいだよ。彼らに罪はない。それは一番君が良
く知っている筈だ」

「そうだよ、あんたの言うとおりだ。本当にあの時は参った」
ハアとため息をつく。

「彼は元気にしているかな」

「知るか。私はあいつと縁を強引に切ったつもりだ」
「そうか」

頷きながらまた緑茶を飲む。

「あーそういやヨーロッパのやつのは正体はわかったのか？」

「姿を捕らえる事は出来ていないが、名前だけは式人が全力を尽く
して見つけてくれたよ」

「名前？そんな幾つも変えられる分身を見つけてどうすんだ」

「分身の一つでも、その一つの一部には変わりないよ。最も式人は真
名として報告したけどね」

「へー、それじゃその名前教えてもらおうじゃないか」

「まだ君には教えないよ。作戦に参加することになったら教えてあ
げるよ」

「あんた私のこと嫌いなのか」

睨みつけるような目つきになる女。

「いや、寧ろかわいいと思っっているけど」

「ケツ、気持ち悪い」

うんざりだともいうような表情で男を睨む。一方の男はそんな
様子を見て少しだけ笑う。

「それじゃそろそろ朱鳥の様子を見に行くかな」

「随分と熱心な親をしているな」

「？^{みそぎ}塑稀の話では来週の月曜日には目覚めるそつだ」

「それはおめでとさん」

「では、また明日来てくれ」

「了解」

二人は立ち上がり、それぞれが目指す部屋へと歩いて行った。

2 - 1 朱

二千三十年四月二十九日曜日

あの戦いからもうすぐで一週間が過ぎようとしていた。俺は未だに武神家に住み着いている。式神から狙われている状態で、自宅に戻るの是非常に危険であるという朱鳥あすかの父親である赭攀しづるさんの判断だ。確かにこのまま帰宅したら間違いなく襲われて俺の両親も死んでしまいかねない。ま、そもそも俺の両親は今日本にはいない。現在には武神家分家の人達の保護の下国外に脱出中だ。勿論これも赭攀さんの配慮である。さて日本から旅立つ時に母親からこんな一言を貰った。

「翔ちゃん頑張つてね。くれぐれも迷惑かけないようにね。それじゃバイバイ」

というとても軽い内容だった。息子の命が狙われているというのに随分と気楽なものである。そんな母親の様子に赭攀さんも軽く笑っていた。赭攀さんと俺の母親は幼馴染らしく「相変わらずだな」とのこと。そんなことがあの戦いの後直ぐに合ったものだから、さっきの戦いが現実ではなく夢なんじゃないかという変な勘違いをしそうになったのだった。

さて、武神家医務室に努める「医者言う事は絶対」がモットーである？みそぎ 塑稀さんによれば、本日朱鳥の体調が回復するらしい。武か神厭人けがみあきとによる操心術の被害をかなり受けてしまい眠り込んでいたのが完治したそうだ。本来こんな早く回復することはあり得ず一重に朱鳥の持つ素質、力の量が多かったことに大きく起因しているること。普通の人間だったら精神崩壊を起こして只の人形と化して、神眼所持者であっても狂人と化して強制拘束か縛って封印することになる。というわけで朱鳥は今日奇跡的な生還を遂げて医務室から晴れて退院（いや、この場合は退室が正しいのだろうか？）することになった。

それを出迎えるために俺は朝ちよつとだけ早く起きて医務室へと足を運ぶことにした。幼馴染である朱鳥と顔を合わせるのは久しぶりになる。

「取り敢えず殺されないと良いな…」

なんでも朱鳥は俺が蒼き眼・永劫を覚醒させることに大反対だったらしい。更には俺に神眼を所持していることも知らせず生きていて欲しかったそうだ。だから武神に対してあれ程、執念に燃えるように戦っていたのかもしれない。

そしてその苦労は身を結ぶことなかった。俺は神眼を所持していることを自覚するどころか、覚醒までしてしまったのだ。

しかし、此方から言わなければばれる事はないはずだ。瞳の色は今蒼色ではないし。神眼は瞳の色を変色させることによりその能力を発揮できる。俺の場合は能力を発揮することにより不死身に近い身体へ変化。ただ意識的に変えなくても、死にかけたら強制的に能力が発生するようだ。

“つまり朱鳥の前で死にかけれる事がなければ神眼を覚醒させてしまったことは知られないはず。”

うーむ…

恐らく、というよりも間違はなく無理に決まっている。そもそも神眼を覚醒しないと神器もともに使う事は出来ないから戦うことすらできない。戦わずにして生き残れるほど式神達との戦いは簡単ではないし、神器を使っても勝てるかどうか…。

どっちにしても俺は死ぬ羽目になるようだ。これはもう腹を決めて朱鳥に告白するしかない…。

そう言えば朱鳥については不審な事があったことを此処数日考えた中で気付いた。それは式神によって起きた目をくり抜かれた事件現場を巡ったことだ。啓祐^{はるひ}兄さんの話によれば、事件は東京都だけで起きたわけではなかった。あの日俺の家に来た兄さんは石川県の出張から帰ってきたと言っていた。

これは一体どういうことなのだろうか。ニュースを確認すればど

ちらが嘘を追っているのかは一目瞭然なのだがそれはまだ確認しておかないでおいた。この真相は朱鳥本人の口から聞いてみたい。

俺の予想では朱鳥の方に何かがあると思っている。兄さんは嘘を付く理由はないはずだ。となるとどうしても朱鳥を疑わざるを得ない。

とは言ったものの、あれが無駄足になったというだけで決して詰問するような事案でもなかったりする。だとしても理由は気になる。何故あのような大回りしたのか、確かに幾つかの現場の凄惨さを伺えば式神の暴れた後ではあるとは思っただけれど…。

そんな感じで俺は此処数日は心中納まらない状態が続いていたのであった。

そして最近やっと行き方を覚えた医務室へと到着。この場所は何回も行ったり来たりしたのでいつの間にか自然と覚えていた。

こんな短期間に怪我をするってどうなのだろう…

此処数週間で負った怪我は恐らく一般人における一生分以上のだろう。というか二人分の命は消費しているかもしれない。この身体じゃなかったら死んでいたわけだ。生きていることを喜ぶべきなのか、死ななかったことを悲しむべきなのか悩むところ。

ただこの身体になって世界観が少し変わった。前までは何となく死の恐怖が頭の中にちらついていたが今はそれが無い。俺の人間としての最後の敵は死ではなくなった。

俺にとつての最後の敵は“人を失う悲しみ”だ。

死の恐怖とどちらが良いのかはわからない。それにしてもまだその時ではないのだから今から悩んでも仕方ないだろう。その時はその時だ。悩んでいても何ともならないものは悩む意味がない。というより面倒くさいな。

だからこの点について保留にすることに決めた。俺の惰性スキル発動である。

そして薄暗い廊下を歩き続けて医務室へと到着。少しだけ緊張する。取り敢えず何から切り出せばよいのかを考える。俺の身体のこと

とかそれとも嘘の場所へと連れ回し続けた理由。
どするか…

今まで働かせてこなかった頭を使って考える。

ガチャ

ん？

そうして扉の前に建っていると医務室の扉がゆつくりと開いた。

「？^{みそぎ}塑稀さんがとうございました」

「気にしないでいいよ。これが私の仕事なんだから。それに私も貴重な治療方法を発見できたし。やっぱり此処にしていると初見の珍しい症状を見る事ができて良いね」

「そ、そうですか。それは良かったです。これからよろしく願いしますね」

「何言っているの。それは私の言うセリフよ。此処から追い出さないでね」

「それは勿論です。こんな治療を発見して実行できるのは？塑稀さんくらいですから」

「おほめの言葉ありがとう。それじゃ身体に気を付けてね、お嬢様」

「お嬢様だなんて止めて下さい。朱鳥で良いつて何回言えば良いんですか」

「これは仕事上のけじめなの。だからお嬢様と呼んでいるのよ」

「それじゃ私が頭首になったらそんな風に呼ばせない決まりを最初に作ろうかな」

「それは面白いかもね」

二人の笑い声が開きかけている扉の中から聞こえる。

「それじゃ梓のことよろしくお願いします」

「大丈夫よ、私に任せなさい。取り敢えず山場はもう越えたからね。後は慎重にやっていれば何の問題も無いよ」

そして少ししか開いていなかった扉が大きく開かれた。

黒くまっすぐのびた髪の毛の朱鳥と眼が会う。朱鳥の表情が固まる。俺も自分の表情が固まっている事に気付く。顔の筋肉をどのよ

うに動かせばよいのか迷う。まるで彫像のようだ。

そして最初に動いたのは朱鳥の口だった。

「げ、元気だった…？」

医務室の扉が閉まる。朱鳥は目を伏せながら僕に話しかける。

「私大事な時に側にいていられなくてごめんね。私がもつとしつかりしていれば…」

「それは違う。しっかりしなきゃいけなかったのは俺だ。俺が無力だったから朱鳥が無理をしなければならなかったんだ」

俺は声を強くして言う。朱鳥は悪く思うところはどこにもない。寧ろ俺を庇つてとても大きな傷を負ったのだ。悪く思っただけなら俺の方だ。

「そんなことない。翔也は普通の人のままで良いんだよ。無力なままで良いんだよ。特別になる必要はないよ。」

「特別になる必要はないってどういうことだよ…」

「うんうん。特別っていう表現はおかしかったね。“異常”っていう言葉が一番適切かな。私たち神眼所持者っていうのは異常なんだよ。普通じゃない。普通じゃないっていうのは辛いんだよ」

いつもの朱鳥と違い声の力は弱まっていた。

「だから異常であることは私だけで十分なの。異常な力をもっていて、異常な能力を持っていて、人じゃない存在。神眼所持者にはならない方が幸せなはずなの。普通の幸せが一番のはずなんだよ…」

確かに神眼というのは人外の力だ。だから特別な能力であう一方、異常な力ともいえる。特別と異常は表裏一体、同じことだ。

「でもその異常にならなければ守れないものだってあるだろ。お前は守られる側の気持ちになったことあるのか」

「それは…」

押し黙る朱鳥。恐らく朱鳥には命をかけて守られた経験はない。

武神家現頭首の赭攀さんよりも力を所持している。それだけの能力があれば命をかけてまで守られるという事はなかったはずだ。

「だから俺は守られることは止めた。今度は俺がお前を守る」

「その気持ちはとても嬉しいよ。でも…」

暫く口をつぐむ。そしてゆっくりと顔を上げた。

その眼の中にある瞳は朱色に変わっていた。そして目に涙を浮かべる。

「だからって、覚醒しちゃったのは悲しいよ…」

朱色の瞳から水色の涙を零す。

そうだ、朱鳥には俺が神眼所持者として覚醒したことを隠し通すことは無理なことだ。何故ならば朱鳥には誰が力を持っているかわかるから…。能力の種類まではわからなくとも神眼所持者として力を持っているのか、またその力がどのように利用されたかの痕跡がわかると言っていた。

そして俺の身体には神眼、蒼き眼の永劫の能力によって治癒された跡が身体中にあるはず。そうすれば力が使われた痕跡が身体中にある。あれこれ悩んだけれど隠し通せるはずがなかったのだ。

「ごめんね、私のせいで大きな枷を背負うことさせちゃって。孤独の悲しみを知る苦しみを与えることになっちゃってごめん」

涙を流しながら俺に謝罪の言葉を吐き続ける。

別に朱鳥は何も悪くないのに。一番の原因は式神しきがみあきと厭人が俺の眼を狙っているからだ。それが原因で朱鳥、式晨にしきさん、梓が倒れることになった。梓に至っては重症だ。

「だからお前は悪くない。悪いのは式神だ。だから謝らないでくれ」
「そんなこと言っても…。だって死ぬことが許されないんだよ」

「いや、式神に言わせれば今の俺ならば死ぬことはできるみたいだ」
一週間近く前にあいつと会った時に言っていた。蒼き眼の永劫は確かにとても膨大な治癒力は持っている。ただしそれは力がある限りだ。力さえ無くなってしまえば俺は死ぬことができる。

「でもそれって生き地獄じゃない。翔也にはわからないと思うけど、翔也の力って私以上にあるんだよ」

「え…そうなのか？」

「うん。今でも私以上の力を身体に秘めている。多分使っても使っ

ても、直ぐに回復するんだと思う。私以上に力を持っている神眼所持者は初めて見たよ。だから死ぬのにとっても苦労すると思う。それこそ、ものすごい苦しんでもがきながら死ぬしか方法はないんじゃないかな……」

「そっか……。でも、それでも俺はまだ死ぬことができるじゃんか。何の問題も無いよ。それに孤独の悲しみたつてそれは当分先の話だろ。だって俺はまだ十七歳にもなっていないんだぞ？ 朱鳥だってそうだ。人生まだまだ先は長いんだからさ」

俺たちの人生はまだまだ長い。まだ二十年も生きていないんだ。平均寿命から行っても今の五倍以上は生きることができる。

それなのに死ぬときの事を考えてどうするというのが。そんなのはその時になって考えればよい。大切なのは今を前向きに生きることだ。今から後ろ向きになる必要性はどこにもない。

「やっぱり翔也は前向きだね。私も見習わなきゃ」

そう言いながら涙でぬれた顔を手で拭く。

「でもやっぱり翔也が覚醒しちゃったのは悲しいかな。私としてはもうちょつと後になってから決断してほしかったんだよね。結構人生に関わることだし。私だって翔也の立場だったらどうしたら良いのか全然わからないもん」

「それは仕方ないよ。こんな状況何だからさ」

「そっか……」

少しだけ笑いながら呟く。朱鳥としてはまだ納得しきれていないようだ。もうこうなつてしまった以上仕方のないこと。諦めるしかない。

「ところでさ聞きたいことがあるんだけど」

「ん、なに？」

あの式神の殺害現場を歩き回った時だ。どうして殺害現場ではない場所も歩き回ったのだろうか。

「私は啓祐さんから送られたメールに書いてある場所を回っただけなんだけど……」

「でも式神の事件は日本中で起きてたはずだろ？」

「そう言えばそうよね…。どうしてなんだろう？」

そう言いながら朱鳥は携帯を取り出して操作し始める。啓祐さんから送られてきたメールを探しているのだろう。

「んーと…って何か凄い沢山のメールが来てる」

「お見舞いメールか？」

「そうみたい。後で返信しなきゃ」

朱鳥派学校の中でもかなり人望のある生徒だ。他の生徒からの相談に応じることもよくあったらしい。そこら辺は世話焼きの性格が大きく影響しているのだろう。俺のことについてもかなり面倒を見てくれた。迷惑に思う事も多々あったが…。

「あ、あったこれこれ」

そう言っ て朱鳥は俺に啓祐兄さんから届いたメールを見せてきた。

「うーん…確かにこの町近辺（まちのきりばた）の住所ばかりだな」

メールの住所はこの鏡樓市近辺（かがらじ）ばかりだった。これは一体どういうことなのだろうか…。

「そう言えばその住所では神器だっけか、を使った痕跡は感じ取れたんだろ？」

「そうなんだけど…」

少しだけ思案する朱鳥。

「実はね、翔也の力が強くって完璧に感じ取れたわけじゃないんだよ」

「え？」

力ってまだその時俺は覚醒していなかったはずなのだが。

「力っていうのは強ければ強いほど覚醒しなくても周りに影響を与えるのよ。だから翔也はそこに立っているだけで神眼所持者としての力を周囲にばら撒いているの。だからといって何か実害的な影響があるわけじゃないの」

「でも俺のせいで痕跡を感じ取ることとはできなかったんだろ？」

「うん、でもそれは仕方ないかな。力が強いっていのうは先天的な

ものが大きく影響しているし。でも神器の力が感じ取れなかったわけじゃない。どの場所も神器は使われていた。けれど全て同じ力だったかどうかは自信が持てないかな…」

つまりどの場所も神器が使われた痕跡はあった。しかし、全ての場所において同じ神器が使われていたかどうかがわからなかったということか。

「待てよ、それだと式神以外の神眼所持者が人殺しをしたってことなのか？」

「それはあるのかもしれない…。けど式神の分家ということもあるだろうし」

確かに分家のやつらが殺した可能性もなくはない。だとすれば啓祐さんの送ってきた住所は式神関連の人殺しが行われた場所ということになるのだろうか。

「どちらにせよ啓祐兄さんに確認した方が良いのかもしれない」

「そうね。それじゃ後で連絡取らない？」

「それなんだけれど…」

実はあれ以来啓祐兄さんと連絡がまだとれていないのだ。この件について質問をしようと思って何度か携帯に連絡を入れた。しかし全く連絡がつかない。行方に関して母親にも聞いたのだが知らなかった。

「それじゃ探してみるしかないわね」

「でもどうやって探せばいいんだ？ 鏡楼市内にいるのならともかく東京都もなれば難しいぞ」

「別に私たちが探す必要はないわ。式人^{いちと}に頼みましょう」

確かに式人さんなら適任だろう。あの人ならば一日しないうちに見つけることができるのかもしれない。俺との仲もこの前まで険悪だった。あの日俺に蒼き眼の所持者向けの武器をくれたのは式人さんだった。今ならば俺の従兄を探す頼みも聞いてくれるだろう。

「ん、何心配してるの？ 式人は私の付き人なのよ」

「そつえばそうだったな…」

式人さんは武神家に関する情報を全て管理、調査する仕事を行っている。それと同時に朱鳥の付き人でもあるのだ。

付き人である以上は朱鳥の指示に従わなければならないのだろう。取り合えず啓祐兄さんに関することはこれでなんとかなりそうだ。

「さて、それじゃ行きましょ」

そう言うのと薄暗い廊下を歩き始めた。

「久しぶりにベットから起きたけど、やっぱり筋肉落ちてるのかな」歩きながら腕や足の方を触って確認する。

「そりゃあれだけ眠っていればなくなるだろ」

「そうだよ。後でお父さんに退院の挨拶序に稽古お願いしようかな」

「真剣で稽古するやつか？」

「そうだよ、翔也も見ていく？多分役に立つと思うよ。でも巻き込まれない様に注意してね」

「あ、うん」

確か道場の床を炭にしまったとか聞いたような気がする。いくら死なない身体とはいえ朱鳥の火に燃やされたらたまったものじゃないな。朱鳥の火だけは勘弁だ。

暫く歩いて木製の扉の前で立ち止まり、朱鳥はその扉に向かって二回ノックする。直ぐに中から返事が聞えた。

「なんででしょうか？」

「朱鳥です」

ガチャリとドアノブが回る音がして扉が開いた。

「お嬢様、退院なされたんですか。おめでとうございます。どうぞ中へお入りください。翔也さんもどうぞ」

朱鳥から中へ入っていき、俺もその後が続いた。部屋の中は沢山の本だながあった。その中にはファイルが所狭しと収められたいた。鍵付きの引き出しもたくさんある。どうやら貴重な情報はその中にしまっているのだろう。床は俺の部屋と違い畳ではなく木でできていた。

「どうぞその椅子へお座り下さい」

部屋のある机に案内される。そこに座り早速話しを始めた。

「お嬢様、ご体調はどうでしょうか」

「うん、問題ないわよ。それでね、今日は頼みがあつて来たの」

「はい、何なりと申して下さい」

そう言つて胸のポケットからメモを取り出した。

2 - 2 朱と赭

「探してほしい人がいるの」

朱鳥は手帳を手に持った式人さんに話しかける。

「一体どなたでしょうか？」

「翔也の従兄の啓祐さん。ちょっと聞きたいことがあるのだけれど、連絡がとれないみたいなの」

「彼の従兄ですか？」

眼を細めて俺の方を見る。

「彼については何度か聞いたことがあります。何でも十七年前の事件を調べているそうですね」

「はい。雑誌記者になったのもの情報収集するためみたいなんです」
俺の従兄である啓祐兄さんは十七年前世界中を巻き込んだ事件の真相を追っている。その事件とは太平洋上の中心でおきた謎の爆発のことだ。それは只の爆発ではなかった。世界中の科学技術の発展が一切静止、世界は変わってしまったのだ。その原因は公表されることはなかった。

因みのその真相について兄さんよりも俺が先に知ることとなった。原因は非道な人体実験を行っていた式神家を武神家が攻撃し粛清しようとした。しかし式神家が自爆。それも只の自爆ではなく特殊な細工がされていた。それが理由で科学技術の発展を強制的に静止させられたのだった。

そのことについても教えるために連絡をしたのだが、繋がることはない。行方が分からないのだ。

「いつ頃から連絡が取れないことがわかったのですか？」

メモにペンを走らせながら俺に質問を投げかける。

「連絡を取ろうと思ったのが四日前位です」

「それ以前に会ったのはいつですか？」

確か最後に会ったのは四月十七日だった。今日は四月三十日だか

ら1週間以上前になるのか。

「今から十三日前です」

「そうですか。あの日の三日前にあたるのですね」

鋭い目つきで俺のことを睨みつける。そんな表情に思わずひるんでしまう。

そう、四月十七日の三日後に朱鳥は式神に重傷を負わされてしまった。その一件のせいで式人さんにはかなり嫌われていた。でもこの前俺のために武器を渡してくれたりしたためにつきり許されていると思っていたのだが…。

どうやら思い違いのようだった…

「式人、今はその件については関係ないでしょ」

張り詰めていた空気を切り裂くように朱鳥が口を開く。

「そうでしたね。お嬢様も復帰したようですし取り敢えず今は保留にしておきましょう」

「保留なのか…」

保留にするという事はいずれきっちりとそれなりのケジメをつけることになるのだろうか…。

「ではその従兄の方を探せばよいのですね」

メモに次々と文字を書き連ねていく。

「うん、よろしく。式神の件で今は忙しいと思うけど」

「式神に関しては大丈夫です。式具を無理矢理叩き起こして監視に当たらせています」

式神については今特に動きがないようだ。現在日本では眼狩りについても沈静化している。

ただ逆に言えば居場所を掴むことができていないため、広く浅い監視しかすることしかできない。満足と言える監視ではないが取り敢えずは仕方のないこと。

「寧ろ問題は欧州での眼狩りです。こちらに関しては全然成果が得られていないのです」

眼狩り事件。

欧州では眼をくり抜かれるだけではなく、必ず四肢が切断され死体は無残な姿で発見される。日本の眼狩りよりも前から起きてヨーロッパを震撼させた。

そして、今なおそれは続いているようだ。

「犯人の名前だけは掴むことができました。但し本名かどうかはつきりしていません。私は本名と確信しているのですが、直感ではないので信用に欠けています。一様分家の方達が何名か向かったのですがあまり功を奏していません。向こうの神眼所持者達との連携も難しく依然苦戦している状況です。この前も姿を捕らえることができた程度で戦闘にすら突入できていないようです」

ヨーロッパで暴れている敵もかなり厄介のようだ。行動範囲は日本の何倍も広いせいか集中的に戦力を固められない。分散させるしかないのだ。

「だから式辰が一人で頑張っているのね…。でもこのままじゃ此方も危ないんじゃないの？」

ヨーロッパも危機的状況なのは確かだ。しかしこの日本でも式神を中心とした事件が起きている。しっかりとした戦力で取り組む必要があるのだが…。

「それに関しては神威家の人間もいるので恐らく大丈夫かと。攻撃されることはあっても負けることはないでしょう」

「え、まだあの処にいるの？」

口を開けて驚く朱鳥。確かに戦力として高い神威家の人をヨーロッパに派遣しないのはおかしい。しかも此処本家にいるということはその一族の中でも一、二位を争う実力者のはず。

「それに関しては赭攀さまのご判断です。何でも神威では力が高すぎて危ないとか」

「確かにあの国なら国一個は地図から消しちゃうかもしれないね…」
納得言ったように朱鳥は頷く。

神威家の人々が飛び抜けて強いことは知っていたのだが、まさか国一つ消すほどの強さとは…。核爆弾よりも厄介な存在のようだ。

そしてその人に俺は依然救われている…

その時も目の前で理不尽な暴力が行われているのを見たが、あれは片鱗に過ぎないのか。

「欧州の案件に関しては仕方ないでしょう。今は最善を尽くして取り組んでいますのでこれ以上は何もできません。だから緒鱒さまは先に式神の件を片付けようと考えているようです。それにあたり一人だけ欧州から呼び戻す予定だそうです」

「誰が戻ってくるの？」

「かんざきみき神崎末樹を此方へ呼び戻します」

その名前を聞いた途端に、先ほどよりも驚いた表情を見せる朱鳥。「何でまた神崎の人を。しかも末樹って…。あの人はヨーロッパに居続けるべきなんじゃないの？」

「私も思ったのですが、逆に“未来視”の力で早期決着を考えているのではないでしょうか」

未来視？未来視ってつまり、未来を見る事の出来る能力なのだろうか。

「朱鳥、未来視ってそれは未来が見えるのか？」

「そうよ。読んで字のごとく“未来を視ることのできる能力”よ。だから驚いたの。殺人を食い止めるには結構必要な能力よ。先回りもできるだろうし…」

「ところが上手くいつてないのですよ」

「え、どういうこと？」

未来視というのは確かに未来を見ることが可能だ。但し限界が勿論ある。それは時間、対象、空間の三つだそうだ。例としては一カ月先まで見ることが出来るが、自分のいる半径一km以内のみとか。これは人によって変化するらしい。

「神崎末樹に関して言えば時間、空間、対象について申し分はありません。しかしそれ以上に欧州の敵は動くのです。だから未来視も役には立っているのですが十分な仕事ができているわけではありません」

「だから日本に呼び戻すと…」

「はい。というわけで明日此方へ戻ってくる予定だそうです。したがって明日からお嬢様と君に神崎未樹を加えた三人で行動をしていただきたいのです」

「え…あ、うん、わかったわ…」

かなり歯切れが悪い様子だ。

「何か不都合があるのか？」

「んーと苦手なんだよ。一緒にいると見透かされている感じがしてね。未来視だから当然なんだろうけど」

自分に見えていないものが見えている人が隣にいる。それは不気味かもしれない。君が悪いというか…。でもそれは本人が望んで身に付いた力ではなかったはずだから仕方ないのだろうけど。

「そっか。確かに未来が視えているやつと一緒にいるのは気分が悪いかもな」

うん、と首を縦ふり頷く。

「特にあの人が嫌っているのよ。それが一番心配ね」

「そうですね。確かにそれは心配ですね」

朱鳥と式人さんが腕を組み、眉間に皺を寄せ考え込む。

「あの人って？」

「この家に今いる神威の人。あの人は未樹かなり毛嫌いしているのよね。明日さっそく家の一部が更地になるかもしれないわね…」

溜息をついて頂垂れる朱鳥。心配の種が増えたようだ。

「そうなたら翔也、悪いけど身体を張って止めてくれる？」

「え……………」

あの国一つ消してしまうかもしれない人の攻撃を体で受け止めると…？確かに体を張って生きたまま止められるのは俺だけなのかもしれないが。いや、それ以前にさっきまで俺に対していつていたことと全然真逆じゃないか！？

「冗談よ」

「冗談かよっ！冗談になってなかったぞ、おい」

何故か爆笑している飛鳥。俺はおかしい反応をした覚えは一つもないのだけれど。

「何か久しぶりに笑ったなー。今までずっと寝てたし当たり前か」
笑っていた余韻を残したまま朱鳥は話を続ける。

「勿論翔也にはそんな危険なことさせない。私とお父さんが全力で止めるわよ。それでも本家の人間なんだから無条件で言うことを聞いてくれるよ。心配しないで」

そっか。確かに分家ならば本家の人間のいうことは必ず聞かなければならない。

「それで式人、明日の何時くらいに日本に到着するの？」

式人さんは手帳を何ページか捲る。

「明日の午前11時くらいです。できればお嬢様も一緒に来ていただきたい。まだ病床から上がったばかりだと思うのですが、大丈夫でしょうか」

「ん、私はこの通り体調は問題ないから大丈夫よ。でも、明日って平日になるから学校じゃない？」

あ、そっか。

式人さんと式神が戦闘を行ったのが原因で現在休校中であることを朱鳥走らないのか。

「明日はまだ休校だと思うよ。ついこの間式式さんと式神が戦闘を行ったせいで今滅茶苦茶なんだ」

え…、と朱鳥は間の抜けた顔になった。

「私が寝ている間にそんなことになってたの？」

「うん。学校が屋上から二階分は殆ど原型を留めてないよ。だから暫く休校になるんだって。一様近辺にある高校へ一時的な転校をするって話になっているけれどまだ本決まりじゃないみたい」

「なるほど…。でもその分式神を見つけるための時間を作れるわね」
目つきを鋭くさせて考え込む。

確かにこの暇な時間を式神の探索のために使うことが可能だ。

「そうだな、折角だからこの時間を有効活用しようか。なるべく早

く決着をつけなければヨーロッパで起きている事件を片づけること
できないからな」

ヨーロッパで起きている眼狩りも早めに対応しなければ被害者が
増えていってしまう。しかも被害がかなり大きいようだ。

「いえ、欧州の件に関してお嬢様と君が考える必要はないです。赭
攣さまはあなた達を欧州へと向かわせることは一切考えていないよ
うです。したがって今は式神の件について取り組んでいただきたい」

「いや、でも…」

「一つ一つ確実に案件を消化していくことが大切です。まずは式神
を倒しましょう」

「そうね。ヨーロッパの件に関しては一刻も早く私も向かって助け
たいけどまずは式神を片づけないと。あいつの目的は翔也の眼。そ
のために色々な手を使ってくるでしょうね。降りかかる火の粉は全
て私が飲み込む。よしっ、それじゃお父さんの所に行って久しぶり
に稽古してもらおうと」

座っていた席から立ち上がり扉へと歩き出す。俺も同時に席から
立ち上がり扉へと向かう。

「では、明日時間になりましたらお迎えに行きます。」

「わかったわ。それじゃまた明日」

式人さんの部屋から出て俺たちは赭攣さんの所へと向かった。

朱鳥たけがみしづるの父親であり十の神の名を持つ分家を従える本家武神家頭首、
武神赭攣さん。

その力は朱鳥のそれに劣るらしいけれど、神眼の扱い方がとても
優れているらしい。だから力で朱鳥に負けても技術力で朱鳥を遙か
に上回ることができるそうだ。

というようなことを先ほど朱鳥から聞いたばかりで今、道場にい
る。先ほど赭攣さんに会うために部屋に向かったのだが会うことが

できなかった。そこで道場に向かったら案の定いたわけだ。

赭攣さんは道場の奥に立ち朱鳥は入口に立っている。

「お父さん、心配かけてごめんね」

「大丈夫だ。色々あったみたいだがあのようなことじゃ朱鳥は倒れないだろう」

「勿論よ。おかげで苦労したけれど生きていることに感謝しなくちゃね」

「そうだな」

親子久しぶりの対面。道場という場に合わない穏やかな空気が満ちている。

「それじゃ久しぶりに」

「体もなまっているだろう。今日は手加減しようか？」

「そんなもの必要ないわよ」

「だろうな」

赭攣さんは静かにほほ笑む。

次の瞬間さつきまで満ちていた穏やかな空気が急変。朱鳥と赭攣さんの瞳は燃えるような朱色へと変化していた。

道場にふさわしい殺気が空気を支配する。あまりの殺気に俺は思わず後ずさりしてしまう。

一方の朱鳥はそんなさつきにも慣れていているようでさつきと何も変わっていないかった。寧ろ赭攣さんの殺気に負けまいと朱鳥も殺気を放っていた。

「行くわよ」

朱鳥は右手を振る。すると細長い炎が現れ中から刀が出てきた。

これは確か朱鳥のお祖父さんの遺品で、武神家のために特別に作られたらしい。

朱鳥はそれを鞘から抜き中断に構える。刃は既に本来の銀色から朱い色へと変化していた。

一方の赭攣さんは武器を持たないどころか構えてすらいらない。道場の奥で悠然と立っているだけだ。殺気と態度にあまりにも差があ

る。

「今日こそ勝つわよ！」

そういうと朱鳥は地面を蹴り赭攀さんとの距離を一気につめる。

「え、おい武器持つてないぞ！」

俺は慌てて声をかけるが一切聞く耳をもたない。朱鳥は容赦なく刀を振り下ろした。

赭攀さんはそれを避けることもせず刃に少しだけ触れて軌道を強引に変える。軌道を変えられた刀は赭攀さんを斬ることなく床を碎いた。

爆発音がして床の破片が周囲に散る。それを避けるように二人は再び距離をとる。

朱鳥が唱える。

『我が獄炎よ、我が指示に従い使命を果たせ』

赭攀さんが唱える。

『我が獄炎よ、我が指示に従い使命を果たせ』

朱鳥の刀が巨大な炎に包まれる。大きな火の欠片が道場の木の床を焼く。

一方の赭攀さんはその手だけ朱く炎がまとっているだけで朱鳥のように大きくはない。朱鳥よりも力がないのは本当のようだ。

朱鳥は刀を上段に構えて再び距離を詰める。朱鳥は刀に纏った炎を振り回し攻撃を繰り返す。しかし、赭攀さんはそれを全て手で触れて軌道をそらしてしまう。触れるたびに朱い火花が散り道場の床や壁までも炭へと変えてしまう。

俺は道場の入口から中の様子を見ているのだが、熱気がここまできている。

ん、でもさっきから赭攀さん全然攻撃しないな…

赭攀さんは朱鳥の攻撃をそらしているだけで一切攻撃を加えていない。

「やっぱり娘だから攻撃はしないのかな…」

とつぶやいた瞬間朱鳥の体が真横に吹き飛んで大きな音を立てな

がら壁へと衝突した。赭攀さんの回し蹴りが当たったのだろう。蹴り上げた足を下しながら赭攀さんは再び悠然とした姿で立つ。

「朱鳥、ちよつと鈍ったんじゃないか？」

炎を纏った手のまま腕を組みながら壁からずり落ちていく朱鳥を見る。

朱鳥は大きく呼吸しながら息を整えてる。壁に衝突したときに灰の中にあつた空気が出て行つたのだろう。

「まだまだあ！」

朱鳥は床から勢いよく立ち上がり赭攀さんへと刀を向ける。

「頭を動かしなさい」

今度は刀が振り下ろされることなく片手で握られていた。

「朱鳥は力があるのに技術力がないんだよな。技術力があればこれくらいの刃で傷つくことはない。今のままでは私に刀を当てても傷つけることはできないよ」

そう言うとうと刀を掴んだまま朱鳥を道場の入口へと投げ飛ばした。

「つて、ちよつと俺がいるんだけど！」

俺の体に向かって刀を持ったままの朱鳥が飛んでくる。

避けるべきか、受け止めるべきか……

幼馴染として、色々助けてもらった側としては受け止めるべきなんだろう。しかし今朱鳥は燃えている。文字通り体に火を纏っているのだ。しかも刀を持っていて下手な受け止め方をすれば俺に刺さってしまう。けれど俺はそうそう簡単に死ねない体。

痛いけれど仕方ないっ！

俺は飛んでくる朱鳥を受け止めるために身構えた……が。

「翔也ごめん！」

朱鳥は俺に飛び込むのではなく、空中で体を捻り足から俺の胸に着地。そのまま俺を蹴り飛ばして再び道場の中へと飛び込んでいった。

一方朱鳥の足掛かりにされた俺はというと、さなかから真後ろに吹き飛ばされ無残に地面を転がる。

「痛え…。痛すぎる…」

今の一撃で体が傷だらけになった。

「ん…？」

何故か左腕の感覚がない。目をやると左腕が反対へと曲がっていた。あんまりにもいきなりだったせいか痛覚がマヒしてしまっているようだ。

「仕方ないか、『永劫：再生』」

蒼い光が左腕を包み込む。ずるずるという気持ち悪い感覚がしたかと思うと光が消えて腕が元通りになっていた。

これくらいの怪我ならすぐに治るし力も大して使わないようだ。疲労感などは一切ない。

顔をあげて道場のほうへと見やる。すると奥のほうで爆発があった。爆音と共に道場の側面の壁が一部吹き飛んだ。

道場の右側の壁から飛鳥が、左側から赭攀さんが出てくる。

「朱鳥、さっきからも言っているが無闇やたらに力を使わないように。頭を使って考えなさい」

「そんなこといっても力が強すぎてコントロールが難しいのよ！何とかならないの？」

ため息をつきながらうんざりとした表情だ。力のコントロールが上手くいかず苦戦しているのだろう。

「力の抑制が下手になってしまっているな。一週間以上も寝ていたのだから仕方ないか」

そう言つと赭攀さんは初めて構えた。

「それじゃ次の段階へと行こう。次は戦い方だよ」

「わかったわ」

朱鳥は刀を中断に構える。

「はーっ！」

息を一気に吐き出しながら声を上げ、赭攀さんへと刀を向ける。赭攀さんは静かに足を運びながら朱鳥へと向かっていく。

こうして見てみると朱鳥は動きがとても大きい。その分隙が出る

が刀に纏っている炎の攻撃範囲が広いせいか十分カバーできる。一方の赭攀さんは攻撃範囲が狭いのに対して小さな隙や攻撃が薄い部分を崩して戦う。

したがって一つ一つの攻撃が丁寧な赭攀さんが朱鳥の力押しを突き崩していつているようだ。

朱鳥が横に刀を振る。赭攀さんはそれを後ろに下がり避けて、朱鳥の刀を振ったとの隙に入り込む。赭攀さんの突きが朱鳥の喉に刺さる。

朱鳥は顔を歪めながら後ろへと突き飛ばされてしまう。それでもなお立ち上がり再び刀を振りかざす。赭攀さん再びそれを掴んでしまう。

「グッ……………」

朱鳥は全力を込めて刀に炎を集中させる。掴まれた手をあらん限りの力を使って押し破ろうとする。しかし、集中させようとすることが上手くいかない。炎が集まらないうちに拡散してしまうのだ。

でも、これさえ突き詰めれば行けるかも
朱鳥は意識を刀へと集中させる。

「いっけーっ！」

刀が今までより深く明るく朱々と燃え上がった。

2 - 3 変化

朱鳥の持つ刀の炎が縮小していく。

炎は小さくなっていくように見えるが刀に全ての力が集中しているのだ。刀身は燃え上がる太陽の蠢くような朱色をしている。

一方の赭しじゅう攀さんはいまだに刀を片手で驚掴みしたままだ。その手は朱鳥の刀よりも濃い朱色を纏っている。空いている方の手はだしなくぶら下げているだけで構えてすらいらない。

朱鳥は刀へ更に力を集中させる。

力押しをするにしても一点突破しないと破れないっ

更に刀は朱くなる。見ているだけで目が焼かれそうだ。

すると赭攀さんがついに動き出した。だらしなく下げていたもう一つの手を刀身を掴んでいる手に重ねる。

「段々と調子を掴んできたようだね。それでは私も刀を出すとしよう」

刀を掴んでいた掌が急激に光を増す。思わず瞼を閉じようとしたその時、大きな爆音が周囲を揺らした。

朱鳥は炎の塊の中から飛び出てくる。空中で回転しながら道場の焦げた木の床へと着地。爆発の起きた床は黒く焦げており、小さく煙が上がっている。

その中心に赭攀さんが片手に刀を持ちながら立っていた。朱い瞳が俺や朱鳥を射抜くように見つめる。その瞳を見た瞬間俺の眼も蒼色へと勝手に変化した。

「お、おわ、な、何なんだよ……」

思わず手で目を押さえる。

どうやら体が目の前の脅威に危険を感じて自然と能力を発動させたようだ。

一方の朱鳥はそんな瞳に一切怯むことなく朱く燃える刀を再び中段に構える。

「見ておきなさい、本当の稽古はこれからなのよ…」

さっきまでの戦いがウォーミングアップに過ぎなかったと言う事なのだろうか。俺にはとてもそういう風には見えなかった。真剣勝負じゃなかったというわけか。

そっぴいわれればそうなのかもしれな。何しろ朱鳥は刀を構え、赭攀さんは素手だったのだ。要は久しぶりの稽古だからリハビリだということなのだろう。

「さて、翔也くん。そこからもう少し離れたほうがいいかもしれないよ。今日は今までとは比べ物にならない稽古をしようかと考えているからね」

比べ物にならない…。でも、朱鳥はまだ病み上がりの身だ。そんなことをして大丈夫なのだろうか。

「一樣？^{みそぎ}塑稀には確認をとっておいてあるからその心配はないよ。では、今までもよりも実戦に近い稽古を始めようか」

片手に持っていた刀を中断に構える。刀は朱鳥のものと違い直刀で刃の色が普通の銀色をしていた。長さは一メートル五十センチくらいだろうか。かなり長い刀だ。

朱鳥はその刀を見てより一層自分の刀へと意識を集中させる。先ほどのようにただ威力を上げるのではなく精度を意識する。

お父さんの刀は切れ味がとても良い。今までの稽古でこの刀が何度刃こぼれしたことか…。しかも今回は実践。生半可な切れ味だったらおじいちゃんから受け継いだこの刀を折ってしまう…

本来、朱鳥の刀が赭攀のただの刀によって刃こぼれすることはない。刃こぼれしてしまうのは朱鳥の力量が不足しているからだ。朱鳥の刀は“武神家の神眼所持者のために”作られたもの。只これは逆に、赭攀の能力の高さを示している。普通の刀で神眼所持者のために作られた刀に傷をつけられる。それほど神眼能力の扱い方に長けているのだ。

とりあえず入口から離れよう…。あの二人の炎に燃やされたらたまったもんじゃない…

俺は稽古上から距離を取る。道場は現在半壊状態で、いくつかの壁に一人が通れるほどの穴がある。したがってわざわざ入口に立たなくとも中の様子を見ることができなのだ。

十分に距離を取った瞬間道場内で変化が起きた。

床を壊す音がしたそれと同時に刀と刀がぶつかり合う音が響いたのだ。中の様子を伺ってみると赭攀さんが朱鳥に攻撃をしかけていた。刀の色は朱鳥と同じ朱色に染まっている。ただし朱鳥のよりも数倍明るい色に輝き、蠢めく。

赭攀さんの攻撃を朱鳥は両手に精一杯の力を込めて受け止めた。一瞬避けることも考えたが攻撃の速さがそれを許さない。したがって受け止めることしか考えられずその先のことを考えていなかった。刀から手首、両腕にかかる押し潰そうとする力に耐え続ける。

「どうした朱鳥、このままでは押しつぶされるだけだぞ」

朱く鋭い目つきだけが朱鳥を殺さんとばかりに睨む。そう言われどもだ、受け止めるだけで精一杯なのに此処からどのように攻撃に移れというのか。今は力で押さえつけられているのだ。しかも段々とその力が増していく。

どうすれば……

此処からどのように離脱すれば良いのか。

その時、赭攀の向こう側にある円心上に焦げた床が目に入る。

「はーっ！」

再び刀に意識を集中させる。但し今回は刀の刃全体ではない。刀と刀の接点に意識を集中させる。

すると刃を覆っていた炎がその接点へと集中していく。朱く強く光り輝く。

『我が獄炎よ、我が指示に従い使命を果たせ - 爆炎 - ！』

集中していた炎が一斉に放たれる。大きな炎の塊が道場を覆いくし爆音が道場の柱を揺るがす。

朱鳥は赭攀がそうしたように刀に炎を集中させて爆発させて離脱したのだ。とても強引なやり方である。本来はもっと賢い方法がある

のかもしれない。しかし、力で押しつぶされるのならば力で押し返すまで。朱鳥は何とか離脱することができた。

炎の塊から道場を挟むように朱鳥と赭攀さんが飛び出てくる。朱鳥は方で大きく息をしている。疲労もいい加減限界に近づいてきたのだらう。一方の赭攀さんは一切の疲労を見せることなく佇んでいた。

崩れかけている道場を挟みながら赭攀さんが口を開く。

「それくらいでいいだろう。今日はもう終わりにしよう。道場もいい加減もたなくなってきたようだしね」

先ほどまで道場だったであろう建物は既に原型を留めていなかった。特殊な加工がしてあるのだらう、延焼することはないが神眼による渾身の爆炎を食らってしまえば流石にもたない。

そこへ赤い着物を着た女性が、何事かと道場のある外へと屋敷から出てきた。そして目の前の道場の無残な姿を見るや否や目つきを変える。

「これ、一体どういうことかしら赭攀さん……」

女性は凜とした表情で赭攀さんを見つめる。その静かな姿勢からは想像も出来ないほどの殺気を放つ。

「や、やあ蔡火^{さいか}。君は既にこの町から退避して北海道にいたはずなのに何故此処にいるのかな……」

今まで変わらなかった赭攀さんの表情が変わった。額から嫌な汗をかいている。これは一体……

「お母さん！」

朱鳥が驚いたような声を上げた。お母さんということはあの女性が朱鳥の母親だったのか。そういえば前に道場の床を焦がしてしまったか何かでお母さんを怒らせてしまったということを言っていた。つまりこの状況は……

「赭攀さん、まさか病床から上がったばかりの朱鳥に対して、道場があんなになるまで稽古したのですか？別に稽古するのは構わないです。しかし、限度というものがありません。この惨憺たる状況、果

たして限度を超えていないと言えるでしょうか？折角病床から上がった娘に会いに来たのにまさかこんなことになっているとは。やはり私はこちらに居た方が良いでしょうね」

厳しい剣幕で赭攀さんをまくし立てる。もしかしてこの屋敷の中で強いのも朱鳥のお母さんである蔡火さんなのだろうか。

一方の赭攀さんは今まで黙っていたが此処に来て再び口を開いた。「いや、それはだめだ。君はこの町に留まるべきではない。式神がいつ攻撃を仕掛けてくるかわからない。だから駄目だ」

「一様これでも私は神眼所持者です。多少の攻撃位なら防げますし、攻撃もできます」

瞳を朱色に染めて赭攀さんを見据える。

「そういう問題ではない。それに君は武神家の保険として北海道にいてほしいんだ。万が一にでも此処が崩れた場合、君が武神を従えて応戦してほしい」

式神家との全面戦争。

今はまだ先の話になるがいずれ訪れる出来事。本家が壊滅したとはいえ式神家はかつて武神家と肩を並べるほどの勢力だった。残党とはいえその力は侮れない。そのために最悪の事態を想定した対策を取る必要がある。

そしてその対策が妻である蔡火を第二の武神家の主要勢力としておくことだ。これにより、万が一此処の本家武神家が負けたとしてもその後を引き継げる。赭攀さんは万全を期した対策で式神との戦いに挑むつもりなのだ。

「その話は以前にも聞きました。しかし、その本格的な戦争が起きる前にこの有様。そして全面戦争後の事も考慮に入れてほしいものです。簡単に道場をあのような状態にするなんて……。お金は湯水のように湧くわけではありませんよ」

つまり全面戦争になる前に、更にはその事後処理を考え資金だけでも余裕を持たせたいのだろう。随分と現実的に物事を捉える性格のようだ。

「その点は申し訳ない。今後は気を付けよう…」

「一体その言葉何度聞いたことかしら」

呆れてため息をつきながら頭を押さえる。

「では道場の再建費用の見積もりと、現在の武神家における資産運用を見直したら北海道へ戻りましょう。本来は朱鳥の顔を見に来るのが目的で東京まで戻ったのに、余分な仕事が増えましたね…。朱鳥」

「はい」

構えていた刀を地面に置き蔡火さんの方へ向き直る。

「元気で良かったわ。これからも体に気を付けて力を伸ばして言うて頂戴」

さつきとは変わってにこやかな表情を朱鳥へと向ける。

それに答えるかのように朱鳥もにこやかな表情を母親へと向ける。

「そして翔也さん」

「は、はい」

思わず呼びかけられ焦る。

「朱鳥は無茶をするところがあります。自分の力を過信しすぎるのでしょう。この前の式神との戦闘においてもそうです。だから翔也さんが監視して忠告してやってください。よろしく願いします」
頭を下げる蔡火さん。

「わかりました。できる限りの事をしてみます」

「ありがとうございます。では私はこれで」

そう言うつと先ほど慌てて出てきた屋敷の方へと戻っていった。

まさか朱鳥のお母さんに会うことになるうとは。生まれてこの方朱鳥のお母さんである蔡火さんには一度も会った事がなかったのだ。
「そういえば翔也つてお母さんと会ったの初めてだよね？」

「そうだな。今更な気がするけどな」

「まー、お母さんは普段武神家の財政を管理しているのよ。それで忙しくて普段は出てこれないの。私も会ったのは食事の時だけだったしね」

それほど武神家が大きいという事なのだろう。意外と大変そうだな。そこへ蔡火さんの剣幕に滅入っていた赭攀さんが声をかけてきた。「まさか蔡火が戻ってきているとはね……。これは予想外だった。けれどもあの修業はこれからの出来事には必ず必要だったし致し方ない。朱鳥、蔡火が北海道へ向かったら再開するぞ」

「え、大丈夫なの？」

「……………」

なぜか押し黙る赭攀さん。さっきの様子を見れば無論大丈夫なわけがないはずだ。それでも朱鳥の稽古をやめるわけにはいかないのだろう。

「ふむ、取りあえずはその予定でいく。それじゃ解散」

「はいっ」

朱鳥が答えると赭攀さんは屋敷の中へと戻っていった。

こうして朱鳥と赭攀さんの神眼同市の稽古とは毛ほどにも呼べない勝負が終わった。

東京都鏡樓市 -

十七年前の二十十三年に起きた太平洋中心で起きた巨大な爆発。その津波は日本の沿岸部を襲った。幸い被害者は殆どでなかったが沿岸部に合った主要都市は壊滅。勿論東京都も例外ではなかった。その首都機能を移設した先が鏡樓市だ。よって鏡樓市には沢山のビルが立ち並ぶようになった。かつてあった古いビルは解体されて新しいビルが次々と誕生した。

そのラッシュの中で立てられた高級ホテル。その一室に現在式神家本家が置かれていた。いつまでも廃屋の状態である式神家本家に留まる必要性はない。

幻覚をあやつれる視氣神しきがみが合流して以降、ホテルの従業員へ幻覚を見せることにより騙し留まることになった。この視氣神が合流し

てから式神達の行動範囲が広がった。この町を監視している式神にしきは流石に幻覚を見抜く力までは所有していない。つまり視氣神がいる限り監視がないも同然なのだ。

そんな本部の大移動を済ませ落ち着いた頃に、ある男が厭人の元へ到着した。

「厭人あきとさま、ドイツから神器をお届けに参りました」

黒いアタッシュケースを持ったスーツの男は中身を空ける。中から細い系を取り出し式神家本家頭首である厭人へ差し出す。

「予想より早かったな。あちらは今検問が厳しんじゃないのか」
欧州は現在全てに非常事態宣言が発令され国外の移動に制限がかけられている。特に神眼に関するもの、そう神器に関しても輸送の制限がかけられている。したがっておいそれと持ち出すこと、しかもこの日本まで持つてくるのは非常に難しい。はずなのだが。

「丁度ストックが無くなりかけていたところだ。良い時期に到着したな。これでしばらくは問題なさそうだ」

厭人はその男から束ねられた細い系、ワイヤーを受け取る。

「今回は少し調整を施したと申ししていました。何でも日本語でも操れるようにしたとか」

「はん、余計なことをしてくれるな。日本語だからじゃないこそ役立つていた部分があつたんだがな」

束ねられたワイヤーを解きながら、その変化を確認する。触った感じでは確かに余分な調整がされているようだ。

「それではもう一度作り直させ手配しましょうか？」

「その必要はない。寧ろお前には他の任務をしてもらいたい。もっとも、次の任務は輸送ではなく誘拐だがな」

「誘拐も人を運ぶことに変わりありません。この私、測神跳速しきがみとつやが光よりも勝る速さでさらって参りましょう」

不敵な笑みを浮かべながらうやうやしく頭を下げる。このスーツの男、測神跳速の能力は光よりも速く移動できることだ。その速さは何者も捉えることはできない。勿論物を運ぶだけではなく暗殺す

ることに長けている。

素早く近づき、素早く殺し、素早く退散しその追跡は絶対に許さない。

「一人誘拐し、もう一人は殺せ。無論その二人を護衛する者も同じく殺せ。お前ならばそう苦戦する内容ではないだろう」

「随分と単純な任務なようで、誰をさらい誰を殺せばよいのですか」

殺しの任務と聞いてからこの男の血は熱くなり始めていた。速く殺したい。自分が誰に殺されたとも気づかずに死んだ時の間抜けな死に顔を早く見たい。

「現在中国の香港に滞在中の生上夫婦が対象だ。護衛の武神家のやつは必ず殺せ。生上夫妻についてどちらかを殺し、どちらかを誘拐しろ」

「わかりました」

そう答えると既に男はその場からいなくなっていた。

「相変わらず気の早い奴だな。あいつなら下手なへまをすることはしないだろう」

酷く醜い笑みを浮かべながら外に広がる夜の鏡樓市の街を眺める。さて、親をとられたあいつはどう動くかな……

生上翔也の覚醒。

現在はそれを待っている段階だ。こちらは攻撃を仕掛け何回も瀕死を体験させれば良い。問題は、覚醒させた後どのようなにとらえるか。力づくで拘束するのも良いが覚醒した永劫を捕えるのはそう簡単なことではない。何しろ神眼の中でも希少な部類で、此处数百年の間に誕生した記録はなし。

したがって捕えるとすれば相当の犠牲を払う必要がある。瀕死に追い込むためにこれから幾つもの戦闘を行う予定だ。それを考えると捕える段階で何人生き残っているか不明。

だからこそ、翔也の両親を捕え人質として使う。言わば最後の切り札だ。

切り札だからこそ早期に手に入れる必要がある。

「俺も最後まで生き残らないとな……。不死の研究は俺が完成させる」
それが究極の研究を求める式神家の執念。

「ねえねえ見て見て綺麗な夜景よ。たまにはこういう休みも良いわね」

「お前は随分と余裕だな。翔也のやつが大変だというのに」

「大丈夫よ。だって飛宇貴さんと私の子どもよ。全然問題ないって」

笑いながら香港の綺麗な夜景に見とれている女性。

「そうだな、俺と“お前の”子どもだもんな。早々死ぬことはないだろうな」

「そうよ。問題ないない。それじゃちょっと街に出かけましょう」

そこへ先ほどからずっと二人の会話を聞いていた一人の青年が口を開いた。

「いえ、どうかそれはお止め下さい。外出は申し上げた通り厳禁です」

緊迫した状況にも関わらず、さつきから惚気きっている生上夫妻。

そんな二人に呆れている武神家から派遣された護衛、十番目の分家雨雅神速人。うがじんはやと頭首直々から命じられたこの任務に精一杯の精力を

もって取り組んでいるのだが、その護衛対象がずっとこんな感じなのだ。困ったものである。

「お二方は命を狙われる可能性があるのです。ですから此処から絶対に動かないでください」

厳しい口調で告げる速人。

「うーん。そうね、確かにそれは面倒くさいかもね。どうしようかな」

「ですから、『どうしようかな』ではなく絶対に外出しないでください」

ため息をついて呆れる速人。

このやり取りはこれが初めてではない。もう何回この一連の流れを繰り返したことが。

こんなはずじゃなかったのになー……

速人は本来、本家に出向く雨雅神家の交代として鏡楼市へと赴いた。ところが到着した途端に頭首直々からこの夫婦の護衛を任される。そしてこの能天気な夫婦を連れて中国の香港に来る事となったのだった。

この夫婦凄い能天気だな……。少しは事の重大さを自覚してもらわないと困るなあ……

そこへズボンのポケットに入っていた携帯から着信音が響く。

「もしもし、速人です」

「雨雅神殿、何者かが此方に向かっている」

予想以上に速い敵の襲来を告げる知らせだった。

2 - 4 全領域

時間は少しさかのぼり午後二時東京都鏡樓市鏡樓高校校庭 - -
この高校はちよつとした山の頂上にある。周りは森に囲まれ、
だつ広い校庭が広がる。自然に囲まれた高校なのだ。

そして今、翔也と朱鳥は今自分達の通う高校の校門の前に立っている。いつもなら白く無機質な外観の建物がそこにあるはずだった。しかしそこにあるのは廃墟だった。

屋上は消えており、本来教室であろう階が今は屋上となっていた。そこにはかつて教室だったであろう跡は残ってる。

傾いた黒板。バラバラに解体散らばっている机や椅子。不自然な形、まるで元からそこにはなかったような消え方をしている壁。あの廃墟がかつて自分たちの通っていた校舎であるとは気づかないだろう。

これらは神眼を持つ者が命を賭して戦った戦場の跡だった。

暫くその廃墟の様子に口から言葉が出なくなる朱鳥。

翔也はこの廃墟を見るのは二度目になるので只見つめるだけで、特に感想も出てこない。彼については校舎が崩壊していく様子をその目で見ている。だから今思っていることがあるとすればその時の事なのだろう。

校舎が廃墟になつてから、高校が休校になつてからもう何日が過ぎていた。それでも此処は一切変わっていない。不変である。

「こういうのを見ると、今が日常じゃないってしみじみと感じるわね…」

ずっと閉じていた口を朱鳥は開く。朱鳥は式神厭人との戦いで致命傷を負いずっと眠っていた。激痛の走る夢の世界にいた。

だから現実がこつも崩壊していることに対して考えが及んでいても、実感はなかった。日常のシンボルともいえる高校が廃墟になっているのを見るまでは…。

「日常って大切なんだな。何か怠惰に過ごしていた自分が悔やまれるよ……」

「よく言うわよ。どうせ後悔はしても反省はできないんでしょ」

「酷いこと言うなあ……」

その反応に朱鳥は顔を緩める。

少しだけ日常を味わえた気がした。

「速く後者が再建されると良いのだけれど、いつになるのかな」

「どうだろうな。暫くはこのままだろ。多分今再建してもすぐに壊れてしまっただろうし」

そう、今は神眼一族を現在も束ねている武神家と、かつて束ねていた式神家との戦争中なのだ。その舞台は現在の鏡楼市が舞台となっている。

だからこれからも此処で戦争は行われるのだろう。

「これからどうなるんだろうな」

「それは私も知りたいわよ。でも勝たなければならないのは確実、あいつを何としても斬らないと」

手に力を込める。この前は厭人に倒されてしまい戦いに参戦することはできなかった。今回こそは自らが戦い式神の戦力を削っていく。

それが武神家次期頭首としての役目だ。そして最終的には勝利を収める。これからの世界のために。

これ以上式神の手によって沢山の人を死なせるわけにはいかないのだ。

そんな決意を胸にしていたところに車の音が響く。坂道を上るためにモーターをうならせている。

どうやらトラックのようだ。しかも一台ではなく数台。その荷台には沢山の資材が積まれていた。

「もしかして再建の目処が立ったのか？」

思わず驚きの声を上げる。

確か聞いていた話では暫く再建することはなく、近場の高校へ一

時的な転校という処置になるはずだったからだ。

「何か予定が変わったのかな。でもこの資材って…」

トラックの荷台に積み残されている資材。よくよく見てみるとそれは校舎を立て直すにはふさわしくないものだった。

薄いプラスチックのような見た目の壁。

学校の校舎につけるには小さいガラス戸。

「これってもしかして校庭に仮の校舎でも建てるのかしら」

「あー、それは有り得るかもな。この資材も仮設用の資材とか言われれば納得だな」

どうやら学校側は生徒を分散させて転校させるという手段は取りやめたようだ。もっとも、よくよく考えてみれば何百人もの生徒を分散させて転校させられるほどの高校はこの近辺にはない。

地域柄大学の付属高校が幾つか存在するが、数も足りないし教室も不足するだろう。

よってこのただっ広い校庭に校舎を建てるのが良いかもしれない。

次々とトラックが土煙を上げながら校門の中へと入っていく。

「思った以上に早くから高校が再開されるかもな」

トラックが全て入ったのだろう。ガラガラと音を立てながら校門が閉まる。

カタン――

「え…」

大気が揺れ始める。いや、空間が揺らぎ始める。

周囲の空気までもが変わる。とても不快な空気だ。

体の内側から蝕んでいくような感覚にとらわれる。

空の色が赤黒く染まってゆく。

この空間の変化に校庭の中でせつせと働く作業着を着た人たちは気づかない。

「おい、朱鳥」

「来たわよ」

瞳を朱く染めながらいつの間にか刀を構えていた。どうやらこの不快な空間の変化は気のせいではないようだ。

殺意のある攻撃。

カタン――

再び乾いた音が響く。

カタン――

乾いた音が響く度に空間は歪み、空気は体を蝕んでゆく。

「これって獅護神女の子の幻覚と同じやつなのか？」

この空間の不自然さと体を蝕まれていくような不快感には覚えがある。

とても似ている。

あの武神家の廊下で味わった幻覚に。

「同じではないわね、似ているけれど。只このままこの状態でいるのが一番駄目かもしれない」

刀をきつく握りしめる。

このままでは相手の世界に閉じ込められてしまう。そうならば此処で優位に戦いを進めることはできない。式神家の分家筋ともなれば尚更だ。

敵にとって都合の良いように動く世界。

此処はそんな理不尽が許される世界だ。

現実とは異なる。この世界を想像、否創造した者の意思が最大限に発揮される。

「これはね幻覚とは違うのよ。寧ろそれ以上に厄介。幻覚は視せるだけのんだけど、これは違う」

次々と周りの風景は変わり続ける。

「全てを変える、あらゆる現象と概念に干渉して自分の都合の良いように作り変える能力。全領域と呼ばれる能力よ」

『流石武神家の次期頭首。私の能力について知っている人なんてほんの一握りのはずなのだけれど、よく知っているわね。関心、関心』
聴覚を通すことなく、脳に直接話しかける。

「おい、何処にいる！」

周囲を見渡す。しかし何処にも人の姿を確認することはできない。そして遂に空間の変化が止まった。

体を蝕んでいくような空気、周りに広がる瓦礫が散らばる荒野、赤黒く染まった空。

どうやら俺たちは全領域へと完璧に取り込まれてしまったようだ。『ようこそ私の世界へ。これからあなた達を殺そうと思っているのだけれど、準備は良いかしら？』

ンフッフと笑い声が世界に響き渡る。非常に不快感のある笑い声だ。

「翔也、武器持ってる？」

「ああ勿論だ」

俺は鞘から蒼い刃の短剣を取り出し構える。

『へーそれがあの短剣なんだ。何か大したことなさそうね。でも、厭人さまから警戒するように言われているからそうね』

楽しく愉快そうに話を続ける。

『その短剣の概念から変えちゃいましょう』

カーン――

乾いた音が世界中に響き渡る。

それと同時に下の地面から黒い帯が大量に出現し、天高くまで上り続ける。すると今度は上から垂直に下っていき、俺の持つ蒼い刃の短剣に向かっていく。

「翔也！取り敢えず逃げて！」

朱鳥は瞳をより一層朱く染め上げ唱える。

『我が獄炎よ、我が指示に従い使命を果たせ』

朱い炎が朱鳥の周りを蠢く。

刀の刃にその炎を集めていき地面の下に向けて刃を下げる。

「獄炎・昇火――！」

地面に下していた刃をそのまま点に向け振り上げ、刃に集まった炎を解き放つ。

その炎は黒い帯と衝突。

爆音が響き渡り赤黒い空が朱く染まる。

『随分と威力だけは高いね。でも私の世界ではそれすら無に等しい』
黒い帯が生き物のように動きながら、炎を囲みこむように動く。
そしてその帯は全ての炎を食らいつくしてしまった。

「やっぱり、全領域では私の力も意味を成さないのね…」

目の前で自分の生み出した炎が呑み込まれていく様子を見つめる。
全領域ではあらゆる能力は創造者にとって都合が悪ければ無力化
されてしまう。どんな足掻きも無駄なのだ。

カーン――

炎を飲み込んだ帯が再び動き始める、翔也の短剣を目指して。

「クソッ、しつけないこの黒いの」

息を切らしながら走り続ける。

あいつは俺の持つ短剣を先に封じようとした。式神からも警告を
受けていたようだ。つまりこの短剣の持つ力がこの全領域を脅かす
存在なのだろう。

だからこそ俺はこれを死守する必要があるのだ。

とは言ったものの、果たしてこの空間でどれくらい逃げ切れるだ
ろうか…。

カーン――

乾いた音が響く。

それと同時に地面が揺れ始めた。

「な、地震も起こせるのか!？」

しかしその揺れはすぐに収まった。代わりに空中には巨大な壊れ
たビルが浮かんでいた…。

「マジかよ…」

空中に浮かんだビルはそのまま俺に向かって飛び込んできた。

「避けられるわけないだろおおおおおお」

「そんなこと言ってる暇あったら走りなさいよっ!」

腰に衝撃が走ったと思えば俺は空中を飛んできた。

「獄炎・噴火」

地面を砕くような衝撃音と一緒に朱鳥も空に吹き飛ぶ。その爆風に乗るように俺も空中を更に飛び続ける。

飛んできたビルがさっきまで俺のいた場所へ激突する。地鳴りのような衝撃音と土煙が周囲を満たす。

一方、蹴り飛ばされてしまった俺は地面に転がるように落ちた。
「ぐああ、すっげー痛いんだが…」

その傍に朱鳥が何の問題もないような顔をしながら着地。

「何、あの巨大なビルにひき肉にされるのが望みだったわけ」

朱い瞳が無残に転がる俺のほうを見る。

「お前さあ、前々から少し思っていたんだけど能力使つと性格変わるよな」

「何か言つた？」

ギロリと俺のほうを更に見抜く。

「いや、なんでも…ありません…」

見られただけで殺されそうだ。

『私を放っておいて随分と楽しそうじゃない』

赤黒い空の様子が不気味に揺らぐ。

『ま、さっきから地味な攻撃ばかりだったものね。無理もないか…』

「地味とかそういうわけじゃないんだがな…」

寧ろ迫力が有りすぎて逃げることを考えることで精いっぱいだ。

攻撃に転じるにしてもこの世界を創っている本人を攻撃できなければ意味がない。

そしてその姿はどこにもない。

つまり八方ふさがりだ。

『ソフフ、もっと凄いのがお望みかしら。それじゃ飛びっきりの夢を見せてあげる』

カーン…

赤黒い空に浮かぶ雲が動き始める。その動きとともに雷鳴が生じ音が響き渡っていく。こだまするように雷鳴は増える。

カーン - -

カーン - -

カーン - -

乾いた音が連続で三回鳴り響く。

『具現化せよ私の想像、具現化せよ私の意思、想像は創造を生み出し想像を超える創造を生み出せ』

雷鳴の轟音が空に響き渡る。空気を震わせ、赤黒い空に雷が線を描きながら形を作っていく。

その形は今まで見たことのないような模様だった。丸い円の中に複数の円が描かれそこには大量の文字が浮かんでいた。

「この世界って本当に無茶苦茶ね…。あんな能力を増強させる陣まで作り出せるなんて」

空に浮かんだ陣は怪しい光を放ち地面を照らし続ける。そしてその光はより一層輝きを増していく。

『世界を滅ぼせ、現象 - 黙示録 - 』

世界に存在するあらゆる音が空間を満たしていく。

「おい、何がおきるんだ朱鳥！」

「私にもわからないわよ！今の状況っていうのはこの世界を作ったやつが能力を増強し続けて、果てにはその能力を暴走させようとしていることよ。そんなことをしたら普通、そいつも無事ではすまないはずなのにつ…」

為す術も無く只空を見上げる。

『普通？そんな常識がこの世界に通用するとも思っているの？笑わせないで。そんな常識なんていうのはとうの昔に変えたわよ』

ンフフフと愉快そうに笑う。

陣から注ぐ光は更に強まっていく。今では眩しすぎて空を見上げることにすらできない。

『それではまずはさようなら』

光が体を満たし破壊していく。
激痛が体を満たす。

その時今までとは別の声が空間に響き渡った。

「こんの根性なし共が、いちいちこの私を働かせるな！」

ガラスが割れるような音が響く。バキバキと世界を切り裂いてゆく。

『この馬鹿力、まさか神威？』

この世界の主が初めて驚きの声を上げた。

「あーそうだよ、何か文句でもあんのか。この私にそんな文句があるとすれば、あんたは私の前にひれ伏すだけの価値はあるのかもね！」

バキン――

この世界に大きな亀裂が走る。

『ひれ伏す価値ね……。そんなもの願い下げだわ』

虚勢を張り神威に対抗しようとする。しかしそんなものは意味がない。

「それじゃ、死にな！」

バキン――

ついに世界が壊れた。

この世界を満たしていたあらゆる現象、常識、意思が崩壊を始める。

『はあ……仕方ないわね。このままでは本当に私が死にそうだし。取り敢えず今日は此処までにしてあげるわ……』

世界の崩壊が更に加速していく。

赤黒い空は青い空へと変わり、体を蝕むような空気は体を癒す自然の空気へ、幻の廃墟は消え失せ本物の白い廃墟が現れた。

気づくと顔にアスファルトの固い感触を感じた。

目を開けてみるとどうやら地面に倒れてしまっていたようだ。視線を上げて校庭を見てみると、まるで何事もなかったように仮校舎を建てる作業が進められていた。

重くなっている体を起こす。

するとそこには何事もなかったかのように建っている朱鳥と、真

つ赤なスーツの服を着た女性が立っていた。

「ありがとう。今回は結構危なかったから助かりました」

「これも仕事だからな。やらなければ五月蠅くいう奴らもいるし、全くあんたらには苦勞するよ」

全領域を無理矢理引き裂いた割には何の苦勞もなかったような表情で述べる。

建っているだけで目立つような赤いスーツを着ている人物は神威の人らしい。武神家分家一、理不尽な最強の神威。分家の中でも見た人物は少ないらしい。

現に梓も会った事はないと言っていた。

「おい、その蒼いやつ」

俺に対して指をさしながら呼びかける。

「あんたは内の御嬢さんを守ってもらわないと困るんだよ。全領域くらい何とかしやがれ」

と言いながら俺は鳩尾に蹴りを食らった。

ウゲエとみっともない悲鳴を上げながら空中を数メートル飛び、急こう配な坂道を数メートル更に転がる。

「ちよつと良い？」

「んー？」

無残な姿の俺をまるで居ないように会話を続ける二人。

朱鳥性格変わりすぎだろ…。

もう少しいたわってくれてもいいのではないだろうか。というか言っていることとやっていることが、あまりにも違うような気が…。

あいつ俺のこと本当はどう思ってるんだ？

「あなた翔也なら何とかなるって言っていたけれど、実際何とかなるの？」

「だってあいつは希少な蒼の眼の所持者だろう、何とかできるんじゃないか」

「……………」

沈黙する朱鳥。

俺もあんな勘に頼った推測が原因でこうも吹き飛ばされたことを考えると、何も出てこない…。

「ん、何か私おかしなこと言ったか？」

「いえ…有効な手段をあなたに期待した私が馬鹿でした…」

あきれてため息をつく朱鳥。

「それじゃ私は別件の用事があるから、気をつけるよ」

瞬間、周囲にアスファルトを砕く衝撃音とともに赤いスーツの人物は空に飛んだ。

そして一面砕かれたアスファルトが散らばっていた。

「うん、さっきはちよつとかなり危なかったわね…、彼女が助けに来てくれなかったら早くも私たち死んでいたわ。もっとも翔也だけは生き残れたと思うけど」

安堵したような表情で空を見上げる。

いやだから俺のこの悲惨な現状と、悲惨なことになっている道路は無視かよ！

「さて、取り敢えず敵の気配は消えたし一安心ね」

朱い瞳を通常に戻し周囲を見渡す。そして道路に転がっている俺のほうへ目を向ける。

「……………」

今更ながら驚いたような表情をしていた。本当に今更過ぎる。

「おい、俺になんか一言ないのかよ」

激痛が走りまわっている体から辛うじて声を出す。

「ごめん、翔也…気づかなかった…」

やっぱり気づいていなかったのかよ！

「いや今更ながらなんだけどね、神眼を使っている時の私ってちょっと感覚が麻痺するのよね。とはいっても普段なら今の状況でも気付くことはできたんだけど、さっきはちよつとね…。精神的にしっかり保ってないと全領域のダメージをひきずったままになりそうだったし…。ごめん」

そういつて俺のところに歩いてきて、手を差し伸べる。俺はそれ

を手に取り体を持ち上げた。

「精神的って、さっきのやつは精神的な問題で乗り切れるものなのか？」

「本来ならば無理よ。でもさっきはあの人が助けてくれたから、全てのダメージを受けずに済んだの。だからこそ、精神的なダメージの部分で済んだというか」

「つまり、次は身体的ダメージが来るところだったのか」

「そうよ。因みに翔也が精神的に無事なのは能力のおかげだと思うよ」

「そうだな、今のところ憂鬱な気分ではないし」

「憂鬱とかじゃないんだけれどね…。ま、良いわ。さてこの後どうしようかしら」

「取り敢えず敵を探すのはどうだ？あるいは対策を練るとか」

「そうね。更に言つとその短剣についてももう少し調べる必要がありそうね」

そう言いながら俺の腰に刺さっている短剣を指差した。

「どうやら、それが全領域を破るポイントみたいだしね」

敵は真つ先にこの短剣の概念を書き換えようと襲ってきた。だからこれが重要になるのだろうけれど…。

「でもどうやって調べるんだ？」

「まずは式人に聞いてみましょう。それをここ最近まで管理していたのは式人だし、何かしら知っていてもおかしくないわ。それじゃ一旦帰りましょ」

俺と朱鳥は長い下り坂を降りて武神家に向かった。

因みに校門の前の道路は爆発が起きた可能性な凄惨な状況になっており、高校の再開が数日遅れる原因となってしまうたのだった。

2 - 5 下光兄弟

鏡楼高校は鏡楼市の市街地からはずれたちよつとした山の上にある。そして武神家はその反対側の市街地のはずれにある。

よつて武神家に向かうためには鏡楼市の市街地を突っ切つて向かう。

現在鏡楼市は都市化が進んでおり、様々なビルが建設中だ。逆に地区によつては廃ビルが立ち並ぶ地区もある。かつてはそこが町の中心だったのだが都市化の計画ではそこを全て更地にする予定だそうだ。

随分とムダ金をかけたやり方である。利権の前においてリサイクルは何の意味もなさないうだ。

さて、俺と朱鳥の二人はその町を突っ切つて武神家に向かつていた。

その町を歩いているときに緑色の髪の毛が二つ視界に入る。

「ん、あれつて下光達かな」

「緑色の髪の毛だからそうなんじゃない？ そうね、久しぶりだから少しだけ会つておこうかな」

緑色の髪の毛をしている下光兄弟。眼鏡をかけた兄の葉也やいと弟の葉平よっぺいは双子である。たいていはいつも一緒に居るのをよく見かける。それ程中が良いのだろう。性格は兄は真面目、弟は元氣屋という感じで補い合っている。双子でワンセット、二人で一人で丁度良いという感じた。

そして此方がその二人に声をかけようとした時、弟の葉平と目が合った。

「うお、いつも通りの二人じゃんか。朱鳥はもう大丈夫なのか？」
ニコニコと笑いながらこちらに歩いてくる。その後ろから兄の葉也も声をかける。

「その様子からするに、もう大丈夫という感じだな。寧ろ翔也の顔

に若干の疲労感が見えるのだが気のせいかな？」

相変わらず目の付け所がいい奴だ。本日の俺は地面をよく転が
し変な世界で体を浸食されたりと散々な目に合っている。

真人間なら疲労感どころか、死相が映っているはずだ。

「私はもう大丈夫よ。この通り元気元気。何か心配かけちゃった
みたいでごめんね」

「いやいや、謝ることじゃないよ。心配するのは友達なら当たり
前だろ」

「そうだな。友達なら当たり前だ。友達ならば」

「ん、何か引つかかるような言い方だけど…まいつか」

おそらく葉也が友達ならばと二回も言ったことに、違和感を感じ
たのだからそれと言わないでおこう。

「ところで二人は此処で何してんだ？」

「いや必要なものを色々揃えていたんだよ」

「色々？」

「ほら、高校滅茶苦茶になっただろう。だから学校に置いていた教
科書とかもさ使えなくなっただけ」

「あ、そういえばそっか…」

無論、俺も学校に教科書は置きっぱなしになっていた。筆記用具
等々勉強に関する物は全て学校に置いていた。つまり、この前の式
神と二晨さんの学校内における戦闘で、全てゴミになってしまった
のだろう。

と言う事は、葉平と同じように俺も買いたくなくてはない
…。

予想外の出費だ。

「全く、教科書を学校においておくからこうなるんだ。勉強道具は
毎回持って帰るのが当然だろう」

と真面目の葉也。

「そうよ、普通ならば持って帰っているのが当たり前。学校だけで
やった勉強で満足するのは怠け心も良いところよ」

と真面目の朱鳥。

「はいその通りです……」

と勉強嫌いの俺らはがっくりと肩を落とす。

「でもこうも早く高校が再開するって予想外だったな。今日の朝連絡が来てビックリしたよ」

「俺も流石に予想外だったな。あんなボロボロの校舎をこんなにすぐにも再建できるとは思ひもなかった」

「あー、何か校庭に仮校舎建てるみたいよ。多分突貫工事ですっさと建てる予定みたいね。さっき校庭に何台かトラックが入ってたし」

「だな。でも一週間で完成させるってかなり無茶だよな」

仮校舎を建てるにしても一週間で完成できるものなのだろうか。

でも仮設住宅や道路整備のように日本は土木建築についてはスピードはとても速い。ならば校舎も速く建てられるのだろうか？

「来週から学校始まるのか……。はっ、まさか夏休み短くなったりしないよな!？」

「恐らく短くなるんじゃないかしら。だって消化しなきゃいけないカリキュラムもあるだろうし。だからといって進度早くしたら翔也と葉平はついていけないでしょう」

「そうだな。確かに俺にはそっちもそっちで苦しいな」

「え、何か俺不真面目で馬鹿ってなってるかい？」

「え、そうじゃないの？」

真顔でキョトンとする朱鳥。

素でそんな反応を返されてしまい頭垂れる葉平。それでも自分の名誉を挽回しようと額を押さえながら話を続ける。

「あのさ、俺は不真面目ではあるけれど」

「不真面目なんじゃないか」

「いや、だから最後まで話を聞けええええ、翔也！葉也も何とか言ってくれ！」

「いや、お前は不真面目だろう」

「だからあああああああああ」

弁解に必死なようである。普通此処まで必死になるのだろうか？
「俺はな確かに不真面目だ。でもな翔也みたいにテストが最下位だったり、翔也みたいに留年になりかけたり、翔也みたいに何回も教師に呼び出されたり、翔也みたいに…」

さつきから翔也みたいというフレーズが沢山でてきているような気がする。俺ってダメ生徒の鑑だったのか…。

俺に弁解の余地がないということがショックだ。

「つまりマシな点数をしつかりとっているから、不真面目だけど問題児ではないんだ」

「でも不真面目だ」

「でも不真面目でしょ」

「俺は問題児じゃないっ！…だよ、ね？」

俺に同意してくれる人はいなかった。もう、さつき言っていた決意投げ出そうかな。

予定は未定、決意も未定だ。

しかし真面目組の二人（葉也と朱鳥）は一切の妥協を許してない。葉平の弁解を徹底的に理解せず納得せず、揚句に問いただしているし。

頭が固いと柔軟性がなくなるから困ったものだ。人生のんびりと構えて静かに見据えることが大切だというのに。

「のんびり見据えるのは大切だけど、それは怠けていると同義じゃないから。そこ間違えないこと」

「はい…」

流石幼馴染。

俺の心などすべて見透かすことができるようだ。朱鳥の前に俺にはプライベートは存在しないのか…。

「そう言えば」

弁解を諦めたのか葉平が話の方向を切り替えた。

「俺たちの高校をあんなに滅茶苦茶にした犯人って誰なんだ？」

「ふむ、確かにその点については一切情報がないな。警察の捜査も程ほどだったそうだ。何か知らないか、翔也と武神さんは？」

「……………」

「……………」

さて、どう説明しようか。いや説明しないほうが良いのだろうか。神眼について一般人の人はそこまで知らない。知らない人がいないというわけではないが、注目されることが殆どないのだ。

あんな超能力な力に対して、興味を持たないはずがない。

ところがそういう興味を持つ人は、一般人の中には殆どいない。日本中を騒がせた眼をくり抜かれた殺人事件について神眼が関わっているという情報があった。週刊誌にも掲載はされたりしたそうだが、しかしそれについて興味を持った人々は皆無。

只、神眼と深く関わった人々（俺の従兄である啓祐兄さんのような）は稀に興味を持って探りを入れ始めるようだ。

だからと言って神眼の関して、積極的な情報公開は行われていない。よって真相に辿り着くことは難しいそう。

啓祐兄さんも結構苦労したようだ。神眼に関わる情報が、啓祐兄さんの基に届くようになったのもつい最近らしい。

かくいう俺も朱鳥とずっと幼馴染だったが神眼に対して興味を持ったことは殆どなかった。

こういう不可解な現状についても俺は此处最近までは気づかなかった。科学技術の発達が止まったことと関係があるのだろうか。

これらを踏まえて。

果たして、朱鳥と同じ神眼能力者が高校を滅茶苦茶にしたと説明して、納得してもらえるだろうか。

後、この件について少しでも関わることは、この二人を危険にさらすことになるかもしれない。現段階で死にそうになった人がいるのだ。

それを考えるとこの二人に教えるのは止めたほうがいいのかもしれない。

「私は特に聞いてないわね。だって昨日まで寝込んでいたし」

朱鳥もどうやらこの二人に説明することは回避したようだ。

「俺も聞いてないな」

ダメ生徒である俺は、真面目生徒である朱鳥に倣ったほうが良いだろう…。

自分で言うとお胸にしみるものがあるなあ…。

「そうだよな、何も知らないのが普通だよな。でもあの崩れ方ってすごい不自然だよな。何かが発発した跡もあるけど、不自然に消えている壁もあるし。こう、直線的にスパッと挟みで切り取られたような感じ」

「確かに、あの壊れ方はおかしいな」

二人とも頭を抱えて考え始めた。

うーん、このまま二人が勝手に動き始めても、真相に辿り着けないのは明らかだし。ほっというて良いのかな。

そこで朱鳥に意見を聞こうかと横を見る。

すると当の朱鳥も考え込んでいた。とても考え込んでいた。

話しかけるなオーラが、殺気のように体中からあふれ出ている。

この事って、そこまで真剣に考えることなのだろうか…。

必死に考え込む三人とその様子に慌てふためく俺。

こんな様子、他人から見たら俺が本当に馬鹿みたいじゃないか。

嫌だなあ…。

「あ、そうだ」

葉平が何か閃いたみたいだ。

「調べるために夜の学校に侵入するとかどうだ。今日の夜とかさ」

あれ、この展開は危ないような気がしてきたぞ。

俺の中にある一つ警告ランプが灯る。

「そうだな、その案は良いかもしれない」

何故かノリノリな葉也。

警告ランプ二つ目点灯。

「お、兄貴も乗ってきたか。それじゃやってみる価値はあるな。此

処の所ずっと暇だったし。こういうイベントも良いよな」

とても楽しそうな表情をしている。

警告ランプ全て点灯。

これは非常にマズイ…。

「いや、でもお前らそれは流石に駄目じゃないか。崩れそうな天井とか危なそうだしさ」

不自然に止めると、逆に刺激してしまう可能性がある。だからさり気無く止める戦法を選ぶ。

「ダメ生徒の割に真面目なこと言うんだな、翔也」

「ダメ生徒のネタまだ引きずるのかよっ！」

そろそろ精神的にいじけそうだ。

人は見た目だけではかれるものではない！中身で勝負すれば良いのだ！

「武神さんはどうなんだ。翔也はこういうことを言っているが」

葉也が朱鳥に意見を仰ぐ。

そうだ、朱鳥ならば止めるはずだ。こんな危険なことを見過ごすはずはない。

「んー、そうねえ…。良いと思うわよ」

「良いのかよっ！」

思わず突っ込んでしまった。

あーさっきまで考えていた色々な事情って、なんだったのだろうか。

馬鹿は頭を働かせないことが賢明なのだろうか。自分の馬鹿さ加減が身に染みる…。

「そんな突っ込まなくても…」

遂に引かれてしまった。

シヨックだ…。

「でもそうね、潜入するならばちゃんとした準備は必要かもしれないわね。ヘルメットとか。懐中電灯は必須かな」

とうとう潜入することを前提に話が進みだした。

展開が速すぎる。

「流石武神さん、話が速い。そうだな潜入するならば森の中からのほうが良いな。防犯カメラがうごいているかわからないが、万が一に備えて死角から潜入することを考えよう」

現実味を帯びてきた。今日は早く寝ることはできないようだ。

「流石兄貴、参謀の素質もあるんだな。それじゃ俺は先陣を切って潜入しようか。安全確認とか」

「いや、お前は三番手だ。先陣は俺と武神さんが務めよう。お前に頼るのはいささか心もとないから」

「それ位は信用してくれたって良いだろうよ……」

「武神さんもそれで良いかな」

そんな葉也の問いに対して、考え込み続けている朱鳥。
気づいていない。

そんなに集中する内容なのだろうか。

「武神さん？」

「あ、あーはいはい。うん、それでいいと思うよ」

歯切れが悪い。もしかして他のことを考えているのだろうか。

ダメな俺には推測も及ばないようなことを。

「武神さん、無理はしなくても良いよ。まだ病み上がりのようだし」

「心配いらないわ。只、そうね……ちょっと潜入するならばやっておきたいことあるし……」

やっておきたいこと、とは何だろう。

「あれか、俺と同じように置いていた物とかあったのか？それなら諦めなよ。あんな状態じゃ残るものも残ってないって」

「私は葉平じゃないのだから、そんな物ないわよ」

「さいですか……」

危機迫るような表情で否定した。何が朱鳥をそんなに真剣にさせているのだろうか。

気になるな。

「何かあるようなら言ってくれ、武神さんの意見ならば有益なもの

だろう。それを聞くことは俺たちのためにもなるし」

「いえ、大丈夫よ。特に私から言う事はないわ。それじゃリーダーは葉也くんが良いかしら」

「了解した。それでは待ち合わせの時間だが、できるだけ人通りが少なくなつた時間が望ましいな」

となると深夜になるのか。

これはもう今夜寝れる保証がないな。

最悪だ…。

「そうね、午前一時辺りとかどうかしら。その時間なら高校の麓にある道路も閑散とする時間帯だし」

「文句ない時間だ。それでは午前一時辺りに麓に集合にしよう」

「よしつ、学校に夜中潜入とか滅茶苦茶盛り上がる！」

遠足前日の小学生のようなテンションの葉平。元気が取り柄の小學生と同じだな。

「それでだ」

葉也が改めて俺のほうへ向きなおる。

はて、俺に何か用事があるのだろうか。これ以上の面倒事は御免こうむりたい。

「お前は来るのか？」

あれ、俺って頭数に入ってたのか…。

これはシヨックだ。

「嫌なら来なくても大丈夫だぞ。俺達三人でも十分に楽しそうだしなっ」

円満な笑顔で俺の存在を否定しないでくれっ！

そういう天然なコメントほどダメージが大きいことを葉平は知るべきだ。

「そうね、翔也にこれ以上付き合ってもらうのは迷惑になるかな。いくら幼馴染でも此処まで引っ張るのは問題よね。特に夜中とか翔也苦手だし…」

朱鳥にまで見放されてしまった…。

これは流石にいじけるな…いじけたいなあ。

「で、結局どうするんだ翔也。別に俺は無理強いするつもりはない。だから嫌ならはいやと…」

「参加させていただきます！」

右手を挙げての宣誓。

もう今までの自分を全否定してやる。ダメで馬鹿な俺の事なんか知ったことが。

これは参加するしかないだろう。

だって、滅茶苦茶楽しそうじゃんか！…

さて、こうして俺たちは四月三〇日午前一時に、鏡楼高校のある山の麓に集合することになった。

深夜の学校探検である。しかも今回は只の高校ではなく、半分廃墟と化した高校だ。

文句なし。

「いや、まさか朱鳥が賛成するとは思わなかったよ」

「まーね。色々と思うところはあるのだけれど、潜入できるうちに潜入しておきたいしね。私あの状況を近くで見ておきたかったし…」なるほど。

朱鳥は梓の戦闘に立ち会ったわけではないから、校舎の中に入っていないのか。

ならば潜入できるうちに潜入しておくのは良い判断なのだろう。

「何だ、そんな理由があったのか。だったら教えてくれれば良かったのに」

「あの二人の前で言うのは良くないでしょ。色々と面倒なことになるだろうし」

どうやら途中までは同じことを考えていたようだ。ちょっと安心した。

そんな会話をしている内に武神家へと到着。

日も傾きかけており夕焼けが空に広がっていた。

「さて、それじゃまずは式人の所に行って話を聞きましょう」

「そう言えばそうだったな。この短剣について何か知っているかどうか聞いてみるか」

少し大きな門のある入口を通り敷地内へと入る。

しばらく歩き、電灯の灯る玄関へと向かう。近くまで来たときに扉が自然と開く。

あれ、此処って自動ドアだったけ？ - -

と思っていたらそこには式人さんが立っていた。いつも通りのオールバックに黒いスーツだった。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

「ありがとう式人。ところでちょっと話を聞きたいのだけれど、良いかしら」

「わかりました。では私の部屋へどうぞ」

そう言って俺たちの先を歩き始める式人さん。

俺たちは黙ってその後ろについてゆく。この人の前だとやっぱり緊張してしまうな…。

長い薄暗い廊下を歩き続ける。

鼓膜を震わせるのは気の床を踏む足音のみ。その他の音は一切なし。

このような空気は自然と背筋が伸びる。

式人さんが立ち止まった。此処は今日の午前中に訪れた式人さんの部屋だ。

扉を開け俺たち二人を中へと通す。午前中と同じ配置で席に着く。

「では、準備しますのでご用件をどうぞ」

そう言いながら紅茶の準備を始める式人さん。

こういうことを自然としたすのは、流石だと思う。

「要件は翔也に渡した短剣のことについてなのだけれど」

「あの短剣ですか。それについては、あまり私は助力できないかも

しれません。もらい物ですので」

「そうなの。実はね今日、全領域を使える式神の分家に襲われたのよ」

「その件については把握しております。私もこの目で、全領域を見るのは初めてでしたので驚きました。一樣急務として神威を向かわせましたが、その方法が正解だったようですね」

あの様子を見ていたのか。

式人さんってこの町では見えないところがないのかな。恐ろしい…。

「流石式人。ありがとう、助かったわ。あれは死にそうだったしね」
「それでまさかとは思いますが、その短剣が全領域を攻略するキーアイテムなのですか」

「勘がいいわね、つまりはそういうことなのよ。だから何かしら情報が得られれば良かったのだけれど、知らないなら仕方ないわね」
「もうしわけありません。あいにくそれを頂いた人物との連絡も現在とれないので…。紅茶をどうぞ」

俺たちの前に紅茶が並べられる。やることが丁寧だなあ…。

視線が怖いけど。

しかし、この短剣について情報を得られなかったのは参ったな。

再びあいつに襲われたらマズイ。

「困ったわね…。流石に何の対策もなしに、深夜外を出歩くのは危険ね」

なるほど、ずっと悩んでいたのはあの敵に出くわした時のことを考えていたのか。最悪下光達を巻き込むことになるしな…。

それだけは何としてでも避けなくては。

「今夜外出なさるのですか？全領域を使える敵がいるようなのであまりお勧めしませんが」

「でも一樣、高校の様子を見ておきたいのよね。それも早めに」

「そうですね、わかりました。一樣式人と神威を町の監視に置いておきましょう」

「そう、それは心強いわ。あ、そういえば式晨も町を監視していたんじゃないの？何で助けってくれなかったのかしら」

確かに。

式晨さんは鏡樓市を監視していたはずだ。

「実は、あの時他の敵に対処していたそう。そちらに手が回らなかったようです。申し訳ありません」

「それじゃ仕方ないわね」

そこへ式人さんのスーツのポケットに入っていた携帯が鳴る。

「少し失礼します」

ポケットから取り出し携帯に出る。

「私ですがどうしましたか？……はい、わかりました。何としても護衛してください。その方たちを決して戦闘に立ちいれさせないでください。此方もそちらにいる方々に支援を要請しておきましょう。それまで持ちこたえてください。では」

そういつて携帯を閉じる。何かあったのだろうか？

「お嬢様申し訳ありません。急務が生じました。翔也さんのご両親の居場所が割れてしまったようです」

「つまり式神の分家の攻撃ってわけ？」

「え、マジかよ…」

式神に巻き込まれないように海外に避難していたはずなのに。

まさかこんなに早く見つかるとは…。

「では赭攣さまにも報告してまいりますので、失礼します」

そう言つて式人さんは部屋から出て行った。

一体どうなるのだろうか…。

2 - 6 死の宴会

四月二十九日夜の香港 - -

うがじんはやし

雨雅神速人は、生上夫妻に敵が襲来してきたことを伝える。

「これから私はその敵の撃退を試みます。したがってくれぐれも、此処を動かさないでください」

速人の任務はこの二人の護衛。

しかも武神家頭首からの直々の任務。

何が何でも達成しなくてはならない。失敗しようものなら一族の恥になる。

雨雅神家は分家の中でも十番目に位置する。故にそこまで振り向かれるようなものではない。

また、その能力も他の分家と比較すると見劣りしがちだ。

それに対して速人は少しだけ劣等感を感じている。ではそれを上げたいとは思っていない。そのような努力はするだけ無駄と思っているからだ。

しかしその逆、名を下げる事は絶対するまいと思っている。

だからその名を下げるきっかけになるであろうこの任務には、あまり意欲的ではなかった。

頭首直々の命令。

この任務を達成すれば、雨雅神家の名も上がるのだが速人はそこまでは考えていない。そもそもが本家に雨雅神家の人間として留まるのみで、任務を行うつもりは全くなかった。

何せ自分と交代前の雨雅神家の人間は、任務に就くことはなかったようなのだ。

これは雨雅神家の人間が、如何に見られていないのかを指しているに違いない。速人はそう考えていた。

ところがだ。

今自分は二人もの命を守る任務に就いている。

全くもって予想外だ。

しかもこの護衛、二人のみで監視と護衛が一人ずつしかない。更にその監視役も分家九の神琥家の人間なのだ。この任務、分家最下位の二つの分家で構成されていることになる。

この内容を知った時、速人は戸惑いを隠せなかった。

何故、式神家からの護衛の任務なのにこの構成なのか。どう考えても達成できるはずがない……

だからその理由を聞こうと、頭首である赭攀しゅうばんに聞こうと赴いた。しかしそれを式人いちにんに阻まれてしまった。

曰く、

「この任務はあなた方にしかできません。したがって、あなたの意見を聞くことはできない。理由を知りたいのだろうが、それは無理だ」

と突き返されてしまった。

納得できない。

何故なのだろう、どうしてこの二人が選ばれたのだろうか。

ずっとそんなことを考えていた。

そして、此処に来て敵襲である。

果たして自分は、あの二人を守りきることができるのだろうか……

「この部屋の護衛はこれから神琥の者が務めます。後、最悪の場合此処から退避して頂くことになると思います。ですので、荷物をまとめておいて下さい」

「わかった、そうしておこう。くれぐれも死なないようにな」

翔也の父親である生上飛宇貴いけがみとつきは、速人の話を聞き早速荷物をまとめにかかった。

一方母親のほうと言えば……

「あらあら、何か大変な事になってしまったわねえ」

と相変わらずのマイペース。

緊迫感のなさに思わず、頭の血管が切れそうになるが辛うじておさえる。

その時、部屋の扉が開いた。

「雨雅神殿、只今戻った」

扉から黒いカジュアルな服装の男が入ってきた。この男が現在の任務における監視役である。年齢は三十代後半。

神琥家の能力である、透視の力を用いる。ついこの間まで、武神家本家に出向いていた。したがって本来ならば神琥家に戻っているはずだったが、本家に出向いている者が欧州に向かっているため、臨時としてこの任務に就くことになった。

「敵の数は一。速い速度で此方に一直線に向かっている。後数分のうちに此処に辿り着く可能性が大きい」

現在把握できる状況を伝える。

「しかも敵の能力は貴殿と似たようなもの、あるいは同じものようだ」

「そうですか、では少しはやりやすいかな…」

「しかしすまないな。貴殿のような若い者に、命を賭させることになるうとは…。本来ならば私が出向くべきなのだろうが、私の能力ではあれには何の役にも立たない」

自分よりも二十歳年下である、速人の事を不憫に思う。

「いえ、それは心配に及ばないです。必ず生き残ります」

「ああ、必ず生き残ってくれ」

そして速人は二人の護衛を彼に引き渡し、ホテルの廊下へと出た。雨雅神の情報によれば、敵は自分と同じ能力であるらしい。

それならば、戦いやすいに越したことはない。しかし逆に言えば、同種の能力で相手のほうが自分よりも能力が上だった場合には、勝つことが難しくなる。

違う能力ならば活路を見いだせるかもしれないが、同種となれば罅迫り合いになり結局は能力が高かったほうが勝利する可能性が高い。

だからまずは、相手の能力の把握と能力の高さの比較をしなければならぬ。

エレベーターに乗り一階へと向かう。

このホテルの前は広い広場になっており、障害物も電柱のみで視界が開けている。

戦闘を行うならその場所が適しているだろう。

チーンとエレベーターが目的地へ到着したことを告げる。

エレベーターから降り、人氣がほとんどないロビーを抜けて広場へと向かう。

自動ドアが開くと外から風が中に入り込んでいく。風はとても冷たかった。

広場の中央に立ち周囲を見渡す。

瞳の色を変える。その色は常に変わり続ける三色。橙、黄、朱へとオーロラのように変わり続ける。

その瞳で正面を見た時だった。

ドン、という衝撃音と共にそこに人物が直立して立ってた。

空から着地したのだろうか。周囲の地面は大きく窪んでいた。

「あなたが武神家の護衛ですか？」

目にゴーグルを嵌めた男が此方を見ながら問いかける。

「そうだ。お前は武神家の分家のやつか」

速人もその男へ問いかける。

「そうです。とだけ言っておきましょう。と言う事はあの夫妻が、その後ろのホテルにいると言う事で間違いなさそうですね」

ゴーグルから覗く瞳が後ろにあるホテルの方を見る。

「だからなんだ」

速人は変色し続ける瞳で敵を見る。

「ふむ、どうやら早期決着は望めなさそうですね。私はどうも早とちりでしてね、勝負は瞬間に終わらせるがモットーなのですが」

そう言うとき敵はゴーグルを外した。その瞳の色は…

しかし次の瞬間、敵は速人の顔面を殴ろうと目の前で構えていた。続いて地面を蹴り砕くような音が響く。

移動が音速を超えていた。

敵は拳を放つ。

ただし、それは速人にあたることはなかった。

「ふうむ、同じ能力とはやりにくいですね…」

橙、黄、朱へと変色を続ける瞳で横に避けた速人を睨む。

「本当ですね、全く同じ能力とは。式神家にもいたんですね、光動（ひかりうご）の所持者が」

速人はいつでも走り出せるように構えながら話を続ける。

「光動の能力は他の神眼と比べると、劣っている能力だから実戦であまり見かけることはないと聞いていたが…。案外いるのか」

光動の能力は、単純に速く移動できるというものだ。ただこの能力は二居神家（にいがみ）の持つ、空間移動と比較したときにはどうしても見劣りしてしまう。

このように空間移動という神眼が存在するので、光動はあまり見向きされることは少なくなっていた。結果的にこれを実際に戦闘で使おうという考えもなくなり、興味を示されることはなくなっている。

「んまあ、あなたの思っている通り影は薄いですねえ。光なんて文字がくつついてるのに、影が薄いとはこれ如何に」

ククツと気味の悪い笑いをする。

「そうになると、お前のほうが俺よりも不利なんじゃないか。ノンストップで移動してきたようだしな」

神琥の監視から予測するに、こいつは今長距離を移動してきた後と考えられる。

ならばそれなりに体力は消耗しているはずだ。

「ふむ、見られていたのですか。いやま、確かに私は今海の上を走ってきたところですからね。疲れていると言えば疲れていますが大したことはない！」

再び敵が移動を始めた。

それに合わせ速人も移動を開始する。互いにすれ違いざまに攻撃を加える。手刀、拳、指による突き、あらゆる攻撃を多種多様に織

り交ぜながら攻撃をする。

但し、それらがお互いにあたるとはならない。

双方とも似たような攻撃を所持しているためか、その対策もすっかりとしていた。故に光速に勝る移動をしているにもかかわらず、戦闘は全く進展することはない。

広場を縦横無尽に走りながら敵の動きを見つめる。

お互いとも近い速度で移動しているため、周りの景色が激しく動き敵の動きは止まっているように見える。

次第に音すら聞こえなくなっていく。暫くすれば無音の世界になるだろう。

再び敵が自分の方へと向かってくる。

光速と光速がすれ違う。その度に周囲の地面は焼け焦げ、不吉な音を立てながら地面が爆発する。

おかしい……

速人は敵の動きが最高潮であることに大きな疑問を抱いていた。あいつは海の上を走ってきたと言っていた。それはつまり、日本から直接来たと言う事だろう。

ならば、何故疲労していない。何故こんなにも早く動けるのだろうか。

能力を発動させる人体にある力は無尽蔵ではない。有限だ。

だからこそ、本来ならば披露して速度が落ちても良いのに、未だにトップスピードを維持できている。

その理由が理解できない。

何故だ、どうしてだ……

相手の落ちないスピードに驚きながら戦闘を続ける。そして一抹の不安が心を侵していく。

もし、このままトップスピードを維持できるのならば、自分のほうが先に力が尽きるのではないだろうか……

そして殺される。

相手の能力が同種であることはわかった。後は、その力の源はど

こからきているか、だ。

自分の体力が尽きるまでには、その原因を掴まなければ、
でなければこの殺し合いで自分の命が消える…。

光速で走り続けながら考える。相手の外見を見るからに、特に何かを身に着けている様子はない。

それもそうである、余計な武器や物を所持することは、光動の最大の特徴である速度を落とすことになりかねない。

だから、戦闘に置いて基本は徒手空拳に限られる。
再びすれ違う。

その時だった、敵が走るのを止めたのだ。

体力が尽きたのだろうか。ならば今のうちに止めを指すっ！

左腕を伸ばし、首を掴もうとする。しかし、それは届かなかった。
手首を握られていたのだ。

しまったっ！――

そのまま勢いを殺すように体を回転させられ、今きた方向へと投げ飛ばされる。

空中で体を捻りながら、態勢を立て直し地面に着地。

頭を上げ、敵を確認する。

しかし、目の前には敵がいなかった。

「君、なかなかいい動きするみたいだけど、まだまだ青いな」

左の耳元から声がした。

驚き、慌てて振り返ろうとするが腕を取られており、動くこともできない。

「離せっ！」

「暗くてよく見えなかったが、うん、本当に君は若いな。こんな若造に負けるのは、長年戦場を踏んできたものとしては悔しいものがあるからな。容赦はしないよ」

首を後ろから締め付けられる。足から地面の感触が消える。

視線が少し高くなり、呼吸は増々困難になっていく。

「体重もやっぱり軽いね。さすが光動の神眼能力者だ。心得ている」

敵の表情を見ることができない。意識が薄らいでいく。

「さて、そろそろ疲れてきたなあ……」

流石に疲労が来たと言う事だろうか。やっと此処に来て限界が来たようだ。

「えーと、後回数は二回くらいだったかね。回復回復と」

ッ……！……

回復？ということだ、そんなことができるのか？聞いたこともないぞ。

周囲が明るくなる。その色は光動の色と同じ、 橙、黄、朱が周囲を照らす。

光の基は後ろから来ているようだった。

次の瞬間首を絞める力がより一層強くなる。

「グアアッ……」

「良い声を上げるね。中々だ。さてサクッと決着を付けるかな」

首から締め付けられる感覚が消える。

空を浮く間隔。

視界が狭まる。

黒い夜空が自分を包み込む。

意識が消えていく。

体に衝撃が走る。

視界が光速で移動していく。

そのまま地面に転がり込む。

口に鉄の味、頬に生暖かい液体の感触。

視界が赤に染まっていく。

ピシャッと液体を踏む音が、鼓膜を震わせる。

「ふむ、こんなものか。何か裏切られたような感覚だな。かくいう私も、君が同種の能力者であることに興奮を覚え、この戦闘を楽しむ気もなかったわけではない。だが、君はまだまだ若かったようだ」
「ウゲッ……」

何か言葉を発そうとするが、口から声が出ることはない。

「では、さらばだ。私と同じ世界を生きていた者よ」

男が視界から消える。

どうやら、自分は任務を全うできなかったようだ。しかも命さえも失いかけている。

いや、失ったも同然かもしれない。このままいけば数分後には自分はこの世界にはいない…。

何か…な…、俺ってもう少し頑張れたと思うんだけどな… - -
そのままゆっくりと視界を閉じた。

目標がいると考えられるホテルのロビーへと入る。

中に入ると全く人気がない。フロントにさえ誰もいないのだ。

「ふむ、これは全部を貸し切っていたということかな。武神家は相変わらず金があるな」

ロビーをぐるりと見渡す。申し訳程度に光る照明。

「さて、目標はどこにいるのやら」

視線をエレベーターへと移す。すると階の表示を示す光が、此処へ向かっていると気づく。

ガラスと目の前でエレベーターの扉が開く。

一人は銃を構えながら後ろの二人を守るように立っていた。

「雨雅神殿は…」

銃を構えた男が呟く。

「あの若造の名前か、さあ…死んだんじゃないのかね」

パンツと銃を発砲する乾いた音が響く。

それを、光速で避ける。光動の前では音速を超えただけの鉛など何の意味もなさない。

「お二方、早く逃げてくださいっ！」

後ろに立っていた二人がエレベーターから逃げ始める。一人は男、一人は髪の長い女。

どうやらあの二人が目標で間違いはなさそうだ。

まずは、拳銃を構えてる男を殺す。恐らく神眼能力者と見てまちがいないだろう。

一気に距離を詰める。

啞然としている男の表情が目の前にいた。

「まずは一人…」

拳を構え、その額へと標準を定め放つ。

肉と骨を砕く感触が右の拳から感じる…はずだった。

「ん!？」

硬く揺るぎのない壁にその拳の行く手を阻まれた。

目の前には蒼い半透明な壁が出現し、その先へと拳が入ることを許さない。

気づくと目の前には先ほど、女を引き連れて逃げていたと思われる男が立っていた。

その瞳は…自分の主と同じ蒼い瞳だった。

「生上様っ…!？」

拳銃を構えていた男も驚きの声を上げている。

「神琥さん、すいませんね。黙っていて。赭^{しじゅう}攀^わのやつに黙っていると言われていてね。そうした方が、敵に場所は知られたとしても、素性までは知られることはないと言っていたんでね」

両手を広げて蒼く光る壁を出現させ続ける。

「ほう…、蒼き眼か。まだいたとは…」

主である厭人^{あきと}さまの話によれば、かなり数は少ないとの話だった。が…。

私を知っているだけで三人になるぞ、我が主。これは一体どう言う事なのだろうか…

しかし、目の前のこの男。そこまで力が強いというわけでもなさそうだ。

ならば… - -

半透明の壁から離れ、距離を取る。

「その壁を砕くまで」

主の話によれば一人は殺してよいという話だった。

「丁度良い、あの二人毎殺すでしょう」

より一層の力を体から生み出す。更に、もう一つ。

胸にぶら下げていた宝石、力をためる神器からも力を取り出す。

「行くぞ、我が主の敵よ」

光を超える速度で壁と衝突し壁に亀裂が走る。

壁を支えていた男の顔がゆがみ、瞳の中に動揺が走っている。

パリンツ――

壁が砕けた。

そして、その拳を目の前の敵の胸に叩きつける。

鮮血が空中を染め上げ、周囲の壁をも赤に染めていく。視界も血に染まり返り血を浴びる。

「これで任務完了……」

後は一人の女を誘拐するのみ。

そう思考を巡らす。

しかしそこで視界に違和感を感じた。

眼に血が入ってしまったのだろう、視界が妨げられておりよく見えていなかったせいだろう。だから、よくよく見てみると、目の前の男の胸に穴は開いていなかった。

穴が空いていたのは……自分の体だった。

そこから先の尖った黒い爪を持つ、黒い手と腕が突き出ている。

口から血の味があふれ出ていく。思わず膝が折れ地面に倒れそうになるが、その腕によって倒れることは許されない。

「飛宇貴さん、大丈夫？」

狂気に歪んだ声が体を震わせる。

「ああ、大丈夫だよ。でもすまないね……君をまたそんな姿にしてしまつて……」

「構わないわよ、大切な人を守るためならこの姿になることなんて大した苦痛にならない」

そう笑っている。が、その顔は恐ろしく見るに堪えないものにな
っていた。

恐怖のあまり、神琥は思わず視線をそむけそうになる。

黒い髪の毛は、全てが白いものに。その瞳は真っ黒に染め上げら
れ、穴が開いたように見えるほどだ。更に皮膚に至っては、その空
間にポツカリと穴が開いたようにしか見えない程の黒い色をしてい
る。

「生上殿…これは一体…」

「実はね、私の妻も神眼能力所持者なんだよ」

「しかし、あれは…」

神琥は驚きの表情を隠せない。何故ならば目の前にいるのは…

「そうだ、私の妻は死の眼を持つ者だ。今ヨーロッパで事件を起こ
しているやつと同じ能力らしい」

死の眼。

その眼に狙われれば、生き残ることはできない。

この一連の会話を聞いていた測神界羅^{しきがみかいら}は考えた。

この事実を我が主に知らせなければと。しかし、それが叶うこと
はないようだ。

「んふふふつ、でもこの力って本当に強すぎよね。扱いが難しいっ
たらないのよ。いつもなら飛宇貴さんの能力で、防いでおいてもら
うのだけれど、今日はそうもいかないみたいだし…。派手に殺した
いけれど、今日は大人しく殺すとしましよう」

そういうと、体を通させていた腕を体ごと持ち上げる。

そして…

『死眼^{しがん} - 酒血肉林 - 』

腕から黒い闇が測神の体を食い尽くしていく。骨と肉を碎き食ら
い尽くしていく。

それはまるで、盛大な死の宴会のようだった。

2 - 7 備えあれば

「赭攣^{しつゐ}さま、失礼します」

そういうと式人^{いちと}は、自分の主がいる和室に入った。

赭攣は襖を開けて入ってくる式人を心配しながら見つめる。

「それで、香港の件はどうになりましたか」

「はい」

式人は赭攣の前に正座して座り、持っていた封筒から、情報がまとめられた紙を取り出す。

「式神家分家測神界羅^{しきがみかいら}と思われる人物が襲撃したようです。この人物については、欧州の方で幾つか目撃証言がありました。名前については十七年前の件の中で、武神家の調査によりわかっていました」
「そうですか。あの時に光動の能力を持つ神眼能力者がいることはわかっていましたね。しかし今回、本当に戦闘に出てくるとは思っていませんでしたよ」

十七年前の式神家との衝突時、測神家が前線に出てくることは一切なかった。

寧ろ物資の輸送など、物を運ぶことがメインだった。

武神家はそれを妨害するために何度か、此方から勝負を仕掛けた。しかしその度に逃げられてしまい、妨害活動は上手くいかなかった。そもそも光速で移動する物体を、妨害することなど難しいには決まっている。

そこで本来ならば同じ雨雅神家を出すのが常識なのだが、この時は諸々の事情があり対測神用として戦闘には出せなかった。

「今回は無事逃がすことなく、倒すことができました。ただ此方もそれなりの損害を被ってしまいました」

「やはり此方も無傷ではいきませんでしたか」

「はい、しかもあの方に力を使わせてしまいました」

「そうですか。彼女の死眼を使わせてしまいましたか。できれば、

使わせないままで終わらせたかったのですが……」
生上夕。いけがみゆう

赭攣にとつては幼馴染である。

その彼女も神眼能力者だった。

しかもよりによって、死の眼の持ち主である。

その眼に狙われたものは、必ず殺される。

それ程の脅威を持つ神眼だ。

だから、その力を欲しがるもの、滅ぼそうとする者が彼女の前に
何人も現れた。

その敵から赭攣と今の夫である飛宇貴は彼女を守った。守り続けた。

こうして彼女が死の眼の保持者であることは、赭攣と飛宇貴以外
はいなくなった。それから数年が経過し、夕と飛宇貴は結婚。

一方の赭攣は許嫁であつた蔡火さいかと結婚したのだつた。

その後式神家との戦もあつた。その時に夕が手助けをすると申し
出てくれたが、赭攣はそれを断つた。

もう彼女を危険な人物に狙われなくなつたからだ。彼女だけは
危険な目にあわせまいと、心の中で誓つていた。

しかし、今回の件でそれが難しくなつてしまった。

しかもその中核であるのは、他でもない彼女の息子である翔也だ。
だから彼女を夫の飛宇貴と共に、香港へ逃亡してもらつた。本家

にいた能力者も二人だけ護衛として派遣した。

ただその戦力も十分ではなかつたのだらう。

現に今回彼女に力を使わせてしまったのである。

本来ならば十分な戦力を割くべきだったが、そもいかなかった。
日本では式神の動きが活発化している。

ヨーロッパのほうでは、謎の神眼能力者、しかも式人の情報によ
ればその人物も死の眼の力の所有者である可能性がある。

このような状況に置いて、あの二人の護衛のみが割ける十分な戦
力だつたのだ。

これ以上の戦力を護衛として投入してしまえば、ヨーロッパにあるいは式神との戦いに敗れてしまう。それは最悪の事態であり、必ず避けなければならないものだ。

それら諸々を鑑みての采配だった。

「さて、問題は今度の事です。ね。取り敢えずその後の香港ではどのような対策を行ったのですか？」

「はい、同盟を結んでいる方々に、回収をしていただき匿っていたことにしました。それで暫くは香港に滞在後、アフリカの方へと移動するように手配するつもりです。あの地域は神眼所持者も少なく、その知識を得ている人も少数です。そこならば、夕さんが狙われた時の状況を掴みやすいかと」

「なるほど、わかりました。取り敢えずはそれでいきましょう。他に何か追加の報告があれば随時私に伝えてください」

「わかりました。後今夜お嬢様が鏡楼高校に潜入されるとこの子ですが、何か対策は打っておきましようか。全領域の能力者も現れたと言う事です。今のところは式神と神威の二人を、監視にあたらせようと考えています」

「全領域の能力者も現れましたか……」

ふむ、と考える赭攀。

全領域の能力者が現れたことは、式神も本気を出し始めているということになる。

ならば神威と式神を監視としてだし、衝突に備えることはとても重要だ。

「取り敢えずはその対策で行きましょう。では、その両名について全領域の神眼保持者が現れた場合は神威に対応をさせてください。その他の敵は式神が最優先で対応するようにしてください。恐らく式神では全領域に対応できない可能性があります。最悪殺されることもあるでしょう」

全領域と互角にやりあえるのは今のところ神威のみだ。

翔也も戦うことができれば、十分に勝ち目はあるが残念ながらも

だ十分に戦うことはできない。そこまでまだ神眼所持者として成長できていないのだ。

神眼所持者は神眼を発動させると、身体能力を格段に上げることができる。

だから修練を積み重ねれば積むほど、移動速度、戦闘技術、筋力、知能などを数段も上げることが可能だ。しかし翔也はまだそこを鍛えていない。

視力のみが人外の域まで達していただけた。

当たり前と言えば当たり前である。

翔也は神眼所持者としての修練を全く積んでいないのだ。

逆に朱鳥は物心つく前から、神眼所持者としての修練を沢山積んでいる。したがって全領域に引き込まれることが無ければ、殺すことはできるかもしれない。しかし全領域というのはいつの間にか引き込まれてしまう類の能力であり、回避して発動させている能力者を攻撃することは難しい。

よって朱鳥にも難しいのだ。

「わかりました。そのように二人には指示しておきます」

「そして神琥^{かんくみき}末樹の帰国についてですが、慎重に行う必要がありますね。彼女の未来視は、歴代の未来視能力者の中でかなり強い部類に入りますが、全領域に対応できるとは限りません。格闘もそこまで得意ではなかったはず。朱鳥と翔也くんを迎えに行ってもらう予定でしたが、仕方ないですね、神威を向かわせましょう」

「神威ですか…了解しました。説得してみましよう」

「頼みますね」

現在本家にいる神威と、神琥末樹は仲が悪い。

お互いに犬猿の仲なのだ。それは過去に起きたある事件が原因なのだが、此处で省略。

本当ならば神威に向かわせたくはないのだが、全領域の能力者が鏡楼市に現れてしまったので致し方ない。

此处は神威に耐えさせるしかないだろう。困ったものである。

「では私はこれで失礼します」
式人は手に持っていた資料を封筒にしまいそれを赭攀に渡し、赭攀の和室から出て行った。

今俺は朱鳥の部屋にいる。下には絨毯が敷かれており洋室だ。
この部屋に入るのは数年ぶりだが、昔と比べると余分なもの（遊び道具など）がなくなり、勉強するための本や教科書がひしめく部屋になっていた。

人も成長すればそれに合わせて部屋の内装も変わるのだと思う。
そして俺は朱鳥と二人向き合うように床に座っていた。

「でも、ご両親が無事で良かったわね」

「まーね。でもこれって俺の親の周りには、式神の分家を撃退できるだけの戦力が配置されているんだよな。そんな余分な戦力が残っているのか？」

現在武神家の置かれている状況は、大変な時であることは俺でもわかる。

そんな中俺の親を守るために、戦力を削らなくてはならないのだ。迷惑をかけてしまっていることは間違いない。

「それについては心配ないと思うわよ。此処には神威の人と式兵がいるし、ヨーロッパはヨーロッパで十分な戦力がいつているのよ。心配ないわ」

「そっか。それなら良いんだけどさ」
でも俺一人のせいで、沢山の人に迷惑をかけてしまうことになった。

只でさえヨーロッパの方での眼狩りが起きていたのに、そこに俺が原因で式神家と武神家との衝突が加わってしまったのだ。

この俺の眼にある神眼は、つい最近までは発動することはなく、普通に暮らすことができていた。しかし、俺が何の気まぐれか人助

けをした。

ビルの中で切り裂かれそうになっている女性を助けるために、俺は式神厭人と出会った。出会ってしまった。

その時に受けた傷が原因で、俺の神眼の発生を封印していた印に傷がつき、覚醒へと至るきっかけになったらしい。

そしてそれから暫くして俺の眼は覚醒した。何でも希少な蒼で、更に希少な能力永劫が俺の所有する神眼の正体だった。

そしてそれが式神の求める眼でもあったらしい。それ以降俺は式神厭人本人と、式神家分家のやつらに狙われるようになってしまった。

きっかけは俺が作ったようなものだが、それ以降の流れは俺のあずかり知らぬところだ。今もどうにもこうにも腑に落ちない部分は沢山ある。

それでもやるしかない。

戦うしかない。

そして俺のせいで標的になるであろう人々を、守らなければならない。

目の前にいる朱鳥も含めてだ。

「取り敢えずは一難去ったという感じね。さてそれじゃ今夜のことについて考えましょ」

そう今夜の俺たちは下光達と一緒に、自分隊の高校である鏡楼高校へと侵入する。

現在全領域とかいう、おかしくくらい強い奴が出てきているから、細心の注意をしなければならぬ。では鉢合わせしてしまった場合に置いて、何か対処ができるかというところだ。

せめてこの短剣、青色の刃で蒼の眼所持者のために作られた武器の使い方さえわかれば良いのだが。

「まずは、最悪の場合から考えましょ」

「そうだな。もし全領域のやつと遭遇してしまった場合は、朱鳥が下光達を引き連れて逃げてくれ。俺は大丈夫だ。死ぬことはないし

な」

「それは却下。二人は逃がして私も戦うわよ。あんな一方的にやられただけで終わったのは癪だしね。後、もし翔也が捕まったらどうするのよ」

「そっか、まだ式神家の本拠地が分かっているんだよな」

式神家の本拠地がまだにわかっていないから、俺が誘拐されてしまった場合は助けることは難しいだろう。

「言っておくけど、翔也だけ助からないのは私は許さないかね」

朱鳥の瞳が朱く染まった。

このように本気な朱鳥には何を言っても無駄である。

「それじゃもう少し俺をいたわってくれても良い気がすんだけど……」
瞳から朱が消え通常の瞳に戻る朱鳥。

此処のところ俺に対する扱いが酷いような気がする。

顔を両足で踏み台にされたり、本気で俺を吹き飛ばしたり。

いくら瞬発的な回復力を持っていたとしても、痛いものは痛いのだ。地面に肌を削られる痛みなどもう言葉にできない。

「えーとっ、それは仕方ないでしょ。ごめんね、私神眼を発動させると正気じゃなくなるのよね」

視線を俺からそらす。

「コホン、それよりも今夜の事よ」

話題までそらされた。

ま、謝ってくれたからそれで十分なんだけど。

「取り敢えず私は全領域のやつがあらわれたら、翔也と一緒に戦うからそのつもりで」

「わかった。それで下光達に神眼のことは説明するのか？」

あの二人は恐らく神眼のことについて殆ど知らないだろう。

それが当然であるし、俺もそうだった。あの二人が知らないのは当たり前だ。

説明しておいた方が、全領域のやつが現れた時に説明が容易になる。

「取り敢えず神眼には関わらない方がいいから、現段階では説明はしないでおくわ。全領域のやつが現れたら、その時はその時。テロリストとでも言っておいて逃げてもらいましょ」

「随分と適当だな。それでよいのかよ」

「それで良いのよ。むしろ適切よ」

というわけで下光兄弟には神眼について説明する必要わなくなつた。

「探索については私がゆつくりするから、基本的に私からそこまで離れず下光兄弟の事を監視していてちょうだい」

「了解。朱鳥から視線を外させるようにしてみるよ」

今回の探索で朱鳥は神眼所持者の視点から現場を見る予定だ。

上手くいけば狐のお面を被った二人の能力も分かるかもしれない。あの二人は梓と戦った時に、神眼の能力を使っていないように見えた。使っていたとしても仮面を被っていたため、その能力について知ることはできなかった。

しかも一人は神器のみで戦い、もう一人に至っては格闘だけで戦っていたのだ。

そしてその二人には何回か出会っている。

早い段階でその素性を把握しておくことが大切だろう。

「確認事項はこれくらいかしら？」

「後は持っていく道具を集めておかないとな。懐中電灯とかは必須だろ。あいつらの前では朱鳥能力使うことは難しいだろ？」

「手品で済ましておくにはいささか、威力が大きすぎるし不思議すぎるものね。それじゃそこら辺は準備しておくね」

そついうと立ち上がり、準備をし始めた。

「あ、そうそう。もう夕飯の時間だから適当に食べておいてね。私も準備が終わり次第食べるって給仕の人に言っておいて」

「わかった。んじゃまたあとで」

俺は立ち上がり、扉を開け薄暗い廊下へと出た。

「はあ！？ふざけるな！」

武神家のある一室で朱く長い髪の毛を持つ、朱のスーツを着た人物が激怒していた。今本家にとどまっている神威だ。

その燃えるような朱い姿がより一層燃え立っている。怒りがそのまま視覚として認識できるような感じた。

普通の人間ならその怒号だけで気絶し、神眼所持者でも怯むような気配を醸し出している。

しかし、その怒号を真正面から受けている人物がいた。□式人だ。それに対して全く意に介さないというような表情で、冷めた目線で神威を見ていた。

「これは武神家のためです。今あなた個人の確執について構っているほど、こちらは余裕がないのです」

「だったら私をさっさと自由に行動させりや良いだろうが。何でこの私が、あのいけすかした女をわざわざ迎えに行かなきゃならないんだよ」

「先ほどから説明している通りです。私は基本的に同じ内容の説明は二回以上しません。それにあなたにこの任務を拒否する権限はありませんよ」

そういつて一枚の紙を式人は神威に差し出す。

その紙には武神家頭首である、赭鱗からの直接下された任務であることを示す印が押されていた。この印が押された任務について、分家の人間が逆らうことはできない。

因みに任務が書面で渡されることは滅多にない。大抵は式人が口頭で知らせることが多いのだ。

今回書面が発行されたのは、神威がこの任務をそう簡単に快諾するとは限らないからいと判断したからだ。

そして予想通り、この状況である。

「この書面が今回はあります。ですので、明日昼に必ずお嬢様と同

行して神琥未樹を迎えに行ってください」

その書類を神威へと差し出す。

目の前の神威をその書類を、恐ろしい形相で睨みつける。暫し後ようやくその書類を乱暴に手に取った。

「ったく。あのくそオヤジ。この私をガキのお向かいに使うとはい度胸じゃねえか。しかもかわいいガキならまだしも、あの何でもかんでも御見通しという生意気なガキをね」

手に持っている書類を握りつぶそうとするが、それができない。

先祖代々から受け継がれている印の力のせいだ。そのせいで、頭首からの命には絶対に逆らうことはできない。

「それでは、今夜の件と明日の件、この通り伝えました。私はこれで失礼しましょう」

「ああ、さつさと出ていけこのクソ眼鏡」

「何でもかんでも“クソ”を付けるのを止めたらどうですか？まるでダダをこねている子どもですよ」

「それ以上私を刺激するな。今この紙を持ってきたお前を殺すのを必死で押さえてんだ。感謝しな」

「わかりました。では」

そう言うつと式人はその部屋を後にした。

一方残された神威は未だに興奮冷めやらぬ状態だ。

その書類を机の上に置き、椅子の上に乱暴に座る。

「ったく、何の因果で私がまたあの小娘と、一緒に行動をしなきゃならないんだ」

暫く小言をその書面向かって吐き続ける。

そこへ割って入るように携帯の着信音が鳴り響いた。表示は非通知になっていた。

その表示に嫌な予感がし、神威はその着信を無視し続ける。

しかし、着信は鳴りやまなかった。

何度も何度もなり続けた。

とうとう痺れを切らした神威は携帯に出る。

「おい、てめえしつこいぞ！私をストーカーするとはいい度胸じゃねえか」

「いきなりそんな大声出さないでよ。あんたって昔から変わらないわね」

「んなつ…てめえなんで私の番号知ってるんだ！」

何と電話をかけてきたのはあるうことか、神琥未樹だった。

「そりやたまたま視えたのよ。明日の午後十一時五十六分にあんたへ電話をかけている式人さんの番号をね。序だからそれ覚えてあっているか、電話したまでよ」

「てめえ、まだ海外に居るんじゃないのよ。どうして日本のこの地域を視ることが出来るんだ」

「そりや、私はもう日本にいるからよ。直接本家に行くのもあれだし、一旦実家に戻っているのよ」

「なるほどな。しかしお前も成長したよな、あれだけ取り乱していた頃が懐かしいぜ」

「うるさいわね。あんただって私と同じように、あたふたしていたじゃない。お相子よ」

「私をてめえと一緒にするな」

「私をあんたと一緒にしないで」

暫しの沈黙。

神威は携帯電話を握りつぶさんばかりに、握っている。

「ま、取り敢えず明日はよろしくね。あんたが直々に迎えに来てくれるそうじゃないの」

「行かされるんだ。そこ、勘違いするなよ」

「当たり前よ。それじゃ」

そう言って神琥未樹は通話を切った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0782w/>

BLUE EYE 碧き眼

2012年1月8日18時51分発行